石橋　俊教授退任記念誌

自治医科大学

内分泌代謝学部門業績集

Commemorative Book for the Retirement of

Prof. Shun Ishibashi

Achievements of

Division of Endocrinology and Metabolism,

Jichi Medical University



石橋　俊教授　退任記念誌

自治医科大学内分泌代謝学部門業績集



北岳山荘テン場から望む富士山　3776m　2回登頂

目　次

挨　拶　5

人　物（経歴・役職・集会・研究資金・学位取得者）　7

転載寄稿文（学内広報・鉄門だより・羽生市医師会会報）　11

アルバム　17

寄稿者名一覧　23

記念寄稿―一般　26

記念寄稿―大学他部門：現在籍者　114

記念寄稿―内分泌代謝学部門：現及び元教室員　134

現職員からの贈る言葉　158

論文業績　160

最終講義スライド　206

デジタル付録（DVD）

１）　Michael Brown 先生“Mike Brown and Joe Goldstein: A 50 Year Partnership” 特別シンポジウム「スタチン発見 50 年」、第 55 回日本動脈硬化学会総会、宇都宮、2023、mp4 動画・pdf

２）　石橋俊「マクロファージの脂質代謝に魅せられて」、第 53 回日本動脈硬化学会総会学会賞受賞講演、京都、2021、pdf

３）　石橋俊「旅の半空：Our masterpieces@jichi」、最終講義　2023　mp4 動画、pdf

４）　石橋俊「忘れえぬひと一私の動脈硬化研究史を遡る」、第 55 回日本動脈硬化学会会長講演、宇都宮、2023、mp4 動画・pdf

５）　石橋俊　「内分泌代謝科の経営改善への取り組み」、診療代表者会議、2021、pdf

６）　糖尿病センター合同カンファランスプログラム一覧（第 1～49 回）、pdf

７）　論文業績一覧、word

８）　涸沢診療所開設 60 周年記念誌掲載文、pdf

９）　2022 年 Web 開催「涸沢コンパ」での山行報告、pdf

１０）日本百名山登頂歴、pdf

１１）本記念誌、 pdf

ご　挨　拶

2023 年春は、22 年間奉職した自治医大退任の節目でした。それを機にエフォートの過半を占めていた教育・研究を大幅に縮小することになりました。一方、開業医という形の人生再出発の節目でもありました。そこで、近しくしていただいた（と私が勝手に思いこんでいる）方々に形式自由の回想録の執筆をお願いしました。幸い大半の方々にご快諾いただきました。多忙にかまけて発刊が大きく遅滞しましたことをお詫び申し上げます。補足資料も収載した DVD も添付しますので、ご活用いただけると幸いです。

構成は以下の通りです。i）人物紹介、ii）アルバム、iii）記念寄稿、iv)発表論文リスト、v)最終講義スライド一覧。i)の人物紹介では生い立ちを表にしてみました。結構頻繁に転居したものです。関係組織での委員会活動や開催をお手伝いした主な集会リストも作成しました。研究歴に関しては Jonathan Cohen 先生による私の発表論文の review がよくまとまっています。ただし、相当の時間を費やしたが論文化できなかった仕事や、投稿したが不採択通知後に放置してしまったような論文も少なからずあり、これらを反映する術がありません。大学広報誌、出身校の同窓会誌ないし地域医師会会誌に掲載した文章を転載しました。回顧録を書きかけましたが、納得のいく形にならず、省略としました。ii)の写真ですが、教室としての写真アーカイブを作成していなかったので、大半は私個人のデジカメやスマホが出典になります。定期的な公的イベントとして、4 月の花見、夏の BBQ、年末の同門会と忘年会、冬のスキー旅行や歓送迎会など掲載したい写真は多数ありましたが、断腸の思いで厳選しました。また無許可掲載の無礼をお許しください。iii)の寄稿いただいた方はご指導いただいた先輩諸氏・同僚・友人・学生など多岐に亘りました。大学組織重視の配置、年齢順、50 音順やアルファベット順かと悩みましたが、これら折衷案になりました。失礼があればご容赦ください。iv)の論文は自治医大在籍時代に限定せず、共著の全論文としました。各論文の引用数も調べたところ、最多は留学中に作成した LDL 受容体ノックアウトマウスの表現型解析とそれを用いた遺伝子治療を報告した論文の 1,961 回でした。人気 YouTuber の億単位の閲覧数に比してなんとささやかなことか！v)講堂での最終講義のスライド一覧を掲載しました。収録ビデオは DVD をご参照ください。内容の中立性を客観視できるような COI の記載も必要なご時世ではありますが、一般の読者を想定していないため省略させていただきました。

大学病院で働く医師は教育・研究・臨床の３つの仕事をこなす必要があると若い時分に聞いたことがあり、その通りだと思いながらこれまで生きてきましたし、若手にもそのように指導してきました。大学病院で働く医師たる者は教育・研究・臨床の３つのクラブを両手で器用に宙に上げる曲芸師(juggler)たれと叱咤激励したこともありました。しかし、患者さんの立場に立って考えれば、命を守るべき立場の人間が全身全霊で臨床に取り組んでいなとすれば倫理的とはいえないでしょう。また、全身全霊で没入するのでなければ研究でも十分な成果を挙げることはできないはずです。昨今、日本の研究の国際競争力の急速な地盤沈下と研修医の過労死事件に端を発した「医師の働き方改革」が言われています。これまで当

然とされてきた教育・研究・臨床同時遂行のスキームが破綻しつつあるのかもしれません。多くの task に貴重な時間を浪費することなく、一点集中できる環境の整備がこれからの医療界や自治医大が達成すべき課題であるように思われます。

月並みな物言いになりますが、人間は自分だけで生きている訳ではなく、無数の人間の恩恵を受けて生きています。仕事関係に限定しても数えきれない方々のサポートをいただきました。逐一御礼申し上げたいところですが、とりあえずこの冊子を手に取っていただいた方に御礼申し上げたいと思います。鬼籍に入られてしまった高久史麿先生、山田信博先生、大橋靖雄先生にも絶大なご支援をいただきました。また、編集作業にご尽力いただいた山本慶子さん、野口清美さん、本嶋恵美さん、武井暁一先生にも厚く御礼申し上げます。

既に私も人生の新たなステップを歩み始めており、自治医大時代は遠い夢のようにも感じます。世界に戦火が絶えず、巨大自然災害の脅威が迫る今日この頃ですが、皆様のご多幸を心からお祈りしております。この小冊子から何らかのヒントを得ていただければ望外の喜びです。

2024 年 8 月終戦記念日に



石橋　俊　近影

経　歴

西暦	住所	学校・職場	職位
1958~1959	宮城県仙台市		
~1960	福島県平市		
~1963	岩手県宮古市	小百合幼稚園	
~1964	福島県福島市小倉寺	福島市立第一幼稚園	
~1970	福島県福島市上町	福島大学教育学部附属小学校	
~1971	埼玉県与野市	埼玉大学教育学部附属中学校	
~1973	埼玉県浦和市		
~1976		東京学芸大学附属高等学校	
~1978		東京大学教養学部理科三類	
~1982	東京都文京区向ヶ丘	東京大学医学部医学科	
~1983	東京都文京区西片	東京大学附属病院（第三内科・第一内科）	
~1984		小平記念東京日立病院内科	
~1989	東京都文京区白山	東京大学医学部附属病院第三内科	
~1994	Dallas,TX, USA	University of Texas Southwestern Medical Center at Dallas	
~1998	東京都文京区西片	東京大学医学部附属病院第三内科	助手
~2001	東京都文京区本駒込	東京大学医学部附属病院糖尿病・代謝内科	助手
~2023	栃木県下野市祇園	自治医科大学内科学講座内分泌代謝学部門	教授
2009~2023		同　糖尿病センター	センター長
2012~2023		同　臨床栄養部	部長
2013~2017		同　RI センター	センター長
2023~現在	埼玉県羽生市	いしばし糖尿病内分泌代謝内科クリニック	院長

大学生時代



1979 年鉄門新潟戦　五十嵐グラウンド



白出のコルから前穂高岳を望む

役　　職　　等

自治医大	大学	病院
委員会 （○委員長）	大学院研究科委員会 教務委員会 生命倫理委員会 臨床研究倫理委員会 遺伝子解析研究倫理委員会○ 修士課程設立準備委員会 実験医学センター運営委員会 小動物委員会○ 研究奨励賞選考委員会 シミュレーションセンター設立準備委員会○	内科学講座運営委員会 総合診療部運営委員会 卒後研修センター連絡委員会 病歴委員会○ 栄養委員会○ 研修委員会 RI 委員会○

学会	日本内科学会	日本動脈硬化学会	日本糖尿病学会
委員会 （○委員長）	関東甲信越地方会運営委員会	JAT 編集委員会 プログラム委員会 広報・啓発委員会○ 試験問題作成委員会○ あり方委員会 ガイドライン作成委員会	「糖尿病」編集委員会 糖尿病対策推進会議
役職	評議員	評議員・理事・会長	評議員
賞		学会賞(2021)	
専門医	認定内科医、総合内科専門医、指導医	動脈硬化専門医、指導医	糖尿病専門医、指導医

学会	日本内分泌学会	日本糖尿病合併症学会	日本肥満治療学会
委員会	専門医委員会		
役職	評議員		評議員
賞		YIA(1998)	
専門医	内分泌代謝専門医、指導医		

栃木県	日本糖尿病協会	日本糖尿病財団
糖尿病予防推進協議会	栃木県支部理事 栃木県支部支部長○	選考委員会

厚生労働省
難治性疾患克服事業「原発性高脂血症」研究班研究代表○

集　会

会期	学会	集会名	場所
2005/8/25~27	日本内分泌学会	内分泌代謝学サマーセミナー	かもしか荘、塩原
2007/11/14	日本糖尿病財団	糖尿病シンポジウム	宇都宮総合文化センター
2010/11/20	内分泌代謝研究会	第 38 回内分泌代謝研究会	東京大学医学部教育研究棟
2011/9/23~24	日本肥満学会	第 2 回日本肥満学会（副会長）	淡路夢舞台
2012/12/14~15	日本内分泌学会	第 13 回関東甲信越支部学術集会	宇都宮総合文化センター
2016/11/6	日本糖尿病財団	糖尿病予防キャンペーン	とちぎ健康の森
2020/2/2	日本動脈硬化学会	第 20 回動脈硬化教育フォーラム	京王プラザホテル
2023/7/8~9	日本動脈硬化学会	第 55 回動脈硬化学会総会	ライトキューブ宇都宮

競争的研究資金（国・代表のみ）

1995-1997	基盤研究(A)	肝臓標的遺伝子治療のための基礎技術の開発
1995-1997	一般研究(C)	ノックアウトマウスを用いた生体内コレステロール輸送の解析
1996	基盤研究(C)	動脈硬化形成における小腸由来リポタンパクに関する発生工学的研究
1997-1998	基盤研究(B)	動脈硬化発症過程における血管壁へのリポタンパク繁留とその制御因子に関する研究
1997-1998	重点領域研究	プラークの形成と破綻における泡沫細胞の細胞死の役割を解明するためのモデルの樹立
1998-1999	基盤研究(B)	発生文化におけるコレステロール代謝系の意義を探索するための新しい動物モデルの開発
1998-1999	萌芽的研究	アポトーシスの誘導と死細胞除去におけるオキシステロールの役割
1999-2000	基盤研究(B)	細胞内トリグリセリドリパーゼの分子的多様性に関する発生工学的研究
2000-2001	基盤研究(B)	細胞内脂質の分解誘導による新たな動脈硬化治療法の開発
2001-2005	基盤研究(B)	脂肪溶解機構の解明と糖尿病・動脈硬化の新規治療法開発への応用
2005-2007	基盤研究(B)	遺伝子改変技術を用いた新しいコレステロール機能の解明
2005-2007	萌芽研究	膵β細胞脂肪毒性解除による新規 2 型糖尿病治療法の開発
2006-2007	特定領域研究	脂肪細胞内 lipolysis の分子機構
2008-2010	挑戦的萌芽研究	摂食障害におけるホルモン感受性リパーゼの意義
2010-2012	基盤研究(B)	酸化ステロールエステルによる小胞体ストレスの誘導機構の解明とその実態における意義
2013-2015	基盤研究(B)	マクロファージ脂肪毒性の解除を利用した新規動脈硬化治療法の開発
2011-2017	厚労科研	原発性高脂血症に関する調査研究
2016-2018	基盤研究(C)	コレステロール合成阻害による糖尿病発症機構解明と治療法の開発
2019-2022	基盤研究(B)	骨髄細胞コレステロール代謝調節によるインスリン抵抗性・脂肪肝制御機構の解明

学位取得者

氏名	番号	学 位 論 文 名	学位授与日
稲葉利敬	甲第 297 号	PPAR(ペルオキシゾーム増殖剤活性化受容体) -α アゴニストであるベザフィブラートの動脈硬化に対する影響の検討	2007 年 3 月 22 日
安藤明彦	甲第 343 号	2 型糖尿病モデル GK ラットにおける過食の成因	2008 年 3 月 21 日
田副文子	甲第 353 号	血管平滑筋細胞の増殖におけるコレステロール合成系の役割について	2008 年 3 月 21 日
永島秀一	甲第 354 号	肝臓特異的コレステロール合成酵素群欠損マウスにおける血中、肝臓脂質代謝と肝障害の解析	2008 年 3 月 21 日
高橋学	甲第 394 号	マクロファージのリポ蛋白リパーゼ欠損が動脈硬化、肥満に及ぼす影響について	2011 年 3 月 18 日
王暁黎	甲第 402 号	Genetic analysis of primary dyslipidemia and functional analysis of a novel mutant protein.	2011 年 3 月 18 日
倉科智行	甲第 408 号	膵 β 細胞グレリン受容体のインスリン分泌・全身糖代謝における役割	2012 年 3 月 23 日
宮本倫聡	甲第 418 号	糖代謝異常症患者における超音波血管弾性率検査による動脈硬化評価法の臨床的意義に関する研究	2012 年 3 月 23 日
Enkhtuvshin Bolormaa	甲第 486 号	Study on the structural requirement for kinase activity of insulin receptor kinase activity of insulin receptor.	2015 年 3 月 18 日
山﨑久隆	甲第 554 号	動脈硬化形成におけるマクロファージのコレステロールエステルの生成と水解の意義	2018 年 3 月 19 日
若林徹治	甲第 556 号	アシル CoA コレステロールアシルトランスフェラーゼ(ACAT1)欠損マウスの皮膚黄色腫と動脈硬化病変形成におけるインフラマソームの役割に関する研究	2018 年 3 月 19 日
武井暁一	甲第 582 号	骨髄細胞 特異的な HMG -CoA 還元酵素抑制によるインスリン抵抗性改善作用についての検討	2019 年 3 月 20 日
武井祥子	甲第 583 号	膵 β 細胞におけるコレステロール合成酵素抑制の役割の解明	2019 年 3 月 20 日
礒田雅代	甲第 586 号	1,3-ブタンジオールによるレプチン抵抗性改善効果とその作用メカニズム	2020 年 3 月 16 日
村上明子	甲第 602 号	セラストロールは視床下部弓状核ニューロンに直接作用してレプチン感受性を高める	2020 年 3 月 16 日
山室大介	乙第 826 号	ヒト血漿中オキシステロール類のエステル化機構の解明―LCAT 欠損症患者血漿を用いた検討 ―	2022 年 6 月 22 日
澁谷浩史	甲第 682 号	Valosin-containing protein (VCP) を介した新規 sterol regulatory element-binding protein 1(SREBP1)活性化メカニズムの解明	2023 年 3 月 23 日

退職のごあいさつ

定年退職をされた方々のうち、次の方々から、ごあいさつの言葉をお寄せいただきました。長年にわたり本学の発展にご尽力いただき、本当にありがとうございました。これからも益々お元気でご活躍されることをお祈り申し上げます。
なお、定年で退職された方の中には、引き続き本学に勤務される方もいらっしゃいますが、無事退職を迎えられてのお気持ちなどをお寄せいただきました。



草莽の医師

医学部内科学講座（内分泌代謝学部門）教授　石橋　俊 さん

2001年から、自治医大での医師兼教師兼管理職という価値あるお仕事を、多くの方々に助けられながら、無事了えることができたたことを、ここに改めて感謝申し上げます。天気が良ければ祇園の職員住宅から下野薬師寺か弦巻公園まで朝ランし、週１回は閉店間際のかましんで食材を買い出し、夜の会合がなければ自炊、週末は東京の自宅というような一週間の繰り返しに、学会関係の出張が時折挟まるという生活でした。

この間の最大の出来事は、カンファランス室のロッカーに入れてあったパソコンの紛失事件でした。厚労省関連の臨床研究の個人情報が保存されていたため、下野新聞にも報道され、施錠の怠慢を厳重注意されました。教育者としての無力感に囚われたり、リクルートや研究費取得の強迫観念からはなかなか自由になれず、急性期病院での慢性疾患の診療という矛盾に肩身の狭い思いがありましたが、それ以外は総じて平穏な日々を送らせていただきました。

先日、教育研究棟講堂で「最終講義」させていただきました。録画が図書館から公開されておりますので、ご興味のある方はご笑覧ください。その中で、「好きな言葉」の一つとして「草莽の志士」を挙げさせていただきました。明治維新に限らず、見返りを求めず、現場で義に挺身する若者によって時代は動いてきました。医療現場を支える「草莽の医師」が自治医大からこれからも巣立つことを祈念して、退任の挨拶とさせていただきます。

学内広報　第 478 号　2023 年 4 月 10 日



2023 年 3 月 1 日最終講義、教育研究棟講堂

オフロードで耳を澄ます

いしばし糖尿病内分泌内科クリニック院長
自治医科大学名誉教授
石橋俊氏（１９８２卒）

過去を振り返ると私は実にラッキーだったと言わざるを得ない。戦のない世に生まれ、勉強に集中できる環境に育ち、授業料の安い自由な学校（国立）で勉強し、人気職業である医者と研究者と教育者とを経験し、大きな健康不安はなく、尊敬できる師や友人、そして楽しい家庭にも恵まれた。30歳代前半の留学先ではトップサイエンティストたちの薫陶を受け、40歳代前半から最近まで「医療の谷間に灯をともす」使命感に燃える若者と過ごした。さらに言えば、脱サラを果たし、定年の節目に鉄門だよりに寄稿の機会をいただいた。

後輩の参考までに学生時代を振り返りたい。授業出席の熱心度は中くらいで、いつでも抜け出せるように後方に座り、試験前には友人のノートのお世話になった。記憶に残る鬼気迫る名講義を三つあげるとすると、本庶佑、大橋靖雄、野々村禎昭の三先生かな？お二人は鬼籍に入られたが。日本語の教科書や試験対策本は買わないと意固地になっていた。Harrison's Internal Medicine原書の読破、N Engl J Med の case records of the MGH の抄読とECFMG合格を目指した。時間の大半は勉強以外に費やしていたにも関わらず、一度も追試を受けたことがない。牧歌的時代でもあり、要領もよかったのだろう。

鉄門陸上部に加え鉄門山岳部に所属した。往年の名ランナー瀬古利彦の走りを横目に織田フィールドや駒場のグラウンドなどで練習した。合宿は検見川寮だった。短距離200mでは東医体の銀メダルまで到達し、連敗続きだった新潟戦では主将を務めたM３のときに優勝できた。

山岳部の合宿や個人山行では、根津の赤札堂で買い出しをして、兎小屋で荷造りし、中央線や上越線の夜行列車の床に敷いた新聞紙の上で寝て目的地を目指した。薬品類の荷上げと診療補助の名目で毎年二回は穂高の涸沢診療所を往復した。秋休みに剱岳から奥穂高岳に抜けたソロ山行が達成感という意味で印象深



▲ 1992 年８月 UT Southwestern 留学中のパーティーでのスナップ。左、筆者、中央、Joachim Herz 先生、右、Michael Brown 先生。

い。リーダーを務めた山行で仲間の一人が雪面を滑落した。幸い岩に衝突して止まったため、遭難事件に至らずに済んだ。二度ほど自分も墜落したが、運良く骨折しなかった。ヒヤリハットだらけで思い出すだに冷や汗が出る。

東京大学学生基督教青年会（東大YMCA）寮で、吉野作造・森有正・木下順二などを親しく感じて過ごした。日曜日には中渋谷教会で佐古純一郎の説教を聞いた。その関係で参加したボランティア活動では、障害という過酷な運命を背負った子どもたちが健気に明るく生きているのに接し、つまらないことに悩んでいる自分の卑小さを知った。

卒後は二年の研修後、東大病院第三内科で六年、UTSouthwesternで四年、東大病院に戻って七年、自治医大で22年、教員生活を送った。研究には「eureka!」気分を味わう醍醐味があり、世界中に友人ができる。結果や評価は二の次でいい。ジョルダーノ・ブルーノやグレゴール・メンデルを持ち出すまでもなく、真に革新的な発見は同時代には理解されないこともある。7月の学会で「忘れえぬひと―私の動脈硬化研究史を遡る」と題して半生を総括してみた。仕事以外では、日本百名山を還暦前に完登し、洞爺湖・バンクーバー・ホノルルマラソンなどの旅ランも楽しんだ。単身赴任の夜長に好きな読書に耽った。

この度は、晴れて高齢者となったので、50年近く在籍したアカデミアを離れ、埼玉県北部の地域医療に身を投じた。ちょっとした冒険である。平日は多忙だが、週末にはジムで汗を流し、ときにライブコンサートや山に出かける。老害と言われるまで（もう言われているかも）、もうひと頑張りしたい。稲穂を渡る風、小鳥の囀り、蛙や虫の声、そして、声なき声に耳を澄ましながら。（誰かをあげると誰かをあげないことになるため、謝辞は割愛で勘弁願いたい）



▲2019年7月Herz先生訪日時に富士山山頂でのスナップ。左、筆者、右、Herz先生。栃木の自治医大で講演してもらい、京都の学会に参加し、山中湖のホテルで天候を伺い、梅雨の切れ目に、富士宮口から登頂し、須走口に下山した。箱根経由で成田に戻った。

開院のご挨拶―祖父の回想など

いしばし糖尿病内分泌内科クリニック
石　橋　　俊

本年(2023年)２月13日に市内の下手子林に糖尿病と内分泌専門のクリニックを開院させていただきました。９ヶ月経過した今をヒトの成長に例えるなら、つかまり立ちに挑戦しているといったところでしょうか？これもひとえに医師会の皆様のお力添えのおかげです。この場をお借りして御礼申しあげます。

開院前に北埼玉医師会さんにご挨拶に伺った際、私の名前が出ていると言って見せていただいた過去の医師会名簿に、没年にあたる82歳の父方祖父の紹介文があり、その家族欄の孫の項に「俊(12)」とありました。ちなみに祖父の趣味は「読書・花卉・園芸」とあります。そこで、ご挨拶代わりに、祖父の思い出と開院の動機とを文章にしてみたいと思います。

没後54年も経つので、流石に祖父を知る人は少なかろうと思っていましたが、60歳代以上の患者さんから、祖父に「診てもらった」､「自転車で往診する姿を見かけた」､「手子林小学校の校医をしていたのを知っている」、などのお言葉をいただきました。人の出入りが激しく、平均年齢の若い東京のような都会では想像できないことです。

私の出生地は羽生市下手子林ですが、父の仕事の都合で小学校卒業までは東北地方を転々としていました。下手子林にある父の実家にはお盆に年１回帰省する程度で、私の祖父との交流も帰省時だけにほぼ限定されていました(写真１)。その実家に隣接する「石橋医院」で、大正２年11月から没年の昭和44年８月まで56年間も祖父は働いていたことになります。祖父晩年に私は小学生で、実家の風呂が五右衛門風呂だったこと、大きな銀杏の木の下にある井戸でスイカを冷やしていたこと、柿の木の葉っぱ裏に潜んでいた毛虫に触れて額が腫れ上がったこと、近隣に住む従兄弟たちと遊ぶのが楽しかったことなどが思い出されます。



写真１：祖父(推定72歳)と幼年期の私(推定２歳)(８ミリフィルムから)

祖父の診療風景を一度だけ目撃(見学)したことがあります。私から見ればお兄さん(恐らく小学高学年)の子供が２人で診療所にやってきました。一人の足の裏にパックリと大きな切創がありました。田圃の中を裸足で歩いて、落ちていたガラス片で怪我したようでした。祖父は煮沸消毒した針糸で淡々と切創を縫合していました。当時の祖父は80歳を超えていたと思います。

私が小学６年生の時、祖父急逝の訃報が当時福島市に住んでいた私どもに届きました。夜行列車だったのか、小山駅に向かう東北線の列車の車両連結部の暗がりに座るお尻が痛かったのが思い出されます。実家から寺に向かう葬列の中で遺影を運ぶ係を孫の私が仰せつかりました。享年82歳でした。

９年前に父も他界し、下手子林の土地家屋の

管理が私の仕事になりました。毎年春になると孟宗竹の竹林の筍から始まり、敷地に雑草が繁茂し始めます。月１～２回、草刈りのために下手子林に通う生活が始まりました。刈れども刈れども猛々しく伸びる雑草に加え、夏は暑熱や蜂の襲撃との戦いになります。この作業を一体いつまで続けるのか？という不満が溜まってきた時期と、私の前職の自治医科大学の定年が近づいていた時期とが重なりました。

脱サラに憧れもありましたので､｢石橋医院｣の跡地に新たにクリニックを作り、開業医としてスタートし直すことを思いつきました。人生百年時代を反映して、大学教授の定年退職後に、新規開業する先生も私の知る限り５人を降りません｡その多くは都会のビル診です｡一方、当地は市街化調整区域で、駅からは遠く、下水道もありません。前任地に近い場所や市街地に地の利があるという意見もありました。しかし、｢石橋医院｣の跡地という条件を外したら、敢えて私が開業する必然性がないと感じました。埼玉県は人口当たりの医師数が最も少なく、糖尿病・内分泌代謝内科の専門医も少ないので、私にもお役に立てる余地が残されているのではないか？と思われました。最後に私の背中を押してくれたのは、妻と元教室員たちでした。

クリニックの建築に先立つ旧家屋解体の際に(写真２)､｢石橋医院｣の診療所部分に保存され



写真２:解体前の旧｢石橋医院｣診察室外観



写真３:４冊の死亡診断書等交附控帳

ていた聴診器･顕微鏡･注射器･メスやピンセット・天秤・医薬品を整理しました。診療録・帳簿に加えて、死亡診断書・死体検案書等の交附控帳(大正10年５月から昭和30年４月)も残されていました(写真３)。そこには氏名・住所・生年月日･死亡年月日･死因の記載がありました。判読可能で欠損データのない2,107件のデータを excelに転記してみました。解析結果の詳細は別稿に譲るとして、そこから以下のような当時の風景が見えてきました。

乳幼児死亡が過半数、若い女性は妊娠・出産関連死が多い､｢胃腸加答児｣・結核・肺炎・｢気管支加答児｣・ヂフテリア・百日咳・麻疹・腸チブス・破傷風・赤痢・ワイル氏病などの感染症死が多い(驚くべきことに、この傾向は大正から昭和にかけてほとんど変わりません)、悪性腫瘍では胃癌・肝癌・子宮癌が多い、事故死には溺死と(鉄道)轢死が多い、自殺には縊死と農薬中毒が多い。半身不随・脳出血・脳梗塞などの脳血管障害や心臓弁膜症･心不全･狭心症･突然死などの心臓死も多いですが、剖検されてはいないはずですから、診断名の正確な確定は困難です。105歳男性が最長寿です。生年は自己申告でしょうし、誤記であれば、98歳女性が最長寿となり､後者が妥当な気がします｡元来、行政用の記録ですから、科学的な検証には耐えないかもしれません。

同日記載の死亡診断書３件という日も少なからずあり、診療活動と並行してお看取りや死体

検案もしていたとすると、文字通り寸暇なく仕事に明け暮れる日々だったのではないかと想像されます。「夜中に雨戸をどんどん叩かれて起こされる生活には自分は耐えられないから、開業医になりたくなかった」という父の言葉が思い出されます。現在では、専門のクリニックが近隣にもあり、重症患者は地域の中核病院などに紹介できますが、当時は、埼玉県では小川赤十字病院や大宮赤十字病院が開設したかしなかったかで、消防署の救急車搬送のシステムも未整備だったはずです。

専門医制度や医師会などの再教育制度も未整備な状況で、どのように医学の進歩にキャッチアップしていたのでしょうか？亡伯父から亡父に宛てた「(祖父が)老いたので早く医院を手伝って欲しい」という内容の書簡が多数残されている事実から類推するに、高齢による体力の衰え以外に、医療機器の整備や医学知識のキャッチアップにも遅れがあったのは想像に難くありません。その当時、地域中核病院のICUを任されながら脳神経外科の専門医を志向していた若き父には、総合医が前提の「石橋医院」の承継は受け入れ難かったかもしれません。祖父が死亡・廃業するまでの14年間の交附控帳が欠落しているのは、紛失した可能性以外に、当該業務を近隣の若手医師に委ねたためかもしれません。言い換えると、68歳前後までは死体検案を引き受けていたことになります。

さて、当地に住んでみると、今まで知らなかった多くのことに気付かされます。空が広く、夜が暗く、星や月がきれいというのが第一です。第二は、稲穂や道端の草花の美しさです。第三は路傍の石仏の多さです。利根川に南接する当地は武州になりますが、武州の山よりも赤城山・皇海山・男体山などの上州・野州の山々が迫ってみえるというのも驚きでした。

今年前半のNHK朝ドラ「らんまん」の主人公のモデルの牧野富太郎が日本にも自生しているのを発見したとされる「ムジナモ」は、日本では羽生市の宝蔵寺沼にしか現在は自生していない（写真４）、剣道着の藍染シェアは羽生市が日本一、鰻屋さんが多く、うどんも美味しい、という発見もありました。東北自動車道の羽生PA上りの小江戸が人気なのは知っていましたが、イオンモール羽生やカインズモールなど新しい商業施設も人気で、羽生市の新しい中心になりつつあるという認識も新たにしました。

大学病院勤務時代は、多種多様な仕事を処理する必要上、一人一人の患者さんに向かい合う時間が犠牲になっていました。大学病院を退任後は教育・研究・管理・学会活動などの業務が大幅に縮小された結果、患者さんにじっくり向き合いことができるようになりました。また、専門外領域も勉強してみようという気持ちのゆとりができました。一方、勉強が追いつかないことに関しては、大学に在籍する若手の支援も得やすい立場はメリットと感じています。

これからしばらくは、祖父も眺めていたであろう同じ景色を眺めながら、羽生市医師会の皆様とともに近隣住民の健康と福祉の向上に尽力する所存ですので、ご支援のほどよろしくお願いいたします。



写真４：７月22日に羽生市産業文化ホールで開催された「ムジナモ講演会」の看板

世界の中心で



男体山山頂



Whisler



Vancouver

仲間と



教室員



学生



糖尿病センター



臨床栄養部



学会にて（New Orleans）



研究室にて



内分泌代謝学部門の同門会



東大研究室の同門会



内科学講座科長会前期



内科学講座科長会後期

教室イベント



お花見



BBQ





スキー旅行



忘年会

留学先(UTSWMC)表敬訪問



Joe Goldstein



Mike Brown



David Russell



Joachim Herz



Bob Hammer



Jonathan Cohen

オフ



瑞垣山



根名草山から奥鬼怒



学会仲間との釣り



ホームBBQ 鉄門陸上部



雨飾山



足利尊氏マラソン

寄稿者名一覧　List of contributers

一般

愛葉　美奈	Mina Aiba	26
麻生　好正	Yoshimasa Aso	27
荒井　秀典	Hidenori Arai	28
新井　洋由	Hiroyuki Arai	29
荒木　栄一	Eiichi Araki	30
粟田　卓也	Takuya Awata	31
飯塚　陽子	Yoko Iizuka	32
五十嵐　正樹	Masaki Igarashi	33
石垣　泰	Yasushi Ishigaki	34
泉　哲郎	Tetsuro Izumi	35
井上　郁夫	Ikuo Inoue	36
岩本　禎彦	Sadahiko Iwamoto	37
岩本 安彦	Yasuhiko Iwamoto	38
宇都宮　一典	Kazunori Utsunomiya	39
江藤　一弘	Kazuhiro Eto	40
及川　眞一	Shinichi Oikawa	41
大橋　健	Ken Ohashi	42
大橋　博	Hiroshi Ohashi	43
小川　誠司	Seishi Ogawa	44
小澤　敬也	Keiya Ozawa	45
梶尾　裕	Hiroshi Kajio	46
春日　雅人	Masato Kasuga	47
勝部　聡太	Sota Katsube	48
川上　正舒	Masanobu Kawakami	49
葛谷　健	Takeshi Kuzuya	50
倉林　正彦	Masahiko Kurabayashi	51
Fredric B. Kraemer	Fredric B. Kraemer	52
Jonathan Cohen	Jonathan Cohen	53
Joseph L Goldstein	Joseph L. Goldstein	58
Ira J. Goldberg	Ira J. Goldberg	59
神崎 恒一	Koichi Kozaki	60
児玉　龍彦	Tatsuhiko Kodama	61
後藤田　貴也	Takanari Gotoda	62
齊藤　寿一	Toshikazu Saito	63
酒井 寿郎	Juro Sakai	64

一般（続き）

佐倉　宏	Hiroshi Sakura	65
佐藤　隆一郎	Ryuichiro Sato	66
斯波　真理子	Mariko Shiba	67
島田　朗	Akira Shimada	68
島田　和幸	Kazuyuki Shimada	69
嶋田　昌子	Masako Shimada	70
島野　仁	Hitoshi Shimano	71
清水　孝雄	Takao Shimizu	72
下村　伊一郎	Iichiro Shimomura	73
椙村　春彦	Haruhiko Sugimura	74
関谷　元博	Motohiro Sekiya	75
曽根　博仁	Hirohito Sone	76
平良　亘	Wataru Taira	77
髙田　良久	Yoshihisa Takada	78
高梨　幹生	Mikio Takanashi	79
高橋 慶一	Keiichi Takahashi	80
田村　嘉章	Yoshiaki Tamura	81
為本　浩至	Hiroyuki Tamemoto	82
千葉　泰子	Yasuko Chiba	83
塚本 和久	Kazuhisa Tsukamoto	84
寺内　康夫	Yasuo Terauchi	85
戸邉　一之	Kazuyuki Tobe	86
富永　眞一	Shinichi Tominaga	87
供田　洋	Hiroshi Tomoda	88
中釜　斉	Hitoshi Nakagama	89
野田　光彦	Mitsuhiko Noda	90
畑　裕	Yutaka Hata	91
原田　賢治	Kenji Harada	92
武城　英明	Hideaki Bujo	93
Michael S. Brown	Michael S. Brown	58
古川　雄祐	Yusuke Furukawa	94
古村　芳樹	Yoshiki Furumura	95
Joachim Herz	Joachim Herz	96
南　昌江	Masae Minami	97
宮園　浩平	Kohei Miyazono	98

一般（続き）

村勢 敏郎	Toshio Murase	99
村野 俊一	Shunichi Murano	100
森 和俊	Kazutoshi Mori	101
森澤 雄司	Yuji Morisawa	102
矢田 俊彦	Toshihiko Yada	103
矢作 直也	Naoya Yahagi	104
山内 敏正	Toshimasa Yamauchi	105
山下 静也	Shizuya Yamashita	106
山田 正信	Masanobu Yamada	107
山本 徳男	Tokuo Yamamoto	108
横手 幸太郎	Koutaro Yokote	109
横出 正之	Masayuki Yokode	110
横山 信治	Shinji Yokoyama	111

大学他部門在籍者

永井 良三	Ryozo Nagai	114
大槻 マミ太郎	Mamitaro Otsuki	115
新井 茉美	Mami Arai	116
尾仲 達史	Tatsushi Onaka	117
苅尾 七臣	Kazuomi Kario	118
川合 謙介	Kensuke Kawai	119
川島 秀俊	Hidetoshi Kawashima	120
小谷 和彦	Kazuhiko Kotani	121
佐久間 康成	Yasunaru Sakuma	122
佐田 尚宏	Naohiro Sata	123
高橋 将文	Masafumi Takahashi	124
田島 敏広	Toshihiro Tajima	125
長田 太助	Daisuke Nagata	126
原 一雄	Kazuo Hara	127
細谷 好則	Yoshinori Hosoya	128
村上 かおり	Kaori Murakami	129
茂木 さつき	Satsuki Mogi	130
山本 博徳	Hironori Yamamoto	131

現及び元教室員

大城 太一	Taichi Ohshiro	134
大須賀 淳一	Junichi Ohsuga	135
岡﨑 啓明	Hiroaki Okazaki	136
岡田 健太	Kenta Okada	137
岡田 修和	Nobukazu Okada	138
加藤 夏果	Natsuka Kato	139
倉科 智行	Tomoyuki Kurashina	140
甲賀 裕希子	Yukiko Kouga	141
坂井 謙斗	Kento Sakai	142
櫻井 百恵	Momoe Sakurai	143
高橋 学	Manabu Takahashi	144
武井 暁一	Akihito Takei	145
武井 祥子	Shoko Takei	146
竹田 幸代	Yukiyo Takeda	147
永島 秀一	Shuichi Nagashima	148
畑野 悠	Yu Hatano	149
T.Bayasgalan(バイサ),	Tumenbayar Bayasgalan	150
E.Bolormaa (ボギ)	Enkhtuvshin Bolormaa	150
村上 明子	Akiko Murakami	152
野牛 宏晃	Hiroaki Yagyu	153
山岡 桂子	Keiko Yamaoka	154
山崎 久隆	Hisataka Yamazaki	155
渡邉 秀平	Shuhei Watanabe	156
王 暁黎	Xiaoli Wang	157

記　念　寄　稿

― 一般 ―

※50 音順とさせていただきましたが、編集の都合上前後しておりますこと、ご了承願います。



記念棟から望む日光白根山 2578m、男体山 2486m、女峰山 2483、登頂各 1 回

バーベキューの思い出

日本赤十字社医療センター産婦人科　　愛葉　美奈

石橋先生が長きにわたる教授職を全うされ、ご退任の日を迎えられましたことを、心よりお慶び申し上げます。
石橋先生は東京大学医学部陸上部 OB で、私から見ると 36 学年上の大先輩になります。学生時代は短距離走でご活躍され、現在も部内の歴代記録に名が刻まれています。

新型コロナウイルスの流行までは、毎年陸上競技シーズンの終わる秋頃になると、石橋先生は陸上部の学生を大勢ご自宅に招いてバーベキューを開催してくださっていました。私は学生時代に図々しくも 6 年連続で参加させていただき、卒業後にもお邪魔しておりましたので、バーベキューの思い出をつづらせていただきます。

よく晴れた 11 月の午後 3 時、閑静な住宅街を駅から 10 分ほど歩いてご自宅に伺います。インターホンを押すと先生が玄関に出てこられ、すぐに学生を迎え入れてくださいます。笑顔が素敵な奥様に促され、道中考えていたご挨拶の言葉を述べる間もなく、中庭に出て火起こしを開始します。慣れない学生たちですが、石橋先生の監督のもと、着火剤と炭を組み上げ交代で空気を送ります。炭火が安定してきたらビールで乾杯です。奥様が絶品の手料理を次々とキッチンから運んでくださった後、運動部の学生でも食べきれないほどたくさんのお肉がまた次々と出てきて焼かれていきます。石橋先生は部員一人ひとりのことをよく見て覚えていてくださり、教授としての普段の姿も眼前に見えるようでした。また、現在も健脚は衰えず、マラソンや登山のお話に何度も驚かされました。
満腹になりすっかり日も沈んだころ、リビングルームに移動します。今まで飲んだことがないほど美味しいお酒を何本も開けていただき、途中で OB も合流して話に花を咲かせ、デザートやコーヒーまでいただいて記念撮影をして夜遅くに解散というのがいつもの流れでした。明るいリビングでは石橋先生と奥様が仲睦まじく言葉を交され、時にはお嬢様方も顔を見せてくださり、温かい家庭の姿が強く印象に残っています。学生だった当時、年に一度のこのバーベキューは、美味しいお料理とお酒をいただける上に、進学で実家を出てから触れる機会の少なくなった家庭の温かさも同時に味わえるような、とても幸せな時間でした。美酒に酔ってその場で眠り込んでしまうなど粗相を働く者も何人もいましたが、毎年温かく迎えてくださり、感謝の念に堪えません。

ご退任なさった後も素敵なご家庭の姿は変わらないと確信しております。石橋先生とご家族の皆様の今後一層のご多幸とご健康をお祈り申し上げます。

石橋　俊　教授ご退任に寄せて

獨協医科大学病院　病院長
獨協医科大学内科学（内分泌代謝）教授　麻生　好正



石橋　俊　教授、この度はご退任、誠におめでとうございます。22 年に及ぶ長い期間、教授という重責を見事に全うされ、無事、定年を迎えられたことを心よりお喜び申し上げます。先生の普段の溌溂とした若々しいお姿から、定年のイメージは全くなく、今年度を持ってご退任とのことで大変驚いております。また、私にも寄稿文の機会を与えて頂き、本当に光栄に存じます。

石橋教授と私の本当の意味での最初の出会いは、私が埼玉県から栃木県の獨協医科大学に異動した 2012 年 1 月に遡ります。石橋教授は、私の専門分野である糖尿病・内分泌代謝学の栃木県のトップでしたので、まずはご挨拶をと多少、強引に会食の機会をお願いしたところ、快く受けて頂きました。2012 年の年明け早々に宇都宮市のステーキハウスでご一緒したのですが、スタートして直ぐに、石橋教授は開口一番、「君は圧が強いね。アルコールが入る前からその機関銃トークなの？」、そして、「少し、疲れるね」と笑いながら言われたのです。第一印象が悪かったのでは心配したのですが、その後、11 年間にわたり、温かい目で見守って頂き、辛抱強くお付き合いして下さり本当にありがとうございました。

この 11 年間、石橋教授とは、栃木県の糖尿病合併症対策、日本糖尿病協会栃木県支部の運営、糖尿病関連の研究会などお会いする機会が多く、その度、ご指導、ご支援を賜り、本当に感謝しております。特に、講演会では、数多く座長の労を取って頂き、いつも恐縮しておりました。私が講演中に、センスのないダジャレを発すると、苦笑いしながら反応して頂いた石橋教授のお顔が忘れられません。また、米国糖尿病学会では、広い会場の中、何回か偶然にもお会いして、勝手にご縁を感じておりました。

先生は診療、教育、研究と第一線で休みなく走り続けてきたと思いますので、定年後は、是非、リラックスする時間を作られることをお願いしたいと思っておりましたが、何と 2023 年 2 月に糖尿病内分泌内科クリニックを新規にご開業されるとお聞きしました。その気力、体力、エネルギーに驚嘆するとともに敬意を表したいと存じます。地域医療の担い手として、「赤ひげ」となって、臨床医の本来あるべき姿を追求するのではと推察しております。そして、石橋教授の優しさで、患者目線で、患者さんにとって最高の医療を提供することを確信しております。登山で鍛えた体力、元々の知力をフルに発揮され、これからも益々のご活躍をお祈り申し上げます。そして、私共、後進に対して、引き続き、ご指導のほど宜しくお願い致します。

令和 5 年 1 月 23 日

石橋俊先生との思い出

国立長寿医療研究センター　理事長　　荒井　秀典

石橋俊先生、20 年以上にわたる自治医科大学教授としての奉職を終え、無事退官に至りましたこと心よりお祝い申し上げます。退職後は地域医療に貢献されると伺っております。これまで、糖尿病、脂質異常症を中心に診療されてこられたかと存じますが、地域医療においては老年医学の重要性をますます実感されるのではないかと存じます。今後は生活習慣病のみならず、老年医学の視点からも協働することができればと存じます。

さて、石橋先生との思い出ですが、やはりダラスから LDL 受容体ノックアウトマウスの成果をひっさげて帰国された 1994 年以降になるでしょうか。私は 1997 年にアメリカから帰国しましたが、アメリカにいるときから石橋先生のご活躍については注目しておりました。私が帰国した頃には石橋先生はすでにアメリカでの研究を発展させ、動脈硬化学会や様々な講演会で華々しい研究成果を発表されており、圧倒されるばかりであったことを覚えております。その後も動脈硬化、リポ蛋白代謝に関して常にレベルの高い基礎研究を継続されるとともに臨床研究にも力を注がれました。また、多くの人材を輩出されたのも周知のところであります。

光栄なことに私は石橋先生とこれまで学会を始め一緒に研究をさせていただく機会を頂きました。まず、原発性高脂血症研究班においては石橋先生が班長をお務めの時に分担研究者として脂質異常症の実態調査に参加させていただきました。また、ある薬剤の開発に関しては 10 年以上にわたりご一緒させて頂きましたが、石橋先生のリーダーシップにより、その薬剤は順調に上市されました。その開発に共に携わらせて頂いたのは、大変光栄でよい思い出になっています。

ご存じのように石橋先生は研究者の中でも大変博学で、学会での質問では必ずいくつかの論文のデータを参照しながら、質問されていたことに敬服しております。

最後になりますが、これからも先生の知識と人柄で地域医療に貢献されることを祈念しています。石橋先生と言えば、山登りですが、お互い定年前後になってきましたので、機会があれば、山登りをご一緒したいと思います。それまでにはなんとか腰を治して、しっかり筋トレしておきたいと思います。本当に長い間お世話になりました。今後ともよろしくお願い申し上げます。

石橋俊教授のご退任に寄せて

帝京大学薬学部
（元東京大学薬学系研究科教授　医薬品医療機器総合機構(PMDA)理事）　新井　洋由

石橋先生、ご退任誠におめでとうございます。
先生は私の一歳年下のほぼ同期で、私が米国留学から帰国してからのお付き合いとなりました。留学中私は血漿リポタンパク質代謝、特に LCAT，CETP に関わる研究をしておりまして、帰国後もその仕事を少々続けておりました。しかし、薬学部所属ということでヒト血液等のサンプルが手に入らず困っていたところ、当時第三内科におられた（故）山田信博先生を紹介して頂き、その時初めて石橋先生、後藤田先生、島野先生などグループのメンバーとお知り合いになりました。リポタンパク質代謝研究に際しては、当時 LCAT，CETP のみならずリポタンパク質やアポタンパク質も自前で精製しなければならない状況で、石橋先生をはじめグループの皆様から親切に御援助・ご助言を頂いたことをよく覚えております。

ヒトとマウスではリポタンパク質代謝は大きく異なっているため動脈硬化症の発症メカニズム解析にモデル動物の限界を感じた私は、その後コレステロールから脂肪酸代謝の研究に移ってしまいました。しかし、石橋先生が自治医大学内科学講座内分泌代謝学部門の教授にご就任された後も、肝臓におけるコレステロール生合成に関する研究、脂肪組織における新たなリパーゼに関する研究、内皮細胞のスカベンジャー受容体に関する研究、等いくつかの共同研究をさせて頂き、J. Lipid Res., Diabetes, J. Biol. Chem.など一流誌に共著とさせて頂きました。改めてお礼申し上げます。また、2010 年に自治医科大学の特別講義にも呼んで頂きました。当時の講義スライドを振り返ってみましたら、線虫(C.elegans)を使ったアシル基導入酵素の同定とか脂肪酸二重結合の位置の役割といった非常に基礎的な話ばかりでした。臨床を目指す聴衆が多い中で基礎的過ぎる話をしてしまったと今更ながら反省しております。講演の後は駅近くだったと思いますが料亭のようなところでご馳走になりまして、なぜかその映像が今も脳裏に残っております。自治医大にも栃木県の周辺地域にも訪れた事はこれ一回きりで、いい経験をさせていただきました。

石橋先生はご退任後埼玉県羽生市のご祖父様ゆかりの土地で医院を開業されたことを知りました。大学における研究・教育・臨床とは違った環境に身を置いて新たな道を進み始められたこと、大変羨ましくも尊敬致します。また、地域の住民の方々にとっても基礎から臨床までご存知の素晴らしいお医者様が来られたことは誠に幸運なことと思います。先生は週末には約 15 km のジョギングをされていると伺いましたが、私も土日曜日の朝 10 km 程走っています。この調子なら 75 歳くらいまで走れるかなと思っていたのですが、最近猛暑のせいか途中でめまいがするようになりました。お互いにまだ後期高齢者までは少々時間がありますが、お身体にはくれぐれもお気をつけて新たなお仕事に励んでいただければと思います。ますますのご発展をお祈り申し上げます。

石橋　俊先生の教授ご退任に寄せて

熊本大学大学院代謝内科学講座　　荒木　栄一



石橋　俊先生の自治医科大学内科学講座内分泌代謝学部門教授の定年でのご退任、誠におめでとうございます。心よりお祝い申し上げます。
石橋先生は昭和 57 年に東京大学医学部をご卒業され、内科医としての研鑽を積まれたのちに、東京大学の第三内科に入局し、糖尿病、脂質異常症、動脈硬化症などの内分泌代謝学のご研究と診療に当たって来られました。特に糖尿病合併症や動脈硬化症の発症機序などに関して、発生工学的な手法を用いた疾患モデル動物の作成など最先端の技術も駆使して、これらの難題に立ち向かっておられます。

私は昭和58年に熊本大学を卒業し、インスリン作用の研究といった石橋先生と近い領域で研究を行ってきましたので、以前から石橋先生のことを存じ上げておりました。しかし、石橋先生と親しくお付き合いさせていただくようになりましたのは、石橋先生が中心となってその作用機序や臨床効果、さらには臨床応用の研究を行って来られましたK−877の研究グループのメンバーに入れていただいた以降になります。K−877（一般名ペマフィブラート）は SPPARMα と呼ばれる選択的 PPARα モジュレータであり、従来のフィブラート製剤よりも PPARα に対する選択性が高く、強力で安全性の高い高中性脂肪血症の治療薬として開発されてきました。この研究グループのサポートによってその有効性や安全性が確かめられ、K−877は日本において脂質異常症の治療薬として承認・販売に至りました。
石橋先生は、他のメンバーの意見を十分に配慮された上で、確実かつ丁寧に研究グループの運営に努めて来られました。一方、オフの時間に食事をご一緒する際には、山登りの話など、積極的に色々な話題を提供いただき、石橋先生との食事は大変素敵な時間へと変わります。学術的な面だけでなく、人間的な魅力にも溢れた、大変素晴らしい先生だと思っております。2014 年にはウイーンで開催されました EASD（ヨーロッパ糖尿病学会）で石橋先生や何名かのメンバーの先生とご一緒する機会に恵まれ、食事をご一緒したり、ウイーン美術史博物館の夜間特別開館でクリムトなどの素晴らしい絵画を鑑賞したのが良い思い出として残っています。

先日、石橋先生からご退官されるというご挨拶とともに、ご退官後は開業されるというお話をお伺いした時には、何かアカデミックなお仕事に就かれると思っておりましたので、大変びっくりしました。しかし、実は石橋先生のお祖父様が開業されていた場所にご開業されると知って、納得しました。私の勝手な想像ですが、きっといつかはお祖父様の跡を継ぎたいと以前から思っておられ、それがやっと実現するのだろうな、と思っています。石橋先生の人当たりの良さ、丁寧なお話の仕方、そして豊富な臨床経験から、開業のご成功は間違いないと確信しています。
石橋先生の益々のご健勝と、いしばし糖尿病内分泌内科クリニックのご発展を祈念いたしまして、お祝いの言葉とさせていただきます。ご退官、そしてご開業、本当におめでとうございます。

石橋先生との思い出

国立国際医療研究センター、沖中記念成人病研究所
（膵臓移植中央調整委員会 委員長、元埼玉医科大学内分泌・糖尿病内科教授）
栗田 卓也

自治医科大学内分泌代謝科の主任教授を長く勤められた石橋教授が退任するにあたり、少しばかり石橋先生の思い出を述べさせていただきます。

私は石橋先生の大学の 1 年先輩に当たり、自治医科大学内分泌代謝科にも葛谷健先生、岩本安彦先生がおられた時期に在籍し遺伝子解析（1型糖尿病の HLA 遺伝子やミトコンドリア遺伝子異常症例など）を行っていたことはありますが、その後私は埼玉医科大学に移り、同じ職場の同僚となったことはありません。しかし、卒業後は生活習慣病を専門とし、北関東地区の医科大学の内分泌代謝疾患を担当する科の責任者を務めるなど、石橋先生とは共通点も多くいわば「同好の士」として、勝手に親近感を抱いておりました。

医科大学の主任教授といっても、結局は中間管理職であり、医科大学では診療・教育・研究の三本柱を高いレベルで行うことが求められるので（さらに自治医科大学は私立大学といっても「半官半民」のエリート大学でもあり）、私の経験から推察しても、かなりたいへんだったと思いますが、特に脂質代謝研究の日本の権威の1人として、見事に科の発展に尽くされたと感じております。お疲れ様でした。

さて、現在私自身は大学を定年となっていますが、その数年前に栃木県の医科大学に移った関係で栃木県の医療講演会の世話人としてご一緒することがたびたびありました。糖尿病の治療薬は多くの新薬が発売され、その関係の講演会が多かったわけですが、幸いコロナ禍の前であったため、石橋先生や埼玉県で親しくしていた獨協医科大学の麻生好正教授（以前は旧・獨協医科大学越谷病院の所属）などと世話人会、講演会やその後の情報交換会で交流させていただいたことが楽しく思い出されます。石橋先生は栃木県の生活習慣病診療の中心として、講演会のオープニングやクロージングでダンディーな紳士然とした格調高いご挨拶をされていました。

石橋先生は、存じ上げなかったのですが埼玉県のご出身ということもあり、退職後は羽生市のクリニックでの診療もされるとのこと、今後のご健勝とご多幸をお祈りいたします。

心と感謝を込めて

東京大学医学部附属病院　国際検診センター長/糖尿病・代謝内科　　飯塚　陽子

石橋俊先生とはじめてお目に掛かったのは 1995 年頃、研修医として東大病院第三内科で研修した時です。石橋先生が大ベンとして、学生や研修医の私達に対し大変分かりやすく熱心に教えて下さり、脂質や糖尿病代謝学について熱く語っていらしたのが大変印象的でした。石橋先生に導かれ、11 研究室に入り、研究に対しても石橋先生による大変きめ細やかなご指導に恵まれ、研究の手法のみならず、研究者としての心構えもしっかりと教わりました。自治医科大学にご栄転の際に、石橋先生の外来や外勤を引継ぐことになり、石橋先生の診療のエッセンスに触れる機会に恵まれ、大変勉強になりました。

今から振り返ると、自分が代謝学を目指す大切なきっかけを作って下さり、臨床や研究の重要な礎を作って下さったのが石橋先生であり、自分が現在代謝学の臨床・教育・研究に携わることができたのも、ひとえに石橋先生の一貫した温かいご指導・心強いご支援の賜物だとこの場を借りて深く感謝申し上げます。

自分のライフワークの一つである医療の国際化に対しても、いつも気にかけて下さり、講演の機会を頂く等いつも温かいご高配を賜り、重ねて御礼申し上げます。これからも自分の強みをフルに活かし、win-win が得られるよう、人類共通の財産で・限られた資源である医療のために貢献していくことが、石橋先生のご指導へのせめてもの恩返しになれたらと思っています。今後ともご指導を宜しくお願い致します。



1998 年 11 月　東大 2/11 研歓送迎会

石橋教授にご指導いただいた論文の思い出

東京大学医学部附属病院　糖尿病・代謝内科　　五十嵐　正樹



この度は、石橋教授の退任に際し、ご寄稿させていただき感謝申し上げます。
私は、2004 年に大学院生として、東京大学第 3 内科 2、11 研で基礎研究を開始ました。石橋先生は東大 2、11 研を離れ、すでに自治医科大学教授に就任されておりましたが、石橋先生が東大で進めておられた研究プロジェクトに関わらせていただきました。具体的には、ホルモン感受性リパーゼ欠損マウスで残存するマクロファージコレステロール水解酵素を担う候補遺伝子である NCEH1 の機能解析を行い、論文をいくつか発表いたしました。論文の投稿から採択まで、石橋先生のご指導のもと取り組ませていただきましたが、お宅に何度もお伺いさせていただきまして、論文のご相談をさせていただいたのを思い出します。
石橋先生に論文の原案を提出すると、私の書いた文章の原型がなくなるほど修正されており、自分の未熟さを実感するとともに、論文を執筆することの難しさを実感いたしました。それでも、少しずつではありますが、回を重ねるごとに石橋先生の修正が少なくなって参りまして、私の論文を執筆する能力が向上したと実感いたしました。
中でも、思い出深いのが、私が留学前に石橋先生と発表したヒトの NCEH1 の論文です。reviewer のコメントにすべて回答したにも関わらず、論文が reject されてしまいました。しかし、Reviewer の評価の不当であると、石橋先生が反論の手紙を書いてくださいまして、驚いたことにその主張が認められたのです。3人だった reviewer がさらに2人追加されて再び review が行われました。この時も石橋先生のお宅にお邪魔して、何度もご相談をさせていただきましたが、最後にはすべての reviewer のコメントに回答することができまして、なんと最終的に論文が採択されたのでした。私の留学の渡米が差し迫ったギリギリの採択であり、まだ家具などが配置できていない米国ボストンのアパートの一室で石橋先生から受け取った proof の確認を行いました。石橋先生とともに闘って勝ち取った論文であり、今でも、私の研究人生で最も思い出深い論文となっております。
石橋先生には、海外の学会参加、学会発表を促していただき、また、海外に研究成果を発表することの重要性とその難しさを教えていただきました。現在、私も、若い先生の研究や論文作成の指導を行う立場となりましたが、その礎となっているのが東大 2、11 研での研究と石橋先生の教えであることは疑う余地もなく、この場を借りて厚く感謝申し上げる次第です。22 年間おつかれさまでございました。今後とも何卒よろしくお願い申し上げます。



2015 年 6 月 Boston にて

岩手の山でお待ちしています

岩手医科大学医学部内科学講座糖尿病・代謝・内分泌内科分野　　石垣　泰

このたびは、22 年間におよぶ自治医科大学教授生活を完結されるにあたって、石橋俊先生に心からお祝いを申し上げたいと思います。脂質代謝、糖代謝の領域における多大な業績と薫陶を受けた多くの後進を残された 22 年間だったと思います。

私は、大学院生時代にリポ蛋白受容体に関わる研究に取り組んでいた時分、石橋先生がご留学時代に作成された LDL 受容体欠損マウスとその関連の論文を読み返しておりました。実際に、仕事で石橋先生とご一緒させていただいたのは、2011 年の厚生労働科学研究費補助金・原発性高脂血症に関する調査研究に声をかけていただいたのが最初でした。石橋研究班は、現在も続く PROLIPID など多くの作業を手がけ、私も班員の先生方の仕事ぶりに接することで貴重な経験をさせていただきました。

石橋先生は御父上の出身大学の関係で、子供の頃は宮城県や岩手県に住んでいたと聞き、とても親近感を覚えたことを思い出します。また、岩手在住の私も登頂したことがない岩手山を息子さんと制覇したエピソードや白濁した露天風呂が印象的な藤七温泉を教えていただくなど、石橋先生の後ろを追いかけながら岩手県の自然を再認識しています。

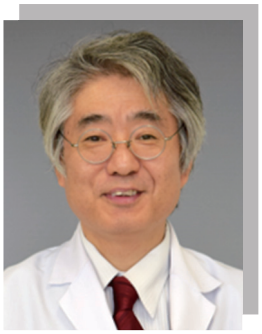
これからお時間ができた折には、岩手の山を楽しみにいらしていただければと思いますし、その時までに私が案内できるようになっていることを目標にお待ちしています。

石橋俊先生のご退任に寄せて

群馬大学生体調節研究所　遺伝生化学分野　　泉　哲郎



私は、東京大学医学部学生の同期として、石橋先生（先生と呼ぶのは少し抵抗がありますが）の若い頃から存じ上げている一人と思います。第一印象では、物静かで穏やかな性格の方かと思いましたが、実際に接してみると情熱を秘めた活動的な方であることがわかりました。学生時代はアイウエオ順で実習ベンチが近く、卒業後も、ともに東京大学付属病院第3内科に入局し、彼は動脈硬化、私は糖尿病を専門とする近縁の研究室に所属するなど、近い関係にありました。言うまでも無く動脈硬化は、脳卒中、虚血性心疾患など、頻度の多い疾病の基礎となる重要な病態であることはわかっていましたが、その当時、実臨床の場においては脳神経外科や循環器内科の医師が担当することが多く、それを専門とする医師は多くはなかったと思います。スタチンの製品化からもあまり時間が経っていない時期でした。研究を指向する医師が多かった第3内科においても、動脈硬化を研究する先生は、糖尿病、内分泌、循環器などを専門とする、いくつかの研究室に分かれていました。その後、（筑波大学長になられた）第3内科糖尿病研究室出身の山田信博先生が、独立した研究室としてまとめたという経緯があります。私自身、動脈硬化の研究の重要性は理解していましたが、それを専門とする臨床医というのを、十分に想像することができませんでした。しかしながら、その後、石橋先生は、中性脂肪やコレステロールの代謝に関わる酵素の同定やその遺伝子欠損マウスの解析、マクロファージの病態への関わりなどに関する業績を次々に上げられたことは周知の通りです。そして自治医科大学内科の教授に就任され、広く内分泌代謝疾患の研究・臨床を先導されることとなり、先生の先見の明に改めて感心することとなりました。私自身は、留学後、群馬大学生体調節研究所で、臨床の場から離れ、基礎医学研究にもっぱら関わるという立場の違いは起きましたが、ともに北関東の大学に転出したことなどで、数々の接点があり、学会や種々の研究会でご一緒し、彼に群馬大学でセミナーをお願いしたこともあります。また、糖尿病や肥満の遺伝学的成因について研究していた自分が、思いがけず脂肪分解酵素や脂肪組織マクロファージの研究を行うことになり、石橋先生の論文を参考にすることもありました。このように、先生とは長いお付き合いとなりました。石橋先生が、地域に根差した臨床医学に注力しながら、研究を重んじて来られたことは、その実績からもうかがえますが、ご退任後は開業するということを聞きました。一瞬、意外な決断と思いましたが、初めて会った頃の彼の心優しい人柄を思い起こし、彼らしい選択と納得しました。開業の場でも、きっと良い臨床医となることと思います。古くからの友人として、ますますのご活躍を祈念すると共に、今後は、より気の置けないお付き合いができればと思っています。



埼玉医科大学内分泌内科・糖尿病内科　　井上　郁夫

令和五年三月をもって、石橋先生が自治医科大学を定年退職なさると言うことを半年ほど前にうかがいました。いつも若々しく、思慮深く、お優しい石橋先生がそんな年齢になられたのかと小さな驚きでした。まさしく光陰矢の如し、若輩者の私自身の人生を重ねつつ、石橋先生の退職を感慨深く感じています。

私は、平成元年、母校埼玉医大より、恩師河津捷二先生のご紹介で東京大学第三内科 11 研に国内留学をさせて頂きました。当時、血気盛んな山田先生が研究室の講師として、若手研究者を率いて大変活気に溢れていました。そんなところに右も左もわからない、研究の「け」の字もわからない私のような者が飛び込んでいきました。若手の先生方もきっと煩わしさを感じていたのではないかと思いますが、そんな私を手取り足取り、優しく、指導して下さったのが他でもない石橋先生です。先生のお陰で、実験のテクニックや動物の世話など大学院生として、なんとかマスターでき、その後の研究生活での基礎を学ばせて頂きました。家にも招いて頂き、埼玉より単身東大に乗り込んだ私を随分、親身になって面倒をみて下さりました。私が母校に戻った後も、学会や同窓会など、お会いする度に親しく接して下さり、そのお人柄の良さに救われた人がたくさんいらっしゃるのではないかと思います。

石橋先生には、改めて感謝を申し上げると共に、第二の人生でのご活躍を心よりお祈り申し上げる次第でございます。

石橋先生へ感謝を込めて

分子病態治療研究センター・人類遺伝学研究部　　岩本　禎彦

石橋先生におかれましては、内科学内分泌代謝学部門教授として定年まで職を全うされ、多くの学生、研修医を教育すると共に、輝かしい業績を上げて御退任に至ったことに対し、心よりお祝い申し上げます。

石橋先生とは、いくつかの研究プロジェクトでご一緒させていただき、数は多くないものの、それなりにインパクトのある共著論文を公表させていただいた。その背景を含めてご紹介させていただくことで、石橋先生の鋭い透察力と学問に対する真摯な姿勢をご理解いただければ、幸いである。

最初にお仕事を一緒にさせていただいたのは、2008 年頃に遡る。2003 年から始まった COE プログラムに本学が採択され、約2万1千人を登録した大規模地域ゲノムバンクをプロジェクトの一環として構築した。当時としては、規模感のあるゲノムバンクをどう使おうか逡巡していたところに、石橋先生から、当時、英国で始まったゲノムワイド SNP 関連解析によって新たに検出された血清脂質レベル関連遺伝子を日本人で大規模に検証してはどうかと提案していただいた。モンゴルから石橋先生の元に留学していた Bayasgalan さんの助けを借りながら、約 1 ヶ月かけて 12 SNP をタイピングし、論文は J. Med. Genet. (2009;46;370-374)に掲載された。驚いたことに、日本人ではヨーロッパで深い関連が検出された SNP の 2/3 しか検証されなかった。これには、ゲノムの人種的な連鎖マップ構造の違いや遺伝子頻度の違い、生活習慣の違いが影響していることなど、興味深い事実がのちに明らかになる契機になった。ResearchGate によると、今日までに 70 以上も引用されている。さらに、脂肪組織における遺伝子発現解析を目的に、手術患者様から術前に IC を取得した上で、皮下脂肪と内臓脂肪を収集するプロジェクトを共同で実施した。当時、大学院生だった永島秀一准教授と一緒に手術室に駆け上り、約 50 検体を収集した。これを用いて、私たちは RBP4 遺伝子の発現解析を（Obesity. 2010;18:1006-14.）、永島先生はトリグリセライド分解酵素の発現解析を実施し（J Atheroscler Thromb. 2011;18:190-9.）共著論文として公表した。最近にも、次世代シーケンサーを用いたゲノム解析によって ApoB のレアバリアントを見出した高橋学先生の論文共著（J Clin Lipidol. 2021;15:569-573.）にしていただいた。この他にも、もう 1 報、脂質関連遺伝子多型の人種的影響について共著論文（Hum Genet. 2010;127:685-90.）を報告したが、その筆頭著者の中山講師（当時）は、後に東京大学大学院新領域創成科学研究科へ准教授として栄転した。

以上のように、石橋先生は私たちにもポジティブな影響を振り撒きながら、自らの研究テーマを強力に推進してこられたことが分かる。また、決して他人の足を引っ張ったりすることなく、研究成果のシェアもフェアにしていただいた。退任後は内科クリニックを開業されると聞いていますが、引き続き、ご指導、ご支援を賜りますようお願い申し上げます。

結びに、先生の長年にわたるご功績に対し改めて衷心より敬意を表しますとともに、益々のご健勝とご多幸をお祈り申し上げます。

石橋 俊 教授のご退任に寄せて

朝日生命成人病研究所名誉所長
公益財団法人日本糖尿病財団 理事長
岩本 安彦



石橋 俊 先生には22年間の長きに亘り、自治医科大学内分泌代謝学部門教授として教育・診療・研究に邁進され、このたびご退任を迎えられましたこと、誠におめでとうございます。

先生は自治医科大学設立以来の吉田 尚 教授、葛谷 健 教授、斎藤寿一教授が築かれた内分泌代謝科に新進気鋭の教授として赴任され、臨床的および基礎的研究テーマに脂質異常症と動脈硬化症が加わり、自治医科大学内分泌代謝学部門の発展に大きく貢献されました。私自身は1983年から11年間、自治医科大学内分泌代謝科に奉職し、葛谷教授、斎藤教授の下で務めさせていただきましたが、自然に恵まれた環境、広いキャンパスの中で、のびのびと仕事させていただいたことを懐かしく思い出しています。

先生と私とは時期と立場は異なりますが、自治医科大学で充実した教職としての生活を過ごすことが出来た仲間であります。ここで石橋教授と私との最近の仕事上のお付き合いにも触れたいと思います。私は現在、公益財団法人日本糖尿病財団の理事長を務めていますが、石橋教授には2016年11月に「糖尿病予防キャンペーン東日本地区 in 栃木」の代表世話人をお務めいただき、興味深いプログラムを企画下さり、会場のとちぎ健康の森には300名余の参加がありました。石橋教授には、日本糖尿病財団が実施する研究助成の選考委員としても重責を担っていただいています。

先生には自治医科大学の教授を退任されますが、末永くご健康に留意され、益々ご活躍下さいますようお願い申し上げます。



2016年糖尿病予防キャンペーン後の慰労会

石橋　俊先生と辛夷の会

医療法人財団慈生会野村病院常勤顧問
東京慈恵会医科大学名誉教授　宇都宮　一典



石橋　俊先生の定年ご退任に際し、長年に亘って立派に講座担当教授としての職責を全うされたことに、心からのお祝いを申し上げます。私が石橋先生の名前を知ったのは、東京大学の山田　信博先生のもとで発表されたトップジャーナルの論文からでした。その頃の石橋先生は遺伝子改変マウスの作成で我が国のトップを切っており、手品のように次々と遺伝子を操作される先生に畏敬の念を抱き、学者肌の風貌もあって、近寄りがたい方のように感じていました。ところが、東京学芸大学附属高校（附高）の先輩、当時東京医科歯科大学におられた田中　明先生から、石橋先生が自治医大教授として赴任されること、そして附高の後輩であることを知らされ、びっくりしました。後日、夕食をご一緒させていただく機会があり、高校時代の思い出話で大いに盛り上がって、その真摯なお人柄に改めて感銘を受けました。この高校は個性を尊重する自由な校風を持つ一方、同窓間の繋がりが希薄な面があり、長く面識のある者同士が、同窓だと聞いて驚くことがよくあるのです。実際、千葉大学の横手幸太郎先生、東京医科歯科大学の藍　真澄先生、朝日生命成人病研究所の大西由希子先生など、斯界で活躍する赫々たる方々が附高出身であることを知ったのは、それぞれの知己を得た後でした。しかも、各先生方の下に、附高出身の優秀な若手が多数いることが判ったのです。流石にこの人脈を利用しない手はないだろうということになり、写真は2010（平成22）年4月、日本女子栄養大学に移られた田中先生のご発案で、同大のレストランで昼食会を催したときのものです。



その場で、糖尿病・代謝領域の診療・研究に従事する同窓に声を掛けて研究会を立ち上げ、cutting edgeにある研究者から功成り名を遂げた著名人に講演を依頼し、研鑽と親交の場とすることを決めました。この研究会を「辛夷（こぶし）の会」と命名しました。これは附高の文化祭、「辛夷祭」に因んだものですが、在学生は秋にあるこの文化祭に向けて全力投球し、3年生に至っては、終了後に本格的な受験勉強を始めることが習わしになっており、同窓生なら誰でも慣れ親しんでいる言葉だったからです。2011年2月、第1回の研究会を開催、田中　明先生に特別講演をお願いしました。当日は30名を超す参加者があり、旧交を温めるとともに、この中から、将来この領域のリーダーシップを担う人材が育つことを期待させる熱気を感じました。最近の世情　から研究会の名称を変更しましたが、今でも継続されており、楽しみな年中行事になっています。

定年退任といっても、その日を境に知力・体力が急に衰える訳ではありません。退任後は、糖尿病・内分泌疾患を専門とするクリニックを開設し、地域医療に貢献されるとのこと。長年培ってこられた医療に対するご自身の思いを実践されるお考えと拝察し、石橋先生らしいご決断と大変嬉しく存じております。これまでのご厚誼に衷心からのお礼を申し上げるとともに、今後の一層のご活躍を祈念致しております。

石橋俊教授の退任に寄せて

サンライズクリニック（東京都台東区）　　江藤　一弘

石橋俊先生

誠におめでたい退任、こころよりお祝い申し上げます。
教育者や研究者としての生活に一区切りということですね。
人を教育するとは考えれば考える程、難しいものですね。私の個人的経験では遠い過去に教わった先生たちのなかで素晴らしく記憶に残るのは、中学の国語の先生、高校の体育の先生などでした。理屈よりも人を感化する力、成長の糧になる言葉や態度を操る力、そんなものが大事なのかと顧みます。
先生ご指導下の三年間は深く胸に刻まれました。北関東の自然、風土、人情にも触れさせていただいた貴重な期間でもありました。
研究者としての先生は、新薬候補の探索などもされていました。疾病のメカニズム解明→治療薬の開発という流れは、内科系医師のキャリアをかけた大目標の一つとなってきました。古くからある良質な薬剤をきちんと使うことはもちろん大切ですが、新たなカテゴリーの薬剤登場は診療現場に活気をもたらします。引き続き、共同研究などでのご活躍を期待しております。
さて、これからは、診療者としての力を存分に発揮できますね。地域の一大拠点となり、住民の方々を広く診てゆかれることと思います。鋭い洞察力と広範な知識とで、埋もれていた問題点が明らかになって、患者から喜ばれる場面がすでに想像されます。
最後になりますが、これまでやや離れて暮らされていた家族、特に奥様との時間を末永く大事になさってください。また、医者の不養生だけは避けてください。沢登りやサイクリングではヘルメットを着用しましょう。
以上、簡単ながら謝辞とさせていただきます。
たいへんお世話になりました。有り難うございました。



2007 年糖尿病シンポジウムにて

石橋先生から学ぶ

公益財団法人結核予防会 複十字病院 糖尿病内科　　及川 眞一

石橋先生との初めての出会いは動脈硬化学会の学会場であったと思います。先生がダラスへの留学から戻って間もない頃と記憶しています。当時は山田信博先生が中心となってグループを率いていた時期と思います。東大第三内科での新しい息吹を感じさせる若手が、颯爽と現れたと感じました。LDL 受容体機能解析をさまざまな手法で行い、業績を積み重ねてきたことが思い出されます。「ダラス派」の一人として日本での脂質・動脈硬化研究の第一線を走ってこられました。この度は、「恙なく、めでたく、ご退職」となり、まことにおめでとうございます。

石橋先生とのエピソードといっても、個人的なお付き合いはあまりなく、なかなか、おもしろいエピソード持ち合わせていません。登山がお好きで、講演の合間に山の写真を見せて頂くことが多くありました。

学会の中で親交を深める、というよりは周辺の研究会などで親しくお話をしていました、Atherosclerosis and Biolipid（AB）カンファランスは質問時間が延びに延びて、予定時間を超過することが「習い」になっていました。議論の応酬は激しく、石橋先生は座長として、穏やかに議論をまとめていた印象があります。私が世話人を担当したときには気仙沼に来て頂きました。石橋先生のみならずグループの先生方が多く、参加されたと記憶しています。懇親会でご案内した居酒屋は津波で破壊されましたが、ご主人兄弟は無事で、今も、気仙沼で忙しい居酒屋を切り盛りしているようです。

Lipid Club では千葉県の研修施設で関東の先生方が集まりました。参加される教室からは必ず若手の先生方を同行することになっており、脂質代謝についての新しい話題を聴講し、議論しました。石橋先生の質問は鋭く、たびたび、演者が困ったのではないか、と感じていました。

動脈硬化 Up-Date は、よりフォーマルな会で、ミニ学会的な会でした。支援会社のご尽力で、研究費申請を受けつけ、交付していた貴重な会でした。採用論文については、先生は選考委員の一人としても活躍されました。

動脈硬化学会での活躍は多くの方がよくご存じ思います。学会誌 JAT の編集委員会としては大変お世話になった先生のお一人で、あらためて感謝申し上げます。

また、原発性高脂血症調査研究班では班長を務められました。大阪大学第二内科・垂井清一郎教授が班長として組織されたことが始まりです。私も班員として研究班に参加し、石橋班長のお世話になりました。

学会や多くの研究会でご一緒し、常に、静かに議論する、といった姿勢を学ぶことができました。感謝します。

颯爽とした身のこなしは、若々しく、うらやましい！退任後はクリニックを開設される由、良く決断されたと思います。糖尿病は高血糖、インスリン、動脈硬化を中心に動いています。その中で脂質代謝に造詣の深い石橋先生が臨床の第一線で活躍されることは幅広い臨床の眼で臨床治療に貢献するもと思います。

ますますのご活躍をお祈りいたします。

”Shun Ishibashi”が抜けている！

国立がん研究センター中央病院　総合内科（糖尿病腫瘍科）　大橋　健



石橋先生に初めてお会いしたのは 1994 年のことです。場所は、虎の門病院内分泌代謝科の部長でいらした村勢敏郎先生のお部屋でした。米国留学からの帰国のご挨拶に来られた石橋先生に、当時虎の門病院のレジデントだった私を村勢先生がご紹介下さったのです。学生実習での山田信博先生とのご縁で、私は翌 1995 年 4 月から大学院生として東京大学第3内科 11 研でお世話になる予定でした。石橋先生のお名前は山田先生・村勢先生から何度も伺っており、LDL 受容体ノックアウトマウスの樹立という輝かしい業績を上げられたメジャーリーガーの颯爽としたお姿に、強い憧れを抱いたことをよく覚えています。

迎えた 1995 年 4 月 1 日は土曜日でした。前日に病院の寮から東大近くのアパートに引っ越し、深夜まで片付けをして爆睡していた私は、電話の音で目が覚めました。

「大橋くん？　どうした？　まだ来ないのか？」

なんと石橋先生からでした。研究室デビューは4月3日の月曜日からと勝手に思い込んでいた私は、初日から寝坊して遅刻することになってしまったのです……。思えばその日以来、実験も論文も、石橋先生にはずっと「どうした？　まだできないのか？」と言わせ続ける不肖の弟子となってしまいました。

さらに、考えられない失態もありました。はじめて AHA でポスター発表したときのこと。出発ぎりぎりでようやく仕上げた私のポスターには、なんと”Shun Ishibashi”のお名前が抜けていたのです。会場で貼ったときにも気づきませんでした。気づいたのは、そのポスターの前で石橋先生と待ち合わせしていた留学時代のご親友、J 先生です。気づかぬふりをしてくれればよかったのに、「君の名前がないぞ」と石橋先生に……。それを石橋先生から聞いたときのことを思い出すと、今でも冷や汗が出ます。大慌てで会場の PC コーナーで作り直したのですが、石橋先生、本当に申し訳ありませんでした。

その後も遅々として研究の進まぬ私に、先生はしびれを切らしておられたのではないかと思います。それでも先生は待って下さいました。11 研で石橋先生から直々にご指導を受けられたことは、私の医師人生の大きな財産です。また、先生は自治医大に移られてからも折に触れて私のことを気に掛けて下さり、自治医大で講演する機会を頂戴したり、学会評議員にご推挙いただいたりと、常に温かく見守って下さいました。長年にわたり診療・研究・教育の最前線でリーダーシップを発揮してこられた石橋先生に敬意を表するとともに、この場をお借りしてこれまでに賜ったご指導に改めて感謝申し上げます。

石橋先生、大変お世話になりました

小山イーストクリニック　　大橋　博

2001 年に石橋俊先生が、自治医科大学内分泌代謝学の教授にご就任以来、公私ともども大変お世話になりました。

この度ご退任され、お祖父様が開業されていた埼玉県羽生の地で糖尿病甲状腺クリニックを開院されるとのこと、大変おめでとうございます。

私共は、1989 年に小山市で糖尿病を中心とした内科クリニックを開業、以来外来では対応しかねる重症患者さんなどを自治医科大学病院内分泌代謝科でお願いして参りました。当院にとってとても心強い病診連携病院、後方支援病院として、当時の葛谷健教授を初めとし岩本安彦教授など、多くの教室の先生方には大変お世話になりました。

2001 年、石橋俊先生が自治医科大学の内分泌代謝科教授に就任され、先生の親身になってお話し頂く、気さくなお人柄も相まってより一層の関連性が深まりました。患者さん紹介・逆紹介のみならず、非常勤医師派遣、糖尿病講演会や研究会など大変お世話になりました。深謝いたします。

特に印象に残っているできごとは、2010 年 11 月に宇都宮市で行われた第 29 回関東甲信越地区糖尿病セミナーです。石橋教授が当番世話人となり、関東甲信越の糖尿病の患者さんの集会が宇都宮の栃木県総合文化センターメインホールで行われました。通常の学会とは異なり手作りの集会で、教室員のお手伝いや地域の糖尿病の先生や看護師さんなどメディカルスタッフあるいは協賛メーカーの担当者などの協力で出来上がった会でした。多数の糖尿病の患者さんが集まるので、様々なおもてなしと健康人の集会とは異なる細やかな対応が要求され、企画立案に様々なバリエーションが必要でした。

石橋教授の指示のもと我々も含め多くの糖尿病療養関係者が一致、協力して事故もなく盛会裡に幕を下ろすことができました。当日は石橋教授のこまやかなお心遣い、臨機応変のご対応、機転の速さを目の当たりにし、学問を離れた石橋俊先生のフットワークの軽さに、まさに"俊"と感じました。当日は奥様も舞台裏で細々とご協力いただき、教授夫人とは気づかず大変失礼致しました。ここにお詫び申し上げます。

この度、羽生の地で糖尿病甲状腺クリニックを開業されるとのこと、ある意味お膳立てされた大学とは異なり、一から自分で計画立案実行することとなり大変なこととは存じますが奥様のご協力も得て、クリニックの診療理念に沿う医療実現されると確信します。

東大陸上部の強さ、忙しい診療の合間を縫って日本百名山踏破を目指すフットワークの軽さ、計画性、極められた学問知識経験を持ってすれば、まさに鬼に金棒です。

今後のご活躍を期待するとともに、陰ながら応援させてください。



2010 年 4 月糖尿病センター合同カンファ　大森安恵先生

2023 年節分

ご退任記念の退任記念集によせて

京都大学医学研究科腫瘍生物学講座　　小川　誠司

石橋先生、この度は多年に渡る自治医科大学　内分泌・代謝学分野　教授としてのおつとめご苦労様でした。自治医科大学との直接の関係のない、若輩の私が先生の退任記念集に寄稿させいただくというのは、大変に僭越ではございますが、先生から是非とのお言葉を賜りまして、一言、先生への感謝の気持ちとして、主として、東京大学第三内科時代の先生との思い出を記させて頂ければと存じます。

先生とはじめてお目にかかったのは、1988 年に東京大学医学部を卒業して、当時、昨年ご逝去された高久史麿先生が主宰されておられた東京大学医学部第三内科で研修を始めた時でした。第三内科に入局する以前でしたから、多くの、色々な研究室の先生方にお世話になりました。石橋先生は、当時脂質代謝を専門としておられた山田信博先生のチームで、新進気鋭の医局員の一人として活躍されておられました。先生とは、病棟、あるいは赤十字(当時第三内科の医局の宴会?はそう呼ばれていました)でしばしばお世話になりました。わけても記憶に残っているのは、年末の忘年会で六本木のディスコに言った折のことでしょうか。当時はバブル絶頂期でしたから、とくに華やかな記憶として蘇ります。先生とは 6 年以上年下で新米の私達、研修医に対しても、見下ろす感じではなく、大変にフラットに接して下さいましたので、頼りがいのある兄貴的な印象で、大変に親近感を覚えたわけでありました。そういった、先生のお人柄はおそらく、もっと年下の医局員、学生さんたちと接する際にも、同じような感覚で接しておられたのではないかと思います。

先生が自治医科大学に赴任されてからは、専門もことなり、また自分も京都大学の基礎の講座に赴任したこともあり、年賀状でのご挨拶は続いていたものの、直接にお目にかかる機会が無かったのでありますが、一昨年の秋、コロナもまだ 2 年目で世の中の規制もまだ厳しかったと記憶しておりますが、京都の学会にご出席された後に、小生の研究室を奥様とご一緒に訪ねて来て下さいました。本当にもう二十年ぶり以上になるでしょうか。しかし、お目にかかるとそのような長い時間が忘れられるように、話は思い出話に花が咲き、当初の予定の時間を大きく過ぎて、いろいろな先輩や後輩の先生のお話、自治医科大学でのご苦労のお話、とともに、以前と変わらず大変ご多忙の毎日を精力的に過ごしておられるご様子を伺うことができました。また、最後は共同研究のお話までいただきまして、わずかではありますが、先生と研究をご一緒する機会にも恵まれました。

昨年 2022 年の年末に自治医科大学ご退任のメールをいただいたおりには、時の経つことの早さに愕然とするとともに、大変寂しい気持ちがいたしました。しかし、退任されるとはいえ、先日お目にかかった際にも、まだまだ現役以上にお若く、とても退任と言う言葉がそぐわない思いがいたしております。実際、最近、共同研究に加えて頂いた論文も投稿にまで至った旨ご連絡をいただきました。今後とも我々是非後進のご指導賜れればと念じております。

石橋 俊 教授の御退任に寄せて

自治医科大学 名誉教授・客員教授　　小澤 敬也



石橋 俊先生は 2001 年から自治医大内科学講座内分泌代謝学部門の教授を務められてきましたが、とうとう定年退職されるとのことで、大変お疲れ様でした。20 年以上というのは長いようで、実はあっという間に過ぎ去ったのではないかと想像されます。私自身は 2018 年に現役をリタイアしましたが、最後の4年間は東大医科学研究所に異動になりました。つまり、私が自治医大の内科学講座血液学部門の教授職を神田善伸先生にバトンを渡してからは9年経ちますので、教授会や内科学講座の会議で石橋先生と顔を合わせる機会がなくなって、随分と経ちます。一方で、石橋先生も私も東大旧第三内科（三内）の出身ですので、三内時代のお付き合いを含めますと、随分と長くなります。

東大三内は奇人変人が多いところで、私自身も直接的な影響を受け、大分苦労しました。一方、石橋先生は大変温厚な方で、奇人変人とは対極的な存在でした。おそらく、自治医大の医局でも同様だったのではないでしょうか？ 外では温厚な印象の人でも、医局の中では大変厳しく医局員に恐れられている人の話を耳にすることがあります。石橋先生の場合は、そのような噂は皆無ですから、興奮されることも喧嘩をされることも本当になさそうです。

自治医大関係の行事では、21 世紀 COE プログラムによる The 3rd Nikko International Symposium 2006 で石橋先生にご協力いただきました。このシンポジウムでは海外から3名の演者を招待していましたが、この第3回の時は、石橋先生に Rudolf Zechner 博士（オーストリア）をご推薦いただきました。石橋先生と同じ研究領域の先生で、競争相手だったようです。石橋先生には、シンポジウム翌日の日光観光と、さらに鬼怒川温泉ホテルでのサテライト・シンポジウム（合宿のような感じで、主に若手に英語発表をしてもらいました）にもお付き合いいただきました。今では大変懐かしい思い出です。

石橋先生は、退職されてからは、「いしばし糖尿病内分泌内科クリニック」を開院され、地域の診療現場で益々ご活躍されるご予定と伺っております。これまでご多忙な生活でしたから、これからは余りご無理されず、ご趣味の山登りなどを大いに楽しまれることを願っております。



2006.10.26　COE　高久学長らと



2006.10.26　Rudi Zechner 先生らと

石橋俊先生のご退任を祝して

梶尾　裕

私は石橋俊先生には大変お世話になりました。石橋先生がこの度自治医科大学教授をご退任され、新たにクリニックを開業されるとのこと、心よりお祝い申し上げます。

石橋先生との最初の出会いは研修医の時でした。第3内科を回ったときに、研修医へのクルズスのときに、村勢敏郎先生からご紹介されて受けた動脈硬化の講義が最初でした。大変クリアーで精緻な講義で、先生のすばらしさを感じました。第3内科の研修医の時には専門的な見地から色々とご指導をいただき、研修医2年目に結婚した際には、わざわざ2次会にご出席いただき、お言葉を賜ったことは今でもありがたく感じています。

その後、私は第3内科（高久文麿教授）に入局させていただき、糖尿病のグループに入れていただきました。最初の専門研修の場は虎の門病院でした。虎の門病院では当時赴任されたばかりの村勢先生のもと、糖尿病の研鑽に励みました。その時、その後の進路について迷うことがあり、村勢先生のご配慮によって、第2研究室、第11研究室をご紹介いただきました。以後、山田信博先生や石橋俊先生、島野仁先生をはじめ研究室の皆さんには大変温かくサポートしていただきました。特に、石橋先生には、私が 1998 年夏に米国留学から大学に戻り、翌年春に自治医大大宮医療センター（金澤康徳センター長、川上正舒教授）に異動することになるわずか１年足らずの間でしたが、留学中に暖めていたインスリン分泌機構の未開拓の部分の研究を開始したいとご相談したところ、ウサギを使った抗体作成の段階から、細かなところにも心を配っていただいことを、今でも忘れません。その後、研究室の集まりがあるときにはいつでも「元気でやってる？」とお声をかけていただき、その都度励まされました。思い返してみて、あらためて石橋先生のお人柄に触れた感じがしておりました。他の方も、同じような思いを抱かれたのではないでしょうか。

私は2001年から国立医療センター（矢崎義雄総長、葛谷信明部長）（現在の国立国際医療研究センター）に異動しましたが、2014 年から春日雅人理事長がご提案された新たなプロジェクトを立ち上げることとなりました。石橋先生にご相談したところ、快く施設としての参加をご承諾していただきました。これが、J-DREAMS（診療録直結型全国糖尿病データベース事業）の始まりです。石橋先生のお陰で、何とか多施設共同研究としての体をなし厚労科研をいただくことができました。研究ははじめからはすんなりとは進みませんでしたが、班会議のたびに色々とアドバイスをいただき、何とか形ができて、翌年からAMEDの大型プロジェクトとして全国展開を進める事ができました。

最後に、私にとってうれしかったことは、2018 年に石橋先生から、しもつけ糖尿病ミーティングでの講演の機会をいただいたことです。その時に特別講演として、石橋先生が日頃お世話になっておられる先生方の前で、このJ-DREAMSをご紹介できたことは、本当によかったと思いました。

改めて、石橋先生からいただいたご恩を思い返し、石橋先生のこれからを祝させていただきたいと思います。

石橋俊教授の御退任に寄せて

公益財団法人朝日生命成人病研究所 所長　　春日 雅人

石橋 俊先生は2001年より20年余にわたり自治医科大学教授として同大学内科学講座内分泌代謝学部門を主宰され、多くの素晴らしい成果を挙げられました。心からお祝い申し上げます。

石橋 俊先生は1984年に東京大学第三内科の脂質グループに入局されました。当時、私も米国留学から帰国して第三内科の第一研究室（糖尿病グループ）で診療・研究に従事していました。隣の第二研究室は内分泌グループでしたが、村勢敏郎先生が下垂体後葉の研究から脂質代謝に研究テーマを変更され、そこに山田信博先生が加わりお二人で新しい研究グループをはじめられたところでした。40年近く前のことですので記憶が定かでない点もありますが、山田先生が今度石橋君が研究グループに入ることになったと大変喜んでいたのが記憶に鮮明に残っています。山田信博先生は1983年にサンフランシスコのハーベル教授の研究室に留学されていますので、私の記憶違いかと思い石橋先生にこの辺の経緯をおたずねしたところ、脂質異常症の患者さんを受け持ったことでこの領域に興味を持ち、山田先生にはサンフランシスコでお会いして誘われ、グループのアットホームな雰囲気も気に入って入局を決められたとのことでした。その後1989年に石橋先生が留学されるまで、高久史麿先生が主宰されていた第三内科で共に内科学を勉強しました。 2001年に石橋先生は自治医科大学教授に栄転されました。私は同じ代謝でも糖代謝を専門にしていましたので、学会や研究会でもなかなか御一緒する機会はなかったのですが、私が関係しているAPDO（Asia-Pacific Diabetes and Obesity Study Group）という研究会があり、2007年のこの会に石橋先生が参加してくれることになりました。この年は初めての中華人民共和国での開催ということで多少不安はあったのですが、なかなか開催場所が決まらず、結局上海から車で4-5時間かかるChina Medical City, Taizhoでの開催となり、石橋先生に非常に御迷惑をおかけしてしまいました。このような状況にもかかわらず石橋先生にはAdipocyte lipolysis and metabolic syndromeというタイトルで立派に御講演いただいたのが印象に残っています。 また、何かの機会に石橋先生と雑談をしていて、石橋先生の趣味がランニングとおうかがいしたのも非常に印象に残っています。陸上部に所属していた学生の頃から走っていて、その後もその習慣を継続されており、フルマラソンにも7-8回出場されたとのことで、まさに筋金入りのランナーと拝察しました。いつも姿勢正しく清々しい印象の石橋先生ですが、これはランニングの効果かも知れません。

御退任後は、羽生市のご祖父様が開業されていた地で「いしばし糖尿病内分泌内科」を開院されるとお聞きして、非常に驚きましたが、考えてみると石橋先生らしいのかなと思っています。医師としての原点に立ち返って、地域医療に尽力されることは誠に素晴らしいと思います。今後の一層の御活躍を期待しています。



2007年APDO会議終了後上海にて

石橋先生と私

周防大島町立東和病院　内科　　勝部　聡太

石橋先生、ご退官おめでとうございます。石橋先生との思い出は、同期の平良亘君（沖縄県）と古村芳樹君（富山県）と3人で参加させて頂いた学生向けセミナーが印象深く残っております。英語が不得手であった私は宿題の解読に四苦八苦しておりましたが、石橋先生の解説は至極明快であり、セミナー受講後は『そういうことだったのか！』という体験の連続でした。セミナーの中で最も印象的であった内容は骨粗鬆症の項目になります(JAMA.2004 Dec 15;292(23):2890-900.)。身長が縮むことでも推測は可能であるが、身体診察では肋骨骨盤間距離が狭くなる（通常では4横指入るが、2横指以下の場合では陽性尤度比3.8）というものでした。身体診察から病態を推測し鑑別を挙げることの重要性を理解させて頂きました。このことは医師人生、特にへき地診療所での診療に大変生かされています。また我々セミナー受講生は石橋先生のご自宅へお招きにあずかりましてお庭でバーベキューをご一緒し、大変楽しい時間を過ごさせて頂きました。大学卒業後は一度だけお会いする機会がありました。山口県下関市で学会（2015年5月、第58回日本糖尿病学会年次学術集会）になります。石橋先生のシンプルで力強い講演を拝聴した後で、隣接する魚市場（唐戸市場）にあるお寿司屋さんに入り食事をさせて頂きました。当時初期臨床研修医2年目の私は医師として社会人として多くの悩みを抱えておりましたが、石橋先生は私の話を親身になって聞いて下さいました。そんな私自身ですが今年度で無事義務年限を終了し、令和5年度からは埼玉県で勤務を予定しております。石橋先生も埼玉県で開業されると伺っており、同県で再びご一緒させて頂くことを大変うれしく思います。転居後は義務年限終了の報告を兼ねて一度御挨拶に伺わせて頂きます。今後ともどうぞよろしくお願い致します。



石橋俊先生の自治医科大学教授退任を祝して

公益社団法人地域医療振興協会 会長　　川上　正舒

自治医科大学の内分泌代謝科は、初代の吉田尚先生から葛谷健先生、斎藤寿一先生とそれぞれ内分泌学会、糖尿病学会の重鎮が主宰されたこの分野での日本を代表する教室ですが、石橋先生は、若くしてこの名門の教室を継承され 4 代目の教授として立派にさらなる発展を遂げられたことをお祝い申し上げます。先生は、糖尿病やいわゆる内分泌疾患に留まらず、脂質異常症の病態解明と治療の開発に研究を拡げられ、輝かしい業績を挙げられました。

今でこそ高コレステロール血症は動脈硬化症の原因として広く認知されておりますが、コレステロールが動脈硬化の原因であると明確になったのは比較的最近のことで、1970 年前後にはコレステロール負荷の動物で動脈硬化が促進するというようなことが一流医学雑誌に報告されるような状態でした。この領域の大きな breakthrough は MS Brown と JL Goldstein が家族性高コレステロール血症の研究から、LDL 受容体を発見し、コレステロールと動脈硬化の関係をその機序を含めて極めて明確にしたことが大きいと思いますが(1985 年ノーベル医学生理学賞)、これも石橋先生が医学部を卒業されるわずか 6 年前のことで、先生が東京大学で研究を始められた頃は、脂質代謝異常は内分泌代謝領域の中でも主要な分野という認識は無かったように思います。石橋先生が所属された教室では村勢敏郎先生（現沖中記念成人病研究所理事）がトロント大学の G Steiner の研究室から帰国され、糖尿病グループの山田信博先生（元筑波大学学長）を誘って東大病院ではじめての高脂血症の専門外来を始められたばかりの時期でしたので、この小さな研究グループに飛び込まれた石橋先生はこの時点から非常に開拓精神に富んでいたのだと思われます。

その後、スタチンの発見から高コレステロール血症の治療が可能になり、この領域が大きく発展したことは周知の通りであります。石橋先生も村勢先生とリポ蛋白リパーゼの研究からアポリポ蛋白へと研究を拡げ、さらには、米国留学から帰国された山田先生の指導で分子生物学の手法を取り入れた研究へと発展されましたが、その後、自らも Brown ＆ Goldstein の研究室に留学され、LDL 受容体のノックアウトマウスを用いて、もう1つの LDL 代謝経路の存在を示すなど非常に多くの重要な成果をあげられました。自治医科大学に赴任後も教室に分子生物学的研究手法を導入し、多くの後進の指導にあたられたことは教室員はじめ大学の皆さまがご存知の通りです。

診療面でも脂質異常症はもとより、糖尿病領域では葛谷先生以来の伝統を引き継いでいる長坂昌一郎先生（現昭和大学教授）と共に文字通り栃木県の内分泌代謝疾患の中心的医療施設としての役割を継続してこられました。

これからは、より地域に密着した医療に守備範囲を広げられると伺っています。定年になられたとは言え、未だまだお若く、山歩きで鍛えたお体も非常に健康とお見受けします。益々のご活躍を期待いたします。

川上正舒

石橋　俊先生の御退任に寄せて

自治医科大学 名誉教授　　葛谷　健

石橋　俊先生が自治医大に赴任されたのは、ついこの間のように思っていたので、先生から来年定年退職するというメールをいただいたとき、月日のたつ早さに驚いた。

先生は 1982 年に東京大学医学部を卒業後、東大医学部第 3 内科に入局され、以後第 3 内科の糖尿病・代謝グループに属して研究・診療に従事された。糖尿病・代謝グループには赤沼安夫先生、山田信博先生たちを中心とする脂質代謝研究のサブグループがあり、石橋先生はこのグループに入って研究の手ほどきを受けられた。その後 1988 年から 1994 年にかけて米国テキサス州ダラスの Department of　Molecular Genetics, University of Texas Southwestern Medical Center に留学され、分子生物学的研究方法を身につけられた。そのときの指導者はコレステロール受容体の研究でノーベル賞をもらった M.Brown、JL.Goldstein である。石橋先生は LDL 受容体ノックアウトマウスを作成し、それがヒトの家族性高コレステロールのホモ接合体と類似の所見を呈することを明らかにした。帰国後も分子生物学的研究を駆使してリポ蛋白の機能などを研究され、その一つとしてホルモン感受性リパーゼノックアウトマウスではオスが不妊症になること、などを見いだされた。

2001 年東京大学講師を経て自治医科大学内科学講座第 4 代の内分泌代謝学教授に就任された。その後も脂質代謝の研究を続けられ、いくつかの遺伝性脂質代謝異常症を見つけるなど、基礎的研究のみならず臨床面でも成果を挙げられた。その研究成果の多くは英文誌で発表されている。

分子レベルの研究の一方、日常の診療では、栃木県糖尿病協会支部長に就任され、栃木県の糖尿病患者組織の指導者として、糖尿病患者の治療レベルアップに貢献された。その後、自治医大に糖尿病センターが設けられることになり、先生は初代センター長として活躍された。

学会活動としては、日本動脈硬化学会、日本糖尿病学会などで理事や評議員などの役員を務められている。さらに次年度の日本動脈学会長として、学術集会を宇都宮で開催される予定とお聞きしている。

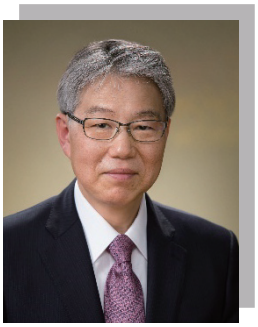
自治医大の同じ教室前任者として感謝していることは、自治医大内分泌代謝科の同門会を設立されたことである。多くの医科大学と異なり、自治医大の卒業生は出身した都道府県で初期研修を受けるので、医局はいつも人手不足がちとなり、先輩後輩のつながりもできにくい状態にあった。先生は教授就任直後から同門会設立を強く望まれていたようである。同門会ができたことは教室の成熟の一つの表れといえるが、石橋先生の熱意がなければ、同門会は今でも存在しないか、できたとしても設立はずっと遅れたことだろう。

同門会誌の中で石橋先生は夢を語っておられ、未来の医療を変えていけるような診療、たとえば未だ評価の確定しない治療の検証や栃木県の糖尿病診療レベルの向上などを挙げておられる。先生が在任中には種々の新しい糖尿病薬が開発され、治療の選択肢が広がった。新しい薬剤の使い方が複雑になってきた一方で平均的な糖尿病診療のレベルは改善してきたように思う。

お聞きしたところでは今後、先生は出身地の埼玉県羽生市で内科医院を開業されるとのことである。立ち位置は変わってもこれまでの知識・経験を生かして地域の医療の発展に尽くしていただけるもの期待している。

石橋俊教授のご退官を祝して

群馬大学名誉教授
藤岡市国民健康保険鬼石病院地域連携医療センター長
倉林　正彦



石橋俊先生、ご退官、誠におめでとうございます。石橋先生も定年をお迎えになるとのことで、時の流れの速さに驚いているとともに感慨深く思い起こしております。私の「退官記念誌」に先生から頂きましたご寄稿文にもありましたが、先生とのお付き合いはある患者さんがきっかけでした。研修医 1 年目に私が受け持っていた期間には代謝異常の明らかな原因が特定できなかったのですが、引き継いでいただいた石橋先生は、ミオパチーが基礎にあり、その結果、骨格筋由来のリポ蛋白リパーゼの活性低下と高TG血症をきたしたことを解明して、内科学学会誌にまとめられました。この症例との出会いによって先生がその後、脂質異常症の基礎と臨床の道に進まれたとすれば人生の妙味を感じます。

石橋先生とは、毎年 1 月に東京で「北関東心血管内分泌リサーチミーティング」でお会いすることが恒例になっていました。北関東の3大学の気の置けない仲間内で研究の面白さを実感する楽しい会でした。石橋先生や島野仁先生（筑波大学教授）と東京大学第三内科で基礎研究に没頭していた若き日を思い出す時間であり、また、討論後のワインを飲みながら談笑したり、教授職の苦労話をして癒されたりする時間であり、私たちにとって至福の時間でした。また、ダラスやニューオーリンズでの AHA でおいしいステーキをご一緒したことも楽しい思い出です。

石橋先生は Joseph Goldstein 教授、 Michael Brown 教授のラボにて LDL 受容体の欠損マウスの作製とアデノウイルスベクターを用いた LDL 受容体の補充による LDL-C の低下を実証し JCI に報告されました。この論文は、世界の脂質研究者をうならせました。遺伝子欠損マウスの作製や遺伝子導入が現実に可能な技術とはなっていなかった時代ですから、ずば抜けて先駆的で感銘しました。その当時、私は南カリフォルニア大学に留学しており、ラボの同僚がエリスロポイエチン cDNA を含むプラスミドベクターをマウス骨格筋へ注入して貧血を改善させる研究をしておりましたので、先生のお仕事の先駆性はよく理解できておりました。自治医大では、HMG-CoA 還元酵素、LCAT, マクロファージや骨格筋のリポ蛋白リパーゼ(LPL)、cholesteryl ester hydrolase、CETP など脂質代謝に関わる多数の酵素の生体での役割を解析され、脂質異常症のヘテロな病態を解きほぐしてくれる感がありいつも勉強させていただいておりました。冒頭の東大病院での患者さんとリンクしているとも勝手に想像していました。

石橋先生と私は同世代で同じ東大第三内科の同窓生でありますが、なぜかそれ以上に親近感を持たせていただいております。先生とはいろいろな場面で「馬が合う」と失礼ながら感じています。先生のご出身が埼玉県で私と同じ公立育ち、ということも一因かなと思っています。ご退官後は埼玉県羽生市でクリニックを開院されるとの由、ご選択に大変共感しています。お忙しい毎日になるかと思いますが、どうぞお元気で、奥様とのゆっくりとした時間もお楽しみください。私は退職後、故郷の片田舎の公立病院で入院患者も持ちながら一臨床医をしていますが、フレイルな高齢者を診ておりますと、医療の限界を感ぜずにはいられません。そんな悩みを解消してくれるのがサイエンスであると思っています。これからもまたご一緒に盛り上がりましょう。この度は、誠におめでとうございます。また、大変ご苦労様でした。

Professor of Medicine
Division of Endocrinology, Gerontology and Metabolism, Stanford University
Fredric B. Kraemer

I am very pleased to be able to have the opportunity to contribute to the tribute for Dr. Shun Ishibashi on his retirement and in doing so will primarily provide an account from a personal perspective. In trying to remember when I first met Shun, I believe that we first met at a Deuel Conference for Lipids that took place in California when he was a postdoctoral fellow with Mike Brown and Joe Goldstein at UT Southwestern in Dallas. However, it was not until years later after he had returned to Japan and established his own lab and research program first at Tokyo University and then at Jichi that we started to interact fairly regularly. Actually, it was the generation of hormone sensitive lipase (HSL) knockout mice by Shun in the late 1990s (published in 2000) that prompted us to start, at least from my perspective, a very fruitful collaboration, since I had been investigating HSL for several years prior to then. Shun and I were able to publish a number of papers over the ensuing years on HSL, and the HSL deficient mice generated by Shun were an invaluable resource for my lab as we continued to pursue studies of HSL. In addition, I had the pleasure and benefit of having several trainees from Japan come to my lab at Stanford based on recommendations of Shun. They all were quite productive, wonderful to get to know as people and only strengthened our ties. Throughout this time, I obviously benefited greatly from Shun's scientific insights, his willingness to generously share reagents, and his friendship.

I would be remiss if I did not mention Shun's kindness and generosity when he hosted my wife, daughter and me for a visit to Jichi Medical University and Japan. We had an absolutely wonderful and enjoyable time. Not the least of which was due to Shun. Regrettably, I don't think that I ever fully reciprocated during his visits to Palo Alto.

Finally, as someone who recently stepped down as Chief of the Division of Endocrinology at Stanford after holding the position for over 20 years, I can relate to some of the issues outside of research questions that Shun has had to deal with over the past 22 years as chair of the Division of Endocrinology and Metabolism, both good and bad. Thus, I am sure that it is with mixed feelings that Shun approaches his retirement, but I am certain that he takes great pride in the people whom he has hired and in the program that he has built.

Shun, I wish you all the best in your retirement and hope you truly enjoy this next phase of your life.

University of Texas Southwestern Medical Center Jonathan Cohen

In this essay, I want to share with you some personal reflections and impressions of my friend and colleague, Dr Shun Ishibashi. I will also discuss his scientific contributions, though my coverage of this work will of necessity be incomplete. Dr Ishibashi has remained remarkably prolific throughout his scientific career, and even the generous space I have been allocated by the editors would be insufficient to provide a comprehensive discussion of each aspect of his work. I have known Dr Ishibashi for a long time – we first met in 1990 when we were post-doctoral fellows in the Department of Molecular Genetics at UT Southwestern Medical Center in Dallas, Texas. We were both new arrivals in the USA, but it quickly became apparent that Shun had, at that time, a much stronger scientific training than me. He was already adept at molecular biology and had published several papers, some of which I had read even before my arrival in Dallas. Over the next 3 years, as I grew more familiar with his work, it became obvious that his papers were often at variance with standard orthodoxy. He looked at each question from a different, usually novel perspective, taking seemingly unrelated data from disparate fields and applying it to his own experiments.

At the time we met in Dallas, Shun had spent enough time in the US to be able to look at American culture with both a Japanese and an American understanding. At the same time, he could look at Japan with a clear, dispassionate view and without being self-conscious. That was a great education for me because I got to see both cultures from his perspective.

Impressions of Shun's scientific contributions

Shun's research can be considered in three phases:

1. Early work 1982-1989 (Pre-Dallas)

Before coming to Dallas, Shun had shown that the cytokine monocyte colony-stimulating factor (M-CSF) decreased plasma levels of cholesterol in LDLR-deficient rabbits by about 35%. In these experiments the lipoproteins were taken up primarily into the spleen and bone marrow, rather than the liver, and the uptake was independent of LDLR activity. M-CSF treatment also caused a remarkable increase in cholesterol esterification in macrophages. These findings strongly suggested that i) cytokines such as M-CSF and GM-CSF play an important role in cholesterol metabolism in macrophages, and ii) M-CSF increased the activity of a LDLR-independent pathway that promoted the clearance of modified LDL from the circulation. This observation remains interesting and important because it implies an alternative to the LDLR pathway for clearance of lipoprotein remnants from the circulation, and that the pathway could be targeted for therapeutic intervention via M-CSF.

Shun then performed a series of mechanistic studies which provided direct evidence that M-CSF increased the uptake of modified low density lipoproteins (acetyl-LDL) by monocyte derived-macrophages. The increased uptake of modified LDL in the M-CSF treated-cells was associated with an increase in binding of acetyl-LDL to a protein of ~240kD which they initially called SREC1 (scavenger receptor expressed in endothelial cells. The formal gene name was later changed to SCARF1 (Scavenger receptor type F number 1) to indicate its position in the scavenger receptor lineage. Studies of SCARF1 knockout mice showed that inactivation of SCARF1 largely abolished the uptake of modified lipoproteins by macrophages, but had little effect on plasma levels of cholesterol or triglyceride. This result highlights an important limitation of knockout mice as a validation test for biochemical purification or genetic association.

2. The Middle Period (Dallas 1989-1994)

In 1989 Shun moved to Dallas to work with Joachim Herz in the Brown and Goldstein group. Joachim was just starting to get targeted gene knockout methodology established in his laboratory. Shun's goal was to learn how to knock genes out in mice. This would be a simple feat today but in those pre-CRISPR days it was a major challenge. One difficulty was that the transition from "test tubes" to mice required a complete shift in thinking and in methodology. The classical biochemistry-based approaches that he had learned earlier were rigidly focused on proteins whereas the skillset he would need to make genetically manipulated mice was almost entirely molecular. In the molecular laboratory, the nucleic acids reigned supreme and almost all methods are based on base-paring.

Shun started his Dallas scientific adventure by knocking out the LDL receptor in mice. In humans, mutations in the LDL-receptor cause familial hyper-cholesterolemia, the most common and most severe of the genetic hyperlipidemias. He showed that LDLR knockout mice have very high circulating levels of LDL-Cholesterol, and that they accumulate cholesterol deposits in the skin and blood vessels, strongly reminiscent of human FH. Challenge with a high cholesterol diet resulted in massive xanthomas and atherosclerosis, which could be restored to normal by restoring LDL receptor expression in liver alone. The closely matched phenotypes of LDLR deficiency in humans and mice provided an encouraging proof-of-principle study for the gene knockout technology.

A primary objective of generating these mice was to test the hypothesis that LRP1, a gene cloned by Joachim Herz, was the functional chylomicron remnant receptor.

The most definitive test for the proposal that LRP1 is the chylomicron remnant receptor would be to knockout LRP1 and test the ability of LRP1- mice to clear chylomicron remnants. This conceptually simple experiment was, of course, the first one that was tried, but LRP1-null mice did not survive long enough even to provide cells for immortalization. The chylomicron remnant receptor had proved elusive to all approaches used so far. There was consistent evidence for a LDL receptor-independent pathway; LRP1 was a major contender. In subsequent studies, Brown and Goldstein and others showed that mice lacking ApoE had much higher plasma

levels of cholesterol than did LDLR knockout animals. Based on these and other findings they proposed a two-receptor model for chylomicron remnant clearance.
LDLR and LRP1 remain the prime candidates for clearance of chylomicron remnants.
Sticking with membrane proteins that were strongly expressed in liver and could potentially function as chylomicron remnant receptors, Shun then knocked out the asialoglycoprotein receptor subunit 1. Asialoglycoprotein receptor is an endocytic receptor that is expressed predominantly on the sinusoidal surfaces of hepatocytes. Its function remains largely unknown. The knockout mice were completely unable to clear asialoorosomucoid, a high affinity ligand for asialoglycoprotein receptor, but they do not accumulate desialylated glycoproteins or lipoproteins in the circulation. Therefore it seems unlikely that the asialoglycoprotein plays a significant role in the clearance of remnant lipoproteins.
Shun then collaborated with David Russell to knock out cholesterol 7a hydroxylase (Cyp7a1). Cyp7a1 catalyzes the first step in the biosynthesis of bile acids from cholesterol. Cyp7a1−/− mice exhibit a complex phenotype consisting of abnormal lipid excretion, skin pathologies, and behavioral irregularities, and about 90% die within a few weeks after birth. The remaining 10% of animals recover from these symptoms and have normal life spans. Surviving mice had several 7α-hydroxylated bile acids in bile, including cholate, chenodeoxycholate and α-muricholate. These data suggest that a second 7α-hydroxylase is present in Cyp7a1−/− mice that is induced at three weeks of age and compensates for the missing cholesterol 7α-hydroxylase activity David Russell subsequently proved that the residual cholesterol 7α-hydroxylase activity is conferred by a related enzyme (CYP7b) that will accept side-chain hydroxysterols as substrates.

During his years spent in Dallas, Shun made important contributions to our understanding of dietary lipid metabolism. His extensive training in the methods required to generate genetically engineered mice formed the basis of his career as an independent scientist.

3. Independence (Post-Dallas)

Shun returned to Japan in 1994. He very quickly established a laboratory to generate and study genetically manipulated mice. At that point he faced the critical decisions that confront everyone who embarks on an independent scientific career: What was the fundamental question that would define his career? In keeping with his non-conformist inclination, Shun elected to knock out genes that most people would not consider. One prime example was hormone-sensitive lipase (HSL). HSL was uniformly accepted as the major insulin-responsive, intracellular lipase in adipose tissue and liver. To the great surprise of almost everyone in the field, genetic ablation of HSL (by Shun and colleagues), had little effect on fat metabolism in liver or in adipocytes. In reporting these results the authors concluded with the modest claim that “HSL is required for spermatogenesis but is not the only enzyme that mediates the hydrolysis of triacylglycerol stored in adipocytes”. Subsequently Rudy Zechner showed that ATGL (also known as PNPLA2) was the major triglyceride hydrolase in adipose tissue.
A second and perhaps even more extreme example is Shun’s decision to knock out HMGCR, an enzyme that is essential for the biosynthesis of cholesterol. The cholesterol biosynthetic pathway was one of the most

thoroughly studied pathways in biology, and HMGCR was the most thoroughly studied enzyme in the pathway. Whole body knockout of HMGCR was lethal as expected, but by using conditional knockout methods Shun was able to generate mice in which HMGCR was knocked out only in selected tissues, such as liver, or muscle. Liver-specific deletion of HMGCR resulted in hepatic steatosis with jaundice and hypoglycemia. Deletion of the gene in muscle resulted in rhabdomyolysis. The development of rhabdomyelosis in mice with cholesterol-depleted muscle due to loss of HMGCR parallels the rhabdomyelosis that develops in some humans treated with statins. Therefore these mice may provide a genetic model of statin-induced myopathy.

Personal Reflections

If I had to come up with a single word to describe Shun it would be "maverick". A maverick is an independent-minded individual. The term applies both scientifically and to Shun's life outside the lab. As I got to know him better it became obvious that what appeared to me as a perennially orthogonal perspective was not a deliberate attempt to be different or to stand out. Rather it arises from a desire to confirm assumptions underlying any scientific argument. He obviously recognized this characteristic in himself and would often use gentle humor to calm intense discussions . Shun was very hard-working, very focused and very competitive. Yet at the same time he was very generous with his time and kind with his humor. I have many fond memories of the lovely hospitality shown to me by both Shun and his wife Junko, both in Dallas and in Japan.

One theme that dominated many of our discussions was differences between Japanese and American societies, how these differences arose, and how they affected individuals in each society. I should note that the prevailing societal context was strikingly different from the one that prevails today. The Japanese economy was booming, and there was a palpable sense that the USA, burdened as it was with an inadequate school system, crippling Government debt, and overly generous trade policies, would never catch up. There was also a strong sense in many quarters that at least part of this success was the misappropriation of American technology by technologically nimble Japanese companies, like Sony and Toyota.

Shun had two perspectives on these issues that have remained with me. The first was that many of the characteristics of Japanese culture that outsiders found so impressive: politeness, honesty, industriousness, were maintained by very strong social disapproval and even ostracism of those who did not conform. He illustrated this point with an aphorism. In the USA, one uses the phrase "The squeaky wheel gets the grease"; a celebration of individualism at the expense of conformism. In Japan, the corresponding wisdom would be "The nail that sticks up gets the hammer"; clearly not an exhortation to individualistic behavior. Thus societal compliance came at a cost to the individual.

Shun's second perspective was paradoxically that "people are people", much the same (on average) everywhere. One reason American and Japanese societies appeared so different is that Japanese society has

evolved very formal rules that explicitly guide and govern many aspects of day-to-day interaction. By contrast, interactions among Americans have fewer formal rules, but also fewer guidelines for appropriate behavior. Shun believed that ultimately, American and Japanese societies have the same overall goals. Just different ways to attain them.

There is little doubt that the biomedical science community lost one its most enthusiastic participants with Shun's retirement from research. From my perspective, Shun looks and sounds very much like the man I met in Dallas more than 3 decades ago. He remains intensely curious and fascinated by new ideas and information. I will watch with interest to see where his energies and interests take him next.

SOUTHWESTERN MEDICAL CENTER
Department of Molicular Genetics

Joseph L. Goldstein
Michael S. Brawn

Dear Shun:

Congratulations on your retirement. We still remember your arrival in our laboratory when we had just begun to use the new technique of gene knockout in mice. Your knockout of the LDL receptor gene was a major advance. Before your experiment, some people refused to believe that cholesterol was the cause of atherosclerosis. They based this false idea on the observation that feeding cholesterol to mice or rats does not cause atherosclerosis. We thought we knew the reason: livers of mice and rats express high levels of LDL receptors so the plasma LDL level does not rise when cholesterol is fed.

You proved this theory correct when you knocked out the LDL receptor gene in mice. When the knockout mice were fed cholesterol, their plasma LDL rose dramatically, and they developed severe atherosclerosis. Your 1993 *Journal of Clinical Investigation* paper describing the knockout mice has been cited 1951 times. Your 1994 *Journal of Clinical Investigation* paper describing the resultant atherosclerosis has been cited 887 times. Both papers had a major influence on public health. They helped convince the most skeptical people that LDL cholesterol is the cause of atherosclerosis.

When you returned to Japan you brought the gene knockout technology with you. Over the next 30 years you used this technology in clever ways to make many discoveries regarding lipid metabolism. We are proud of you.

We wish you great satisfaction and great happiness on your retirement.

Yours sincerely,

Mike

Michael S. Brown

Joe

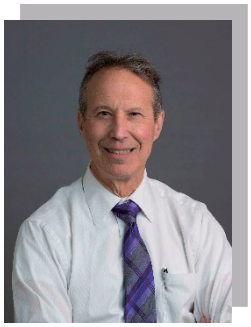
Joseph L. Goldstein

B16/016

5323 Harry Hines Blvd. / Dallas, Texas 75390-9046 / Telephone 214-648-2141 Telefax 214-648-8804
www.utsouthwestern.edu

Director, Division of Endocrinology, Diabetes and Metabolism
NYU Langone Health

Ira J. Goldberg



I have known Shun for decades and am impressed that he could chair an endocrinology division for over 20 years. Although I have read many of his papers, running a Google search I see he has over 400 publications. Wow! What I know best are his studies on lipoprotein lipase enzyme and atherosclerosis performed along with Dr. Hiro Yagyu and others. They showed that a deficiency of this enzyme in macrophages reduces atherosclerosis. Subsequently, they published that the mice also have reduced obesity on a high fat diet and the reduced fat mass associated with fibrosis. His other research work explored the interaction of cholesterol and islet cell function, circadian rhythms, HMG-CoA reduction and bone marrow, and cholesterol ester hydrolase.

Most impressive to me, is that Shun had the time to write a series of clinical papers on response to fibrates, mutations in MTP and abetalipoproteinemia, Kallmann syndrome, LCAT deficiency, and factors associated with the development of diabetic retinopathy. He has done this while also participating in some of the most important large-scale trials of lipid-altering drugs. How did he find the time to do all this and still direct a busy clinical division? Is he such a good manager that he could do all this and still have time to sleep?

I had visited Jichi once and look forward to doing so again this summer and hearing about how you will hopefully be enjoying some well-earned time away from work.

Good luck,
February 15, 2023



ご縁

杏林大学医学部高齢医学　　神﨑 恒一

石橋先生、つつがなく定年を迎えられご退任されますことをお祝い申し上げます。

石橋先生とは、私が東大第 3 内科第 11 研究室（山田信博室長）でお世話になったのがご縁です。といっても私は老年病科に所属しており、脂質、動脈硬化の研究をするためにお世話になった 1989 年～92 年当時石橋先生はダラスにご留学中であったため、実際にお目にかかったのは石橋先生が帰局され、私が老年病科に戻った 1993 年以降のことです。私が 11 研にお世話になった頃は、島野先生（現動脈硬化学会理事長）や後藤田先生（現杏林大学医学部生化学教室教授）をはじめバリバリの脂質研究者が日夜（本当に寝ていませんでした）研究に没頭されていた頃であり、その先を行く石橋先生はいったいどういう人だろうとあたかも天井人のように想像していたのを覚えております。山田信博先生が筑波大学に異動された後、石橋先生が 11 研の室長を引き継がれた際、想像以上のハードワーカーでいらっしゃったので、天井人というより宇宙人ではないかと畏怖の念すら持つようになったことも記憶しております。

それが動脈硬化学会の専門医制度委員会でご一緒させていただくようになってからは、実は冗談好きな気さくな先生でいらっしゃることがわかり、最近はようやく下界でお付き合いさせていただけるようになりました。石橋先生には問題作成委員長として良問を作成していただき大変感謝する一方、これからどなたを頼りにすればよいのか心細さを感じております。

プライベートなエピソードとしては、拙宅の隣にあるイタリアンレストランに石橋先生ご夫妻は時々いらっしゃるようで（一度高久先生にもお目にかかりました）、その際には私のことを気にかけてくださり、突然店に来るようお誘いを受けたのは懐かしい思い出です。奥様も非常に楽しい方で、なるほど石橋先生の気さくさはこの夫婦関係の中で築かれているのかと勝手に想像しております。

普段は冗談好きな気さくな下界人、仕事となると怖い宇宙人、これが私の石橋先生像です。ご退職後もどうぞ呼び鈴を鳴らしてください。

冷静に本質を見つける:石橋俊先生の科学

東京大学先端科学技術研究センター　がん・代謝プロジェクトリーダー　　児玉　龍彦

石橋先生に初めてお目にかかったのは、先生が東大病院で研修された昭和 57 年ではないかと思います。医師として冷静で科学的であり、また人間的には温かく信頼できる素晴らしい先生でした。

私が MIT に移動する直前に内科の脂質の研究室にはいられ、1989 年のノーベル賞受賞後のブラウン、ゴールドスタイン研に移られ、発生工学を駆使して LDL 受容体ノックアウトマウスを樹立され世界に貢献されました。ダラスにご訪問してご自宅で歓談したことが懐かしく思われます。ご指導を受け、Nature に共著の論文も発表させていただきました。

御帰国後、脂質代謝に関わる酵素の研究でマウス発生工学を駆使され、重要な成果をあげられ、自治医大の教授にご就任されました。臨床面でも、中性脂肪の代謝とその疾患の解明にも大きな役割を果たされます。

そして、脂質代謝異常の新たな治療薬である選択的 PPARαモジュレーターの開発をご一緒に進めました。石橋先生が中心になりこの薬の臨床試験を勧められ、フェーズ3の大規模臨床において容量依存的な肝機能の改善のエビデンスを明らかにされ、脂肪肝の治療への道筋を開かれます。

石橋先生のお仕事は科学をしっかりした見通しの上に着実に一歩一歩積み重ねて行き、大きな発見に辿り着く、とても大切な役割を果たされていると思います。複雑な人間の代謝を解き明かすため、いつも穏やかで、温かく、患者さんのための医学医療に貢献されてきた石橋先生の姿勢に多くのことを学ばさせていただいております。

この度、地域医療にさらに本格的に貢献される挑戦を始められること、心からお喜び申し上げ、応援させていただければと考えております。一層のご活躍に期待しております。



2012 年 12 月日本内分泌学会地方会

石橋俊先生のご退任に際して

杏林大学医学部代謝生化学教室　後藤田　貴也

石橋俊先生のご退任に際し、感謝の念を込めて拙文を寄稿させて頂きます。

石橋先生は私の内科研修医時代の最初の指導医（中ベン）であり、この出来の悪い研修医にとても根気よく付き合ってくれました。当時、石橋先生は比較的口数が少なく朴訥な雰囲気を纏い、少しシャイな性格もあり決して押し付けるような断定的な物言いをせず、不出来な研修医にとっては心地よくてありがたい指導医でした。患者さんの治療に関する質問等で夜遅く研究室（東京大学旧第三内科2研）をお伺いすると、いつも他に誰もいない机の前でじっと腕組みして前を見つめ座っていた姿が思い出されます。当時の私にとって研究は未知の世界でしたが、夜遅く静寂に包まれた研究室で一人思考を巡らせる孤高の姿に初めて研究の世界に対する興味が芽生えました。私が旧第三内科に入局したのも、やはり石橋先生から受けた影響が少なくなかったものと思います。

東京大学の研究室（旧第三内科2・11 研）でボスの山田信博先生のもと、“狭いながらも楽しいわが家”を地で行く弱小研究室で苦楽を共にさせて頂いたことは、私にとってもかけがえのない思い出です。メンバー全員で切磋琢磨し、なかでも互いに歳が近いため、石橋先生、島野仁先生、そして私を“だんご三兄弟”と呼んでくれる方がいましたが、三兄弟の長男として石橋先生にはいつもボスや周囲からのプレッシャーの風除けになって頂き感謝しておりました。

2・11 研のヘッドとなられてからは、2研の大規模リノベーションや発生工学研の立ち上げなど、私の存じえないような様々なご苦労があったものと思います。そのような中にあってヘッドとしての石橋先生は、まさに「剛毅木訥は仁に近し」で、ぐだぐだ言わずに懸命に頑張る自分の背中でメンバー全員を引っ張ってくれる頼もしいリーダーでした。

ご退任後はおじい様ゆかりの地でご開業されると聞き、最初は正直驚きましたが、やがて合点が行きました。石橋先生は昔から研究の最前線にあっても常に臨床的な視点を大切にし、それが臨床医として活躍されたおじい様とお父様に由来していること、そして、都会育ちでありながらどこかカントリーボーイ然とした石橋先生のルーツがご開業の地にあることを知り、石橋先生にとって退任後の開業は極めて自然な流れであることが理解できました。

個人的には、一緒に海外での学会の夜の部（？）で羽目を外したことや、家族ぐるみの軽井沢旅行などとても懐かしい思い出です。今度は、自然豊かなクリニック周辺のゴルフ場などでぜひご一緒させて頂ければ嬉しいです。

最後になりましたが、石橋俊先生の自治医科大学の無事ご退任を祝し、新クリニックのご繁栄をお祈り申し上げます。

石橋　俊教授のご退任に寄せて

自治医科大学名誉教授　　齊藤　寿一



平成13年の春に私は後任として自治医科大学の内分泌代謝学講座主任教授が内定した石橋　俊先生と、教室の活動や大学における役割など引継ぎをかねた懇談の場を持ったことをつい最近のことの様に思い出します。米国での研究生活から帰国された気鋭の研究者として脂質代謝を中心とした新任地となる教室でご活動の構想を伺い、意欲にあふれたご着任の熱意をひしひしと痛感した次第です。私は自治医科大学の特徴として、教育、診療そして研究の発展への期待と併せて、特に卒業生全員が卒後９年間、各出身県にあって地域医療に専念するという当時は全国的にも唯一であった実態を踏まえて特に地域に根差した診療の視点が不可欠であるという期待をお話ししました。以後22年間、教室の前任者としてその発展を注視して来ました。石橋教授はご在任中には多くの学会の主催や国際的なトップクラスの学術誌への学術論文の発表など、期待を大きく上回る活動成果を発信され私は、前任者として大変に嬉しく心強く感じてきました。このほど石橋教授から令和5年3月で自治医科大学を定年退任されるとうかがい、教室の発展に尽くされた教授のご尽力を改めて敬意をもって想起した次第です。そしてご退任後のご予定については開業を考えていると伺い、正しく自治医大教授のご退職後の活動の場として相応しいとの思いを深めた次第です。

私自身、大学を離れてから20年余、活動の場を市中の病院に移して、地域で開業して居られる医師の方々と親しく交流し、また病院団体に属して我が国の地域医療体制について体験し、考える日々が続きました。その中で常に痛感してきたことは医師の活動の基盤となる原点は開業の先生方の診療室にあるということでした。地域住民の視点に立った予防、検診、そして診療活動に寄せられる開業する医師への期待は今後，我が国でさらに膨らみ続けるものと思われます。このことは過去数年、わが国でも猖獗を極めた新型コロナウイルス感染症の流行を経験して改めて痛感させられることとなりました。医療の場でも電子機器が普及した昨今、実地医家の視点もともすれば患者の表情から離れ、電子機器の画面にくぎ付けとなり勝ちであることが否定出来ません。どうか石橋先生には患者の想いを深く理解し、それを診療活動に反映させるという医の原点を踏まえて、医師にとって常に新しい課題に満ちた実地医家という「地域医療の新しい地平」に挑んでいただきたいと心から期待する次第です。

石橋 俊 先生の医学研究へのご貢献に感謝、そして、これからのご活躍にエール

東北大学大学院医学系研究科
東京大学先端科学技術研究センター
酒井 寿郎



このたびは、自治医科大学糖尿病代謝内科のご退職、そしていしばし糖尿病内分泌内科クリニックの開業、おめでとうございます。長年にわたり、糖尿病や動脈硬化に関する研究に従事され、多大な成果を上げられましたことは、私たち後身にとっても大変誇らしいことです。ご退職は少々淋しい思いですが、同時に、石橋先生のこれからの新しいステージに対する期待と、ご自身が開業されるクリニックによる患者さんへの貢献に対するエールを送りたいと思います。

石橋先生は、テキサス大学の Goldstein 博士、Brown 博士の研究室において、LDL レセプターのノックアウトマウスを作成され、このマウスを用いた研究によって、動脈硬化の病態を解明されたことで、世界中で高い評価を受けています。さらに、この研究は、高脂血症治療に関する新しいアプローチを提供し、医療現場に大きな影響を与えました。 私も石橋先生のあとに Goldstein 博士、Brown 博士の研究室で過ごした者として、石橋先生の人望の厚さがとても印象的でした。私が大学院時代に携わった VLDL 受容体のノックマウスを作製し解析していた Philip k. Frykman という石橋先生が面倒見ておられた MD., PhD.の学生が、初対面の私に,”I like Syun!”と言っていたのをついこの間のように覚えております。このように、石橋先生は、研究者としてだけでなく、人としても尊敬される方でした。石橋先生は、学生や後輩たちに対しても、常に優しく、温かいご指導をされておられました。私たちの悩みや相談にも、いつも真摯に耳を傾け、的確なアドバイスを下さいました。そのおかげで、私たちは自信を持って研究や診療に臨むことができました。

石橋先生は、卓越した医学的知識と豊富な経験、そして人柄の魅力を持ち合わせている方です。そして、研究者としても、患者さんに対する医療者としても、常に自分自身を高めるために努力されてきました。多くの糖尿病や脂質異常症の患者さんの治療にあたられてこられたことは、医学界にとっても、社会にとっても大変な功績となっています。石橋先生が開業されるクリニックは、必ずや、その地域において多くの患者さんの希望となることでしょう。石橋先生がこれまで築いてこられた人脈や人望は、クリニック開業後も、多くの方々から愛され、信頼されることでしょう。そして、石橋先生の優れた医療技術や温かい人柄が、患者さんの病気と向き合う力となることでしょう。

石橋先生のご退職という節目に、改めてその業績と人柄に敬意を表し、これからの新しいステージでのご活躍を心よりお祈り申し上げます。また、これまでの研究者としての業績、医師としての貢献、教育者としての指導など、あらゆる分野において、多大なる貢献をいただいたことに対して、深く感謝申し上げます。

令和 5 年 2 月 14 日

東北大学大学院医学系研究科
東京大学先端科学技術研究センター
教授　酒井寿郎

石橋俊先生の教授退任に寄せて

東京証券業健康保険組合診療所
（元東京女子医科大学教授）
佐倉　宏



石橋俊先生には22年の長きにわたり自治医科大学内分泌代謝学部門教授として教室を主宰され、このたび無事退任されること、心からお慶び申し上げます。

私と石橋俊先生とは1982年東京大学医学部卒業の同期であり、学生の頃から石橋先生のことはよく存じ上げています。石橋先生は、当時から勉学は勿論のこと運動部活動にも非常に熱心に取り組まれていました。先日お聞きしたところ、現在も日曜日の朝は15 kmのランニングを日課にされているということで大変驚嘆いたしました。まさに医学研究者としても、食事・運動療法が重要な糖尿病・代謝疾患を専門とする医師としても、鑑のような生き方だと感じました。

初期臨床研修修了後の1984年に、私も石橋先生も、同じ東京大学附属病院第三内科第一研究室に入局しました。ただ、私は糖尿病研究室、石橋先生は脂質代謝研究室と、専門分野は近いものの異なる研究グループに属していたことや、留学・出向・医局を離れた時期がずれていたことなどから、医師になってからは存外一緒には過ごしていません。そんな中で、1,300ページを超える大著である「カラー版糖尿病学　基礎と臨床」（2007年、2009年アップデート版、西村書店）に共同編集者として一緒に参画させていただいた思い出があります。

この文を書くにあたり、自治医科大学附属病院内分泌代謝科のホームページを拝見しましたが、多くの医局員が在籍され、すばらしい診療・研究業績を残されていることから、石橋先生が卓越した手腕を持って教室を主宰され、繁栄に導かれたことがよくわかりました。私は石橋先生の半分にも満たない期間しか臨床教室のリーダーを務めていませんが、それでも在職中は気が休まらない日々で、退任したときは大変安堵しもう十分という気持ちでした。22年もの間、教育・研究・臨床・教室の運営を当たられたというのはそれだけでも大変なことであり、時にはご苦労されることもあったのではないかと推察しますが、改めて頭が下がります。また、私ごとで申し訳ありませんが、私は、石橋教授の先々代教授の葛谷健先生が主宰されていた1984～1985年にシニアレジデントとして自治医科大学附属病院内分泌代謝科に在籍しました。当時はまだ自治医大駅から大学まで建物が1つもなく、夜歩くのはとても怖かった思い出があります。しかし、私にとって自治医科大学は、糖尿病の臨床・研究生活のスタートを切った地であり、出身者のひとりとして今後も教室が益々発展されることをお祈り申し上げます。

さて、石橋先生は、ご退任後は、心機一転、埼玉県羽生市で開業されると伺っています。現在は開業するのも簡単ではない時代になっていると聞き及んでいますし、石橋先生と私の共通の恩師である小坂樹徳先生は、よく「開業される先生は大学の勤務医と異なり、すべて一人で責任を負わなければならないから、大変なものです。」とおっしゃっていました。しかし、埼玉県北部は医師不足地域であることや石橋先生の力量を持ってすれば、必ずしや成功することは間違いないものと確信しています。あと数十年間はご活躍できると思いますので、是非頑張ってください。石橋先生とは、東京の自宅がすぐ近いこともあり、時々はお会いする機会もあります。つい先日には、大学の同級生数人とともにご自宅で行われたバーベキューパーティーに招待していただき、大変楽しいひと時を過ごさせていただきました。今後も末永くお付き合いしていただければ幸いです。

ダラスでの懐かしい思い出

東京大学大学院農学生命科学研究科・特任教授
東京大学名誉教
佐藤　隆一郎

石橋俊先生、ご退任を迎えられ大変お疲れさまでした。留学先では3年半ほど同じ研究室で苦楽を共にし、懐かしい思い出ばかりです。

私は1989年の中頃から留学先を決めるべく、情報集めをしていました。ある晩、当時人気番組であった久米宏の「ニュースステーション」を見ていると、特集コーナーで「全米一犯罪都市ダラス」が紹介されていました。日本人撮影クルーがダラス郊外の一軒家でインタビューをしていると、数発の銃声が近隣から轟き、あまりの恐ろしさにここにだけは行くまいと思ったことを覚えています。そうなるはずであったのですが、なぜかダメ元で何のコネクションもないままにGoldstein/Brown博士に手紙を送ったところ、来ても良いという返事を頂きました。G&B研究室では、ノーベル賞受賞後に難解なHMG CoA還元酵素分解研究は中断されていましたが、それを再開したいという変人(？)に両博士が興味を示して下さったのだと思います。

女房より一足先にダラスに恐る恐る到着した私は、何とも贅沢なことに横出正之先生に空港までお迎えに来ていただき、アパートの手配その他をお手伝いいただきました。さらに石橋先生には、車購入のために複数のディーラーに一緒に足を運んでいただき、値引き交渉までしていただきました。石橋先生は、ディーラーのお兄ちゃん相手に巧みな話術で大幅な値引きを要求して相手を愕然とさせ、そんな交渉を楽しんでいる大物ぶりに私も唖然とさせられました。石橋先生と私は理3と理2の違いはあるものの、東大同期入学でもあり、その後は気楽なお付合いをさせていただきました。それも石橋先生のどなたとも分け隔てなく笑顔で会話されるおおらかな性格が、そうさせてくれたのだと思います。

石橋先生ご帰国の4か月後に私も帰国し、その後先生が自治医大にご転任される2年前に母校に戻ることができ、退任するまで過ごすことが出来ました。G&B研で学び、そこで得た成果がその後の人生を豊かなものにしてくれました。そしてその記憶の中では、石橋先生との思い出が色褪せることなく輝いています。今後は近隣住民の健康と福祉の向上に尽くされるとのこと、益々のご活躍を祈念しております。



ダラス到着直後の歓迎会で石橋先生ご夫妻と

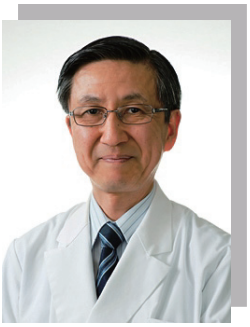
基礎研究から行政まで、動脈硬化の世界に大きな貢献

大阪医科薬科大学　斯波　真理子



石橋俊先生には、これまで多岐にわたり、大変お世話になりましたことを御礼申し上げます。私は、石橋先生に直接お会いする前に、細胞に出会っております。私は滋賀医科大学の大学院生の時に、皮膚線維芽細胞を用いてLDL受容体に対するインスリン作用の実験を行っており、私のスーパーバイザーの日高先生が、何故か石橋先生の線維芽細胞をお持ちでした。私の学位の実験の初期のデータは、実は石橋先生の細胞を使用させていただいたのでした。大学院卒業後、国立循環器病センターに異動し、ポスドクとして働き始めたころに、生の石橋先生に初めてお会いすることができました。石橋先生は、ダラスのGoldstein, Brownの研究室にご留学され、家族性高コレステロール血症のモデル動物であるLDL受容体ノックアウトマウスを作成され、全世界の動脈硬化研究の発展に寄与されました。私も、常染色体性劣性遺伝高コレステロール血症の病態モデルを用いた実験を行っている際に、そのマウスをいただき、大変良い結果を出すことが出来ました。石橋先生は、2012年に山田信博先生の後任として、厚生労働省　難治性疾患政策事業　原発性高脂血症調査研究班の班長になられ、2017年まで務められました。その間の2015年には、小児慢性疾患と成人の難治性疾患について、脂質異常症におけるそれぞれの対象疾患の範囲が大幅な拡大がなされました。原発性脂質異常症の中からレシチンコレステロールアシルトランスフェラーゼ欠損症、シトステロール血症、タンジール病、原発性高カイロミクロン血症、脳腱黄色腫症、無βリポタンパク血症の7疾患が、それまでのFHホモ接合体に加えて新しく指定難病に認定されたこと、さらに3疾患についてPROLIPIDのレジストリーが開始されたことなど、脂質異常症の世界の大きな転換点となりました。2018年より、石橋先生の後任として私が班長に任命され、引き続いて全脂質異常症難病のレジストリーの開始、全疾患の和文および英文の総説作成を介して、脂質異常症難病の啓発に取り組んでおり、石橋先生の多大なご指導をいただきながら務めさせていただいております。このように、石橋先生には、研究の大事な局面で大きなサポートをいただいて、ここまで進めることができましたことを、深く感謝いたしております。これまでは教育、研究、診療、さらには行政の面より医学へ多大な貢献をされてきましたが、これからはクリニックを開設され、地域医療へと活躍の場を変更されますが、これまでのご経験を元に、大きな貢献をされることと存じます。お身体に気を付けながら、ご活躍されますこと、さらに後輩へのご指導も継続いただきますよう、お願いいたします。

石橋俊教授のご退任に寄せて



埼玉医科大学　内分泌糖尿病内科　　島田　朗

石橋俊教授のご退任に際し、一言、御礼申し上げます。

石橋俊先生は、20年以上の長きにわたり、自治医大において教授職をお勤めになられたとのこと、それだけでも大変なご業績かと思います。一教室の責任者には、基本として、質の高い診療、世界レベルの研究、優れた医師の育成、が求められるわけですが、加えて、診療における医療収入、大きな研究費の獲得、多岐にわたる人事、さらには、対外的な責務、特に学会を軸とした国全体に関わる役割や先導、などなど、数えきれない程の重責がありますが、先生におかれましては、常に紳士的に、スマートに種々の事柄に対応されておられると拝察しておりました。

以前、おそらく私が慶應の講師だった時代と記憶しておりますが、高々私学の一講師を自治医大までお招きいただき、講演をさせていただくという大変光栄な機会を頂戴しました。その際も、非常にアカデミックなディスカッションをさせていただき、感銘を受けた記憶がございます。さらに、講演後もアットホームな懇親の場を設けていただき、先生のお人柄で多くの教室員の方が集まって来られていることを目の当たりに致しました。その節は、誠にありがとうございました。

先生は動脈硬化関係、特に、脂質代謝の権威と承知しておりますが、私が1型糖尿病研究のお話をさせていただいた際にも、非常に熱心に、また、物事の本質をつくご質問をされておられ、サイエンスに対する真摯な向き合い方をご教示いただきました。今回、ご退任されてからも、大所高所からご指導を賜りたく存じます。

これからもお体にお気をつけられて、益々ご活躍されますことを祈念しております。

石橋俊先生と私の 20 年間

新小山市民病院 院長　　島田 和幸

石橋俊先生が自治医大内科学講座内分泌代謝学部門の教授に就任されたのは、今から 20 年以上も前のことになる。石橋先生は、私とは専門領域は異なるが、東京大学第3内科の同門で、私より 10 年後輩である。自治医科大学は、開学時、全国の大学に先駆けて第1、第2のようなナンバー内科を廃止して、専門領域ごとに独立した内科学講座を開設した。このことは、自分が卒業した大学のナンバー内科に「入局」することが普通だった時代には、全国の医学部から専門性を求める卒業生を呼び込むことに成功した。しかし、石橋教授が着任された頃は、時代は進み、専門分化のみならず内科全体を統合化する方向に舵をきろうとしていた時期であった。当時、私自身は新設された内科学講座の主任教授を斉藤壽一教授から引き継いだ。
石橋先生は、大学の後輩で、かつ脂質の研究面でも重なるところがあったため、私には最初から身近に感じていた。そのせいもあって、時に先輩ぶった言動で先生に接したことがあったと反省している。先生のご退官にあたり、誌面を借りてお詫び申し上げる。自治医科大学は、診療のみならず、研究・教育を重んずる学風があり、それぞれの教室を主宰する教授のご苦労は、私自身よく知っている。まずは教室員を獲得し、多様な医局員が志向するところと教室の目指すべき方向を擦り合わせなければならない。着任直後は東大とは違う教室の雰囲気にまず適合し、新たな方針を打ちださなければならない。そして地域の医療需要にもなんとか応えなければならない。石橋先生は、最終的にはみごとにそれらをやり遂げた。現に、新小山市民病院は、自治医大内分泌代謝の医局から素晴らしい、優秀な医師を継続して派遣していただいており、さらに地域医療に従事している内分泌代謝の医局出身者の何人かとも私たちは強力な支援をいただいている。大変感謝している。
石橋先生は、温厚で、仕事に対して終始誠実を貫かれるお人柄であり、最初の教授選任のときの印象から一つも変わっていない。アカデミアを退官後は、診療所を開いて地域医療に従事されると聞いているが、「患者さんに好かれる開業医」になることは疑いがない。
石橋先生の今までのご活躍、ご貢献に対して心からの拍手を送るとともに、これからのますますのご活躍を祈念する。

「医学研究の道」へ導いてくださった恩師

相模女子大学 栄養科学研究科 教授　　嶋田 昌子

私が初めて石橋 俊先生にお会いしたのは、東京大学医学部医学科の6年生の春でした。卒業後の進路について、内科臨床医をしながら医学研究にも携わりたいと考えており、特に代謝学分野に興味を抱いていました。学生実習の担当医が脂質代謝のご研究をされていることを知り、そのご縁で当時の第三内科第 11 研究室を訪れました。研究室で黙々と楽しそうにご研究されている石橋先生のお姿を拝見して、この先生のご指導を受けてみようと思い立ち、それ以降数カ月にわたって実験の手解きをしていただきました。研究に全く無知な私にとても穏やかに丁寧に接してくださったのが大変有り難かったです。その後、石橋先生は、1985年にノーベル医学生理学賞を受賞された米国ダラスのテキサス・サウスウエスタン大学の Michael S. Brown と Joseph L. Goldstein 博士もとにご留学されました。私が前期内科研修後、入局までのフリーの時期を利用して渡米した際には、石橋先生のご留学先のダラスの研究室を訪問し、両教授に面会させていただきました。また、その折にご自宅に温かく迎えてくださった先生のご家族への感謝の気持ちは今も忘れることができません。石橋先生は帰国後自治医科大学に異動され、私も渡米してしまい疎遠になっておりましたが、ある年、先生がニューヨークで招待講演をされた際にボストンで研究をしていた私にご連絡をいただきました。奥様と3人でマンハッタンにてご一緒させていただいた折には、昔のことがとても懐かしく思い出され、本当に楽しい時を過ごすことができました。ただ、先生のお好きな村上春樹の小説の舞台であるボストンの街のご案内が、私の在住中に叶わなかったことが、今でも心残りです。

石橋先生は、長い年月に渡り、臨床、および医学研究の第一戦でご活躍され、多くの業績を築いてこられました。本当にお疲れ様でした。そして、公私ともに大変お世話になり、どうもありがとうございました。これからの先生の益々のご発展とご多幸を心よりお祈り申し上げます。

ご退任にあたり 団子三兄弟次兄から長兄にむけて



筑波大学医学医療系内分泌代謝・糖尿病内科　　島野　仁

石橋先生“ご卒業”おめでとうございます。
先生が東大糖尿病代謝内科から自治医大にご栄転される際、研究室（2研 11 研）でのお祝いの会だったか、元ボスの村勢敏郎先生、故山田信博先生をはじめ我々メンバーの前で、これから一国一城の主としての矜持を披露されていたのを昨日のように思い出します。 少々はにかみながらでしたが、使命として地域の医療を支え後進を育てなければならないと話され、先生、後藤田貴也先生（現杏林大教授）と若かりし頃 団子3兄弟と呼ばれ実験三昧の緩い気持ちでいた私は、noblesse oblige としての薫陶に背中がピリッとしました。そのご姿勢は先生のご在任期間、一貫されていたと感じています。
研究では、皆様よくご存知の通り、マクロファージの脂質代謝、動脈硬化巣での泡沫化機構の解明、ご留学中の家族性高コレステロール血症の動物モデル LDL 受容体 KO マウス作成。 その後の発生工学動物を軸にした脂質糖尿病病態の解析は、2研 11 研の研究に方向性をあたえ、また屋台骨のエンジンとして研究室を引っ張ってくださいました。 動脈硬化学会、糖尿病学会、内分泌学会などに大きな足跡を残され、同じ研究室出身として誇らしい思いをさせていただいています。
私が筑波に移ってからも、後輩のよしみでいろいろ共同研究させていただいています。 根源的な問いに答えを与えてくれるプロジェクトでいまだに展開にワクワクしております。 同じ北関東ということで研究会などご一緒する機会も多く、先生の独自のお考えや時に厳しいご意見をいただき、勉強になるとともに背筋がまたしても伸びたものです。
具体的なエピソードをここであげるには、あまりにたくさんの思い出や万感の思いがありますが、長きにわたるおつきあいからふりかえると、どうしても若い時のことがまず頭に浮かびます。
旧東大第3内科に入局したてのころ病棟を終えて研究室で夜な夜な頑張っていると、毎晩のように新婚の先生にお誘いいただきお宅でご馳走になった楽しい場面場面。 その後ダラスのテキサス大学サウスウェスタン医療センターGoldstein, Brown 両教授ラボへの留学は入れ替わりになったので、ここでも公私ともに入局の時と同じようにご夫婦にお世話になりました。
私が脳卒中で倒れたときは自治医大病院で先生に大変お世話になりました。 節目節目で先生に助けていただいたこと感謝の念に堪えません。 順子奥様には先生以上に頭が上がりません。
家族一緒に旅行した際、山道でひょんなことから先生とかけっこ競争することになりました。 そのとき私は内なる力を最大限に出したつもりでしたが、どうしようもない先生の深い力を実感した感覚が今も離れません。陸上部の先生、あたりまえに勝ったと思われていたでしょうが、、 近しい中にも当時のこういう緊張感は大切だと思い返します。
先生は、羽生で開業をされるとのこと、ご両親のお仕事を繋いでいき、文頭のお考えを新しい形で紡いでいかれるのですね、ご発展を祈念いたします。 これからもご後進の方々を高い位置からご指導されると思います。 古巣のグループもよろしくお願い申し上げます。

石橋先生、無骨で野武士風の貴族？

国立国際医療研究センター、(公)微生物化学研究所　　清水　孝雄

石橋教授とは同じ東大第三内科の同門ですが、専門も違うこともあり、それほど交流があったわけではありません。文京区の私の賃貸マンションのすぐ隣に、立派なお屋敷があり、どういう人が住んでるのかな、と覗いていたら、ある日、そこから、ひょいと顔を出されたのが石橋先生で、それ以来のおつき合いです。2019年には自治医大にお招き頂き、講演会のホストを務めて下さいました。永井学長より、感謝状を頂いたり、また、大学内のレストランで美味しいフレンチを頂きながら、先生方とお話し出来たのは大変嬉しい経験でした。先生とは山登りも同じ趣味で、涸沢診療所で御一緒したこともあります。私は滑落事故後は、もっぱら関東近辺や、京阪の低山徘徊を続けていますが、先生は四季を通じて、全国の百名山は踏破したと聞いています。Fb でも綺麗な風景や山の写真が印象的ですし、また、思ったことはまっすぐに発信しておられ、無骨で、野武士風の正義漢というのが私のトータルな印象です。アシル転位反応で、もう少し共同研究が進めば良かったのですが、ご退職と聞いて、本当に残念に思います。しかし、お元気な先生ですから、次の頂きを目指しておられると思います。今までのご厚誼に心から御礼申しあげます。



2019 年 6 月 10 日大学院特別講義

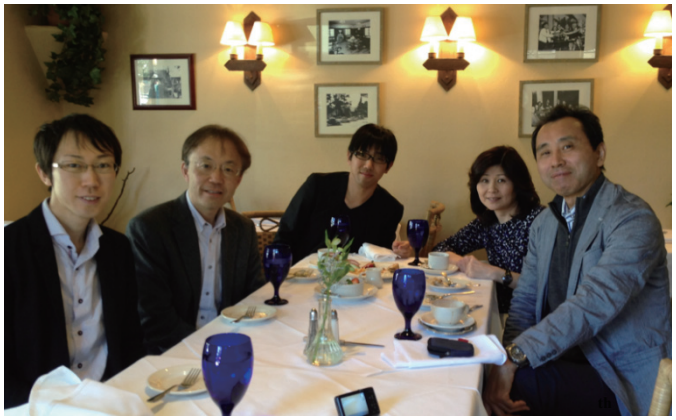
石橋俊先生ご夫妻とのドライブ旅行

大阪大学大学院医学系研究科 内分泌・代謝内科学　　下村 伊一郎

石橋先生、この度は自治医科大学内科学講座内分泌代謝学部門教授のご退任、そしてご開業の新しい人生のスタート、まことにおめでとうございます。

私にとって、石橋先生は、時期は重なっていませんが、ゴールドスタイン・ブラウン研の大先輩です。私がいた頃、石橋先生はまさしく legendary ポスドクの先生でした。LDL レセプター欠損マウスという歴史の大きな1ページとなる仕事をされたことに加え、ゴールドスタイン・ブラウン先生はじめテクニシャン・秘書さん達まで皆が、“Shun, Shun, Shun は元気にしているのだろうか？”と微笑む、皆からの愛され度が格別の先生でした。

帰国後2015年、西海岸の有名なリゾート地・モントレーで、ゴールドスタイン・ブラウン先生が中心となられて脂質代謝を中心とする”Duel conference ”を開催されました。私は、教室の大学院生二人を連れて行きました。最終日、出立までほぼ1日の時間ができ、どうしようかと考えていた際に、石橋先生より、「下村君、学生さん達、連れてこられているから一緒にドライブに行かない？」とありがたいお声がけを頂きました。
そしてその朝から深夜までのドライブ旅行は、私にとって学生達にとって忘れがたいものとなりました。朝、ホテルフロントで初めて奥様とお会いし、それからレンタカーを借り、近くにあるという話題のカフェへ。思いの外遠く、慣れぬ道にも散々迷い、結局カフェにたどり着くのに１時間以上かかり、私も学生もグタ～、となっている時も、石橋先生はいつものとおり泰然悠然とされておられ、奥様はとてもお元気で、「あら、先生達、疲れちゃったの？お若いのに大丈夫？」と。それからおそらく 4 時間くらいをかけたスタンフォード大学までのドライブも、ナビもまともな地図もない、あるのは古い「地球の歩き方」のページの端の方にある大雑把で正確かどうかもわからないとても小さな地図だけ。なんとかスタンフォードまで行って、暗くなった道をモントレーまで戻って帰ってきたのも深夜近くで、遅くに開いていたレストランで遅いディナーを食べる頃には、皆も打ち解け、ご夫妻からは「大学院生の僕ちゃん達も、今日はほんとドライブお疲れ様でした。きっと偉くなってね。」と言っていただけた。我々皆、疲れ果てたが、道もわからず明るくアメリカの道をドライブし、ちゃんと行って帰って来られた醍醐味感、ようやく着いたスタンフォード大学キャンパス内の有名な大きな中庭の芝生の上に皆で寝転んで見上げた時の空の青さ・爽快感、いずれも人生の中で至極の思い出の1ページとなっています。


At Café “ Porta Bella “ , Monterey in California, March 7 , 2015.

石橋先生、奥様、あの時の僕ちゃん達（藤島裕也先生、小幡佳也先生）も今や私の教室の超中心メンバーとして大活躍、教官として教室を引っ張ってくれています。彼らにとって、あの時のお二人との時間は、大学人としての明るさ・おおらかさ・タフネスを教えていただいた貴重なものであったと思います。
これからもますますお元気で、人生を謳歌下さい。そして、いつかまたあのような至極のひと時、ご一緒させて下さい。

命の恩人

浜松医科大学腫瘍病理学講座　　椙村　春彦

石橋先生御退官、御開業おめでとうございます。石橋先生とは本郷で一緒になりましたが、陸上部というか、山岳部というかストイックな雰囲気は暗めの私にはまぶしいものでした。
何故かスキーに誘ってくれたことがあり、当時私は 5 年に一度くらいしかスキーをしなかったので、ゲレンデの変な塊として転がっていたものです。スキーで宿に帰る時、なだらかな下り坂の道を降りて行ったのですが、道のはじで転びました。転んだ本人はたいしたことでもないと思って、のんびり、立ちあがろうとしていましたら彼がすぐやってきてくれて、お前、ここは道のはじでそのまま落ちたら大変なところだったぞと心配してくれました。長年山をやっている人の危機管理能力なのでしょう。その後、留学先で大きな仕事をされ、比較的早く、自治医大で独立されたかと思います。私の留学中にも一度訪れてくださったのですが、あろうことか、そのとき私が運転でへまをして、同僚の方々共々にご迷惑をかけたかと思います。というわけで、長らえているのが不思議な私と比べて、自治医大で、優秀な医師を育てられた後、今度はご先祖の地で開業をされ、さらに、人々のために尽くすということ、羽生市の皆様の大きな期待でもありましょう。とかく時にはひどいことを言われたりすることもある同窓会の中でもどこに出しても恥ずかしくない医療人の模範だと思います。
先生の時々発信する SNS などの中で、映画や読書の感想がある時があり、私は、そういう映画などは石橋が推薦するのだから、と言って見ることにしていています。確かによかったと思うことが多いです。ありがとうございます。
遠藤周作に灯のうるむ頃という小説があり、権威にいじめられながらも、がんの研究をする町医者像が描かれており、私自身はそういう方向で甲斐なき努力を続けて、ご迷惑をかけ続けるのではと思います。

石橋俊先生に育てていただいて

筑波大学　医学医療系　内分泌代謝・糖尿病内科　　関谷　元博



石橋先生と私の出会いは2000年にさかのぼります。大学を卒業後、そのまま東大病院で研修医として各内科をローテートしておりました。当時、内科は悪性腫瘍の患者さんが多いものの最後には救命し切れず、気心通じた患者さんが次々に亡くなり、いろんなことを考えておりました。ところが、最後に回った循環器内科や糖尿病・代謝内科は生活習慣病科の色彩が強く、そうした悩みが少ないことと、石橋先生のグループは基礎研究もしっかりされていながら目先の成果に振り回されて大事なものを見失ってしまうようなところがないことから、石橋先生のところでさらに研鑽を積ませていただくことにいたしました。

石橋先生の教育スタイルは積極的に能動的に取り組ませるもので、若手であってもベテランと同等にどんどん難しい問題にチャレンジさせていました。研修医のうちからたくさん総説も書かせていただきましたし、研究室に入ってからもすぐに一人前の研究テーマを与えていただきました。これは実際にはついていくのが大変なのですが、若いときに一人前に扱っていただくのはうれしいことですし、頑張って取り組んでいるとすごく力が伸びます。自分で考えて自分でやる。そして自由な発想も大事にしてくださる。この繰り返しで本当に鍛えられました。英語論文の書き方も優れた研究者の優れた表現をどんどん自分のものに取り入れていきなさい、というご指導でどんどん自分で書きました。1, 2報目は恥ずかしいものでしたが、3－4報目には自分でほとんど書いたものがeditorにwell writtenと評価されたり、うれしかったのを覚えています。昨今は教育が非常に‘受け身’になっているように感じることが多いですが、よく考えられるべき部分かと思います。

また石橋先生は山登りなど仕事以外も楽しまれており、私も入門を決める前に山登りに連れて行っていただきました。私自身は学生時代から卓球を継続しているのですが、成果主義の色彩も比較的強かった当時は他の研究室の先生には‘よくそんな時間あるね’など言われたこともあったのですが、今振り返ってもそうした全体のバランス感覚のようなものはもう一つ石橋先生に教えていただいたものであり、大事にしています。

私自身はまだ自分のこれまでを振り返るのは早いのですが、振り返ると私自身の中核的な部分を育てていただいたことに感謝の気持ちで一杯になります。石橋先生の教えは目先の成果主義ではないので、研究をしているとその延長上にこの世の成り立ちやそこにある科学的基盤に思いを致すことになります。そうした中で現時点の私が好きな言葉が‘縲蛄（けいこ）春秋を知らず伊虫あに朱陽の節を知らんや’です。我々は科学も発達し、かなりの部分を理解したつもりになりがちですが、実際には1－2割程度しか理解していないのではと思っています。数学、量子科学、様々な手掛かりから世界の成り立ちを考えると、最新の科学と古典の不思議な一致を見たりします。こうした深みのある思考を楽しむことこそ科学の醍醐味かと思います。こうしたところまで連れてきていただいた石橋先生の教えに本寄稿をお借りして感謝いたします。本当にありがとうございました。

石橋俊教授の御退任によせて

新潟大学大学院医歯学総合研究科
血液・内分泌・代謝内科　教授
曽根　博仁



石橋俊教授が、自治医科大学内科学講座内分泌代謝学部門教授を勤め上げられ、このたび御無事に定年をお迎えになるにあたり、この場をお借りしてお祝いと御礼を申し上げます。

サイエンスに対する研ぎ澄まされた厳しいご姿勢の一方、誰にでも温和で気さくな石橋俊教授は、私自身が教授になる前もなった後も、常に理想の教授と仰いできた先生であります。最初に先生にご指導いただいたのは、すでに御逝去なさった山田信博筑波大学元学長が教授として筑波大に赴任され、その下で私が大規模臨床研究 JDCS（Japan Diabetes Complications Study）の担当をさせていただくことになった時でした。全国の糖尿病専門医のご協力により実施された本研究は、欧米以外では初めての、糖尿病患者対象の大規模臨床試験として主に生活習慣介入の効果を検証する研究です。石橋先生は、山田先生と朝日生命成人病研究所の赤沼安夫名誉所長の下、初代事務局長としてそのスタートアップと運営に多大なるご尽力をなさり、私はそれを引き継がせていただく形で、運営面、研究内容とも、その後長きにわたり多くのご指導を賜りました。おかげさまで本研究は、先生の御専門の脂質や動脈硬化関連を含む多くのエビデンスを通じて、わが国の糖尿病診療に大きく貢献しました。

石橋先生は広く知られているように、わが国において、初期からノックアウトマウスなど最先端の発生工学を駆使した基礎研究をけん引されてこられた第一人者ですが、同時に臨床研究においても常に深く、はっとさせられるような洞察をもってご指導いただき、どれだけ助けられたかわかりません。この分野広しと言えども、先生のように、基礎研究と臨床研究の両面について同じ高みでご指導なさる先生は決して多くありません。

石橋先生は学生時代、陸上部の短距離選手だったとお伺いしておりますが、その後はマラソンもなさり、さらに登山でも、私も含む多くの人の憧れの日本百名山踏破を達成されており、その広範囲にわたる稀有な万能ぶりは、御趣味の世界にまで及ぶことに改めて感銘を受けたことを思い出します。

教授として大きな足跡を残された石橋先生が、続く人生を医師としての原点に戻られ、地域医療に貢献されることからも、多くの学びをいただいております。基礎・臨床研究両方の豊富なご経験を基盤に展開される最前線の現場医療のお話しが今から大変楽しみです。どうかくれぐれもご自愛の上、末永くご活躍いただくと共に、今後とも変わらぬご指導の程よろしくお願い申し上げます。この度は、誠におめでとうございました。



2013 年 8 月 29 日　新潟での講演会後の慰労会

学生時代の思い出

長野県立阿南病院　　平良　亘

長年のご勤労本当にお疲れ様でした。私は自治医大 37 期生(沖縄県)で石橋先生にはマクギーの身体診断学の原著教科書を和訳して輪読するという勉強会でお世話になりました。学生時代はもちろん、医師となった現在ではより一層先生から直接ご指導いただけたことを大変ありがたく感じております。それだけではなく先生のご自宅に招いていただきお食事までご馳走になり、先生は学生の私たちと同じ目線にたって話してくださりとても楽しい時間を過ごすことができました。卒業後も SNS を通して近況を機にかけてくださり本当にありがたく思います。そのような先生の人柄が今回のこのような記念誌を作成する運びになったのではないかと思います。これからも益々のご活躍をお祈りいたします。お体ご自愛下さい。

地域医療への貢献～一味違う石橋先生～



医療法人寿朋会　高田クリニック　　髙田　良久

石橋俊先生が自治医科大学内科学講座内分泌代謝部門教授に就任されたのは平成 13 年（2001）、御年 45 歳。卒業年は私と同じ昭和 57 年（1982）だった。年代が同じなだけだが、親近感を抱き、これから石橋先生のご指導の下、栃木県の医療を担っていくのだなぁという予感のようなものを感じた。

先生は、地域の研究会にもよくご参加くださった。

写真 1



写真 1 は平成 28 年（2016）2 月 13 日、第 2 回北関東糖尿病診療連携フォーラムで挨拶される石橋先生だ。茨城の遅野井先生の提唱で始まった研究会だが、栃木、茨城両県の糖尿病を専門とする医療機関が集まり、それぞれの取り組みを紹介したり、課題を検討したり、と意義深かったけれど長時間に及ぶのと両県間の移動はそれなりの負担だった。にもかかわらず、先生はご参加くださった。栃木県開催の時は、ホスト役を買ってでてくださったと思う。

写真 2 は、石橋先生企画による「しもつけ糖尿病ミーティング」の第 2 回、令和元年（2019）10 月 24 日の情報交換会だ。先生は特別講演に岐阜大学の矢部大介教授を招かれ「糖尿病治療薬の効果と食事療法」を勉強する機会を作ってくださった。矢部先生が関西電力病院時代から研究されている「食事が DPP4 阻害薬の効果に影響する」という、我々開業医の診療の実際に生きる事柄の学問的裏付けを与えてくださったのだ。他にも国立国際医療センターの梶尾裕先生、京都大学の稲垣暢也先生、東京大学の山内敏正先生といった石橋先生ならではの人選で、一味違った勉強をすることができた。

写真 2



先生は、県の糖尿病予防推進協議会などにもご出席くださり、含蓄あるご発言で会に深みを与えてくださった。

こうして思い返すと名残惜しく寂しい思いが湧いてくる。

石橋先生、20 余年にわたり、栃木県の地域医療をもご指導賜り、本当にありがとうございました。新天地でのさらなるご活躍をお祈り申し上げます。

脂質の道をお示し頂いたことに感謝申し上げます

東京大学医学部附属病院　糖尿病・代謝内科　　高梨　幹生

石橋俊先生、長きに渡る教授職を全うされ、この度ご退任されますこと心よりお祝い申し上げます。

多くの先生方が研究やお仕事の上でのことをご寄稿されることと思いますので、私は自身が現在の道に進む契機となった陸上部での関わりについて記したいと思います。石橋先生に初めてお目に掛かったのは2002 年秋の三医大戦でのことでした。当時私は 6 年生であり、石橋先生は自治医大に異動をされて間もない頃になります。この大会で初めて応援にお越しになり、内分泌の教授をしている旨の自己紹介をされました。当時の私は内分泌科志望であり、これは何かのご縁と思いお話をさせて頂いたことが昨日のことのように思い起こされます。その後、高校の先輩であることも判り、ますますご縁を感じる中で、東大の研究室の見学やお食事にお誘い頂くようになりました。気付いた頃には本来の志望であった下垂体や副腎ではなく脂質の道へ方向が定まり、内分泌内科ではなく糖尿病・代謝内科の脂質グループへ所属することとなりました。あの大会は自身の引退試合でもあり、まさにラストチャンスでの奇跡のような出会いとなりました。現在に至るまでの道をお示し下さったことに深く感謝を申し上げます。

その後は陸上部の大会にお越し頂くことも増え、若手 OB として学生と同じように大会に参加する私に「そんな暇があったら研究をせよ」とご指導頂く一方で、手頃な大会があると「一緒に走らないか？」とお声掛け頂いたり、陸上部の学生を集めたご自宅での BBQ にお誘い頂いたりするなど、奥様と共に家族ぐるみで大変可愛がって頂いており大変有難く存じます。

現在の私は出会った頃の石橋先生の年齢を超え、多くの若手医師や学生と接する立場となっています。あの時の石橋先生のように、若手に道を示せるような指導者でありたいと思います。これからもご指導のほど、何卒よろしくお願い申し上げます。手頃な大会へのお誘いはこれからも是非よろしくお願い致します。可能な限りお応え出来るようトレーニングもしておきます。これからもよろしくお願い申し上げます。



2010 年 11 月　三医体戦後の打ち上げ

石橋俊先生の自治医科大学退任によせて

高橋医院　　高橋　慶一

石橋俊先生と私の関わり合いは、年月は長いが散発的で希薄であった。最初は東大医学部の鉄門陸上部だった。年次が数年違い、私が本郷の後半に石橋先生は駒場で、年に何回かの対抗試合や大会のときだけ顔をあわす程度。石橋先生は長身で短距離が速かった。卒業後は卒後研修、第 3 内科入局と、会う機会もなく数年たち、石橋先生が同じ研究室に来て再会した。一緒の仕事ではなく、たまに姿を見て居るなと思う程度だったが、二つほど強い記憶がある。石橋先生が結婚されるとき式に招待されたが、会場が東京全日空ホテルの開業初日だったこと。1986 年にハレー彗星が来たときのある週末、レンタカーで清里高原に彗星を見に出かけた。暗くなって多くの人が空を見上げる中、持参の双眼鏡でハレー彗星を見ていると私を呼ぶ大きな声がする。約束していたわけではないが石橋先生が妻同伴で清里に来ていて、私を捜していたのだった。翌日は3人で近くの丘にハイキングに行き、石橋先生の健脚を実感したことを覚えている。その後私は留学したあと、1990年に埼玉医大に移った。石橋先生はダラスに留学して活躍されたあと、自治医大に移られ長く活躍することになった。そのころ研究室の仲間とアメリカの学会に行ったおりに，ダラスやサンデイエゴで会う機会があった。どちらかの時に同伴していた双子はもう成人されているだろう。私は家の事情で1998 年に郷里に戻って開業して今日に至るが、学会には毎年行き、会場で姿を遠望し、すれ違って挨拶する事はあった。最近の宇都宮での学会で久しぶりに少し話し、この文を書くことになった。大学退任後は開業され地域医療にご活躍とのこと、再び近い世界になった気がしてうれしく思っている。先生の今後の長い健康と活躍を祈る。

2024 年 10 月

私と自治医大と石橋先生

東京都健康長寿医療センター　糖尿病・代謝・内分泌内科　　田村　嘉章

石橋先生、定年御退官心からお祝い申し上げます。東京都健康長寿医療センターにおります田村嘉章です。私は東大糖尿病・代謝内科時代に石橋先生の研究室にいれていただき、学位をとらせていただいたあと、現在の職場に移って現在に至ります。

私は研修2年目を自治医大で過ごしました(1997年)。当時はまだ内分泌代謝を専門にすると思っていなくて、内分泌代謝科は回りませんでしたが。当時は学生寮の奥の一番北側にできたレジデント寮に住んでいましたが、いまもあるのでしょうか？研修医生活はとても楽しく、大学の隣の居酒屋「吉四六」でよく飲み会をしてましたが、もうないようですね。毎週末は真岡井頭温泉につかるのがルーティンでした。益子・芳賀・市貝の温泉巡りもして、入浴中にポケベルで呼び出されたことも懐かしいです。

石橋先生には東大での1年目の時からお誘いいただいていましたが、上記2年目の時、研究室の某先生の熱心なお誘いで入局しました。石橋先生は高校の先輩でもあり、その後うちの高校から何人か研究室に入りましたね。入局後もたびたび先生のお宅にお邪魔させていただいたり、カラオケに連れて行っていただいたり、大変お世話になりました。沢登りにまで連れていかれ死ぬ思いをしたのは閉口しましたが。もちろん、研究や論文執筆の面でも大変お世話になりました。臨床を大切にされ、臨床と基礎の両方の論文を書きなさい、内分泌も大事にしなさいとおっしゃっていたのが今も心に残っています。石橋先生は常にお忙しそうにされていましたが、夕方になると必ず泳ぎに行かれているのが印象的でした。その石橋先生が自治医大に来られることになったときは、不思議な縁を感じたのを覚えています。その後私も東大から離れてしまい現在に至りますが、時あるごとに私の近況を気にかけてくださり、ありがとうございます。

私個人の思い出話ばかりになってしまいましたが、私と自治医大と石橋先生にはちょっと特別な関係があり、書かせていただきました。石橋先生、このたびはおめでとうございます。体力のある先生に心配は無用でしょうが、お体を大切にお過ごしください。



谷川連峰仙の倉沢西ゼン登攀前

石橋教授とモンゴル人留学生の思い出

医療法人社団聖仁会　我孫子聖仁会病院　医長　　為本　浩至

石橋教授とは研修医のころからお世話になっています。11 研究室は村瀬先生が立ち上げた脂質の研究室で私は糖尿病研究の1研でした。山田先生がハウプトの 11 研は雰囲気がよく、内心うらやましかったことを思い出します。自治医大の生化学教室にお世話になるようになってからカンファに顔を出させていただいたことがあります。そのご縁で留学生のボロルマーさんの指導を依頼されました。ボロルマーというのはモンゴル語で聖母マリアのことだそうです。インスリン受容体の変異の作用を細胞に発現させたモデルで検討する実験でした。PCRを使って変異受容体を作成して培養細胞にトランスフェクトします。ネオマイシン選択で生き残ったコロニーを単離してインスリン結合を調べ、効率のよいものを選びます。これを使って受容体のチロシンキナーゼ活性を調べました。私が拙い英語で教えるのですが、なんとか完成にこぎつけました。以前に群馬大学で中国人留学生、自治医大の大宮医療センター（現さいたま医療センター）でベトナム人留学生と仕事をしたのが役に立ちました。彼女本人のアイデアでやりたい仕事を指導できればもっと発展があったのかもしれません。限りのある時間の中でまとめるので筋道の見える仕事にせざるを得ませんでした。彼女は留学生のバザールのときにモンゴルのゲルにさそってくれたのですが、地元の外勤のために行けなかったのが残念です。

石橋教授との思い出

医療法人長崎病院　　千葉　泰子

新教授としてご就任された石橋先生と初めてお話したのは、ある研究会後の懇親会でした。当院の外来患者数の増加に伴い、医師派遣を依頼した際に、先生が東京大学医学部陸上部に所属されていたことを知りました。当時東京大学と私の母校である新潟大学の陸上部は交流があり、一年ごと東京と新潟の地で交互に定期戦が行われていました。先生が、私の恩師であり友人でもある新潟の先生と仲良くされていたことを伺い、一気に親近感を覚えました。そして、医局の先生（最初に来てくださったのは高橋学先生です。）を派遣していただき、現在まで自治医科大学の先生方にお世話になっております。当院の糖尿病外来が継続して行えるのは、自治医科大学の先生方そして石橋先生のおかげといつも感謝しております。

仕事以外の思い出もたくさんあります。

ある時、高橋学先生が当院スタッフと足利尊氏マラソン大会に出場する事になり、研究会後の懇親会で、その話題で盛り上がっていましたら、石橋先生も参加されることになりました。皆と同じコースに参加するということでしたので5kmだと思っていましたら、ハーフマラソンにエントリーされました。陸上部での専門は短距離と伺っていましたので、心配していたところ、先生からメールが届きました。「マラソンについて何冊か本を読みました。全く走っていない人が 20km 走るには、まずは、○○日まで○○km、そして、1 ヶ月前までには○○km 走り込み、最終調整を行うと走れるということです。現在ランニングを始めています。」目標を完遂するために計画を立て実行していく姿を目の当たりにし、驚嘆致しました。これ以後先生はフルマラソンもされており、2019 年には、TDJ のメンバーとホノルルマラソンにも参加されたと伺っています。

尊氏マラソンにご一緒するようになって 2 年目か 3 年目の 2014 年に、先生から雨飾山に登りませんかというお誘いを受けました。登山などしたことのない私ですが、主人ともども参加させていただくことにしました。登山初心者の私達に、お忙しい中登山用品の買い物まで付き合ってくださいました。先生は山岳部にも所属し、百名山を極めようという大専門家でしたが、買い物の際には、大切なものを強調するものの、押し付けはなく、緩やかにリードして下さいました。登山当日は、先生と奥様、主人と私の 4 人で登りましたが、先生は一番あとからガードしてくださり、初心者のペースに合わせお休みもたくさんとり、食べ物の食べ方も懇切丁寧に教えてくださいました。先生が計画された登山日はお天気がよく紅葉もきれいで、お陰様で初めての登山は最高の思い出となっています。その後私達夫婦は登山にはまり、時に百名山・時に低山を登って楽しむようになりました。石橋先生は百名山を制覇されましたがその最後の山にご一緒できたことも、また至極楽しい思い出です。頂上での先生との百名山登頂記念写真撮影も感無量でしたが、下山後、すそ野のキャンプ場で、奥様がけんちん汁を作って待っていてくださり、ご一緒した先生方と温かい汁やお肉を頂きながら、「百名山登頂の歴史」を伺った時間もとても幸せなひと時でした。「登山は、運動機能の維持や眺望を楽しむだけでなく、気象学や地形学、天文学・歴史学・風土学などいろいろな学問を学ぶことができて楽しい」とおっしゃっていました。



新潟長野頸城連峰雨飾山山頂

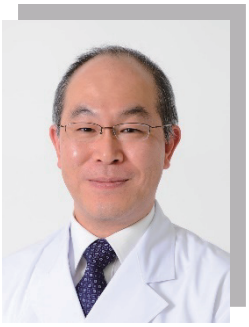
先生には、医療活動面でお世話になったばかりでなく、登山を通じて、また、幅広い教養や生き方のお話しから、私達の人生の幅を広げてくださったと心より感謝しております。これからも宜しくお願い致します。

今後は地域医療にご尽力されると伺いました。ますますのご活躍を心よりお祈り申し上げます。

足利市　医療法人長崎病院　千葉泰子

石橋俊教授のご退任によせて

帝京大学医学部内科学講座　　塚本 和久



石橋俊先生の教授ご退任によせて、学問面のみならず私生活でも非常にお世話になった者の一人として、謹んでお祝い申し上げます。

私が初期の研修をおえて東京大学に戻ってきた 1989 年には、丁度石橋先生が米国にご留学され、また石橋先生が帰国された 1994 年には私が留学した関係上、実際に私が石橋先生と直接面識を持つようになったのは私が帰国した 1997 年以降でした。しかし、研究室こそ異なるものの、同じ分野（脂質代謝・動脈硬化）の研究を行う研究室に属していたため、石橋先生のハウプトの山田信博先生や私の研究室の先輩から、石橋先生が卓越されていることはよくお聞きしていましたし、何より 1993 年に LDL 受容体欠損マウスを作成されて発表された時には、すごい先生だな、と実感したことを覚えています。LDL 受容体欠損マウスに関しては、私の留学中および帰国後の研究において使わせていただき、その恩恵にあずからせていただきました。

1998 年の東大病院の内科編成に際しては、病棟でも一緒に働かせていただくようになり、また動脈硬化学会のみならず脂質代謝・動脈硬化の様々な研究会ではご一緒させていただきました。石橋先生は脂質代謝のみならず非常に広い範囲にわたる生命科学の最新の知識をお持ちで私にはわからない質問をよくされており、常に広い視野にたって多面的、多角的に考察し、研究を推進されているのだと感嘆していた次第です。

個人的にもいろいろと一緒に楽しませていただきました。ご自宅にも数回呼んでいただいて夜遅くまでご馳走になりましたし、また、私の家族ともども、石橋先生の奥様とも一緒にイタリアンで楽しい時間も過ごさせていただきました。私が会津に赴任していた時には、石橋先生の趣味の山登り（確か安達太良山；石橋先生は目を輝かせて安達太良山の愛称を連呼されていました）も同行させていただき、下山してから「芋煮会」で楽しんだのも新鮮な思い出です。石橋先生がしばしば竿頭となった船釣り（beginner’s luck と謙遜されていました）などもありますが、今でも一番印象に残っているのは、ダラスで学会があった時のこと。毎日のようにいろいろなお店に連れて行っていただき、そして滑り台のある店では、子供のようにはしゃいで滑っていた先生（私もそれ以上に滑りましたが）を思い出します。ご退任後は、羽生でクリニックを開業されると伺っております。新天地でのご活躍を祈念するとともに、脂質代謝や動脈硬化の分野で、今後もいろいろとご指導ご鞭撻をぜひよろしくお願い申し上げます。



久里浜での釣り

石橋　俊教授との思い出

横浜市立大学　内分泌・糖尿病内科学　　寺内　康夫

石橋先生、自治医科大学を定年退官されるとのこと、月日が経つのは早いもので、永年にわたりお世話になり、ありがとうございました。

東京大学時代から、脂質異常症の診断・治療で迷ったときは、いつも石橋先生に相談していました。低コレステロール血症を呈する方の診断の進め方を相談したことがありましたが、追加すべき検査、治療方針を懇切丁寧にご指導くださいました。石橋先生のお人柄がよくわかりました。

また、栃木県内で開催される糖尿病・代謝疾患に関する講演会に度々お声掛けいただきました。コロナ禍で、宇都宮まで行く機会はなくなりましたが、以前は講演会に参加された先生方との情報交換することで、楽しいひと時を過ごすことができ、加えて臨床・研究に重要なヒントを得ることができました。貴重な機会を与えてくださり、ありがとうございました。

退官されましても、クリニックを開設され、診療に当たられると聞いています。新しい環境下でもご活躍されますことを祈念いたします。

石橋俊教授の思い出

富山大学学術研究部医学系　内科学第一講座　　戸邉　一之

大学時代に寮が一緒であったこともあり、石橋俊先生の方が学年が一つ上でありながら今日まで親しくさせて頂いてきました。卒後、内科の 2 年間のローテーションを終えて入局した東京大学の第三内科の研究室も、気が付いてみれば隣の研究室で、石橋先生は脂質と動脈硬化、私は糖尿病の研究室でした。昭和 57 年(1982 年)卒は、高久内科に多くの優秀な先生方が入局されましたが、その中でも石橋先生とは親しく付き合わせて頂くことができました。当時の第三内科の研究室はどこも不夜城を競うがごとくハードワークの方がたくさんおりましたが、石橋先生もその一人でした。

その後、石橋先生は Brown＆Goldstein 博士のところに留学をされました。「ノーベル賞」は、今よりずっとずっと遠い存在でしたので、ノーベル賞受賞者のラボのところに留学することに、畏敬の念を抱いたものです。石橋先生は留学先で Gene targeting の系を立ち上げられ、LDL 受容体欠損マウスを作製・解析し素晴らしい論文を書いて帰国されました。ちょうど、私どもの研究室でも為元先生が IRS-1 欠損マウスを作製していた時期に重なります。

私はインスリン初期シグナルと脂肪細胞の研究を経て脂肪組織のマクロファージの研究に移り今日まで続けております。石橋先生の動脈硬化の分野の「血管マクロファージが LDL 粒子を取り込んで泡沫化し、炎症をともなった血管のリモデリングの引き金になる」という知見に、知らず知らずのうちに刺激をうけていたのかもしれません。

その後、石橋先生は自治医科大の教授となり、私は富山大学へと、ともに第三内科を離れましたが、様々な研究会で顔を合わせると「どうしているか」と気遣ってくれる石橋先生でした。第三内科の時と同様に、胸には熱い情熱を秘めながらもいつも温和で、そして誠実に時には厳しく見詰めていてくれる石橋先生でした。学生時代の寮が一緒という不思議な縁ですが、これまでどこかで心の支えになっていてくれていたのが石橋先生です。

笑顔が素敵な石橋俊先生とのお付き合い

自治医科大学 名誉教授　　富永　眞一



石橋俊先生のことを初めて知ったのは、東大の第三内科に同級生の山田信博先生を訪ねた時でした。「もうすぐ優秀な弟子が海外留学から帰ってくるので、よろしく頼むよ。」と言われ、信博君（わがクラスには山田君が 4 人いるので、皆は下の名前で呼び合っていました。）が言うのだからきっと飛び抜けた俊才に違いないと期待していました。

その後自治医科大学に赴任された石橋先生とお会いしました。正直に申しますと想像していた人物像とは大変異なっていました。ニコニコと柔らかな笑顔が素敵な好青年という印象で、とても生き馬の目を抜く群雄割拠の第三内科で生きてきたとは思えぬお人柄でした。その後私が定年退職するまで、長きにわたり公私共にお世話になりました。

まず公の部分ですが基礎研究、特に実験科学に身を置く私は何よりも目の前で生じた現象を大切にしてきました。その現象を正しく解析するためにはどのような方法を用いるのが良いか、方法がなければ自ら開発しその妥当性を十分に検証した上でデータに基づく考察を加えるといった一見まわりくどい手法で研究活動を行ってきましたが、石橋先生が醸し出す雰囲気にも似たような匂いを感じていくつか共同研究をさせていただいたことがあります。先生の研究は臨床研究というよりも基礎研究に近いもので親近感をいだいています。

これ以下は私事になるのをお許しください。実は私には母親譲りの高脂血症があり同級生の信博君たちにも「研究対象になるほどだな。」などと言われ、石橋先生の外来でお世話になっていました。ある日外来受診後研究室で仕事をしていると石橋先生から電話があり、「血液検査の結果 CPK が 5,000 近くに上がっているので至急来てください。」と言われました。「心筋梗塞を見逃したら洒落にならない。」とおっしゃり ECG 検査をしたり、検査室に残っていた血清を調べて否定してくださり二人で胸を撫で下ろした記憶があります。結局薬物の副作用による横紋筋融解だろうとのことで薬を変えて現在まで無事に過ごしています。

さらに私的な話になりますが、ある日「霧降高原に reasonable なステーキのお店がありますが、行ってみてはどうですか。」と教えていただきました。早速家内と行きましたが、上質な黒毛和牛（たしか前沢牛）であるにもかかわらず驚くほどの値段で調理も行き届いていました。このように趣味も多彩な先生には人間としての余裕を感じさせるところがあります。また当時自治医大でレジデントをしていた愚息も内分泌代謝科をローテートしている時にご自宅に招待してくださり、まさに家族ぐるみのお付き合いをさせていただきました。

雑多な思い出話をしてしまいました。私は定年退職後に自治医大の卒業生が設立した「地域医療振興協会」で、全国に展開する卒業生と学生、教職員との連携を深める仕事をさせてもらっています。石橋先生にも自治医大 OB としてこれまで培ってこられた経験、人脈を活かした地域医療分野でのご活躍を祈念しております。そして今後も現役時代と同様に“共同研究（事業）”ができると幸いです。

石橋俊先生との思い出の断片

北里研究所・北里大学（特任教授）　供田　洋

石橋先生、ご退官おめでとうございます。
先生との出会いはもう 25 年くらい前になるのでしょうか。先生が東大の医学部 3 内に米国での留学から戻られていた頃、東大薬学部の新井洋由博士に先生をご紹介いただいたのが契機であります。当時、北里研究所の我々の研究室で発見した微生物由来のステロール O-アシル転移酵素(SOAT、当時は ACAT と略されていた)阻害剤ボーベリオライドについて、動物での動脈硬化進展に対する薬理効果を検証したいという目的でありましたが、先生は快く引き受けてくださいました。先生が構築・保持されていた LDL 受容体のノックアウトマウスと apoE ノックアウトマウスを用いて、私どもの研究員・生田目一寿君（現アステラス）が 2 年間にわたり動物実験のご指導をいただきました。薬理実験とは無縁であった我々の研究室であったこともあり、生田目君は大変苦労したこととは思いますが、先生のご協力のおかげで明確な結果を持ち帰ることができ、その成果は PNAS（2004 年）に発表することができました。その後、私が薬学部に移った折、医薬基盤研究所からの助成（2006-2010 年度）を受けることができ、再び先生のお力にお縋りすることとなりました。この時先生は、（あっという間に）自治医大の教授としてご栄転されておられました。SOAT に 2 種の機能の異なるアイソザイムの存在が明らかとなり、SOAT2 を選択的に阻害することがわかってきた化合物ピリピロペンの薬理効果の実証でありました。先生はそれまで SOAT1 のご研究をされておられましたが、この時も快く共同研究を引き受けてくださりました。研究室で博士号を取得したばかりの大城太一君（現在、私の退官後の研究室の教授）が今度は先生のもとでご指導をいただくこととなりました。大城君も着実に成果をあげ、先生との共同研究として ATVB（2011 年）や JPET（2015 年）などの雑誌に成果を残すことができました。生田目君も大城君も大酒飲みでありましたので、この点でも先生には大変ご迷惑をお掛けしたのではないかとずっと心配しております。ピリピロペンの研究は着実に？進展させることができ、より優れた誘導体 PRD の創製、さらに創薬を目指し 2021 年にはベンチャーPRD Therapeutics を設立し、現在、臨床試験を目指して準備をしています。先日も自治医大の先生方のご意見を伺いに押しかけ、これからも先生のお力を頼りにしている次第です。大城君のあとも、先生のもとには研究室の卒業生が押しかけました。坂井謙斗君（現山梨大学）はポスドクとして、さらに山室大介君は最後まで先生のもとで研究を続け、学位の取得までなし遂げたと伺い、私はホッとしております。今思い浮かべても、本当に多くの人間が先生のもとでご指導を受け、さらなる成長を続けておりますことに、心より感謝申し上げます。また、私自信、先生のお計らいで身に余る場所で講演させていただく機会を与えてくださいました。特に、動脈硬化 Update（2008/9/4@東京プリンス）と第20回動脈硬化教育フォーラム教育講演（2020/2/2@京王プラザ）が思い出されます。とても光栄なことであり、感謝しかありません。
先生のいつもにこやかな笑顔を思い浮かべながら、これからの先生の人生がますます充実したものとなりますことをお祈りします。本当にありがとうございました。

石橋 俊先生の教授ご退官に寄せて



国立がん研究センター理事長　　中釜　斉

石橋俊先生、教授ご退官おめでとうございます。長年にわたり、教授の重責を果たされてこられたことに対し、友人の一人として、深く敬意を評したいと思います。

大学時代を振り返ると、学業面での石橋先生（以後、石橋君と呼ばせて下さい）との共通の話題は必ずしも多くなかったと思いますが、スポーツに没頭した点では互いに共感するものがあったのではないかと思います。私はバレー部に所属し、自らの役割を意識しながらチームに勝利をもたらすべく励んでいました。一方、石橋君は個人競技である陸上部に所属し、常に自らに高いノルマを課すかのように、御殿場グランドで一人黙々と短距離のトレーニングに励んでいた姿がとても印象的でした。チームの中で自らが貢献できるピース（役割）を見出し、チームとして成長するための技術向上にメンバーが一丸となって取り組むチームスポーツと比べると、短距離競技に打ち込む学生時代の石橋君は正に孤高の求道者というイメージでした。大学教授としての石橋君のイメージも求道者そのものであったのか、皆様からの寄稿文を今から楽しみにしているところです。

1982 年に医学部を卒業した後、石橋君とは二年間の初期研修をともに過ごしました。最初の一年間は東大病院で研鑽を積み、二年目は小平記念東京日立病院（現在の東都文京病院）で丸々一年間を共に過ごしました。同級生ではもう一人の英才、大石展也君（東京逓信病院呼吸器内科部長）とも一緒でした。大学病院での研修では 2~3 名の患者さんを受け持ち、医学書や文献を読みあさりながら、多少の余裕を持って医学知識の集積と診療経験を積むことができたのですが、二年目の東京日立病院では多様な病態の10名前後の患者さんを一度に受け持つ必要があり、毎日が火の車状態であったと記憶します。自らの医療行為が適切なものなのかを常に自問自省しながら、時に強い不安を抱えながらの研修だったのですが、その際にも、堅実で充実した医学知識を持ち合わせていた石橋・大石の両君と一緒に過ごすことができたのは私にとってはとても幸運でした。二人の優秀な同級生との切磋琢磨の二年間で、内科医として少しばかりの自信と耐久力を育むことができたことは、その後の私の人生において、大きな財産になったことは間違いないと思っています。

研修医生活を終えて、共に東大病院第三内科（当時、高久史麿教授）に入局。内分泌・代謝学と消化器・肝臓病学と異なる専門分野を選択したことから（＊大石先生は呼吸器病学）、その後の医療界での接点は限定的なものとなりましたが、私にとっては医療者・研究者としての在り方に関して、初期刺激（イニシエーション）を与えてくれた同志の一人として、石橋君には今でも深く感謝しています。約 40 年の時を超えて、また新たな人生を迎えるに当たって、改めてお礼を述べたいと思います。求道者・石橋 俊先生のこれからの益々のご活躍を祈念します。今度、一緒にバーベキューでもしましょう。

石橋 俊先生の後輩として長く接しさせていただいて

国際医療福祉大学 市川病院　　野田 光彦



石橋 俊先生は昭和 57 年の東京大学医学部医学科のご卒業で、私の 2 年先輩にあたる。東京大学第三内科における学兄でもある。

もう三、四十年も前のことになるが、第三内科時代には、医局のカンファレンスなどにおける内分泌代謝疾患についての討議やディスカッションを一手にお引き受けになり、議論をリードしておられたシーンが昨日のように甦る。Carney complex といった当時先駆的であった疾患概念についても言及しておられたことが脳裏に思い起こされる。

石橋先生は英語にご堪能な先生であったとも拝察する。第三内科の医局旅行だったかのバスの中で石橋先生が書物を読んでおられたことがあった。私が、先生が読書中のご本の中身についてお尋ねしたところ、ジャレド・ダイアモンドによる『銃・病原菌・鉄』であったが、驚いたのは、それが英文原著であったことである。すなわち、英語で書かれた“Guns, Germs, and Steel”に熱心に目を落として熟読しておられたのであった。

私は、自治医科大学大宮医療センター（現 さいたま医療センター）に石橋先生より随分先に奉職し、5 年半近くに亘り内分泌代謝疾患の診療を中心に勤務した。その後、石橋先生が内科学講座内分泌代謝学部門の教授としてご着任され、学位審査や同窓会などの機会に、折に触れてお呼びいただき、お目に掛かるチャンスが多くなった。ご厚誼に感謝申し上げる次第である。

先生は、文京区の本駒込に居を構えておられ、まだ私の娘が小さかった頃、わが家から程近い神田明神の祭礼で、ご家族とご一緒にいらしていた石橋先生に、私ども夫婦と娘がばったりお会いしたこともあった。懐かしい思い出である。その娘もすでに二児の母、月日の経過は早い。石橋先生におかれては、今後益々お元気に、是非、先達として私ども後進を、大所高所からご指導いただければ嬉しいかぎりである。この点をお願い申し上げつつ、擱筆する。

東京医科歯科大学病態代謝解析学分野 教授　　畑 裕

自治医科大学での石橋先生の功績を称える記念文集に寄せられる他の方々の原稿とは、この原稿は、だいぶ、文調が異なっていると予測されます。予めお断りします。

私は至って人付き合いにおいて不器用（というよりも無様）、臆病なくせに、時に失礼千万な態度をとる（緊張を強いられる分、億劫になってしまうため）人間で、したがって、世間が狭く、偏屈者とみられているのでないかと思います。そんな私にも心優しく向き合ってくださる有難い（本当に、有難い）友人（とお呼びしてよいですね？）が石橋俊さん（本稿では石橋先生でなく石橋さんと書くことにします）です。

石橋さんとは、学生時代の外来実習でご一緒させて頂いたはずです。石橋、小林の陸上部コンビと、椙村、畑でしたねえ、石橋さん？（実は記憶があやふや）卒後研修でも同じ科で過ごしました。第一内科で一緒でしたねえ、石橋さん？（これは間違いない）小学校や高校の同窓会の席で、あの時、あんなことをした、その時、お前はこんなことを言ったと、微に入り、細に入り、何十年も前の出来事を再現する優れた記憶力の持ち主がいます。ところが、私においては、社会性・社交性欠損の一症状か、人との交流の具体的事実の輪郭が、数年のうちに曖昧となってしまいます。二十代の日々は、霧の彼方に霞み、外来実習や初期研修での石橋さんとの交流に関わるエピソードをビビッドに描出することができません。（残念）そんな私でも、アメリカはDallasのTexas大学、Southwestern Medical Centerに留学した時、Joseph Goldstein先生、Michael Brown先生の教室に在籍していた石橋さんに、空港への出迎えにアパート探しと、種々、お世話になった時期の交流となると、あれこれ思い出せます。特に留学初日の印象は強いのですが（涙が出るほど心細かったので）、その話は別のところに書きましたので、今回は省略します。Dallasでは、何度か石橋家にお邪魔させて頂き、奥様の手料理をご馳走になりましたし、三人のお子様に囲まれた暖かいご家庭に触れて、しみじみ羨ましいと感じました。私はその代わりに日本のテレビ・ドラマのビデオをお貸ししました。鈴木保奈美主演のドラマ「愛という名のもとに」でしたねえ、石橋さん？斉藤由貴主演「女事件記者立花圭子」もお渡ししましたね。さらに、その後は、私の研究室に学生を派遣してくださったり、まだ東大にいた当時の石橋グループで研究発表の機会を頂いたりと、非連続的ながらも、コンスタントに接点をもち、先日も夕食を共にしました。

こうした40年（長い！）余りを振り返るとき、私の中に立ち上がる石橋さんのイメージは、一貫してぶれません。私など昆虫並みに変態したのに、石橋さんの外見はあまり変わっていません。笑いをたたえた目（目じりに少し皺がよっている）と白い歯がのぞく口元（何か言いたそうなのだけれども、あえて言わないことにするよと告げている）。石橋さんの方を向くと、何やら温かい空気が流れてくる感じがします。自治医科大学の教室員の皆様が石橋教授に対してもたれる印象は、もしかすると、全く異なるのかもしれませんが、鷹揚にして長閑、それが私の印象です。稀有な大人（たいじん）と思います。（ちょっと、褒めすぎか？）でも、実際、そのように思うのです。

石橋さん、温泉につかって手足を伸ばす時のように、脱力OKなゆるゆるとした御付き合いを、これからも末永くお願いします。

ひたすら感謝です

東京農工大学 保健管理センター　　原田 賢治

石橋俊教授のご退任・ご退職にあたり、思い出を綴り、感謝を述べさせて頂きます。
私が学生のころ、夏休みの期間に、髙久史麿先生が当時教授をされていた東京大学第三内科のいくつかの研究室を訪問する機会がありました。その際に、矢崎義雄先生が石橋先生をご紹介くださり、第 2 研究室（2 研、村勢敏郎先生の研究室）で一日見学をさせて頂きました。この見学について、石橋先生ご自身は全く覚えていらっしゃらないようですが、私としては、研究室のアットホームな雰囲気が大変に良くて、全く知識のない学生に対して親切にして頂いた、という思いがありました。そのこともあって、大学を卒業して第三内科で研修し、山田信博先生からお誘いを頂いて研究室（2 研・11 研）に入ったのですが、石橋先生は研究室でも病棟でもパワフルに働いておられて、研修医への面倒見も良くて大変に慕われ、入院係をされていたときには同日入退院を駆使して病床稼働率が 100%を超えることもあった、というのは、いかにも石橋先生らしいエピソードと思います。当時の研究室の状況の例えとして、山田先生が店の旦那さん（店主）で、石橋先生が働き者の大番頭さん、そして我々は丁稚どんたち、と言われていました。なお、石橋先生のご自宅に伺う機会があり、ばりばりと研究をする一方で、ご家族も大変大事にされている、ということが印象的でした。その後、石橋先生は、ノーベル賞受賞者であるゴールドスタイン先生とブラウン先生の研究室（テキサス大学）に留学され、ノックアウトマウスとアデノウィルスベクターという最先端の技術による成果を手土産に帰国されました。石橋先生の留学中、石橋先生が担当されていた患者さんの外来を私が担当していたことがありましたが、カルテを緻密に記載されていることに感嘆し、一方で、石橋先生の手書きの文字が、斜めの線がたくさん平行に並んでいるように見えて解読に苦労した、ということもありました。石橋先生が帰国されてしばらくしてから、American Heart Association の大会がダラスで開催され、石橋先生がテキサス大学を訪問される際にご一緒させて頂く機会がありましたが、 ゴールドスタイン先生とブラウン先生が、石橋先生に対して「シュン、いま何をやっているのか、何を見つけたのか」と情報を探るようにずっと問い続けていて、ノーベル賞をとった二人からも石橋先生の活動が注目されていることを感じました。また、私がスタンフォード大学のクレマー先生の研究室に留学することができたのも、石橋先生が紹介してくださったおかげであり、本当に感謝しています。私が留学中におこなっていたことと、石橋先生が当時東大の研究室でされていた仕事を、共同研究ということにして頂いた件も、大変にありがたいことでした。さらに、私が帰国後、東大病院の医療安全の仕事の任期が終了する際に、石橋先生にご相談をして自治医科大学で雇っていただけそうにもなりました。最終的には、永井良三先生から私の今の勤務先である東京農工大学をご紹介頂き、自治医大での勤務のお話はなくなりましたが、困っていた時に何度も救って頂いた、ということについて心より感謝いたしております。石橋先生にはひたすらにお礼を申し上げます。ありがとうございます。

走り続ける Shun 石橋先生へ

東邦大学医療センター佐倉病院　　武城　英明



石橋　俊先生、自治医科大学内科学講座内分泌代謝学部門教授ご退任ご退職を迎えられるとのことお慶び申し上げます。

石橋先生には論文や学会でたいへんお世話になりました。初めてお会いすることのできたのは私が留学から帰って間もないころと思います。留学中、卵を産まない鶏の原因となる LDL 受容体と似ているものの LDL 受容体とは違う卵黄受容体のクローニングを行なっていました。その大きな違いはネガティブフィードバックを起こさないことでしたので、世界の中心ダラスで先頭に立って LDL 受容体の仕事の最先端を走っていらっしゃった”Shun”先生のお話は研究室のボス Schneider 博士よりよくよく拝聴していました。学会で先生からいただける核心のご質問やコメントを楽しみに発表の準備をしたこと、先生のお話を緊張しながら聞いていたことを思い出します。先生はいつも優しい笑顔でお話しされ、また、育った地が思いがけず近くだったこともわかり、それからほぼ 25 年、いろいろ楽しい時間を過ごさせていただきました。エピソードといえばやはり研究班で北　徹先生から大阪大学山下静也先生と3人にいただいた仕事、家族性高コレステロール血症の全国調査でしょうか。まだ個人のパソコンで統計処理するのは容易でなかった頃、私が初歩解析を担当し作った論文案を山積みのフロッピーとともに石橋先生に送ったところ、詳しく解析くださりリスクと合併症を表した図とともに素晴らしい内容にされ、今でもスタチンの普及する前の FH 像としてよく引用される論文とすることができました（JAT 2004;11:146）。その後、いろいろと一緒に仕事をさせていただきましたが、LCAT 欠損症のリポタンパクサブフラクション解析でお力をいただいたところ(ATVB 2014;34:1756)、先生は LCAT の基礎研究（JLR 2020;61:1287）で新たな知見を提唱され、さすが今なお最先端を走り続けていることに感銘し、また昔を思い出しました。ところで、アテネの研究会を覚えていますか。確か、2 泊 4 日の予定で前夜遅く郊外のホテルにチェックインし、私はフロントで勧められたジョギングコースを走り朝食をとりに行くとそこにすでに石橋先生がいらっしゃいました。市街地までのマップを持ちながら観光も含めて走ってこられたとのこと、爽やかに話されていました。その後、新幹線で登山の道具を持った先生にお会いしましたが、今も学会の合間に走っていますか。この度、羽生で新たに実地医療を始められるとのこと、いつまでも私たちのリーダーとして走り続けてください。



アテネのレストランにて

共同研究の思い出

幹細胞制御研究部　　古川　雄祐

私が石橋先生と初めてお会いしたのは、先生が東大から赴任した翌年である 2002 年の夏のことで、当時の学長であられた故・高久史麿先生を顧問として立ち上げた「生活習慣病と明日の医療を考える会」という勉強会の代表世話人への就任のお願いに上がった時でした。先生の第一印象は、物静かで、物事をじっくり論理的に考える学究の徒という感じでした。以来 20 年、その印象は全く変わらず、実際、臨床と研究の両面で素晴らしい学問的業績を残され、自治医科大学に大きな足跡を残されたことは周知のとおりです。

勉強会の方は今にして思えば、教室の基盤形成の一番大事な時期に良くご了承いただけたものと改めて感謝する次第ですが、ご多忙の中、2005 年まで代表をお務めいただき、生活習慣病の臨床と基礎研究を橋渡しするさまざまなテーマで講演会を定期的に開催し、ご出席の先生方に好評をいただきました。

その後、2007 年の秋には、私共が行っていたマウスの造血幹細胞移植の手法を、先生のご専門である動脈硬化の成因解明のプロジェクトに応用するという共同研究がスタートしました。共同研究は順調に進行し、結果は 2009 年に Cell Metabolism 誌に publish されました。研究成果が一流誌に採択されることは研究者として最高の栄誉の1つではありますが、石橋先生は成果よりもデータの正確性や発展性に重きを置いており、研究者のあるべき姿を体現されていると感心したことを今でも思い出します。2005 年に学内で「研究業績評価ワーキンググループ」という ad hoc の委員会が形成され、私と石橋先生もメンバーでしたが、委員会の席で先生が「研究者をインパクト・ファクターのような単純な指標で評価するべきでない」と強調されたことを覚えております。

退官後はお祖父様の医院のあった地で診療に当たられるとのことで、文字どおり原点に戻られて地域医療に大きく貢献されることかと存じます。体調にはくれぐれもご留意の上、益々ご活躍されることを祈念申し上げます。長い間、有難うございました。

石橋教授のお人柄に惹かれました！

市立砺波総合病院　集中治療・災害医療部　　古村　芳樹

私は、医学部 3 年の系統講義を通して、内分泌・代謝内科（より限定すると甲状腺）に興味を持ちました。当時、石橋教授の温厚で物腰の柔らかい雰囲気に魅力を感じていたことも、内分泌がいいなと思ったきっかけとなりました。ぜひ石橋教授のセミナーを受講したいと思い、同期 2 人を誘って、一緒に身体所見について学ぶセミナーを取りました。お忙しい中、私たち学生とディスカッションをして頂いたことが印象的でした。またセミナーを受講した 3 人を、ご自宅にお招きして頂き、お肉を振る舞って頂いたこともとても楽しかったです。その際、私たちが大事な七輪を壊してしまい本当に申し訳ありませんでした（私ではありません笑）。そんな時も穏やで、懐の深さを感じておりました。他にも、フリーコースで私のメンターを担当して頂いて、内分泌・代謝内科での長期的な実習、学会発表、海外研修の機会を与えて下さいました。卒業後は、石橋教授が金沢に学会に来られる際にお声をかけて頂き、お寿司を一緒に食べられたことも嬉しかったです。私事で恐縮ですが、出身の富山県で 9 年勤務（臨床研修 2 年後は、一般内科・総合診療 2 年、救急・ICU2 年、内分泌・代謝内科 2 年、山間部の診療所 1 年）しました。楽しかったこと、心が折れかけたこと色々ありましたが、どこの職場でもスタッフに恵まれ、充実していました。今年度で 9 年間の義務年限が終了となり、2023 年 4 月から甲状腺専門病院の隈病院に入職します。進む道のきっかけを与えてくだり、お世話をして下さいました石橋教授に心より感謝しております。本当にありがとうございます。新天地でもご活躍をお祈り申し上げます。

Ode-to-Shun-Ishibashi

University of Texas Southwestern Medical Center Joachim Herz



Shun Ishibashi and I arrived in Dallas around the same time, in 1989. Both of us were drawn to the Department of Molecular Genetics, where Mike Brown and Joe Goldstein were the vanguards driving the understanding of cholesterol metabolism, lipid transport and atherosclerosis. Shun's goal was to learn everything about the LDL receptor. I, on the other hand, was obsessed with finding out whether my hypothesis that LRP1, a gargantuan cousin of the LDL receptor I had just discovered while working at EMBL in Germany, was indeed the long-sought-after - fabled - chylomicron remnant receptor, whose existence had been postulated by the ground-breaking work of Toru Kita in the same department several years earlier, was indeed correct.

We soon discovered that to succeed in our mutual quests, we needed each other. Only genetics could solve the mysteries that had enthralled us. What both of us needed were knockout mice in which we could study our favorite genes and how they interacted with each other and other metabolic pathways in the liver. So together Shun and I generated the LDL receptor knockout mouse, which remains one of the most indispensable and widely used animal models for drug discovery and preclinical research today. As of the time of this writing, these mice have been used in ~4500 studies by our colleagues all over the world.

But, as is common, yes, almost customary among scientists, Shun and I were not only friends, we were also fiercely competitive with each other. This competitiveness is what at its heart drives science and our knowledge of the natural world. But never did it come out more clearly than during my visit to Japan in 2019. And what a memorable visit it was! I was privileged to see again, not only Shun, but also many others of my old friends from Japan who had passed through our department in Dallas over the last 45 years. Together, they had convinced the committee organizing the meeting of the Japanese Atherosclerosis Society in Kyoto that year that they should invite me as a speaker.

I had a wonderful and unforgettable time in Kyoto in the company of Shun and all our mutual friends, but I had not anticipated what would come next: In a careless moment, I had confided to Shun that one of my dreams in life was to climb Mt. Fuji. Shun wasted no time arranging for my wish to come true. On July 13, 2019, we arrived at the top of Mt. Fuji, as the picture attests.

I leave it to the reader to determine who won…..

PS: To Shun, may fortune be with you, wherever life may lead you next (Your friend in the picture with you)

ランナーの石橋先生、
またホノルルマラソンを一緒に走りましょう！

医療法人南昌江内科クリニック　　南　昌江

ご退官、誠におめでとうございます。また大変お疲れ様でした。
記念誌の 1 ページに加えていただけることを大変感謝いたします。
私は福岡で 1998 年から糖尿病専門クリニックを開業しております。数年前に自治医大で 1 型糖尿病の講演をさせていただきました。その時に石橋先生がランナーだとお聞きし少し驚いた記憶があります。2019 年の 11 月末に石橋先生から突然のメールがあり、私が毎年参加している 12 月のホノルルマラソンに参加されるとのこと！是非とも TDJ（Team　Diabetes　Japan）の T シャツで走ってくださいとお願いしました。はじめ、先生は「おじさんがそんな可愛い T シャツ着るなんて恥ずかしいなあ」と躊躇されていましたが、ホノルルでの懇親会ではすっかり気に入って？いただいたようでした（写真1）。
石橋先生はお名前の通り大変俊足で、ホノルルマラソンでは、途中のハイウェイですれ違いましたが（写真2）、先生のゴールが早すぎてゴール後の写真はご一緒できなかったことが残念でした。
ご退官後はクリニックをご開業されるとのことで、重ねておめでとうございます。さらに精力的に活動される先生の活力の源はランナーの精神からなのでしょうね。少し落ちつかれましたら、またホノルルマラソンをご一緒してくださいね。その日を楽しみに私もランニングを頑張ります。

※TDJ；日本糖尿病協会のマラソンチーム 「糖尿病でもできないことは何もない、という No　Limit！の精神」で、患者さん、ご家族、医療従事者が一緒に走る企画を行っています。





2019 年 Honolulu Marathon、TDJ

東大時代の石橋俊先生との思い出

理化学研究所理事
東京大学大学院医学系研究科卓越教授
宮園　浩平



石橋先生と最初に会ったのは 1976 年の春、私が東大教養課程の2年で、石橋先生が1年生として入学されたばかりのことでした。私は中学生の頃に陸上部に所属していたこともあり、医学部の鉄門陸上部に所属していました。実は私は健康のために走ろうという軽い気持ちでいたので、選手としては全く役に立っていなかったのですが。そのころに入部してこられたのが石橋俊先生や竹内靖博先生（現・虎の門病院副院長）でした。石橋先生は体格も良く、見るからに短・中距離のホープという感じで、これからは大会でも勝てそうだと、先輩部員で大喜びしました。石橋先生は選手として期待に応えられたのはもちろんですが、温厚で優しい方で、鉄門陸上部全体がほっこりした雰囲気になり、部活動が楽しくなりました。

大学卒業後のことで忘れられないのは、私が東大第3内科で研究を始めた頃に、私の研修医時代の指導医だった村勢敏郎先生が、「石橋君が僕のグループに入ってくれることになった」ととても嬉しそうに私に話しかけられたことでした。石橋先生が入局された後は村勢先生のご配慮で、私も石橋先生と一緒に細胞の培養をやったりして短い期間でしたが大変楽しい時間を過ごしました。村勢先生と山田信博先生のグループは脂質代謝や動脈硬化の研究では大変有名でしたが、当時はまだ小さなグループでした。石橋先生が加わられた後の村勢・山田グループの発展をみると、石橋先生の入局とその後の貢献が大きな転機だったのでは、と思い返しています。

石橋先生は自治医科大学を退任後はお祖父様の故郷に戻られクリニックを開院して臨床を続けられると伺いました。石橋先生は学生時代から物事をしっかりと丁寧に考えられる性格で、健康面でもさまざまなことに気を配られる方でした。医院の理念の最初に「心のこもった医療」とあるのを読み、先生らしいなと嬉しくなりました。石橋先生の今後のご発展を心より祈念いたします。

石橋 俊教授 退任記念： 今後のご発展を期待して

公益財団法人 冲中記念成人病研究所　　村勢 敏郎

この度は、石橋君が大学人として無事に責務を果たし終え、自治医科大学を退任なさる運びになったとの由、長い間ご苦労様でした。

石橋君は、私が留学から帰国して東京大学の旧第 3 内科に脂質研究グループを立ち上げて間もない頃に入局し、2～3 年後には今度は私が虎の門病院に移って、結局一緒に研究ができた期間は僅か 2～3 年間ほどでした。石橋君、その頃よく研究していましたね！ 仕事は早い！君は入局するとすぐに前向きに研究開始、まずは各種疾患の脂質代謝異常について、ということで “Sheehan‘s syndrome” に目を付けて症例を纏め、あっという間に論文に仕上げてしまったのですから立派でした。（論文は： Ishibashi S et al. Hyperlipidaemia in patients with hypopituitarism. Acta Endocrinol. 110: 61, 1985）。

その頃のこと覚えておられますか？ 本郷に残された若い人たちは互いに切磋琢磨して、元気に頑張っていただろうと思います。石橋君はまさにその筆頭、2001 年に自治医大に奉職するまでグループのまとめ役だったのだろうとおもいます。

そういえば、石橋君と一度対談をしたことがありましたね。あれも懐かしい思い出です。（ ‘The Lipid Vol 19, No3, 2008-7）（日本語です）

石橋君、ところで、退職後の生活設計はもう出来ていますね？ 開業準備中との由、それを聞いてほっとしました。仕事始めにあたっては、まだまだ“Sheehan‘s syndrome”にもご注意あれ！です。今からちょうど半世紀前、私が駆け出しの頃にも同じような経験をしていますから： Murase T, et al.: A survival case of myxedema coma of pituitary origin. Endocrinol Japon. 21:331, 1973。

最後に、小生が80歳の時に経験した症例、“Case report”です。お読みいただければ幸いとここに提示させていただきました。これを契機に患者さんとのコンタクトが急によくなりました。 論文は Murase T et al. Biphasic dyslipidemia in a patient with painless thyroiditis. J Clin Lipidol (2018) 12, (1367 -1370).

石橋君，新しい環境の中で、興味ある症例をどんどん発掘して下さい。

君の新しい人生が実り豊かなものでありますように！

自治医科大学からは これまでに大学院講義，学生講義等々で、しばしば講演する機会を頂き、とても光栄に存じており、ここに深く感謝申し上げる次第です。



2006 年弘前での糖尿病合併症学会終了後、
白神山地マザーツリーへの道すがら

動脈硬化研究の流れの中で

とちぎメディカルセンター　名誉院長　　村野　俊一

私は 1975 年に千葉大学の医学部を卒業しました。学生時代から老化の研究を志し、熊谷朗教授の主催する母校の第2内科に入局し、臨床研修終了後、齋藤康先生が立ち上げた脂質代謝研究室に入れていただきました。当時は米国での Framingham study などから動脈硬化が癌と並んで医学研究の 2 大ターゲットとなった時代です。日本動脈硬化学会が設立され、この学会を基点に精力的な動脈硬化、脂質代謝の研究が始まりました。石橋先生の東京大学でも板倉弘重先生、村勢敏郎先生、内藤周幸先生、寺本民生先生などが参加されました。私も過酸化脂質の研究課題をいただいて研究を始め、初めての学会発表は動脈硬化学会でした。米国ではノーベル生理学・医学賞を受賞した Goldstein, Brown 両先生が LDL 受容体の研究を精力的に進めており、そこに京都大学の北徹先生、続いて石橋先生が留学されました。その研究室はテキサス州ダラスにあり、丁度その時期、私も隣のアーカンソー州リトルロックに留学して、遺伝性早老症、Werner 症候群の分子・遺伝学研究に取り組んでいました。リトルロックからダラスまでは車で7時間あまりなので、何回かお鮨を食べる目的でダラスに行きましたので、ひょっとすると石橋先生にはそんなところですれ違っていたかもしれません。千葉大学では熊谷教授の後任に自治医大の教授であった吉田尚先生が就任され、ご指導、ご薫陶をいただきました。石橋先生が自治医大の教授にご就任が決まった時、私も秋田大学老年科の助教授から栃木の JA 下都賀総合病院の副院長への転任が決まり、何かの会合の後に皇居近くの路上でお会いして、ご挨拶させていただいたことを思い出します。その後、2002 年に石橋先生を中心に栃木脂質代謝研究会を立ち上げることになり、第1回の講演会には筑波大学の教授になられていた山田信博先生、齋藤康先生、寺本民生先生、川上正舒先生と錚々たる先生方が記念講演を引き受けてくださり、石橋先生と私がパネルディカッションの司会をさせていただきました。この研究会は現在まで脈々と続いており、栃木県の脂質代謝、動脈硬化診療の進歩に多大な貢献を続けています。脂質代謝や糖尿病関連の講演会がある度に石橋先生とは親しくお話させていただき、学問以外にも趣味の城跡歩きや加藤周一先生の著作のお話などを聞かせていただいたことを楽しく思い起こします。私はその後、JA 栃木厚生連下都賀総合病院の病院長職に就きましたが、臨床研修制度改変の大波をかぶり、千葉大学からの医師派遣が難しくなった時に、佐藤（齋藤）奈緒子先生、次いで若林徹治先生と大変優秀な先生方をご派遣いただいて糖尿病、高脂血症、内分泌診療を支えていただいたことには心から感謝をしております。栃木市内の 3 病院を統合してとちぎメディカルセンターを設立するに際しては、獨協医科大学内分泌・代謝内科の笠井喜久男教授、後任の麻生好正教授とも快く協力してご支援をいただき、自治医大、獨協医大が協力して運営するとちぎメディカルセンターが誕生しました。私の今日あるのは先生方のお蔭であると心から感謝申し上げております。石橋先生が大学を離れられることは大変寂しく感じますが、今後お仕事の場を変えられて、ますますのご活躍を期待しております。

石橋俊先生との思い出

京都大学大学院理学研究科　　森　和俊

私が石橋先生に初めてお会いしたのは米国テキサス大学サウスウェスタンメディカルセンター（ダラス）留学中であった。石橋先生は 1989 年 11 月～1994 年 2 月、私は 1989 年 4 月～1993 年 9 月とほぼ重なっていた。ダラスにいた日本人研究者は多からず少なからず、ちょうど良かった。年に1回家族も含めてほぼ全員が参加する BBQ パーティが開かれていたし、休日に一緒にゴルフするグループや土曜日夕方に一緒にテニスをするグループなどがあり、アパートに集まって飲み会をすることもあった。

石橋先生が所属していた Brown & Goldstein の研究室は指導が厳しいことでよく知られていた。私にとって一番印象的だったことは、ある土曜日の夜の出来事であった。日本人研究者何人かが家族と共にある方のアパート（石橋先生宅だったような気がしている）に集まり夕食を共にしていたら、石橋先生が突然「これから大学に行ってくる。今日何々の実験をしておいたら来週の実験が楽になるから」と言って出かけられた。石橋先生は下戸なので飲酒運転にはならないのだが、凄いなあと感心した。私も実験好きだったが、酒好きでもあったのでそんな真似は到底できなかった。

日本では、サウスウェスタンメディカルセンターに留学した研究者が集まるダラス会が4年に1回開かれていたが（日本医学会総会に合わせて）、私は参加していなかった。ある年、石橋先生が幹事を務めるというのでその会には参加すると返事をした。そのダラス会が開かれるのは、2011 年 3 月下旬の予定であったが、その直前に東日本大震災が発生し、お流れとなった。

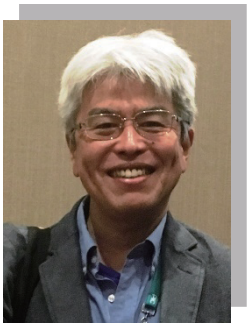
石橋先生が自治医科大学教授になられた後、2010 年 1 月と 2019 年 12 月の2回、セミナーに招いていただいた。最善を尽くしたつもりだったが、石橋先生の研究のお役に立てたかについては心許ない。自分の研究で精一杯で、共同研究もさせていただけなかった。心残りである。

2021 年に学会で京都に来られた際に、石橋ご夫妻と私共2人で夕食を共にして、楽しいひと時を過ごさせていただいた。感謝申し上げると共に、石橋先生の第2の人生に幸あれとお祈り申し上げる。



2019 年 12 月 16 日　大学院特別講義

正直者の頭に神宿る



住友商事株式会社・住友商事診療所・所長　　森澤　雄司

石橋俊先生の御退官に際し、僭越ながら一言、御挨拶を申し上げます。

振り返りますと、不肖私、石橋先生とは、東京大学医学部附属病院以来、実に長いお付き合いになっています。もともと石橋先生が第 3 内科、私は第 1 内科といわゆる医局が違っていたのですが、東大病院で 1998 年に内科学講座の臓器別再編成があり、そこから御縁をいただいております。再編成の少し前に木村哲先生（現・東京医療保健大学名誉学長）が感染制御部・感染症内科の教授として着任され、私は感染制御部・助手に拾っていただき、感染症診療を続けていました。その再編期に教授が不在であったという事情もあり、感染症内科と糖尿病代謝内科が木村哲先生の下で単一の医局として運営されることになりました。そして、今から考えると不思議にも思いますが、感染症内科と糖尿病代謝内科は合同で教授回診を実施することになり、ということで毎週 1 回はチャートラウンドおよび病棟回診で石橋先生と御一緒することになったのでした。

当時は若気の至り、自分の担当症例でなくても平気で‘つっこむ’戦闘モードを常としていました私は、当然のように糖尿病代謝内科の症例にも“この抗菌薬はないでしょう”とかウザく突っ込んでいた訳ですが、そんな中、（不肖私の勘違いかもしれませんが）石橋先生は嫌がられることなく、むしろ楽しそうにこちらのコメントを聞いて下さっていたように思います。

その後、石橋先生は 2001 年に自治医科大学に教授として赴任され、私も遅れて 2004 年に感染制御部長として着任しました。感染症科の立ち上げや臨床栄養部の運営などで大変に御世話になりました。そんなある日、いつだったか石橋先生がすれ違いざま、”モリサワくん、HFpEF って知ってる？”とおっしゃられたので“えっ、EF の保たれた心不全ですよね”とお答えしたところ、”なんだ、知ってるのか、つまらん。ところでそれって常識？”と少年のような瞳でおっしゃられたのが忘れられません。内科学講座の教授でありながら、何と飾らない態度でしょうか。一方、新型コロナ流行の中でも、日々の対応に右往左往するばかりの私とは違い、COVID-19 症例におけるマクロファージの脂質代謝物について論文をまとめられ、その中で不肖私も末席に加えていただきました。’真の科学者とは知らないことを知らないと明言できる者のことだ’という言葉は石橋先生のためにあるような気がしていましたが、その思いを一層に強くしました。真の臨床家もそうなのでしょう。

たまたま石橋先生が退官されるのに先立って私も自治医科大学を離れることになりました。このことからも勝手ながら浅からぬ御縁を感じています。石橋先生、これからもどうぞ御健勝で一層に御活躍くださいますように衷心よりお祈り申し上げております。

（前・自治医科大学附属病院・感染制御部長・感染症科（兼任）科長）

山紫水明の人、石橋俊先生

関西電力医学研究所　統合生理学研究センター長
岐阜大学糖尿病内分泌代謝内科　招へい教授
矢田　俊彦



医学部、病院は、良きにつけ悪しきにつけ、 社会と向き合っており、日常に振舞わされる。石橋先生はそれをこなしつつ、それに埋没せず、迎合せず、常にご自身の思いで歩まれた。

私は2000年に自治医大に着任したが、石橋教授は1年後の2001年に着任され、すぐに私を訪ねてくださった。その時、はじめてお目にかかったが、共通の趣味である登山の話になったことを鮮明に覚えている。その後17年間、大学、大学院の仕事から共同研究まで、多くの作業を共同でさせていただいた。その際、石橋教授以外からは聞けないコメントやご意見を度々いただいた。しがらみやポリティックスに左右されず、原点に立ち返ること、プュアーな視点を示して下さった。先生が大切と思われていることから発していたのだと思う。その点で、山の言葉で表現すると、先生は「山紫水明」の人である。先生が定年退職後、出身のさいたまの田舎でクリニックを始められると伺った時、先生らしいと思った。いろいろな選択肢のうちから、そこに、ご自身の納得のいく活動を感じられたのだと思う。

長年、自治医大でのご奉仕お疲れ様でした。公私にわたりお世話になり有り難うございました。今、自治医大を登頂・下山され、次の峰をめざす石橋先生、地域の方の心身の霧を晴らすお働きに幸あれ！最後に、イギリスの冒険家、ベア・グリルスの言葉を贈ります―良い登山とは、野心や誇りではなく心や本能で登ることだ―。



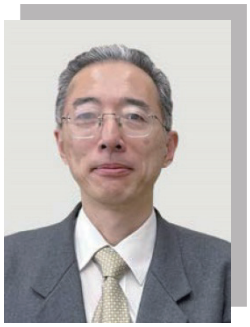
2008 年 6 月 30 日　セミナー終了後の懇親会



2007 年 3 月 7 日　セミナー終了後の懇親会

石橋俊先生との出会い

自治医科大学 内科学講座 内分泌代謝学部門 教授　　矢作 直也



石橋俊先生、この度は定年ご退官、誠におめでとうございます。また、長い間、大変ご苦労さまでした。22 年もの長きに渡るご貢献は前人未到の偉大な記録であり、おそらく今後も塗り替えられることはないように思われます。本学の歴史に不滅の足跡を残されましたことに深い敬意を表したく存じます。

石橋先生は、小生にとりまして、故・山田信博先生とともに内分泌代謝学の道へ誘って頂き、また最初の手ほどきを施してくださいました恩師です。最初の出会いは1994 年頃のことですので、当時まだ36 歳のお若さだったことになりますが、当時すでに大教授の風格を備えておられました。米国留学から戻られて間もない頃で、世界最先端の分子生物学と発生工学をノーベル賞ラボ(ゴールドスタイン・ブラウン博士研究室)から持ち帰られ、我々に教えて下さった伝道師でした。当時は分子生物学全体が急速に発展しつつあり、かつまた医学分野に強烈なインパクトを与え、molecular biology が game changer になった時代でしたが、まさにその最先端で game change を自ら行っていたスーパースターのお一人であり、そのような世界に強い憧れを抱き入門させて頂きました。

そんな、まさに新進気鋭の若きスター研究者だった石橋先生ですが、実は自分が一番最初に出会わせて頂いた場面は、確か、旧第 3 内科の深夜の病棟だったと記憶しています。1 年目の研修医に成り立ての頃で、文字通り右も左もわからず、点滴の指示書なども見よう見まねで書き方を教わっていた時分に、北病棟に入院していた患者さんの病状が未明に悪化し、どうしてよいかわからず、たまたま病棟当直をされていた石橋先生にご相談申し上げたところ、とても丁寧に診てくださって、その上、優しくご指導頂き、本当に救われたことがございました。あの頃の 3 内の病棟というのは大講座(大内科)でしたので、血液疾患から呼吸器や循環器、消化器疾患などすべての内科疾患を受け持っていましたし、また今のように HCU などもなく、人工呼吸器管理なども一般病棟で行っていて、その上、1 年目の研修医が少なくとも形の上では主治医として診療に当たるという過酷な環境でしたので、自分などは毎日、戦場にいるかのような極度の緊張感に包まれ、生きた心地もしない日々でしたが、そんな中で石橋先生の優しさ、お人柄に触れることが出来、文字通り、救われました。

そして大学院に進学後、本格的に石橋先生に研究のご指導を頂くようになり、先生が自治医科大学へ赴任される2001 年頃まで集中的に脂質代謝学を学ばせて頂きました。この頃は駒込のご自宅にも度々お邪魔させて頂いたり、医局野球などでご一緒させて頂いたのもよい思い出です。その後も今日に至るまで、大所高所からご指導を賜って参りました。そうして授けて頂いた学問が今の自分の礎となっていることは言うまでもありません。この度、たまたまのめぐり合わせで、恐れ多くも先生の後任として着任させて頂くことになり、身の引き締まる思いですが、先生を北極星のように道しるべとして仰ぎ見ながら、これからも進んで行かれたらと気持ちを新たにしております。

石橋俊先生、これまで長年に渡り、公私共に大変お世話になり、本当にありがとうございました。今後の益々のご活躍と御家族皆様のご健勝を祈念申し上げます。



東大病院医局対抗野球大会、荒川土手グラウンド

石橋俊教授のご退任にあたって

東京大学大学院医学系研究科　糖尿病・代謝内科　教授　　山内　敏正



石橋俊先生、自治医科大学内分泌代謝学部門教授のご退任、誠におめでとうございます。

思い起こしますと、石橋先生のお名前を知ることとなりましたのは、やはり何と申しましてもその研究業績の素晴らしさでございました。山田信博先生の研究室における LPL や ApoE と VLDL の代謝の関係を明らかにされる素晴らしい研究業績を引っ提げて、世界の Goldstein JL & Brown MS 研究室にご留学され、家族性高コレステロール血症の原因となる LDLR の個体レベルでの機能に関して、ノックアウトマウスを作製されて証明されたのは石橋先生である、と諸先輩方から伝説の先生として教えていただきました。

ご帰国後も「原発性高脂血症に関する調査研究班」の研究代表者を務められる等、患者さんの為に、研究と臨床の橋渡しにもご尽力賜り、タンジール病等が難病指定される上でも大きなご貢献をされました。

研究・臨床のみならず、教育にも大変ご熱心で、情熱的に後輩をモチベートしていただきました。糖尿病・代謝内科の会等で、予防の大切さをお話いただいたのが大変印象的でした。「名医はすでに生じた病気を治すのではなく、未病の内に治す」と紀元前の中国の「黄帝内経」の話でディスカッションさせていただき、感銘を受けました。2018 年 7 月に私山内が東京大学の糖尿病・代謝内科の教授に就任して後も、母校の出身教室のことを気にかけて下さり、研究会の世話人会や懇親会で、毎回のように、グローバルな視点を忘れないこと等、見識高く将来を見渡すご高説を賜りました。新人を勧誘して、若手を育成することの大切さも繰り返し、ご指導・ご教示いただきました。2019 年度より来年度 2023 年度まで、毎年 10 名以上の新人が、東京大学の糖尿病・代謝内科の専攻医として専門医研修をはじめていることをご報告することが出来、石橋先生の教えを少しは実践出来て良かったと私自身もほんの少しホッとしましたが、石橋先生も少し安心されたご様子であったことをとても嬉しく感じました。

石橋先生は、特に陸上部の後輩等にも大変良くしていただいており、現在の教室員の中にもそのご恩を胸に刻んで頑張っている者がおりますこと、本当に有難く心より御礼申し上げます。

この様に、石橋先生から多くのご指導を賜りまして、私は今感謝と御礼の気持ちでいっぱいでございます。石橋先生の自治医科大学内分泌代謝学部門、ならびに東京大学医学部・大学院医学系研究科における長年のご功績に感謝申し上げ、心より教授ご退任のお祝いを申し上げます。

石橋　俊先生との思い出

地方独立行政法人りんくう総合医療センター　理事長　　山下　静也



石橋　俊教授と初めてお会いしたのは、日本動脈硬化学会学術集会ではなかったでしょうか？その頃は故山田信博先生のもとで、リポ蛋白リパーゼや細胞内コレステロールの調節を行うACATやNCEHの研究を精力的にされており、Goldstein & Brown教授のところに留学されました。ご帰国後は自治医科大学の教授として赴任され、特に原発性高脂血症研究班の班長をされていましたので、大変お世話になりました。その際に原発性高脂血症（脂質異常症）の全国の症例登録（PROLIPID研究）を企画立案され、それが現在も登録が続いています。一方、全国レベルの講演会では動脈硬化UPDATEやAtherosclerosis & Biolipidカンファレンスで、世話人の1人としていつも会の企画や運営でご一緒させて頂きましたし、全国の家族性高コレステロール血症の調査研究班（FAME）では運営委員として一緒に頑張り、英文論文を3つ発表することができました。また、選択的PPARαモジュレーターであるペマフィブラートの開発に関しても共同研究メンバーに入れて頂き、国内での多くの臨床試験の企画や学会・論文発表を一緒にさせて頂き、現在も多くの論文投稿の準備をさせて頂いています。石橋教授は大学時代に陸上部であったそうで、よく山登りをされ、特に日本百名山を制覇されたことを大変喜んでおられました。今はまた次の百名山制覇を実行されているのではないでしょうか？　日本動脈硬化学会では釣り好きが多く、よく皆で集まって全国各地で船釣りを楽しみ、釣った魚はバーベキューで一緒に食べ、飲みながらワイワイ楽しく宴会をやっていたことが懐かしく思い出されます。最近ではコロナ禍で釣りには行けなくなっていますが、またご一緒させて頂きたいものです。今回、自治医科大学を御退官され、開業医としての新しい人生を歩まれるそうですが、大学時代とは違った楽しさがあると思いますので、思う存分エンジョイして研究も続けて頂きたいと思います。石橋　俊先生の今後のご健勝とご活躍を心より祈念申し上げます。

石橋俊教授のご退官に添えて

群馬大学大学院　内分泌代謝内科学　　山田　正信

石橋先生、長年にわたる教授の重責を果たされここに無事にご退官を迎えられましたことを心からお祝い申し上げます。

私は日本内分泌学会や各種研究会などで先生には大変お世話になりました。先生は脂質代謝系をご専門とされ、私は脂質系で疑問があるといつも先生にうかがって、その度に丁寧にご教授いただき大変感謝しております。

また、先生は日本内分泌学会において第13回の関東甲信越支部会を宇都宮で2012年の12月に開催され、多くの参加者を集められました。その際今でも大変残念に思っているのが、市民公開講座で芸能人の菊池桃子さんといっしょに講演をご依頼頂いたのですが、私の都合があわずかなわなかった事です。後でお聞きしたのですが、菊池さんといっしょにお食事の機会があったとお聞きして、今でもテレビで菊池桃子さんを観るとこの市民公開講座の事を思い出します。

また、研究会では北関東糖尿病研究会を自治医科大学、群馬大学、筑波大学、獨協医科大学の内分泌代謝学教室の先生方と毎年開催していたのですが、この会では、各大学から最新の研究成果が発表され賞を競いあっていました。石橋先生のご教室からは、最近では Valosin-containing protein についてなどいつも非常に質の高いご研究成果が発表され、当科教室員も毎回刺激を受けていました。

私も同時期に群馬大学を退官いたしましますが、先生も健康にはくれぐれもご留意され、益々のご活躍を祈念しております。

本当に長い間お世話になりありがとうございました。

石橋　俊　先生のご退職に際して

山本　徳男

石橋先生とは、ブラウンとゴールドスタインの研究室での同窓生として、長いお付き合いをさせていただきました。私の印象では、先生とのお話よりも、奥様とのお話により楽しい時間を費やしたように思います。

今から遥か昔の話ですが、モントレーで行われたブラウンとゴールドスタインの何十周年のパートナーシップの集まりの際、講演に少々飽きた私はロビーに出ました。そこでお会いした奥様とお話しさせていただきましたが、私のとりとめのない話にもかかわらず、奥様は全く迷惑そうな表情を見せず、丁寧に耳を傾けてくださいました。石橋先生は、恐妻家として知られていますが、実は奥様が寛容で、スケールが大きすぎて、そのような話になっているのではないかと、理解できるようになりました。

最近、自治医大を退職され、羽生にクリニックを開業されたと伺いました。羽生の住民の方々は、優れたホームドクターを得たと言えます。地方において、石橋先生のような名医に診てもらう機会は皆無で、先生は貴重な存在となることでしょう。一見クリティカルに見える部分もある石橋先生ですが、それは実際には物事を客観的に捉えているからこその印象かもしれません。羽生の人々は得難い名医に恵まれたと言えるでしょう。

私たちは、石橋先生が故・山田信博先生の学生として始まりましたが、山田先生が突然お亡くなりになった後、先生がその代わりのように感じられることがしばしばあります。やはり、山田先生の薫陶を受けた影響は大きく、山田色をしっかりと受け継いでいらっしゃるためではないかと思われます。

この限られた時間とスペースでは石橋先生を十分に語るには短すぎます。ダラスでのこと、デイビットとのこと、サイエンスのこと、石橋先生ともっと、時間を取って、話ができたら、面白いだろうと感じるこの頃です。

どうかお身体に留意され、幸せな第二の人生をお過ごしくださることを、心よりお祈り申し上げます。



2015 年　ダラス会、京都にて

石橋俊先生の教授ご退任に寄せて

国立大学法人 千葉大学長　横手 幸太郎

石橋俊先生の教授ご退任にあたり、心よりお祝いと感謝を申し上げます。

石橋先生は、同じ高校の先輩であるとともに、それぞれの師である山田信博先生と齋藤康先生が親しい間柄でもあったことから、長らく様々な場面で大変お世話になりました。動脈硬化学会や糖尿病学会をはじめ、かつて多く開催されていた研究会などでも、学術面はもとより、その後の懇親の場において楽しく交流させていただきました。

特に印象深い思い出は、石橋先生が主催された学会の市民公開講座で、私の大学の友人である作家の海堂尊氏およびタレントの菊池桃子さんとご一緒させていただいたことです。その後、銀座の高級すし店で石橋先生ご夫妻を交えて慰労会を開いていただきました（写真）。今でも海堂氏とお会いするたびに、その時の出来事が話題に上がります。

石橋先生の素晴らしい研究業績については、私が述べるまでもありませんが、その背景にある研究に対する真摯なご姿勢には、学会や研究会でのご発言、共著論文の作成過程におけるコメントを通じて、常に感銘を受けていました。また、必要なこととそうでないことを的確に仕分けるそのメリハリのつけ方には、学ばせていただくことが多々ありました。

大学でのご定年とともに、それまで全力を投じられていた研究活動から離れ、地域医療に転じられたというご決断も、まさに石橋先生らしいと感じています。大学とは異なる新たな生活を楽しまれていることと思いますが、くれぐれもご健康に留意され、第二の人生においても益々のご活躍を祈念申し上げます。



2012 年内分泌学会地方会市民公開講座準備会：菊池桃子さん・海堂尊氏らと

石橋俊先生の御退任に寄せて

一般財団法人　京都予防医学センター、京都大学名誉教授　　横出　正之

石橋俊先生

このたびは教授御退任誠におめでとうございます。23 年間にわたり教室の教育、診療、研究に務められこの日を迎えられたこと心よりお慶び申し上げます。

先生との出会いは米国テキサス州ダラスの UT Southwestern Medical Center の分子遺伝学教室で共に学んだことに始まります。教室は Brown、Goldstein 両教授の厳しい指導で有名でしたが、先生は文字通り早朝から深夜まで休む日もなく研究に没頭されていたことが今でも鮮明に思い出されます。その成果は LDL 受容体ノックアウトマウスの作出として結実し、今なお世界中の研究に広く貢献しているところです。先生はその後 1994 年に東京大学に帰学されましたが、その頃京都大学に戻っておりました私も研究会などでご一緒する機会が増えました。先生は 2001 年からは自治医科大学に教授として着任され、内分泌代謝学部門で数多くの後進の先生方を育てられますが、その間ライフワークとされたマクロファージと動脈硬化との関連に関する研究に加え、臨床医学分野では厚生労働省原発性高脂血症調査研究斑長として、わが国の原発性高脂血症の診断、治療の研究を精力的に率いられました。このような研究への取り組みから第 22 回日本動脈硬化学会賞を受賞されたことは、先生の永年にわたるご尽力の賜物と存じます。

傑出した研究者である一方で、先生は心優しい思いやりにあふれた方でした。休日に家族同士で郊外に一緒に行ったことが懐かしく思い出されます。子供たちと地平線を眺めながらのお弁当など、そのときは研究室とはうって変わって、ご家族を暖かく見守られる先生の姿がありました。

退官後はお祖父様が開業された地で地域医療に取り組まれるとうかがいました。優しいお人柄の先生が最善最新の医療を展開されることは、地域の方々にとっては本当に心強いと信じてやみません。

これからは是非ともお身体を大切にされ、新しい目標に向かって進まれますようお祈り致しまして、私のご挨拶とさせて頂きます。



1990 年頃ダラスでのパーティー、Bob Hammer. Kay らと

石橋俊先生へ

中部大学応用生物学部 客員教授　　横山　信治

石橋俊先生が定年退職されると伺い、思わず「まさか」と思ってしまいました。まだまだお若いと思っていた方々がそういう年齢に達していると云うことで、とりもなおさずいつの間にか喜寿をすぎてしまった自らの年齢を否応なく自覚させられることばかりです。

卒業年次に 10 年の開きがあり、若い頃スピンアウトして長年海外で過ごしてしまった私にとっては、長く自治医大の内分泌代謝内科をあずかり臨床や研究に多くの成果を積み上げてこられたことを知らないはずはないのに、失礼極まりないとは分かっていても、石橋先生にはいつまで経っても「東大第三内科の若手のホープ」としてのイメージがつきまといます。しかし、人生百年時代とは冗談でも誇張でもなく現実のことです。聞けば、先生は開業という新しい人生に挑まれるとか。なんとうらやましいことかと、他人事ながら胸躍らせる思いがいたします。

私の高校時代にKという尊敬すべき友人がおりました。今は昔となった60年安保闘争の余韻は地方の県立高校にも残っていた頃のことです。K は怒っていました。世のあらゆる不正義不公正不条理に怒り、時には学校やクラスメートの手に負えない有様でした。そして彼は思うところあってか医学部に進み、私もたまたま同じ道をとることになりました。時は 1960 年代後半、医学部激動の時代です。遠く離れた進学先で我々はそれぞれ時代の中で学生生活を送り医師となってゆきました。K は大学や研修先で抱腹絶倒の武勇伝を数々のこしながら若くして開業、岐阜県の農村で地域医療のみちに飛び込んでゆきました。私はといえば国内外を転戦する暮らしを送り、50 を過ぎて名古屋の大学に落ち着いてから、また K との交流が始まりました。しかし彼の世の不条理に対する怒りが彼を酒に向かわせてしまい、それは既に健康を蝕んでいたのです。K が入退院を繰り返す中で、大学勤務の合間を縫って私は彼の患者さん達を他院へ紹介する仕事を手伝うことにしました。しかし、彼らの多くが「K 先生を見限ってよそへ行くことなどできん、先生が帰ってくるまで医者にはかからん」と私を困惑閉口させたものです。私は、これだけでも彼の人生は報われたと思いました。中途半端な大学生活を送ってしまっていた自らを省み、それぞれに限られた時間をどう生きるべきだったのか、残された時間をどう使うか、突きつけられた思いをしたものです。

K か逝ってから既に十数年、結局私はそのまま中途半端に人生を終えることになりそうです。石橋先生がご退職後に開業の道を選ばれたと伺い、K のことを思い出し、先生のこれから踏み出される新しい天地になんともいえぬ羨ましさを感じる次第です。それは自らが社会に存在する意味に直接の手応えを感じる道であるとともに、世の不正義不公正不条理にも日夜直接曝されることでもあります。石橋先生が踏み出される新しい道に心からの応援エールを送りたいと思います。

記　念　寄　稿

―大学他部門在籍者―

※50 音順とさせていただきましたが、編集の都合上前後しておりますこと、ご了承願います。



三俣蓮華岳付近から望む槍・穂高連峰

槍ヶ岳 3180m２回登頂、奥穂高岳 3190m ８回以上登頂

石橋俊教授の退任を祝す

自治医科大学　学長　　永井　良三

石橋俊教授のご退任にあたり、ご挨拶を申し上げます。石橋教授は、昭和 57（1982）年に東京大学医学部を卒業、内科研修の後、東京大学第三内科に入局されました。第三内科では、脂質代謝グループに属され内分泌代謝内科学を中心に研鑽を積まれました。平成元（1989）年に米国 University of Texas Southwestern Medical Center at Dallas に留学、ノーベル賞学者である Brown 博士と Goldstein 博士のもとで分子代謝学の研究に従事され、帰国後は、糖尿病代謝内科講師を経て、平成 13 年（2001）年 6 月に自治医科大学内科学講座内分泌代謝内科部門教授に就任されました。

石橋教授は脂質代謝学を軸として、基礎から臨床まで幅広く内科学を修められ、とくに脂質代謝異常と深いかかわりをもつ動脈硬化学の第一人者としても活躍されています。今年7月には、宇都宮市で日本動脈硬化学会学術集会を主宰される予定で、先生ご自身の学術の集大成をお聞きできることを楽しみにしております。

自治医科大学病院では、内分泌代謝疾患全体の診療に加えて、平成 21（2009）年からは、糖尿病センター長として、地域の糖尿病ケアを牽引されました。また平成 24(2012)年からは臨床栄養部長として、栄養指導や給食にも尽力してこられました。

石橋先生のご研究は、留学中に LDL 受容体や ApoE 蛋白の遺伝子欠損マウスを用いて LDL 蛋白のクリアランスの仕組みを明らかにするなど、一貫して分子遺伝学の手法を駆使し、代謝疾患の病態に焦点を当てています。東大の助手時代、先生は地道に努力され、心から研究を楽しんでおられる様子でした。その姿勢は、本学でも一貫して変わらなかったと思います。

最近、日本の研究力の低下が懸念されています。2000 年頃から留学する研究者が減り、日本から発表される論文数や、トップ 1%の引用論文の数も大きく減少しています。しかしいかに多忙であっても、知的好奇心をもち、それぞれの場で可能な研究を推進することは大学人の務めです。石橋先生が示されてきた研究に対する姿勢、とくに研究を楽しむ心の大切さを、次の世代が継承していただければと思います。

石橋先生はご退任後、羽生市で地域医療の一線に立たれます。研究の真髄を極められた先生が、これまでのご経験を活かして取り組まれると、従来の地域医療とは異なる独自の展開をなされるのではないかと期待しております。健康に気を付けられて、益々ご発展されますようお祈り申し上げます。

石橋教授ご退任に寄せて

自治医科大学副学長・皮膚科学講座教授　大槻　マミ太郎

石橋先生、ご退任おめでとうございます。石橋先生とは東大の病棟医長時代からのおつき合いで、私は3年早く自治医大に（助教授として）赴いたのですが、教授として赴任されたのは石橋先生の方が3年先でした。自治医大では、石橋先生が尽力されてきた糖尿病センター合同カンファランスで皮膚科との連携の話題や特別講演も取り入れていただき、心より感謝申し上げます。

誰に対しても歯に衣着せぬ石橋先生のツッコミは、私には真似できない直球、ときに剛速球でした。また、石橋先生は研究がお好きなイメージでしたが、日常の多忙な外来において、多くの患者さんの中から貴重な症例を発掘される名人だったともうかがっています。臨床的にも卓越した能力をお持ちだった石橋先生は、自治医大の宝であったと確信しています。

副学長としてもっともっと支援したかった気持ちもありますが、至らぬ点はご退任を機にご海容いただき、今後もなお後進の指導、医学の進歩にご尽力いただければ幸いです。

どうかお健やかに！

感恩報謝

外来看護師　　新井　茉美

石橋先生、ご退官おめでとうございます。

19 年前、私が就職した時には石橋先生は内分泌代謝科の教授でおられました。私自身は途中で循環器の病棟で仕事をした時期もありましたが、延べ 10 年くらい石橋先生にお世話になりました。

内分泌代謝科の病棟で働いていた頃は、医局旅行や歓送迎会、お花見など様々な行事に参加させていただきました。たくさんの「あの頃は若かったな」と思える思い出が回想されます。

糖尿病看護認定看護師になり外来で働き出してからも、不慣れな私にたくさんの支援をいただきました。また、外来や糖尿病合同カンファレンスの場などでも看護師の意見に耳を傾け、反映させていただいたことも大変嬉しく、有り難く感じておりました。

療養支援外来では、先生が退官されると聞いた患者様から「石橋先生がいなくなってしまって不安です」「寂しいです」という声をたくさん聞きました。いつも穏やかにお話をされる先生は、患者さんからも多くの信頼を得ているのだと改めて感じる機会となりました。私も患者様からそう思ってもらえる医療者になれるよう、これからも精進していこうと思います。

長い間、大変お世話になりました。ありがとうございました。

今後もたくさんの場面で活躍されることを心から祈念しております。

看護師　新井茉美



キャンパス二次会での余興

石橋先生のご退任に寄せて

生理学講座神経脳生理学部門　　尾仲　達史

石橋先生、自治医科大学において 22 年間本当にお疲れさまでした。これまでの長年にわたるご指導に深く感謝申し上げます。また、退任にあたっての記念誌に文章を書く機会を与えていただいたことに感謝いたします。

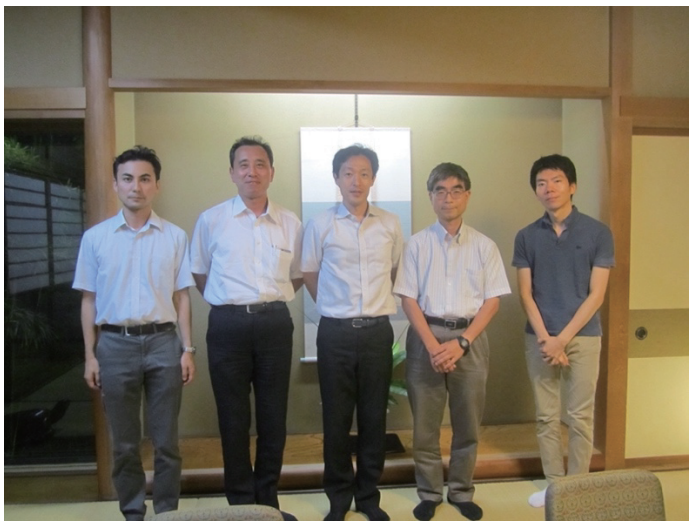
内分泌代謝内科から医局の先生方が生理学講座に研究に来られていたこともあり、長い間本当にお世話になりました。

石橋先生が自治医科大学に来られて間もないころ、学内で論文をどう書くかというシンポジウムが開催されました。そこに先生がシンポジストとして参加しておられました。既に多くの業績を挙げて自治医科大学に来られた先生が、これからも学んでいきたいというとても真摯で謙虚なお言葉を述べられたのを今でも覚えています。その言葉にたがわず、ご専門の脂質代謝から幅広く研究を発展させ、臨床・基礎研究の領域において内分泌代謝科を世界をリードする教室に育て上げられたことは皆様のご存じの通りです。

30 周年記念誌に先生は「内分泌代謝疾患におけるゲノム・ポストゲノム・再生医療・遺伝子治療などの先端的な領域に独自な貢献ができる日の到来を夢見ています」と書かれておられます。先生の真摯のご指導でこの夢が達成されつつあることと存じます。

この 3 年間、COVID-19 感染対策の中、研究が困難な時期もありましたがが、先生は精力的に研究を推進されてこられました。今見てみますと、この 22 年間の間に私が属する教室でエネルギー消費量測定をしていたこともあって共同研究させていただき、4 報共著とさせていただいています。いずれも先生の渾身の研究で、これに加えていただき、とても勉強になりました。

石橋先生、22 年間、臨床、研究、教育と本当に激務をこなされ、お疲れさまでした。今後、益々ご活躍されることとは存じますが、是非ご健康にも気を付けられますようお願い申し上げます。これからも是非、折につけご指導賜れますようお願い申し上げます。



セミナーの慰労会、群馬大学（当時）佐々木努先生を囲んで

石橋　俊教授への感謝

循環器内科　　苅尾　七臣

石橋　俊先生のご退官に際し、栃木県での医療ならびに啓発活動、また同じ内科学講座の中で、長きにわたり身近でご指導をいただきましたことに、心より感謝申し上げます。石橋先生とは、最も長いお付き合いで、栃木県で循環器領域と内分泌領域の講演会や院内の様々な委員会や内科学講座全体会議など通じて大変多くの有意義な時間を共に過ごさせていただきました。

大学病院は臨床、研究、学生教育、さらに病院経営管理が求められ、ますます忙しくなってきています。その中においても、独創性の高い病態機序に関わる基礎研究を在任中継続して推し進められましたことに敬意を表します。研究成績を常に学術論文として一流紙に発表され続けたことは、私にとりましても大きな励みになっておりました。また、循環器リスクを有する患者の長期観察レジストリー研究や新規の糖尿病薬や高脂血症薬などの薬物介入臨床試験など、数多くの臨床研究もご一緒させていただき、学術的なディスカッションができたことは、大変良い思い出となっています。

臨床においても、内分泌代謝内科と循環器内科が常に密接に連携を保ち、大学病院として質の高い診療が行えたことを大変嬉しく思います。大学病院の糖尿病患者は、糖尿病性腎症が進行していることに加え、重症冠動脈疾患や心不全が背景に隠れていることも多く、さらに脳・腎血管障害などを合併した多血管病患者の診療や、治療抵抗性高血圧など2次性高血圧が疑われる高血圧患者においても、副腎静脈サンプリングを当科が、負荷試験を内分泌内科が担当し、2つの科が連携して、原発性アルドステロン症やクッシング症候群などの診断・治療に当たらせていただきました。石橋先生は診療科横断的な多職種参入型の糖尿病センター合同カンファランスを主宰されていました。そこでは、複数の科にまたがる症例を中心に、看護師、栄養士、薬剤師などメディカルスタッフも加わり、積極的な情報交換が行われており、循環器内科が心不全多職種カンファを行う際にも大変参考になりました。

最後に、石橋先生が会長として「地域医療における動脈硬化」をテーマに宇都宮で行われます第55回日本動脈硬化学会総会・学術集会の大成功を祈念いたします。これまで石橋先生から受けた多くのご指導に心より感謝申し上げるとともに、長年にわたる偉大なご功績に対し改めて敬意を表し、先生の益々のご健勝とご多幸をお祈り申し上げます。

石橋俊先生ご退任に寄せて

自治医科大学附属病院長
脳神経外科学教授
川合　謙介

石橋俊先生、長らくのご大任、大変お疲れ様でした。自治医科大学内科学内分泌代謝部門の教授としてのみならず、日本の内分泌代謝学領域をリードされ、多くの業績を残され、後進を育てられたことに心より敬意を表し、お礼を申し上げます。

石橋先生は東京学芸大学附属高校卒の医師の会をまとめておられ、多くの後輩から尊敬され慕われてきました。学大附高の大先輩として私は石橋先生のお名前だけは存じ上げておりましたが、2016 年に自治医大に赴任して初めて直接お話しする機会をいただけました。病院のエレベータで 2 人きりになると暖かいお言葉や鋭い慧眼の一言を頂戴し、大学や病院の歴史や背景についてもご教示いただくことがあり、私にとっては大変心強い存在でした。私がお世話になった脳外科の先輩は石橋先生の同期の方々が多く、その点からも石橋先生を勝手に身近な存在にさせていただいておりました。

私が病院執行部に関わるようになってからは、診療科の運営等について失礼なことも申し上げたように思います。後輩の戯言としてご容赦いただければ幸いです。

羽生市に開かれるクリニックは石橋先生のお人柄とご才覚で多くの患者さんが集まることと確信しております。どうかご自身の健康にもご配慮の上、末永くご活躍されますようお願い申し上げます。

陸上部＆山岳部 OB の健脚をいつまでも！

眼科　　川島　秀俊



まずは石橋先生におかれましては、恙無く定年退職されますこと、誠におめでとうございます。そしてお疲れ様でございました。

私は大学の一年後輩ですので、特に可愛がっていただいたと感じています。例えば、先生が糖尿病センターのセンター長をお勤めになっておられる関係上、人事の際にいつもお世話になっておりました。年度ごとの眼科医療機器申請でも、大変厚遇していただきました。ちなみに Facebook でも友達に加えていただいています。先生はとても活発に Facebook に投稿されておられ、友達の数も多く、交友の広さが伺い知れます。さて、自治医大退職後はお祖父様ゆかりの羽生市にご開業なさる予定と伺っております。先生は大学時代は陸上部＆山岳部でいらっしゃいました。どうぞ、陸上部＆山岳部 OB の健脚をいつまでも維持して、ますますご発展されますことを心より祈念申し上げます。

石橋先生への謝意

地域医療学部門　　小谷 和彦

石橋 俊先生には長きにわたってご高配を賜りました。講演会や学会をはじめとして色々な機会にご縁をいただきました。ご退任にあたり、厚く感謝を申し上げます。

大学院生の A 先生のご紹介を受けたことがあります。A 先生は、脂質と血管の代謝に関して大変に熱心に研究を進め、無事に学位の取得に至りました（現在、A 先生は、初志貫徹の精神で地域医療に身を浴しています)。ある時、A 先生が、ぼそっと言いました―「石橋先生は、専門領域に加え、別の領域にも造詣が深く、例えば歴史や文化の話であってもしっかり反応してくださる」―石橋先生に対する、A 先生の恭敬を感じた場面です。

その後、石橋先生から患者さんの遺伝子解析の依頼を受けることがありました。思いがけずレアな変異が見つかり、ご連絡したところ、その変異をもとに地理的なルーツを辿れる可能性について言及されました。地域医療では、こうした変異に関するエピソードが語られることがあります。ほんの自験ですが、A離島で特異な変異による病気が見つかり、既報を辿っていったところ、別の離島で同様の変異が検出されていると分かりました。A離島の方にこれをご説明したところ、ご先祖様が航海中に悪天候に見舞われ、一族は別々に漂流したと聞いているとのことでした（その後、一族が再開されたかどうかまでは不詳ですが)。石橋先生はこの話にしっかり反応して下さり、探求することについてのご示唆、また診療の心得を含めて様々なコメントをいただきました―石橋先生の恭敬者は多いはずです。

ご退任後は、クリニックを構えて地域医療に尽くされるとう伺っております。最近、熟達医の地域医療への貢献は、医師のキャリアモデルの一つとして注目されています。引き続きのご指導をお願い申し上げます。



膵臓移植を始めよう！

消化器一般移植外科　佐久間　康成

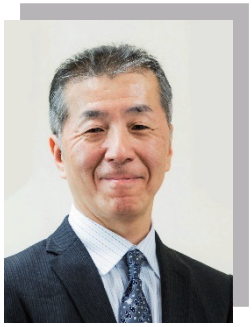
外科医である私と石橋先生のつながりは、なんと言っても膵臓移植です。
昨年、当院が膵臓移植の実施施設として認定されましたが、そこまでの道のりについて紹介すると、石橋先生がいかに尽力してくださったか、わかっていただけるかと思います。
私は、2005年～2006年にマイアミ大学で膵臓・膵島移植の臨床に携わり、それぞれの移植の有利性について勉強してきました。1型糖尿病患者さんへの新たな治療法として、この分野で活躍する事を目指してきましたが、栃木県では獨協医大が先に施設認定を受け、完全に足踏み状態となってしまいました。しかし、その様な中においても、石橋先生は内分泌内科との膵臓・膵島移植の勉強会を設けてくださり、まずは足場を作ることができました。そして、10年以上も経過した2020年3月、膵臓移植に向け本格的に始動しました。膵臓移植は、1型糖尿病の方が適応となりますが、その多くは腎不全を伴っており、糖尿病の中でも晩期合併症を伴っている患者さんが対象になります。元々、移植医療はチーム医療が欠かせませんが、1型糖尿病で腎症を伴っている患者さんは、神経障害、網膜症、血管障害、長い病脳期間による精神疾患など実に多岐にわたる合併症を有していることが多く、各領域にわたるチーム結成が必要です。そこで、最前線で活躍されている外部講師を招聘しての講演会や当科主催の勉強会開催に尽力していただきました。結局、施設認定までは2年以上の時間を要しましたが、院内のエレベーターであった際は、「応援してます！」といつも気にかけてくださっていたのを覚えています。
移植医療をやっている私にとって細胞の異常から来る臓器不全の解明がテーマであると同時に、その延長線に移植医療があるものだと考えています。そのような中、炎症・免疫研究部にポスドクとして出向中の山田先生が脂質代謝の研究に絡むことになり、そこで石橋先生に大変お世話になったと聞きました。コレステロール代謝で需要な位置にあるDHCR7の論文で、研究初期からrevise対策まで、貴重なアドバイスをたくさんいただいたとの事で、この場を借りてお礼を申し上げたいと思います。
最後になりますが、臨床、そして研究までお世話になった私がどのような恩返しができるかわかりませんが、1型糖尿病の患者さんことでは、引き続きご一緒させていただければと思います。



写真左）第一回：膵臓移植勉強会。コロナ禍のおりwebも併用しての開催となりました。現地に30名、webで20名と多くの方に参加していただきました。

石橋俊先生の退官に寄せて

外科学講座　消化器一般移植外科学部門　　佐田　尚宏



石橋俊先生が2023年3月に退官されることになりました．在任中様々な場面でお世話になったことを感謝申し上げるとともに、新しい門出を心よりご祝福致します．石橋先生は2001年6月に内分泌代謝科教授として本学に着任されました．私もほぼ同時期(2000年4月)に本学消化器・一般外科(現在の消化器一般移植外科)に講師として着任し、消化器外科、特に肝胆膵疾患のチーフとしての活動を開始しました．内分泌代謝科と消化器外科は対極にあるようで、実は関連の深い診療科です．当科は最近の大学附属病院では稀な単一の外科診療科で、従来対象疾患の範囲が広く、通常は泌尿器科が担当することが多い副腎手術も行っています．私自身は胆道・膵臓外科医ですが、黎明期から腹腔鏡下胆嚢摘出術を実施していた経緯もあり、当科の副腎手術(主に鏡視下手術)を責任者として担当していました．褐色細胞腫、原発性アルドステロン症、Cushing症候群等の診断、評価では内分泌代謝科に大変お世話になっています．因みに、私の日本内視鏡外科学会技術認定は「副腎手術」のカテゴリーでいただいています．また、当科は2010年代前半から細谷好則教授を中心に肥満手術(スリーブ状胃切除術)を行っています．高血圧症、糖尿病、睡眠時無呼吸症候群などの肥満関連疾患を手術で改善するという発想で行われる手術で、この手術の実施においても内分泌代謝科にはお世話になっています．最近は外科手術の短期成績向上のために、術前禁煙、栄養療法、術前リハビリを含めた、積極的な生活習慣への介入が行われるようになり、外科医にとっても内分泌代謝科的な知識、見識が重要になってきました．現在も附属病院臨床栄養部では、当科の倉科憲太郎講師がNST室長を務めていたり、外科の勤務経験のある看護師さんが所属していたり、密な協力関係にあります．今後も、現在の良好な協力関係が是非維持できることを祈念しています．

個人的には石橋先生は大学の2年先輩で、FACEBOOKなどで拝見すると、広く色々な事に興味を持たれ、ランニングなど自身の健康にも配慮されていることがよく分かります．私も2年後には定年を迎えます．定年年齢の65歳は、現在の高齢化社会ではまだまだ若く、その先人生がまだまだ長く続きます．石橋先生は定年後自身のクリニックを開設されると伺いました．やはり、人生を刺激的に過ごすためには、何か新しいことを始めることが重要で、そのエネルギーを十分に持っていらっしゃるということだなと感じました．私自身も今後の人生、どのように過ごすか、残り2年の現役生活中に考えていきたいと思います．在任中は大変お世話になりました．改めて感謝するとともに、先生の新たな事業の成功と今後のご健勝を心より祈念いたします．これからもお元気でお過ごしください．

石橋俊先生との出会いに感謝

分子病態治療研究センター　炎症・免疫研究部　　高橋　将文

石橋先生との最初の出会いは、先生が自治医大に教授として着任された 2001 年頃だったかと思います。もちろん、動脈硬化モデルとして超有名な LDL 受容体欠損マウスを作成した石橋先生のことは存じ上げていました。しかし、同じ動脈硬化の分野でも脂質代謝を専門にされている石橋先生と、循環器系の血管生物学が専門だった私との直接的な接点はあまりなく、自治医大に来られた後も動脈硬化に関連する研究会や食事会等でご一緒するくらいでした。さらに 2003 年には私が信州大学へ赴任してしまいましたので、その後も、どこかでお会いすれば挨拶をする程度のお付き合いだったかと思います。

しかしながら、2009 年に私が自治医大に戻ってからは、“公私ともに”とても親しくお付き合いをさせていただいています。まず、“公”の部分では、一緒にいくつかの研究会を企画・開催させていただき、終了後には今はなきレストラン西洋堂で遅くまでワインを飲んで語り合いました。また、新しい研究のアイデアやテーマ、そして解決策など本当に数多くのことを教えていただきました。実際、いくつかの共同研究も行って論文にすることができました。

“私”の部分では、“釣りと山登り”という 2 つの遊びで、とても仲良くさせていただきました。実は、動脈硬化の研究者には釣り好きが多く、研究会翌日の船釣りに石橋先生と一緒に参加して、船宿で BBQ をしたこともとても楽しい思い出です。また、石橋先生は学生時代に山岳部で、日本百名山の完登を目指していると伺っていましたが、その最後の 100 番目となる瑞牆山（みずがきやま@山梨）にもご一緒して石橋先生の完登の喜びを分かち合いました。この時も下山後に石橋先生の奥様が BBQ を用意してくださり、大変盛り上がったのも忘れられない思い出です。



石橋先生の日本百名山完登を祝して（瑞牆山@山梨）

ここ数年、新型コロナの流行によって、いろいろな方との“公私ともに”の関係が失われてしまっています。しかしながら、これまでの石橋先生との関係を振り返ってみると、このようなお付き合いが新たなケミストリーを起こさせ、これまで思いつかなかったアイデアや共同研究を生み出していくのではないかと改めて感じています。

石橋先生との出会い、そして公私ともに素晴らしい人間関係を築かせていただいたことに心から感謝しています。また、これからも“公私ともに”の相談をさせていただきますので、ご指導のほど、よろしくお願いいたします。

自治医科大学とちぎ子ども医療センター小児科　　田島　敏広

先生には、多くのことを教えていただくとともに、私の赴任後直ちに糖尿病センターの一員に加えていただき、学内で「こどもの糖尿病」の講演をさせていただく機会を設けてくださいました。
また多くの糖尿病内分泌代謝疾患のこどものトランジションを受け入れていただき、厚く御礼申し上げます。
小児医療から成人期のトランジション医療の重要性が言われておりますが、現実には十分に機能していない施設、地域が多い中、先生のお力添えを持ちまして、スムーズに行うことができました。
これからもご指導いただくこともあるとおもいますので、よろしくお願いいたします。また今後は新たにクリニックを開き、糖尿病内分泌代謝疾患の診療を行うとともに、人々の健康で安心して暮らせる社会作りを続けると伺いました。今後のますますのご活躍お祈り申し上げます。

自治医科大学とちぎ子ども医療センター小児科　田島敏広

石橋俊先生との思い出

内科学講座腎臓内科学部門　　長田　太助

石橋俊先生、長きに渡り内分泌代謝学部門の教授、内分泌代謝科の科長の重積を担われ、大変お疲れ様でした。また大変丁寧にご指導下さり、誠にありがとうございました。

私の石橋先生との最初の思い出は、平成5年頃だったと思うのですが、当時の万有製薬（現 MSD）が企画した高脂血症の勉強会での出来事です。もう 30 年も前のことです。私は三井記念病院のレジデントをしていましたが、万有製薬の MR さんに日曜日（だったと思いますが・・・）に高脂血症の勉強会を開くので参加しませんかと誘われました。当時、万有製薬はリポバス®（シンバスタチン）に力を入れていた時期だったはずで、なんとなく研究も好きそうだった当時の私を誘ってくれたのでしょう。パンフレットを見ると、講師は山田信博先生と石橋俊先生でした。当時すでに御高名なお二人だったこともありましたが、自分が入局した東大第二内科の「なんちゃって」高脂血症の専門家ではなく、第三内科の本格派の先生からお話をうかがいたいという希望も強かったので、是非参加させてくださいとお願いしました。休日に研修医が自ら志願して勉強会へ出席するなんて、今の自治医大では信じられないですが、当時は類似の会への若手の出席希望者は結構いたと思います。割と大きな講堂で総論をお二人の先生から賜った後、それよりも小さめの 2 つの教室に分かれて、少々詳しいアポ・リポ蛋白のお話を伺うことになっていました。その時、私は石橋班に割り当てられました。卒後 2 年目で、まったく研究もしたことがなく、難しい基礎的な論文など読んだこともないような状態でしたから、石橋先生の講義は衝撃でした。素人にも情け容赦なく、ガンガン最新の話題が振られるので、驚く以外ないという感じでした。臨床で手を動かしているだけでなくて、本当にちゃんと勉強しないといかんな・・・と思ったのは間違いありません。第三内科のすごさの片鱗を痛感した瞬間でもありました。それから数年後、石橋先生は自治医大の教授として若くして赴任されたのですが、更にその十数年後に自分が同じ敷地内で腎臓内科のトップとして一緒に仕事をさせていただけるようになるとは想像すらしておりませんでした。これだけリサーチ分野でも業績を残された先生が、定年後にクリニックを経営されるというのもまた驚きだったのですが、私も先輩の後ろ姿を見て真似したくもなってきました。新しい職場はそれほど遠くないとのことで、今後ともよろしくご指導ください。

自治医科大学附属さいたま医療センター　総合医学1（内分泌代謝科）　　原　一雄

石橋先生ご退任にあたり、本学における代謝内分泌学の臨床・研究・教育に長年に渡りご尽力誠に有難うございます。私が医学部を卒業して内分泌代謝分野の研究を始めたことから先生は分子生物学の王道でご活躍で、宴会の際などにはグループが違う私にも気さくに声をかけて頂いたと記憶しております。その後私は米国や他大学での研究の経験を経てから、附属さいたま医療センター内分泌代謝科に赴任しました時には、いち早く勉強会にお呼び頂きレクチャーの機会を与えて頂きました。内分泌代謝科の先生方と交流の機会を早くから与えて頂きましたことに感謝申し上げます。また、本学の学生さんに糖尿病について講義をする機会を与えて頂き、10年連続医師国家試験の合格率が全国トップであることに大変微力ではありますが貢献できたことにも感謝申し上げます。また、私どもの診療科では、近隣の医療機関から高コレステロール血症や高中性脂肪血症の難治症例を紹介されることも多く、脂質異常症のエキスパートの先生にお助け頂くことをお願いしたところ、永嶋先生に赴任して頂けることになりました。更に、当院は施設の基幹病院としての役割が大きいこともあって、研究室も手狭で内分泌代謝学の研究について必ずしも理想的な環境ではないため、特に若手医師につきましては先生のところで一度ご指導頂きたい旨お話ししたところ、犀川先生を快く受け入れて頂きましてありがとうございます。この様に石橋先生には感謝申し上げることばかりで、ご在任中に感謝の気持ちをもっとお伝えしておけばと思ったのも後悔後に立たずといったところです。幸い退任後は埼玉県北部の地域医療にご尽力頂くことになり、もしかしましたら自治医大ご在任中よりも、特に病診連携についてですが密にできるかも知れないと勝手に期待しておるところでございます。今後も引き続きご指導を頂く機会があると思いますが、何卒宜しくお願い申し上げます。

減量・代謝改善手術のご支援に感謝申し上げます

自治医科大学附属病院　鏡視下手術部　　細谷　好則

石橋俊先生、自治医科大学での長きにわたるご勤務、誠にお疲れ様でした。この度は寄稿の機会を与えていただき大変光栄に存じます。私は胃外科、食道外科を専門にしています。減量・代謝改善手術、いわゆる肥満外科治療では多職種チーム医療が必須であり、特に内分泌代謝科の診療協力がとても重要になります。10 年以上前になりますが、高度肥満症の外科治療導入について石橋先生に相談申し上げたところ、ありがたくご理解をいただきました。日本の肥満外科治療のパイオニアでリーダーであられた川村功先生を本学に招聘し、石橋先生に講演会を主催していただきました。本院では腹腔鏡下 Sleeve 状胃切除を導入してから先進医療取得し、2014 年の保険診療から現在に至るまで 150 例を超える手術治療を効果的に施行しています。2019 年に第 37 回日本肥満症治療学会を第 40 回日本肥満学会（横手幸太郎先生会長）と合同開催できたことは、石橋先生のご指導ご支援の賜物であると感謝申し上げております。また、石橋先生が会長をされた第 20 回動脈硬化教育フォーラムでは、高度肥満症の外科治療についての教育講演の機会を与えていただきました。本邦において本院が減量・代謝改善手術を早い段階から展開でき、臨床と学術で貢献できていることに重ねて御礼申し上げます。ありがとうございました。
末筆になりましたが、定年ご退職をお祝い申し上げますとともに、末永いご健康とご多幸を心より祈念申し上げます。



2009 年 12 月　糖尿病センター合同カンファ　川村功先生

朝日生命糖尿病研究所にてのおもいで

自治医科大学　薬剤部　　村上　かおり

石橋先生

大学病院での長年のお勤め大変お疲れさまでした。

先生のご退任記念誌にメッセージをお贈りできることがとても嬉しいです。

先生との出会いはもう 30 年程前のことになりますね。東大第三内科 11 研を訪ねるといつも研究室の机に向かっている先生の後ろ姿がありました。声をかけるとふり向いた優しい先生の笑顔が今でも昨日のことのように蘇ってきます。あのころ私はせっせとアポ E のブロッティングをし、そのアイソフォームと糖尿病の合併症とのかかわりについて調べていました。
私の携わった実験や学会発表、そして人生初の英語の論文、Diabetes Care への投稿掲載の折には先生の熱心なサポートとフォローを常にいただけたこと本当に感謝しています。ありがとうございました。

先生のこれからの新しい人生を心より応援しています。

臨床栄養部 11 年の軌跡

臨床栄養部　　茂木 さつき

2011 年 5 月 1 日、栄養部は組織改正により臨床栄養部に生まれ変わりました。栄養管理部門と NST 運営部門が独立して並存し、しかも多職種が 1 つの部門内に所属することはまだ珍しく、このような組織運営をしている病院は全国でも数えるほどしかありませんでした。

そして、臨床栄養部設立翌年の 2012 年 4 月から、石橋先生が臨床栄養部の 2 代目部長に就任され、その後 11 年の長きに亘り、120 名が所属する大所帯を牽引する大役をお務めただきました。この 11 年間の臨床栄養部の歩みを思い返してみたいと思います。

2012 年 4 月　栄養管理実施加算が削除され、栄養管理体制の確保が入院診療料の要件となる。
当院では栄養管理計画書は全入院患者に対し作成を継続。
2012 年 7 月　内分泌代謝科、腎臓内科、看護部との連携により糖尿病透析予防指導管理料加算の算定開始。
2014 年 10 月　給食業務委託会社が「(株)グリーンハウス」から「日清医療食品(株)」へ変更となる。
2015 年 1 月　入院基本料加算算定要件に基づき、入院診療計画書作成時に「特別な栄養管理の必要性有」となった患者に対し栄養管理計画書を作成することに変更。
2016 年 4 月　入院栄養食事指導の体制をチームによる病棟担当制とした。
2018 年 4 月　給食委託体制を全面委託から労務委託に変更し、病院所属の管理栄養士、栄養士と協栄会所属の調理師、調理補助員、洗浄職員での運営体制となる。
2020 年 3 月　新館南棟に設立された新厨房に移転し、給食管理システムを「ニュークックチルシステム」に移行。
2021 年 3 月　入院栄養食事指導料に付加する形での栄養情報提供加算の算定を開始。
2021 年 4 月　ICU で早期栄養介入実施加算の加算を開始。入院患者の栄養管理体制を、1病棟数人の管理栄養士で介入する病棟担当制とした。

このように、診療報酬の改定による栄養管理体制の変化や、給食管理体制及びシステムの変更など、たくさんの大きな変化の中で、臨床栄養部は一致団結し、その時々に応じて体制を整えてきました。これはひとえに、石橋先生が常に栄養管理の重要性を理解し、120 名に及ぶ部員に思いを馳せながら、応援して下さったからにほかなりません。今の臨床栄養部があるのは、まさに石橋先生のご支援とご指導のおかげです。

石橋先生、本当にありがとうございました。そして、これからも栄養の重要性を多くの患者さんに伝えていただきますようお願いいたします。

先輩教授石橋先生に贈る言葉

内科学講座消化器内科学部門　　山本　博徳

石橋先生、この度はご退任おめでとうございます。また、長年どうもお疲れさまでした。月日が経つのは速いものでわたしの中の石橋先生の印象はお若い教授というままなのですが、いつのまにか退任の日をお迎えになられましたね。私自身も2年後には先生の後を追って退任を迎えさせていただきます。長年石橋先生とは内科学講座の先輩教授としていろいろとご指導いただきました。どうもありがとうございました。

石橋先生は偉ぶることなく謙虚なお人柄でとても話しやすく気さくに接していただきました。私が入院診療運営部長を任され病棟編成の見直しをしなくてはいけなかった時にも私の立場にもご理解いただき快くご協力いただけたのは大変助かりました。どうもありがとうございました。

最近はコロナ禍のために宴会は出来なくなってしまいましたが、以前には内科科長会の懇親会で飲みながら楽しく懇談させていただきました。また落ち着きましたら是非ご一緒に飲み会をさせていただければと思います。

石橋先生とはほぼ同じ時代にテキサス大学ダラス校に留学していたという共通点もあり、テキサス大学留学医師の集まりにもお誘いいただきありがとうございました。残念ながらまだ参加は出来ていませんが、コロナが落ち着きましたら是非参加させていただきたいと思いますのでよろしくお願いいたします。

ご退任されたあとはご開業されるとお聞きしました。先生のお人柄でしたら患者さんから親しまれ信頼されてうまくいくことは間違いないと思いますが、働き過ぎには注意してお元気でお過ごしください。それでは重ね重ねお世話になりどうもありがとうございました。



記　念　寄　稿

―現及び元教室員―

※50 音順とさせていただきましたが、編集の都合上前後しておりますこと、ご了承願います。



記念棟から望む筑波山　877m　１回登頂

自治医大での5年間

北里大学 薬学部 微生物薬品製造学教室　　大城 太一

石橋先生、ご退任おめでとうございます。自治医大では、ポスドクとして、5年間 (2007 年から 2012 年) もお世話になり、研究者として大きく成長させていただきました。そして、アメリカ留学、帰国、北里大、名古屋大と移動していく私を、気にかけていただき、北里大学 薬学部 微生物薬品製造学教室 教授として、石橋先生の記念誌に寄稿できることを嬉しく思っております。

2007 年、北里大学 薬学部 供田洋先生が代表者となった独立行政法人 医薬基盤研究所 (保健医療分野における基礎研究推進事業) のプロジェクト「コレステロールアシル転移酵素アイソザイム ACAT2 選択的阻害剤の開発」がスタートしたことが最初でした。その当時、石橋先生と供田先生のご関係は存じていましたが (供田先生の寄稿もご参照ください)、私がこんなに長く、そして深く、お世話になるとは思っておりませんでした。このプロジェクトでは、微生物資源から発見されたピリピロペンやボーベリオライドをリードに ACAT2 選択的阻害剤 (現在は、SOAT2 選択的阻害剤と呼んでいます) を開発していくもので、生物活性評価グループ (供田 G)、誘導体合成グループ (長光 G)、in silico 解析グループ (ファルマデザイン G)、そして、モデル動物での in vivo 評価グループ (石橋 G) から構成されていました。私は、モデル動物での薬効評価に大変興味があり、また自分の持っている技術や知識を広げたいと思い、供田先生にお願いし、石橋先生の研究室 (医局) で研究することになりました。その当時、基礎研究を統括していた野牛宏晃先生、そして田副文子さん、永島秀一先生、高橋学先生に動物実験のセットアップをサポートいただき、その後、岡田健太先生、大須賀淳一先生、王さん、バイサさん、星野さんなどなど多くの先生方、留学生や技術補助員の方々と研究に集中することができました。そして、SOAT2 選択的阻害剤ピリピロペン A やその誘導体を用いたマウスでの in vivo 評価について、Arterioscler Thromb Vasc Biol や J Pharmacol Exp Ther に報告することができました (まだ宿題となってしまっている、データはたくさんありますが、、、)。特に、ATVB はリバイスに1年もかかってしまい、ご迷惑をかけましたが、accept された時は、非常に喜んでいただけたのを覚えております。さらに、 Cell Metab や J Lipid Res などに発表した研究に参加できたことは、私の大きな自信と成果になっております。

あと、石橋先生には、夜の会でもお褒めのお言葉をいただき(笑)、納涼会、忘年会、医局旅行、東京のご自宅でのお食事会などでは、美味しいお酒をたくさんいただきました。特に、学会出張先 (2009 年の下関での動脈硬化学会、那須での勉強会や 2017 年のアナハイムでの AHA など) でも、楽しい思い出となっております。

そして、私が教授に着任した時も、フィールドプレイヤーから監督になった私を心配しながらも喜んでいただきました。まだ論文になっていない宿題 (研究成果) がありますが、それは早急に片付けないといけないと思っております。

最後に、石橋先生、これからもご健康とご活躍を祈っております。そして、まだまだ、ご指導ご鞭撻のほど、よろしくお願い申し上げます。

バッシー魂は永遠に

医療法人北斗会　宇都宮東病院　　大須賀　淳一

石橋先生との出会いは今から30年以上前になります。私が東大の第三内科に入局してミシガン大学の臨床見学に行かせてもらった時に、石橋先生がご留学されていたダラスで初めてお会いしました。入局前に研修していた虎の門病院の部長だった村勢敏郎先生から、石橋先生はとてもタフな印象をお伺いしていたので、会った時は大変緊張した記憶があります。ラボも見学させてもらい、留学先での研究や生活の話しを聞かせていただいたのは記念となりました。

それから2年くらいして石橋先生が帰朝されました。東大第三内科の2研/11研は代謝学の中でも脂質代謝を中心として研究をしてきました。当時、発生工学を用いたin vivoの研究が全盛期で、東大のラボでは島野仁先生や嶋田昌子先生がトランスジェニックマウスを用いて研究されていました。石橋先生はダラスの研究室でES細胞を用いたジーンターゲティングの手法で、LDL受容体やコレステロール7αα水酸化酵素などを欠損したマウスを作成し研究をされていました。帰朝された石橋先生の一番弟子になった私は、ノックアウトマウス作成の基本技術を伝授していただきました。

サザンブロット、ゲノムのライブラリーの作成とクローニング、ターゲティングベクターのサブクローニング、ES細胞への遺伝子導入と変異体のスクリーニング、マウス胚盤胞へのマイクロインジェクションと偽妊娠マウスへの移植、などたくさんのプロセスがありました。故山田信博先生が大型の研究予算を獲得されて、実験設備にも恵まれましたが、研究生活は私にとって毎日が挑戦的でうまくいかないことが8－9割でへこむことも多かったです。うまく行かない時は頭もマイナス指向になってしまっていました。ES細胞の変異体の検出をササンブロットで行った時、私には見えなかったバンドを石橋先生は冷静に見つけてくれました。たくさん励まされながら研究を続け、約2年を経てようやく最初のマウスが出来ました（本当に遅くて申し訳ございませんでした）。

トランスジェニックマウスは遺伝子発現のプロモータを変更することで表現型の違いなどがありますが、ノックアウトマウスの示す真実はコンディショナルでない限り一つしかありません。論文を最初に発表できないと負け組の世界だったのです。私が最初の取り組んだ遺伝子は先を越されてしまい本当にがっかりしましたが、研究を統括していた石橋先生は私よりもっと落胆していたことでしょう。よく認知され研究の進んだ遺伝子は欠損した場合の表現型が想像しやすいですが、人知の及ばない結果になることもあります。ある遺伝子のノックアウトは肥満になり飢餓に弱い表現型が予想されました。実際、そのようなデータが出てきて論文にまとまり一流雑誌にほぼアクセプトされたことがありました。しかし、マイナーリビジョンの時期に、データは捏造されていてそもそもマウスも出来ていなかったことが判明しました（もう時効だから暴露します）。実験結果の再現性がなかったのです。論文を引き下げることにした時の石橋先生のお気持ちを察すると、さぞかし悔しかったことと思います。

そんなこともあったノックアウトプロジェクトですが、私も含め6名の研究者に石橋先生の技術が継承され、9種類の遺伝子でノックアウトマウスを作成することができました。毎週水曜日の夕方に開催されるデータクラブでは、石橋先生の結果に対するシビアな評価と意見で耳にタコが出来そうでしたが、そういう石橋先生のお姿はサイエンスに真摯であるべきことを後輩たちに暗示していたのでしょう。私は石橋先生のご期待に沿えずアカデミーに残れませんでしたが、優秀な後輩たちが石橋先生の足跡を発展させてくれることでしょう。長い間本当にお疲れ様でした。しかし、まだまだ石橋先生のご意見が必要だと思うので、今後ともご指導宜しくお願いいたします。



2014年10月19日　糖尿病ウォークラリー　井頭公園

石橋俊先生との思い出

内科学講座 内分泌代謝学部門　　岡﨑 啓明



この度は御退官と御開業、誠におめでとうございます。先生には長きに渡りご指導をいただき、本当にありがとうございました。
先生に初めてお会いしたのは、内科の1年目の研修で、東大病院を第二内科−第三内科−神経内科と回っていた頃でした。石橋先生がご在籍されていた第三内科の研修の時はあまり接点がなかったのですが（とはいえ、その後、淡々と研修している様子が良かったと言っていただいて、見ていてくださったことをありがたく思いましたが）、神経内科の研修中に、頭蓋咽頭腫でホルモン補充療法中の患者さんの管理で難しいことがあり、ご相談のお電話をしたのが、先生と直にお話しした最初でした。実はこの患者さんの主治医はもう一人の別の石橋先生だったのですが、人違いをしてしまったおっちょこちょいの研修医の突然の電話にも、先生はとても丁寧に答えてくださって、フランクないい先生がいるのだなあ、とほっとしたのを覚えています。それから時折研究室に誘ってくださるようになり、出入りをしているうちに、先生が高校の先輩でもあり陸上部や山岳部の先輩でもあることを知り、ご縁を感じているうちに、いつのまにか研究室（東京大学第三内科二研十一研）に入門、となりました。
臨床も研究も、いろいろなスタイルがありますが、ひとつひとつの事実を大切にしながら、シンプルで重要な疑問を心に抱き、問題を解決するために適する方法を考えながら、あらゆる可能性を考えつつ、直球勝負で挑んでいく、そんな先生のスタイルは私にはとても心地よいものでした。大学院時代は、臨床では、先生の字がびっしり書かれたカルテでひそかに勉強させていただきながら、大ベンとしてご指導いただいた病棟症例や、引き継いだ外来症例などから多くを学ばせていただきました。研究では、脂肪細胞のリパーゼ、動脈硬化の泡沫病変のマクロファージのリパーゼの新規同定という未開拓のわくわくする仕事をテーマに割り当てていただき、文字通り日夜没頭してました。そんな毎日は、今思い返しても幸せとしかいいようがありません。夜通し4℃のカラム精製をして朝を迎え、早朝に出勤された先生と、おはようございます−さようなら、というご挨拶をしていたことを懐かしく思い出します。その後リパーゼの同定に至り、生体内での役割があることを知るにつれ、じわじわと嬉しかったものですが、何かが形になった後よりも、形になる前の、先が見えないなかでの汗そのものが、自分には大きな喜びでした。筋トレになるくらいノートや資料を持参したデータクラブ、リポ蛋白研究で先生からも沢山採血させていただいたこと、ざっくばらんが持ち味の研究室の飲み会やカラオケ、卓球大会、スキー旅行、入局一年目に連れて行っていただいた屋久島山行、谷川岳沢登りなどなど、思い出は書き尽くせません。
100 年残る仕事に憧れて、大学院時代に読んで感激した論文があり、そんなラボに留学したいと思ったところが石橋先生の御留学先であったのは、すでに先生の感化を受けた証拠かもしれませんが、ご紹介いただいて留学したダラスのUT southwestern では尋常でないオーラを放つBrown & Goldstein 両博士のご指導のもととても良い勉強をさせていただきました。その後東大二研十一研に戻り、研究室の運営をする立場となりましたが、新しいラインの臨床研究や基礎研究を発展させることができたのも、一人一人の成長を常に気にかけてくださった先生のおかげと感謝しています。この間、自治の先生方とも、厚労省研究班の臨床のお仕事、基礎のお仕事など、多くの仕事をご一緒し、とても良い勉強をさせていただきました。臨床も研究も、仕事がより広く世の中に役立っていけるような方向に伸びてきたように感じます。先生は、博い知識をお持ちでありながら、「餅は餅屋」といつも謙虚にお話しされていましたが、何か必要な際にはその道の専門家の先生を多々ご紹介いただきました。基礎から臨床まで、国内外問わず、多くの先生方に先生を通じて知り合うことができ、多く学ばせていただいたことに心から感謝しています。
ガンジーの言葉に、人生は真理と愛を探究する一つの実験だ、というのがあります。石橋先生からは、そのような人生という意味も含めて、実験の精神の真髄を学ばせていただきました。実験は、多くの可能性を考えなければならない、その可能性をひとつひとつコツコツと解決していく必要がある、解決に当たっては一人一人の創造性が大切であり、その個性をもとにして、それぞれの未来がひらけていく。そして何より、限られた時間の中で最も重要でシンプルな問題に立ち向う必要がある。臨床でも研究でも人生でも役立つこのような真理への向き合い方を教えていただいた石橋先生には感謝の気持ちで一杯です。新しい次のステージへと向かわれている先生の、第二あるいはさらに第三の人生の、新たな発見と発展とご多幸を、心よりお祈りしております。

前准教授 （大森赤十字病院 糖尿病・内分泌内科 部長） 岡田 健太

石橋先生、晴れて定年をお迎えになられ、心よりお祝い申し上げます。そして本当にお疲れ様でした。

私は 2007 年から入局させて頂きました。石橋先生は、以前から比類なき研究心とアイディア、さらには首尾一貫した研究の方向性と実行力を有し、常に探求心を持ち続け、しかも一流専門誌に多数の貴重な報告をされており、当時、私は深く感銘を受けていた医局に入局することに、少々不安はあったものの、それ以上に大きな期待をもって栃木県に来たことを鮮明に記憶しております。

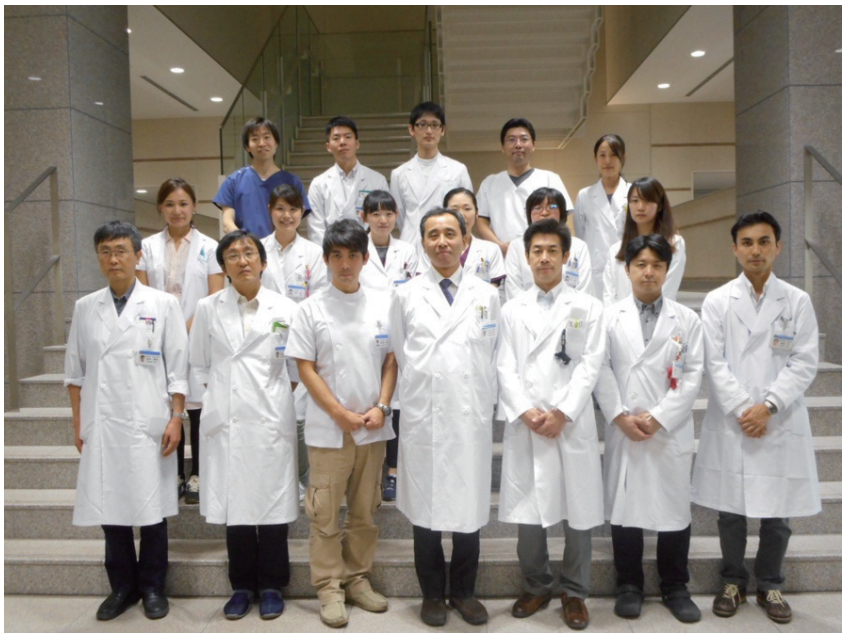
着任後には、私がまだ駆け出しの頃で、いろいろと厳しく御指導を賜りましたが、そんな私にも常に目をかけて頂き、特に海外留学の機会を頂いたことや、岩手医科大学への異動に関しましては、これも石橋先生のご尽力あってのことであり、深く感謝申し上げます。また、私が医局長として医局をまとめることができたのも、石橋先生の御指導があってこその所産であり、今となっては石橋先生と過ごした 15 年間は、大変貴重な思い出であります。

教授退官後にはご実家に戻られて地域医療に貢献されていることと思いますが、石橋先生の益々のご活躍とご健康を心よりお祈り申し上げます。本当にありがとうございました。

石橋俊先生のご退任に寄せて

自治医科大学附属病院内分泌代謝科　非常勤医員　　岡田　修和

石橋俊先生、長いあいだお疲れ様でした。
この文章は、ご退任後に書いています。
自治医科大学附属病院の職階をヘイタイのクライでいいますと、教授・准教授が将官クラス、講師が佐官クラス、講座助教が尉官クラス、病院助教が下士官クラス、といったところでしょうか。そのたとえからすれば、石橋先生が大将として赴任されたとき、わたくしは下士官クラスで、わたくしが退職したときも、わたくしは下士官クラス、石橋先生は大将でした。わたくしは、早くから昇任の軌道を降りていた者でしたが、定年まで勤めることができたのは、石橋先生のおかげによるところが大きく、感謝してもしきれないものがあります。
この稿を起こすにあたり思いをめぐらせてみて、石橋先生はタフなかただとあらためて思いました。ひとつは、逆風に折れなかったところからきています。この逆風というのが、わたくしが見聞きしたところからは、いくつもあったと拝察され、詳しいところは省きます。もうひとつは、膨大な量の仕事をこなされたこと。最後の何年かこそ普通の時刻に帰られていましたが、大半の年月は、いつも遅くまで教授室に明かりが点いていて、さらにときどき休日にも職場に顔を出されていました。現在のように厳格に働き方改革の制度が適用されていたら、アラートを鳴らされるのは必至だったのではないでしょうか。
そして、石橋先生は教授として 65 歳で定年を迎えられ、定年で退任された後は開業されました。ご退任前最後にお会いしたとき、開業されるとおっしゃるとともに、現在気力も体力も知力も充実している、というようなことをおっしゃっていて、それが印象に残っています。やはりタフだなあ、アスリートとして普段から身体を動かすことに親しまれていたことが、趣味と実益を兼ねていたのだなあ、と思います。
現在も精力的に仕事をされていることと思います。クリニックを開業された地域のかたがたにとって、心強いのではないでしょうか。



石橋先生のご退官に寄せて

新小山市民病院 糖尿病・代謝内科　　加藤 夏果

石橋先生、長年に亘り自治医科大学内分泌代謝学の発展にご尽力され、無事ご退官されますことを心よりお慶び申し上げます。こうして寄稿の機会を戴けましたことは、望外の喜びです。

入局したばかりのころ、初めての忘年会の席で先生の右隣の席を戴いて、緊張して座っていたときのことを思い出します。雲の上の存在である石橋先生が非常に気さくに話しかけてくださったことが嬉しく、緊張を解いてくださる優しいお声がけに、この医局を選んでよかったと安堵したものでした。医局員のリクエストで被り物をしてくださったり、ビンゴに楽しそうに参加されていたりと、親しみやすいお姿が記憶に残っています。

毎週のカンファレンスや学会発表の予演会などでは、私の稚拙なプレゼンテーションやアセスメントについて基礎的なところからご指導いただきましたし、専門医試験の出願の際には図々しいご指導のお願いを暖かく受け入れてくださり（ご自宅での奥様のおもてなしにも大変感激いたしました）、とても嬉しかったです。また、コロナ禍を契機に教授回診がなくなってしまっても、毎日病棟の医師室にお顔を見せてくださって、病棟の様子に耳を傾けてくださること、見守っていただいている安心感がありました。今先生のお姿を廊下で拝見できないこと、とても寂しく思います。

先生が自治医科大学内分泌代謝学の教授としてご功績を重ねられた長きにわたる歴史においては、私は先生からご指導を受けたたくさんの方々の末席に連なるたった一人の未熟者にすぎませんが、先生から戴いた教えは私の中に深く刻まれております。誠にありがとうございました。今後の益々のご健勝とご多幸を心よりお祈りしております。

看護学部　内分泌代謝学部門兼任　　倉科　智行

石橋先生には2005年春から18年もの間ご指導を賜りまして、誠にありがとうございました。研修医3年目の秋に、石橋先生のお部屋にお伺いしたとき、私が来るとは予想だにしていなかったご様子で迎えてくださったのを今でも覚えております。多くの同期や先輩に恵まれた学年でした。

入局2年目には、「厚労省の医系技官になる」と息巻いて出願しましたが、その際も快く(?) 推薦を下さいました。結局不合格でしたが、その後医局に戻ってからも変わらず見守ってくださいました。また大学院に入学する際に、統合生理学部門で膵β細胞インスリン分泌調節の研究がしたい、と申し上げたときも、ご自身の研究への参加を強要することなく「行って来い」と送り出してくださいました。

大学院卒業後に、先生が班長をされていた厚労科研の事務局を引き継がせていただきました。(これが本当に大変でした。。。)多くの脂質代謝を専門とされる高名な先生方を束ね、未来の絵図を描いて、実現に向けて活動される先生を間近で拝見することができました。指定難病の診断基準作成に向けての作業や、事務局業務を円滑に進めるための心得をご指導いただきました。これらを通じて、医療現場だけでは得ることのできない本当に貴重な経験をさせて頂きました。

現職の看護学部への異動に際しましても、ご理解を示していただき大変感謝しております。これまで不肖の私がなんとかやってこられましたのも、ひとえに自治医科大学内分泌代謝科をまとめ上げてこられた石橋先生の温かいご指導のおかげです。おじい様ゆかりの地で新たな夢に向かって進まれる先生の御健康と御多幸をお祈りして、お祝いの言葉にかえさせていただきます。ありがとうございました。



2019年　忘年会

ご指導ありがとうございました。

甲賀　裕希子

このたびはご退官誠におめでとうございます。
私は6年間石橋先生の下で研鑽を積ませていただきました。初期研修の2年間を県外の市中病院で行った後の入局で、当時は専門性を持った研修を受けることに対する期待と共に、初期研修から持ち上がりの入局者が多い環境に対する不安も持っていました。先生と初めてお会いしたのは初期研修2年目に医局見学に伺った際でしたが、印象に残っているのは 2 度目にお会いした、面接試験後に院長室から医局へご一緒させていただいた時のことです。私の出身地や出身大学に関連してお知り合いの先生や登山の話などをしてくださり、先生の穏やかなお人柄に触れ、その不安が払拭されたことをよく覚えております。入局してからも、石橋先生を始め温かくかつ熱心にご指導くださる先生方に囲まれ、充実した研修を受けることができました。
22年という長きに渡る教授職をご退官されるという記念すべき場に医局員として立ち会うことができたこと、最終講義を聴講できたこと、大変貴重なお時間をいただきました。
先生の下で過ごさせていただいた時間は、自分にとって内分泌代謝科医としての礎となっております。今後もご指導を賜りますようお願い申し上げます。
石橋先生の益々のご健勝とご多幸をお祈り申し上げます。

石橋先生へ感謝を込めて

山梨大学　山梨 GLIA センター　　坂井　謙斗



ご退官おめでとうございます。医師そして研究者として最前線で長くご活躍され、数々の功績を挙げられてきた先生にご指導いただいた経験は、私の研究生活の財産となっています。今回、感謝してもしきれない先生への寄稿文をご依頼いただき、喜んで筆をとらせていただいた次第です。

先生との出会いは、私が修士課程2年の時です。当時所属していた北里大学　供田研との共同研究の一貫で、石橋研で動物実験を担当することになりました。それまでがむしゃらに実験をしていた当時の私にとって、頭を使いながら緻密に研究をされる石橋研のやり方を知ることができたのは、私が初めて研究者としてスタートラインに立ったきっかけになったと感じています。

その後も長いこと気にかけていただき、幸いなことに石橋研でポスドクとして研究を続ける機会をいただきました。ポスドク時代は、生活習慣病分野で脂質代謝や免疫を絡めた研究に携わりました。この際の主な業績として、2018 年に ATVB 誌への論文投稿と 2019 年の自治医大 優秀論文賞に採用いただくことができました。また、海外での研究発表の機会をいただき、ひどい英語でフランスに乗り込んで行ったのは今では良い思い出です。

現在は神経科学分野で研究を続けています。神経科学は脂質代謝や免疫関連と複雑に絡み合っており、現在の研究生活はポスドク時代に石橋研で学んだ知識・経験に支えられています。先生の弟子の一人として恥ずかしくないよう、今後も研究者として頑張っていきたいと思います。先生のこれまでのご経験と幅広い見地から、今後ともご指導ご鞭撻いただけますと幸いです。今後ますますのご健勝と末永いご多幸を心よりお祈り申し上げます。



2013 年リヨン EAS にて Paul Bocuse 氏と



春の石裂山から男体山を望んで

石橋俊先生、ありがとうございました。

櫻井　百恵

石橋先生、ご退官を迎えられたことを心よりお慶び申し上げます。

カンファランスや論文作成ではご指導頂き、誠にありがとうございました。医学的な知識はさることながら、歴史や文学、地学などあらゆる分野に精通されていらっしゃることが、医局行事等でのご挨拶の端々に感じられ、敬服致しておりました。様々な事象に対する深い探求心こそ、先生から一番学ばせて頂いたことのように思います。

そして先生との思い出はやはり奥鬼怒登山です。道中、前日までの悪天候による倒木があり、道が分からなくなった際も冷静に、「元来た道を一旦引き返そう。研究も同じだ。失敗したら正しかったところまで一度戻り、そこからやり直すんだ。」と仰っておりました。そして正規ルートを無事発見し、下山することができました。下山後の加仁湯温泉での夕食は格別でした。

先生から学んだ精神の元、これからも自治医科大学内分泌代謝科の医局の発展に少しでも貢献できればと頑張る所存です。ご開業された先生からお送り頂く紹介状に、身が引き締まる思いが致します。新天地での先生の益々のご活躍を祈念しております。



2018 年 10 月日光金精峠から根名草山を超えて奥鬼怒温泉郷に到着

石橋俊教授に御礼申し上げます

医療法人　長崎病院　内科　　高橋　学

石橋教授が長年にわたるご尽力を終え、ご退官されるとのことで、心よりお祝い申し上げます。

私は自治医科大学に 2002 年に入職し、初期研修での内分泌代謝科研修を経て、臨床だけでなく、マウスを用いた基礎研究ができることに魅力を感じて、2005 年より入局しました。石橋教授には、現在の所属に異動する 2022 年の 10 月まで 17 年もの長い間多くのことをご指導いただき、勉強させていただきました。そして、臨床、研究、医局の運営など多くのことを経験させていただきました。

臨床では内分泌代謝科の初期研修からご指導いただき、その後に各専門医、指導医の取得をすることができました。研究は 2007 年に大学院に入学してからスタートでした。いろいろと実験に取り組みたいと思っておりましたが、実際は簡単なものではなく、石橋教授、野牛宏晃先生のご指導のもと取り組んだマクロファージ LPL 欠損マウスを用いた動脈硬化、肥満の研究に 15 年費やすことになりました。データクラブで常々、「Just do it」のお言葉をいただき、いろいろご提案いただきましたが取り組めないことも多く、また不器用で結果を出すことができず申し訳なく思っていました。論文化まで時間がかかった分、共焦点顕微鏡を用いた脂肪組織の免疫蛍光染色のデータを掲載できたのが喜びでした。また、2 名の学位研究のサポートをする機会をいただきました。

その他に原発性脂質異常症の患者さんのリポタンパクの解析や遺伝子診断をする機会をいただきました。特に次世代シークエンサーを用いて、数名の方の原因遺伝子を特定できたことは貴重な経験でした。

これらの研究を通じて、石橋教授のこれまでの多くの業績をたどり、また在籍中に様々な新しい研究へアイデアを拝見する中で、研究への情熱と飽くなき探究心に大変感銘を受けていました。

臨床、研究以外にも多くの思い出があります。石橋教授の研究室を通して、多くの方々とディスカッションし、交流することができました。さらに、ご自宅に新年会でお邪魔したり、ADA や AHA に参加し、観光や食事をご一緒したことも懐かしい思い出です。

最後になりますが、このたび石橋教授がご開業され、新しいステージで益々のご活躍されることを心より願っております。そして、石橋教授のご指導のもと、多くのことを経験する機会をいただいたことに感謝申し上げます。今後ともどうかご指導の程よろしくお願いいたします。

「感謝」

内分泌代謝科 OB　　武井　暁一

石橋先生、ご退任おめでとうございます。大学 5 年生時の病院見学で、はじめてお会いしました。やさしくお声がけいただいた記憶があります。その後、2013 年に入局し、臨床医として、研究者として、そして社会人として多くのことを御指導いただきました。

外来で数多くの患者さんを診療されていたことがとても印象に残っております。また、回診で一人一人丁寧に診察され、治療方針を御指導いただきました。それだけでなく、毎朝病棟の医師室にお見えになり、急患や重症患者さんの確認をされ、ときに相談にのっていただきました。大学院生となってからは、さらに多くの御指導をいただきました。研究は、とても順調とは言えず、なかなか結果が出ない苦しい時期が続きました。ちょうど子育ても重なり、疲労が重なり何度も辞めようと考えました。しかし、踏みとどまり、立ち向かっていけたのは、石橋先生のおかげだと思っております。最初の投稿における、年末から年始にかけての論文作成では大変お世話になりました。怒涛の御指導の連続に圧倒されましたが、何とか乗り越え、1 年遅れで無事、大学院を卒業できました。夫婦そろって Diabetes 誌に論文掲載となり、妻の祥子さんはその表紙も飾ることができました。二人の子育てをしながら、困難の連続でしたがとてもよい思い出となりました。後年では医局運営、組織に関して多くの御指導をいただきました。困り果て、突然お電話させていただいたこともありました。親身に相談にのっていただき、とても救われました。

これまで、大変ありがとうございました。そして、これからも御指導のほど、よろしくお願いいたします。

石橋先生へ感謝を込めて

自治医科大学 内科学講座 内分泌代謝学部門　　武井 祥子

教授職を終えられ、無事ご退官を迎えられることに対し、心よりお祝い申し上げます。 先生に初めてお会いしたのは、大学 5 年生の病院見学の時でした。緊張していましたが、やさしく声をかけていただいたことを覚えています。初期研修医として就職後も、内分泌代謝科への入局も考えており、石橋先生、大須賀先生、永島先生を中心に臨床において熱く指導いただきました。コロナ禍より以前の教授回診では患者さん一人ひとりを丁寧に診察されていたことが印象に残っております。

入局して大学院に入学後はちょうど出産の時期と重なり、育児と仕事、研究の両立に悩むことも多々ありました。子供を朝から保育園にあずけ、一度帰宅して夕食とお風呂を済ませてから、また夜間保育に預けてマウスの解剖をすることもあり、大変苦しい大学院生活でした。 しかし、何とか乗り越え夫婦そろって Diabetes 誌に論文掲載ができ、また表紙を飾ることができたのは、石橋先生に多くの御指導をいただいたおかげです。本当にありがとうございました。今後ともご指導ご鞭撻いただけますと幸いです。今後ますますのご健康とご活躍を祈念しております。

石橋俊教授のご退任に寄せて

神戸製鋼所真岡製造所診療所　　竹田　幸代

石橋先生、自治医科大学内分泌代謝科の教授としての 22 年間、本当にお疲れ様でした。そして内分泌代謝科の医局員として入局させていただいてからの 12 年間、いろいろと本当にお世話になりました。

先生と初めてお会いしたのは 3 年目のレジデント時代でした。学生時代に専門としたいと思っていた診療科を回った後で、その科を専門として長きにわたり頑張っていくことが難しいのではと悩み始めていた頃でした。3 年目の 10 月からの 3 か月間の研修でしたが、入局を決めかねていた私には内分泌代謝科での研修が本当に魅力的であったことを覚えています。あの頃の先生は私にとっては本当に雲の上の方でしたが（現在ももちろん！）、回診中やカンファレンス中緊張していたにも関わらず根気強く耳を傾けていただいたことを覚えています。そして内分泌疾患のみならず患者さんの背景や合併している他疾患への鋭い質問に答えられず、自身の医師としての力のなさを痛感しました。一方で病棟にて学ばせていただくにつれ、生涯を通じて内分泌疾患と向き合って行かねばならない患者さんに寄り添えるように内分泌疾患をしっかり学びたいと思うようになり、先生のいらっしゃる内分泌代謝科で学びたいと強く思いました。

入局後は医師としての仕事と子育てとの両立がうまくいかず、何度も先生に「大丈夫か」とお声かけいただきご心配をおかけしました。不出来な私は先生に何度もレポートの指導を受け、どうにかこうにか糖尿病専門医を取得できましたが、合格通知を見て大泣きする私に「よかったじゃない」と笑顔でお祝いの言葉をかけていただきました。先生は、医師としても人としても若輩者の私に、外来診療、学会発表の場などたくさんの場面で多くの言葉をおかけくださりました。またいつも丁寧にご指導いただけたことは感謝という言葉だけでは言い表せません。

石橋先生と言えばスキー旅行、花見、納涼会といろんな行事で奥様と連れ立っておられたのが印象的です。照れくさそうな先生の隣にはいつも笑顔の奥様がいらっしゃいました。奥様からもいつもやさしいお言葉をいただき感謝しています。また教室では見ることのできない先生のエピソードなどや先生のお姿が見れていつもいつも楽しかったです。

昨年新しく羽生で開業された際には見学会で、「僕のクリニックを家内が手伝ってくれることになったんだよ」とやはり照れくさそうにおっしゃる先生と笑顔の奥様‼お二人が本当に睦まじくおられたことが忘れられません。いつまでも奥様を大切にご家族も大切になさっている姿を見て私も見習わせていただきたいと思いました。

最後になりましたが、どんな形であれ、今後も私は先生の教室で学ばせていただいたことを忘れず精進していきたいと思います。先生におかれましてはご夫婦でますますのご健康とますますのご活躍をお祈りしております。

20年大変お世話になりました。
そして今後とも何卒よろしくお願い申し上げます

永島メディカルクリニック　　永島　秀一



石橋先生、20 年にわたりご指導本当にありがとうございました。言葉や文字では表すことができないほどの御恩をいただきました感謝の気持ちと、おそらく私が石橋先生の自治医大人生で一番ご迷惑をおかけしてしまったという申し訳ない気持ちと、そして総合すると(心苦しいのですが)、ものすごく幸せだった 20 年が思い出され、本稿を書き始めて早々に泣きそうになっております。

石橋先生が自治医大内分泌代謝科に教授として赴任された 2001 年に、私は自治医大で医師 1 年目として働き始め、2003 年に研修医として石橋先生に初めてお会いしました。当時は怖い教授先生が大半のなか、とにかく優しい先生でいらっしゃいました。そして指導医でいらした野牛宏晃先生(現筑波大学附属病院水戸地域医療教育センター 内分泌代謝・糖尿病内科教授)と、山梨大学の先輩医局員でいらした藤田延也先生(現ふじた糖尿病内分泌内科クリニック院長)にお誘いいただき、2004 年に先生の下で医局員として生活を始めました。私は 2020 年に自治医大さいたま医療センター内分泌代謝科に准教授として推薦いただき異動しましたが、その後先生が 2023 年に退官されるまで栃木自治の外来も継続させていただきましたので、2003 年から 2023 年まで、ちょうど 20 年、みっちりと先生にご迷惑をおかけしたことになります。

思い出がたくさんありすぎるのですが、まず入局早々に、皮下脂肪と内臓脂肪組織の違いについての総説を書くよう仰せつかりました。今もそうですが、当時も謎の多い領域で、調べはじめるときりがなく、楽しすぎて締め切りを月単位で過ぎてしまいましたが暖かく見守ってくださいました。その後、消化器外科、婦人科症例から術中に皮下脂肪と内臓脂肪組織をわけていただき、そこに発現している各種 TG lipase の役割の違いについて研究を始めさせていただくことになりました。当時は素人でしたのでピンときておりませんでしたが、先生が世界の第一人者である TG lipase 群の発現を、ヒト脂肪組織で確認するというアイデアは本当にすごいことだったと思います。ただ私の研究スピード、論文化が遅すぎて申し訳ございませんでした。

その後大学院に入学後は、コレステロール合成酵素群の臓器特異的な遺伝子欠損マウスの研究をさせていただきました。野牛宏晃先生が実験環境のかなりの部分を整えてくださっており、かつ対象がドメジャーな分子であったので、大学院生としてはかなり贅沢なスタートでした。しかし出てくるデータはネガティブデあるいは予想外の嵐で、解釈にドはまりしたあげく、これも大幅に論文化が遅れてしまい申し訳ございませんでした。

以上のことから、おそらく私が石橋先生の自治医大人生で一番のボトルネックだったかと思います…。ただ石橋先生のご指導のもと、私のあとを引き継いでくれました武井暁一先生、祥子先生ご夫妻の手により、世界に先駆けてスタチンと糖尿病の新たな関係が見いだされて発表できたことは大きな喜びでした。

その後も私なんぞを病棟医長、外来医長、医局長に任命くださり、さらには、さいたま医療センター内分泌代謝科の准教授にまでご推薦いただき、本当に感謝申し上げます。

そして 2023 年、石橋先生が退官されたのちに開業されるというビッグニュースが飛び込んできました。そこで私も急速に開業について思いを巡らせはじめてしまい、ついには 2024 年 4 月に開業してしまいました。せっかく先生に引き上げていただきましたのに、そして石橋先生イズムを後進に十分に伝えることができず、大変申し訳ございませんでした。ただ私としては、現在進行形でクリニックスタッフ、導入機器、算定（生活習慣病管理料ⅠとⅡをどう仕分けるか？）の相談などをさせていただいており、先生と繋がっていられるという身勝手な安心感があります。

20 年間本当にありがとうございました。また、こんな私ですが今後とも何卒よろしくお願い申し上げます。

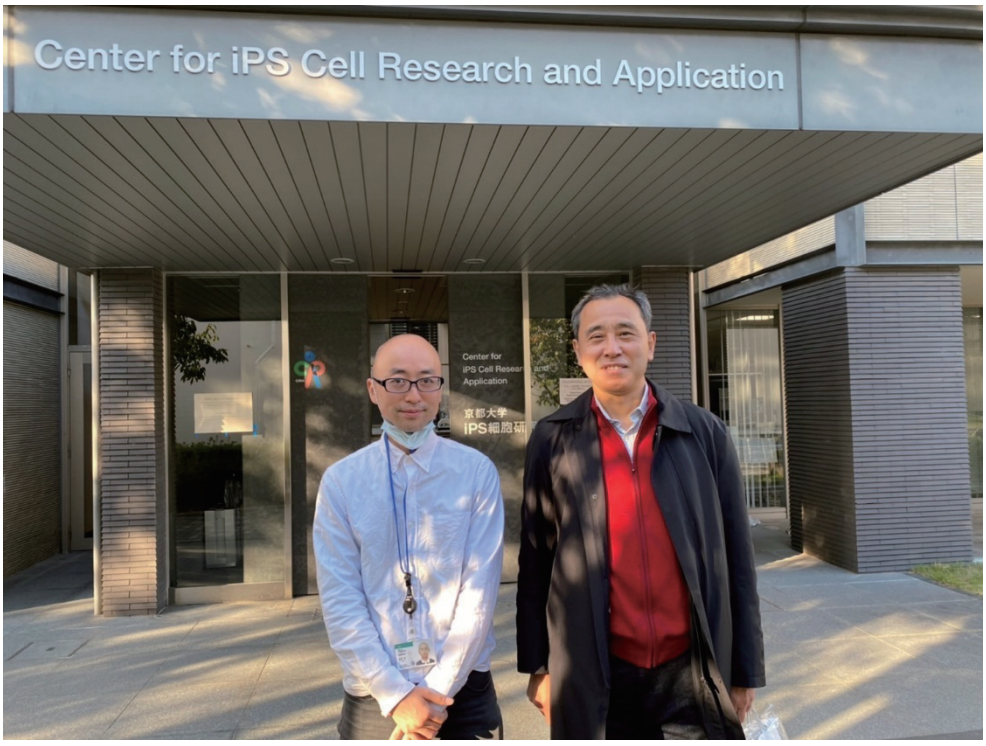
ご指導いただきましてありがとうございました

京都大学 iPS 細胞研究所 増殖分化機構研究部門 博士課程学生　　畑野 悠

22 年余りという長きに渡る教鞭の末、ご退官誠におめでとうございます。私は自治医科大学医学部生として、石橋先生が先導する糖尿病内分泌内科で初めての病棟実習を経験させて頂きました。非常に温かい病棟の雰囲気に学生ながら感動しておりました。その後、2017 年度から 1 年余り自治医大卒業生後期研修医として受け入れて頂きました。学生時代同様、非常に at home な科の雰囲気であり、素晴らしい勤務環境の中で臨床経験を積むことが出来ました。これを可能とさせた先生のご人徳に深く感謝しております。

先生のご方針のおかげで、general な糖尿病内分泌科医として訓練できる場であり、わずか 1 年足らずの研修でしたが非常にたくさんの症例を外来から入院に渡るまで拝診出来ました。発表のチャンスも多く頂き、たくさんの経験が出来ました。カンファランスでも英語で発表をする事をお許し頂き、英語表現に至る事まで先生から学ぶ事が出来ました。私自身の海外留学の際も、推薦状を大変熱心にご記載頂き、先生のサポートもあり留学を果たすことが出来ました。私の帰国後は、現座在学中の iPS 細胞研究所までお越し頂き、先生と久方ぶりにお会し貴重な時間を共有させて頂きました。

私自身は今後も糖尿病研究者かつ臨床医としての道を深めていきたいと思っております。何卒引き続きご指導ご鞭撻を賜る事が出来れば幸いです。我々自治医大医学部生をはじめとする多くの若者をこれまで導いて頂きまして誠にありがとうございました。



2021 年 10 月京大 CiRA にて

Greetings from Mongolia: to our beloved professor Ishibashi.

Director, Postgraduate Institute of Mongolian National University of Medical Science T.Bayasgalan(バイサ)
Cardiologist, Intermed Hospital, Mongolia E.Bolormaa (ボギ)

Dear Ishibashi sensei

Almost 15 years have passed since we first met on my third day in Japan as a graduate student at Jichi Medical University. Yet, it seems just like yesterday.
At that time, every graduate student from Mongolia, China, and Thailand who had been studying at JMU told me how lucky I was that you were my supervisor. Indeed during my and our family's stay in Japan for seven years, you were kind, generous, and supportive in various parts of our life.

I was genuinely happy and speechless when you supported my wife, Bolormaa (Bogi), for admission to a Ph.D. course as a graduate student and a department member as much as myself. Your decision and support have opened a new chapter in our life. With your excellent guidance and daily support from you and other faculties, including Nagashima sensei, Yagyu sensei, Osuga sensei, Manabu sensei, Oshiro san, Tazoe san, Hoshino san, Bogi and I successfully received the Ph.D. degree from Jichi Medical University.

Every Wednesday, during data meetings, when I presented my successful or failed work, you shared your advice, starting with a quote, "if I were you," charged me with self-confidence to complete the given tasks. Still, whenever I challenge some difficulties in my research here, in Mongolia, I occasionally think: what would Ishibashi sensei do? Your broad knowledge in clinical and research fields, generous consultation in every matter, and your natural manner as a scientist/physician have guided us to become better since then, for we are eternally grateful.
In addition to being our mentor, Bogi and I have memorized you as a loved husband and father, a gentleman who keeps up with the modern lifestyle with a youthful mindset.

On behalf of my family, we wish you a very peaceful and happy life ahead, knowing that your soon-to-be-opened clinic will prosper and succeed.
Whenever we have a chance to visit Japan, we will make sure to come and see you in order to express our respect and gratitude to you as our mentor, supervisor, and simply as our DEAREST PROFESSOR.

With much love and respect





石橋先生、大変お世話になりました

内分泌代謝 OB　　村上　明子

石橋先生、この度はご退官誠におめでとうございます。寄稿の機会をお借りして、石橋先生には大変お世話になり、感謝の気持ちを述べさせて頂きたいと思います。

石橋先生にはカンファレンスで困った症例を相談すると優しくご教授して下さり、先生との面談の際には困っている事がないか先生から聞いて下さって、とても話やすく相談しやすい環境を作って下さりました。また、大学院卒業後も自分の苦悩や事情について理解を示して下さり、助力頂き、大変お世話になりました。心より感謝の気持ちを申し上げます。今後の先生の益々のご活躍を心よりお祈り申し上げます。



蔓巻公演での BBQ にて

石橋俊先生との想い出

筑波大学附属病院水戸地域医療教育センター
内分泌代謝・糖尿病内科
野牛　宏晃



石橋俊先生、長い間自治医科大学内分泌代謝学部門の発展にご尽力され、本当にお疲れ様でした。定年でのご退任を迎えられたことを心よりお慶び申し上げます。

石橋先生に初めてお会いしたのは、私が 28 歳の時に東京大学第 3 内科 11 研究室で研究生活を開始した時です。当時、山田信博先生が研究室の長であり石橋先生は長兄的な存在でしたが、石橋先生は研究素人の私を 4 年間に渡りご指導下さり、お陰様で研究成果をあげると共に医学博士を習得できました。東京大学の研究生活はアニメ「巨人の星」の星一徹の千本ノック、「タイガーマスク」の虎の穴の様な厳しさで、午前 0 時前に帰宅することなど殆ど無く睡眠を削っての実験漬けの毎日でした。自らの手で新たな知見を得るという研究の醍醐味、論文作成・査読者への回答など多くの事を石橋先生から学べましたし、あの生活が無ければ海外留学への一歩も踏み出せなかったと思います。

米国 NY 州コロンビア大学留学中の 2001 年 9 月 11 日に、テロによるワールドトレードセンター爆破事件が起こりました。NY 州が異様な空気に包まれる中、いち早く安否確認の連絡を下さったのが石橋先生であり大変嬉しかったです。その後、石橋先生が自治医科大学の教授にご就任され、お声がけ頂き私も自治医科大学へ移りました。世界の中心ともいえる NY 州マンハッタンから自治医科大学のある栃木県下野市に初めて来たときには見渡す景色の違いに戸惑いましたが、石橋先生へのご恩返しは今しかないと考え、微力ながら研究室の立ち上げに尽力しました。実験室、RI 室、動物飼育室の整備、実験助手の採用、大学院生のリクルートなど大変な事も多く、石橋先生には良く愚痴を聞いて頂きました。ふとした会話の中で「野牛は同じ釜の飯を食べる同志」と言って頂き、部下ではあるが同志でもあり頼りにして頂いていることが光栄でした。その後、大須賀淳一先生、永島秀一先生、高橋学先生、田副文子先生、大城太一先生、坂井謙斗先生らが集まったことにより研究室の礎が完成したと思います。またコロンビア大学で隣の研究室に所属していた岡田健太先生がその後教室の一員となり、また留学当時私のボスであった Ira J. Goldberg と石橋先生が現在も親しく連絡を取るなど、なんだか不思議な感じがします。

石橋先生は多くを語らず背中で見せるタイプで、優しく尊敬できる先生でした。突然の仕事依頼など無茶振りも多々ありましたが、石橋先生の部下として働けたことが何より幸せであり大きな財産となりました。自治医科大学を離れて随分と時間が経ちましたが、様々な問題に直面すると「石橋先生であればどうするのであろうか」と今でも考えることがあります。

石橋先生の奥様、大変お疲れ様でした。東京大学時代から継続して開催されていたホームパーティーは楽しかったです。また、自治医科大学での花見などにもご参加頂き、アットホームな雰囲気で皆が楽しむことができました。

ご退任後は石橋先生にとって所縁の地でご開業をされると伺っており、診療を第一にまだまだご活躍されることと存じます。奥様と共にお二人の益々のご健勝と末永いご多幸を心よりお祈り申し上げます。

11 年間の感謝を込めて

内分泌代謝 OB　　山岡　桂子

石橋俊先生におかれましては、自治医科大学内分泌代謝学における教授職を終えられ、無事ご退官を迎えられることに対し、心よりお祝い申し上げます。

専門分野での卓越したご業績に関してはすでに多くの先輩方が述べておられると思いますので、私は先生との思い出を辿ってみたいと思います。

先生に初めてお会いしたのは病院見学をした大学 6 年時。見学を一通り終えた後に教授室でお会いしました。とにかく緊張している私に、にこやかに接して下さったのが印象的で、次第に緊張がほぐれていくのを感じました（でも、何をお話下さったかはやはり緊張で覚えておりません、申し訳ありません）。　その後無事自治医科大学にて初期研修をスタート、1 クール目の研修が第一希望の内分泌代謝科で期待に胸を膨らませておりましたが、時に上手くいかないことがあり落ち込んでいる際は、「大変なことがあったのでしょう？大丈夫？」と、専門的なご指導に加え精神面にもお気遣い頂き、恐縮したことを今でも鮮明に覚えております。

入局した後は、育児と仕事の両立に悩むことも多々ありましたが、時に石橋先生から、時にこちらから相談させて頂き、様々な解決策をご提案頂くことで幾度となく前を向き直し、少しずつでも前進出来たと思っております。診療面でも、未熟な自分の足りない所をそっとご指導下さるので色々と質問しやすく、先生のご意見を聞いて診療の視野が広がっていくのを日々実感しておりました。

石橋先生は、見ておられない様でこちらの様子をしっかり見ておられ、その時々の丁度良いタイミングで声を掛けて下さるのでいつも救われておりました。先生のその努力を怠らず、かつ趣味も充実させ人生を謳歌される姿勢は私の目標です。今後ますますのご健康とご活躍を祈念しております。

石橋先生との思い出

山﨑内科医院　　山﨑　久隆

石橋先生、長きに渡り自治医大でのお勤めお疲れさまでした。また新たにご開業おめでとうございます。私と石橋先生との出会いは私が研修医時代に日本内科学会の関東地方会で SITSH の症例を発表し当時病棟の大ベンだった安藤明彦先生、中ベンだった野口（旧姓：高橋）仁麗先生と一緒に都内で食事会を開いてくださったのが最初でした。入局当初より先生の優しいお人柄に惹かれ内分泌代謝科の分野に興味もあり入局したのを覚えております。何より1番の先生との思い出は私が大学院に入る前(2013 年 3 月）にカナダのバンクーバーで行われたキーストンシンポジアにご一緒できたことです。研究はもちろん英語もろくにできない自分に「山﨑の最終目標だから」と言われ午前中は学会に出席し午後はスキーリゾート地であるウィスラーへ行きスキーをしに行くという今思えば夢のような出来事でした。ゴンドラで山の中間地点（それでもかなり急斜だったと思いますが）まで上がり「山﨑、どっちに行く？」と言われ、急斜面を選択したのが運命の別れ道だった気がします。石橋先生は颯爽と降りて行く一方、私は「転げ落ちる」といった方が妥当でしょうか（更に先生はなんと当日の早朝にホテルのランニングマシンで走ったとの話を後から伺い恐れ入りました！）。当然私は石橋先生のお荷物だったと思いますが手を貸して頂きなんとか山の麓まで助けて頂きました。斯くして私は大学院に入ったわけですが今思えばこのスキーと同じような体験を大学院生活でもしていたのかもしれません。大学院2年目にして共同研究者とトラブルとなり与えられていた研究テーマを変更せざるおえない状況（転げ落ちる）となりました。しかしながら先生は打開策を導いて頂き高橋学先生ご指導のもと動脈硬化形成におけるマクロファージの泡沫化の研究を一部担わせて頂き卒業するまでに至りました。その後も最終的に日本動脈硬化学会では若手研究者奨励賞まで受賞することができ石橋先生のご指導がなければ成し得なかったことは言うまでもありません。ご一緒した数十年間、先生のユーモア溢れるお人柄と優しさに支えられ体力・知力・精神力共にただ尊敬するばかりでした。それ以外も先生のご自宅にお邪魔したことや医局のイベントで大はしゃぎした記憶も懐かしい思い出です。アカデミックな分野に没頭できず夢のキーストン学会での発表目標？には届きませんでしたが先生のおかげで七転び八起きの精神を養えたことは私の財産です。大変お世話になりました。いまだに臨床の場で悩んだ時にフッと先生のお顔を思い出す時があり背筋が正されることがあります。今後ともご指導・ご鞭撻の程宜しくお願い致します。





大切な思い出をいただきました

さいたま記念病院　　渡邉 秀平

石橋 教授、ご無沙汰しております。この度はご退官おめでとうございます。
長年にわたるご功績に心から敬意を表します。在職中には一方ならぬご厚情とご指導を賜り誠にありがとうございました。
お教えいただいたこと、お世話になったことをはじめ、色々思い出されます。
内分泌代謝科のカンファレンスや論文作成、予演会等での厳しくも暖かいご指導には、勉強させて頂くことは勿論、未熟者の私にとっては精神面においても大変励まされました。
また車でご一緒頂いたスキー旅行では、私がどれだけ頑張って進んでも追いつけない先生の滑るスピードやその進路の正確さを目の当たりにして、どこか先生の生き様と重なり、感服しておりました。入局前にご自宅に伺った際には、奥様の美味しい手料理をご馳走になりながら、仕事場以外で初めて先生とお話させて頂き、その暖かく懐の深いお人柄に触れ、入局したいと強く感じたこと、今でも鮮明に覚えております。医局旅行や忘年会のカラオケでご一緒させて頂いた際には、先生の柔らかなお気遣いにより、普段であれば恐縮してしまうところを心から楽しく歌えたこと、まだまだ記憶に新しいです。
数え切れないほどの先生との大切な思い出がございます。感謝しております、本当にありがとうございます。
最後にはなりますが、先生の益々のご健勝とご多幸を心よりお祈りしております。今後とも何かとお世話になる機会があると存じますが、その際には何卒ご指導ご鞭撻のほどよろしくお願いいたします。

王　暁黎

I graduated from the Jichi Medical University in 2011. During the 4 years in Jichi Medical University, I learned the basic and clinical knowledge of endocrine and metabolic diseases, especially dyslipidemia, from Ishibashi sensei, established a research direction, and continued to carry out research in this field after returning to China. The research results were published in such journals as Atherosclerosis, Frontier in Endocrinology, and I also started teaching graduate students. My study and life in Japan are the most memorable and happy days of my life.







岡崎 啓明

見知らぬ研修医の電話相談にも親身に教えて頂いたのがきっかけで、臨床に研究に多くを学ばせて頂き本当にありがとうございました。今後のご多幸を心より祈念しております。

岡田 健太

ご退官おめでとうございます。ご在任中はひとかたならぬ厚情とご指導を賜り、深く感謝いたしております。末ながいご多幸をお祈りいたします。

永島 秀一

石橋先生、これまで大変お世話になりました。20年もご指導いただきましたのに未だ未熟で申し訳ございません。また本当にありがとうございました。

倉科 智行

石橋先生ご退官おめでとうございます。18年を振り返り様々な思いが去来しますが、医師として先生の御指導を受けられたことは本当に幸いでした。ありがとうございました。

若林 徹治

石橋先生、これまで本当にお世話になりました。臨床・研究共に、先生に御指導頂いたことが自分の礎となっております。今後新天地での益々の御活躍を祈念しております。

竹田 幸代

石橋先生、本当にお世話になりました。時短でありながら臨床医を続けてこられたのは先生のお陰だと本当に感謝しています。今後のご健康と益々のご活躍をお祈りいたします。

武井 暁一

石橋先生、御退官おめでとうございます。臨床、研究とたくさん御指導いただきありがとうございました。今後の益々の御活躍を祈念しております。

武井 祥子

御退官おめでとうございます。臨床においても研究においても御指導いただきまして誠にありがとうございました。益々のご活躍をお祈り申し上げます。

近藤　泰之

定年退官おめでとうございます。学会発表や今後の論文作成等のご指導誠にありがとうございました。羽生市でのご活躍を心よりお祈り申し上げます。

犀川 理加

石橋先生、ご退官おめでとうございます。さいたまから私を受け入れていただき、短い間でしたがお世話になり、ありがとうございました。いただいたストーブ大切にします！笑

櫻井 百恵

臨床で多くをご指導頂いたことは勿論ですが、一番印象に残っているのは日光登山です。私も先生を目標に百名山登頂を目指します。今後益々のご活躍をお祈り申し上げます。

藤田英理子

石橋先生ご退官おめでとうございます。つくばから異動してきた私を快く迎えてくださり、臨床を続けさせて頂けたことに大変感謝しています。ありがとうございました。

甲賀 裕希子

ご退官おめでとうございます。入局してから様々なご指導を頂き、その中で自分のやりたい事もやらせて頂き、感謝しております。今後益々のご活躍を祈念致しております。



岡 聖典

私のような比較的無礼な部下にも穏やかに接してくださり、感謝するばかりです。先生が退官され名残惜しく思いますが、今後の益々のご活躍をお祈り申し上げます。

加藤 夏果

御退官おめでとうございます。日常の病棟診療から学会発表まで、ご指導いただきありがとうございました。先生から教えていただいたことを胸に今後も研鑽してまいります。

木村多恵

長い間ありがとうございました。また、クリニックのほうでは患者さんのことでお世話になることもあるかと思いますが、どうぞよろしくお願い申し上げます。

檜垣 仁人

ご退官おめでとうございます。カンファレンスを通じてご指導頂き、ありがとうございました。今後のご健康とご活躍をお祈り致します。本当にありがとうございました。

堀越 裕樹

ご退官おめでとうございます。短い間でしたが、先生の下でお仕事ができ大変嬉しく思っております。これからもお身体を大切に、益々のご活躍をお祈り申し上げます。

菊地 栄作

短い間ではございましたが、カンファランスなどを通し内分泌代謝学の診療をご教授いただきましてありがとうございました。これからも益々のご活躍を祈念しております。

澁谷 浩史

ご退官おめでとうございます。これまで学会・論文発表、研究、臨床と数々のご指導をありがとうございました。教えて頂いたことをこれからも大切にしていきたいと思います。

澤山 渚

ご退官おめでとうございます。これまでのご功労に敬意を表し、感謝申し上げます。今後のご健康と、ますますのご活躍をお祈り申し上げます。

浅野 拓己

医師でない私を引き受け、ご指導くださりありがとうございました。2年間でしたが、とても密度の濃いものになりました。新天地での益々のご活躍を祈念しております。

髙橋 学

長年のご勤務お疲れ様でした。これまで臨床・研究とご指導いただき、心より感謝しています。新年会や海外の学会など懐かしいです。今後、益々のご活躍をお祈りいたします。

岡田 修和

石橋俊先生。長いあいだお疲れさまでした。しかしまだこれからご活躍されることと思います。いろいろとご配慮いただき感謝しております。たいへんありがとうございました。

山﨑 久隆

石橋先生、大変お世話になりました。七転び八起きの精神を養えたのは先生のおかげです。先生には感謝しきれません。今後とも宜しくお願い致します。

馬場 千恵子

ご退官おめでとうございます。看護外来開設など本当にお世話になりました。益々のご活躍をお祈り申し上げます。

荒井 則子

ご退官おめでとうございます。異動初年度で不慣れな私にも診療科ヒアリングなどで御支援いただきありがとうございました。今後のご健康とご多幸を心より祈念申し上げます。

新井 茉美

ご退官おめでとうございます。外来でもご支援いただき本当にありがとうございました。益々のご活躍を祈念しております。

野口 清美

益々のご活躍を祈念いたします。

林 美賀

長い間の教授職を無事終えられ、おめでとうございます。ご着任の早い時期から本当にお世話になり、ありがとうございました。今後、益々ご活躍されることを願っております。

瀬下 美帆子

ご退官おめでとうございます。大変お世話になりました。新天地でのご活躍をお祈り致します。

山本 慶子

ご退官おめでとうございます。そして長年のお勤めお疲れ様でした。先生のお陰で成長の場を与えて頂きました。心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

本嶋 恵美

退官をお送りするのは2人目ですが、先生の教授人生の最後に携われ光栄に思います。今後お忙しくとも患者様の健康だけでなくご自愛もお忘れなく。ご多幸を祈念いたします。

yosetti.com

論　文　業　績



間ノ岳（南アルプス）3189m　3 回登頂

Original papers in English

1) Yamada N, Karasawa T, Ito J, Yamamuro D, Morimoto K, Nakamura T, Komada T, Baatarjav C, Saimoto Y, Jinnouchi Y, Watanabe K, Miura K, Yahagi N, Nakagawa K, Matsumura T, Yamada KI, Ishibashi S, Sata N, Conrad M, Takahashi M. Inhibition of 7-dehydrocholesterol reductase prevents hepatic ferroptosis under an active state of sterol synthesis. Nat Commun. 2024 Mar 12;15(1):2195. doi: 10.1038/s41467-024-46386-6.PMID: 38472233
2) Murakami A, Ebihara K, Isoda M, Ebihara C, Shibuya K, Takei A, Takei S, Wakabayashi T, Yamamuro D, Takahashi M, Nagashima S, Dezaki K, Ishibashi S. Direct action of celastrol on hypothalamic ARC neurons to increase leptin sensitivity. Jichi Medical University Journal. 2023; 46:9-16.
3) Takahashi M, Okazaki H, Tada H, Ishibashi S.: A case of cerebrotendinous xanthomatosis with massive xanthomas but without a considerable increase in serum cholestanol levels. J Clin Lipidol. 2023 Nov-Dec;17(6):834-838. doi: 10.1016/j.jacl.2023.09.008. Epub 2023 Sep 17. PMID: 37777472296)
4) Shibuya K, Ebihara K, Takahashi M, Kurashina T, Nagashima S, Okada K, Ishibashi S.: A Novel Missense MEN1 Mutation in a Sporadic Case of Multiple Endocrine Neoplasia Type 1 Complicated with Papillary Thyroid Carcinoma. JMA J. 2023 Apr 14;6(2):216-219. doi: 10.31662/jmaj.2022-0187. Epub 2023 Mar 6. PMID: 37179722295)
5) Sakurai M, Wakabayashi T, Kondo Y, Ikeda E, Watanabe K, Takei A, Okazaki H, Okada K, Ebihara K, Kakiuchi N, Ogawa S, Fukushima N, Ishibashi S.: A case of vasoactive intestinal peptide-secreting tumor (VIPoma) arising from MEN1 inactivation which recurred 15 years after the initial resection. Endocr J. 2023 Jun 28;70(6):573-579. doi: 10.1507/endocrj.EJ22-0578. Epub 2023 Mar 9.PMID: 36889692
6) Shibuya K, Takahashi M, Nakajima T, Kurashina T, Nagashima S, Okada K, Ebihara K, Kawai K, Ishibashi S. A case of cyclic Cushing's disease requiring short-term hormone replacement therapy after surgery. Jichi Medical University Journal. 2022; 45:61-66.
7) Asano T, Wakabayashi T, Kondo Y, Okada K, Yamamuro D, Koga Y, Oka K, Sakurai M, Sawayama N, Takahashi M, Okazaki H, Ebihara K, Minami K, Morisawa Y, Hatakeyama S, Matsumura M, Ishibashi S. Serum 25-hydroxycholesterol levels are increased in patients with coronavirus disease 2019. J Clin Lipidol. 2022 Nov 6:S1933-2874(22)00296-3. doi: 10.1016/j.jacl.2022.10.012. Epub ahead of print. PMID: 36522261; PMCID: PMC9637049.
8) Das Pradhan A, Glynn RJ, Fruchart JC, MacFadyen JG, Zaharris ES, Everett BM, Campbell SE, Oshima R, Amarenco P, Blom DJ, Brinton EA, Eckel RH, Elam MB, Felicio JS, Ginsberg HN, Goudev A, Ishibashi S, Joseph J, Kodama T, Koenig W, Leiter LA, Lorenzatti AJ, Mankovsky B, Marx N, Nordestgaard BG, Páll D, Ray KK, Santos RD, Soran H, Susekov A, Tendera M, Yokote K, Paynter NP, Buring JE, Libby P, Ridker PM; PROMINENT Investigators. Triglyceride Lowering with Pemafibrate to Reduce Cardiovascular Risk. N Engl J Med. 2022 Nov 24;387(21):1923-1934. doi: 10.1056/NEJMoa2210645. Epub 2022 Nov 5. PMID: 36342113.
9) Iizaka T, Kodama E, Mikura K, Iida T, Imai H, Hashizume M, Kigawa Y, Sugisawa C, Tadokoro R, Endo K, Otsuka F, Isoda M, Ebihara K, Ishibashi S, Nagasaka S. Clinical characteristics and efficacy of pioglitazone in a Japanese patient with familial partial lipodystrophy due to peroxisome proliferator- activated receptor γ gene mutation. Endocr J. 2023 Jan 30;70(1):69-76. doi: 10.1507/endocrj.EJ22-0140. Epub 2022 Sep 29. PMID: 36171144.
10) Kawabata N, Okada K, Ando A, Kurashina T, Takahashi M, Wakabayashi T, Nagata D, Arakawa Y, Haga A, Kogure A, Chiba M, Mogi S, Ishikawa S, Ishibashi S. Dietitian-supported dietary intervention leads to favorable dietary changes in patients with type 2 diabetes: A randomized controlled trial. J Diabetes Investig. 2022 Dec;13(12):1963-1970. doi: 10.1111/jdi.13890. Epub 2022 Aug 30. PMID: 36039846; PMCID: PMC9720194.
11) Takahashi M, Yamamuro D, Wakabayashi T, Takei A, Takei S, Nagashima S, Okazaki H, Ebihara K, Yagyu H, Takayanagi Y, Onaka T, Goldberg IJ, Ishibashi S. Loss of myeloid lipoprotein lipase exacerbates adipose tissue fibrosis with collagen VI deposition and hyperlipidemia in leptin-deficient obese mice. J Biol Chem. 2022 Sep;298(9):102322. doi: 10.1016/j.jbc.2022.102322. Epub 2022 Aug 1. PMID: 35926714; PMCID: PMC9440390.
12) Hatano Y, Sawayama N, Miyashita H, Kurashina T, Okada K, Takahashi M, Matsumoto M, Hoshide S, Sasaki T, Nagashima S, Ebihara K, Mori H, Kario K, Ishibashi S. Sex-specific Association of Primary Aldosteronism With Visceral Adiposity. J Endocr Soc. 2022 Jun 25;6(8):bvac098. doi: 10.1210/jendso/bvac098. PMID: 35822200; PMCID: PMC9268741. 287)
13) Murai N, Saito N, Nii S, Nishikawa Y, Suzuki A, Kodama E, Iida T, Mikura K, Imai H, Hashizume M, Kigawa Y, Tadokoro R, Sugisawa C, Endo K, Iizaka T, Otsuka F, Ishibashi S, Nagasaka S. Diabetic family history in young

Japanese persons with normal glucose tolerance associates with k-means clustering of glucose response to oral glucose load, insulinogenic index and Matsuda index. Metabol Open. 2022 Jun 13;15:100196. doi: 10.1016/j.metop.2022.100196. PMID: 35733612; PMCID: PMC9207666.

14) Shibuya K, Ebihara K, Ebihara C, Sawayama N, Isoda M, Yamamuro D, Takahashi M, Nagashima S, Ishibashi S. AAA-ATPase valosin-containing protein binds the transcription factor SREBP1 and promotes its proteolytic activation by rhomboid protease RHBDL4. J Biol Chem. 2022 Jun;298(6):101936. doi: 10.1016/j.jbc.2022.101936. Epub 2022 Apr 14. PMID: 35430252; PMCID: PMC9127370.
15) Ikeda M, Okamoto K, Suzuki K, Amari M, Takai E, Takatama M, Yokoo H, Ishibashi S, Ikeda Y. Polygenic variants related to familial hypobetalipoproteinemia in a patient with Alzheimer's disease homozygotic for the APOE ε2 allele presenting multiple cortical superficial siderosis and recurrent lobar hemorrhages. Neurogenetics. 2022 Jan;23(1):69-71. doi: 10.1007/s10048-021-00672-3. Epub 2021 Oct 2. PMID: 34599737. 284)
16) Murai N, Saito N, Nii S, Nishikawa Y, Suzuki A, Kodama E, Iida T, Mikura K, Imai H, Hashizume M, Kigawa Y, Tadokoro R, Sugisawa C, Endo K, Iizaka T, Otsuka F, Ishibashi S, Nagasaka S. Postloading insulinemia is independently associated with arterial stiffness in young Japanese persons. Hypertens Res. 2021 Nov;44(11):1515-1523. doi: 10.1038/s41440-021-00749-4. Epub 2021 Sep 13. PMID: 34518649; PMCID: PMC8568691.
17) Isoda M, Ebihara K, Sawayama N, Murakami A, Ebihara C, Shibuya K, Takei A, Takei S, Wakabayashi T, Yamamuro D, Takahashi M, Nagashima S, Ishibashi S. Leptin sensitizing effect of 1,3-butanediol and its potential mechanism. Sci Rep. 2021 Sep 6;11(1):17691. doi: 10.1038/s41598-021-96460-y. PMID: 34489483; PMCID: PMC8421515.
18) Kawabata N, Okada K, Ando A, Kurashina T, Takahashi M, Wakabayashi T, Nagata D, Kusano E, Mogi S, Sato T, Ishikawa S, Ishibashi S. Comparison of the effects of frequent versus conventional nutritional interventions in patients with type 2 diabetes mellitus: A randomized, controlled trial. J Diabetes Investig. 2022 Feb;13(2):271-279. doi: 10.1111/jdi.13657. Epub 2021 Sep 24. PMID: 34480785; PMCID: PMC8847137.
19) Naito R, Daida H, Masuda D, Harada-Shiba M, Arai H, Bujo H, Ishibashi S, Koga N, Oikawa S, Yamashita S. Relation of Serum Lipoprotein(a) Levels to Lipoprotein and Apolipoprotein Profiles and Atherosclerotic Diseases in Japanese Patients with Heterozygous Familial Hypercholesterolemia: Familial Hypercholesterolemia Expert Forum (FAME) Study. J Atheroscler Thromb. 2022 Aug 1;29(8):1188-1200. doi: 10.5551/jat.63019. Epub 2021 Aug 30. PMID: 34456199; PMCID: PMC9371754.
20) Ikeda M, Okamoto K, Suzuki K, Takai E, Kasahara H, Furuta N, Furuta M, Tashiro Y, Shimizu C, Takatama S, Naito I, Sato M, Sakai Y, Takahashi M, Amari M, Takatama M, Higuchi T, Tsushima Y, Yokoo H, Kurabayashi M, Ishibashi S, Ishii K, Ikeda Y. Recurrent Lobar Hemorrhages and Multiple Cortical Superficial Siderosis in a Patient of Alzheimer's Disease With Homozygous APOE ε2 Allele Presenting Hypobetalipoproteinemia and Pathological Findings of ¹⁸F-THK5351 Positron Emission Tomography: A Case Report. Front Neurol. 2021 Jul 7;12:645625. doi: 10.3389/fneur.2021.645625. PMID: 34305778; PMCID: PMC8294698.
21) Murai N, Saito N, Kodama E, Iida T, Mikura K, Imai H, Kaji M, Hashizume M, Kigawa Y, Koizumi G, Tadokoro R, Sugisawa C, Endo K, Iizaka T, Saiki R, Otsuka F, Ishibashi S, Nagasaka S. Glucose Effectiveness Decreases in Relationship to a Subtle Worsening of Metabolic Parameters in Young Japanese with Normal Glucose Tolerance. Metab Syndr Relat Disord. 2021 Sep;19(7):409-415. doi: 10.1089/met.2021.0017. Epub 2021 Jun 29. PMID: 34190620.
22) Ogura M, Harada-Shiba M, Masuda D, Arai H, Bujo H, Ishibashi S, Daida H, Koga N, Oikawa S, Yamashita S. Factors Associated with Carotid Atherosclerosis and Achilles Tendon Thickness in Japanese Patients with Familial Hypercholesterolemia: A Subanalysis of the Familial Hypercholesterolemia Expert Forum (FAME) Study. J Atheroscler Thromb. 2022 Jun 1;29(6):906-922. doi: 10.5551/jat.62925. Epub 2021 Jun 10. PMID: 34108342; PMCID: PMC9174085. 277)
23) Takahashi M, Ozaki N, Nagashima S, Wakabayashi T, Iwamoto S, Ishibashi S. Normal plasma apoB48 despite the virtual absence of apoB100 in a compound heterozygote with novel mutations in the MTTP gene. J Clin Lipidol. 2021 Jul- Aug;15(4):569-573. doi: 10.1016/j.jacl.2021.04.013. Epub 2021 May 8. PMID: 34052173.
24) Yamaoka K, Nagashima S, Okada N, Sawayama N, Saito S, Takahashi M, Okada K, Endo K, Koizumi M, Sasanuma H, Ebihara K, Kasajima A, Fukushima N, Sata N, Ishibashi S. A case of insulinoma with hypoglycemia that was better managed with lanreotide than octreotide. Clin Case Rep. 2021 May 19;9(5):e04118. doi: 10.1002/ccr3.4118. PMID: 34026158; PMCID: PMC8133073.
25) Yamashita S, Masuda D, Harada-Shiba M, Arai H, Bujo H, Ishibashi S, Daida H, Koga N, Oikawa S. Effectiveness

and Safety of Lipid-Lowering Drug Treatments in Japanese Patients with Familial Hypercholesterolemia: Familial Hypercholesterolemia Expert Forum (FAME) Study. J Atheroscler Thromb. 2022 May 1;29(5):608-638. doi: 10.5551/jat.62764. Epub 2021 May 13. PMID: 33980760; PMCID: PMC9135647.

26) Yokote K, Yamashita S, Arai H, Araki E, Matsushita M, Nojima T, Suganami H, Ishibashi S. Effects of pemafibrate on glucose metabolism markers and liver function tests in patients with hypertriglyceridemia: a pooled analysis of six phase 2 and phase 3 randomized double-blind placebo-controlled clinical trials. Cardiovasc Diabetol. 2021 May 4;20(1):96. doi: 10.1186/s12933-021-01291-w. PMID: 33947390; PMCID: PMC8097867.
27) Ando A, Miyamoto M, Saito N, Kotani K, Kamiya H, Ishibashi S, Tavakoli M. Small Fibre Neuropathy Is Associated With Impaired Vascular Endothelial Function in Patients With Type 2 Diabetes. Front Endocrinol (Lausanne). 2021 Apr 14;12:653277. doi: 10.3389/fendo.2021.653277. PMID: 33935969; PMCID: PMC8079951.
28) Wakabayashi T, Takei A, Okada N, Shinohara M, Takahashi M, Nagashima S, Okada K, Ebihara K, Ishibashi S. A novel SOX10 nonsense mutation in a patient with Kallmann syndrome and Waardenburg syndrome. Endocrinol Diabetes Metab Case Rep. 2021 Apr 1;2021:20-0145. doi: 10.1530/EDM-20-0145. Epub ahead of print. PMID: 33913437; PMCID: PMC8115407. 271)
29) Yamashita S, Okazaki M, Okada T, Masuda D, Yokote K, Arai H, Araki E, Ishibashi S. Distinct Differences in Lipoprotein Particle Number Evaluation between GP-HPLC and NMR: Analysis in Dyslipidemic Patients Administered a Selective PPARα Modulator, Pemafibrate. J Atheroscler Thromb. 2021 Sep 1;28(9):974-996. doi: 10.5551/jat.60764. Epub 2021 Feb 2. PMID: 33536398; PMCID: PMC8532064.
30) Okada K, Hoshide S, Kato M, Kanegae H, Ishibashi S, Kario K. Safety and efficacy of empagliflozin in elderly Japanese patients with type 2 diabetes mellitus: A post hoc analysis of data from the SACRA study. J Clin Hypertens (Greenwich). 2021 Apr;23(4):860-869. doi: 10.1111/jch.14131. Epub 2020 Dec 16. PMID: 33326172; PMCID: PMC8678714.
31) Kario K, Okada K, Murata M, Suzuki D, Yamagiwa K, Abe Y, Usui I, Tsuchiya N, Iwashita C, Harada N, Okawara Y, Ishibashi S, Hoshide S. Effects of luseogliflozin on arterial properties in patients with type 2 diabetes mellitus: The multicenter, exploratory LUSCAR study. J Clin Hypertens (Greenwich). 2020 Sep;22(9):1585-1593. doi: 10.1111/jch.13988. Epub 2020 Aug 18. PMID: 32810338; PMCID: PMC7590106.
32) Takei S, Nagashima S, Takei A, Yamamuro D, Wakabayashi T, Murakami A, Isoda M, Yamazaki H, Ebihara C, Takahashi M, Ebihara K, Dezaki K, Takayanagi Y, Onaka T, Fujiwara K, Yashiro T, Ishibashi S. β-Cell-Specific Deletion of HMG-CoA (3-hydroxy-3-methylglutaryl-coenzyme A) Reductase Causes Overt Diabetes due to Reduction of β-Cell Mass and Impaired Insulin Secretion. Diabetes. 2020 Nov;69(11):2352-2363. doi: 10.2337/db19-0996. Epub 2020 Aug 13. PMID: 32796082. 267)
33) Murai N, Saito N, Kodama E, Iida T, Mikura K, Imai H, Kaji M, Hashizume M, Kigawa Y, Koizumi G, Tadokoro R, Sugisawa C, Endo K, Iizaka T, Saiki R, Otsuka F, Ishibashi S, Nagasaka S. Insulin and Proinsulin Dynamics Progressively Deteriorate From Within the Normal Range Toward Impaired Glucose Tolerance. J Endocr Soc. 2020 Jun 5;4(7):bvaa066. doi: 10.1210/jendso/bvaa066. PMID: 32617449; PMCID: PMC7316365.
34) Yamamuro D, Yamazaki H, Osuga JI, Okada K, Wakabayashi T, Takei A, Takei S, Takahashi M, Nagashima S, Holleboom AG, Kuroda M, Bujo H, Ishibashi S. Esterification of 4β-hydroxycholesterol and other oxysterols in human plasma occurs independently of LCAT. J Lipid Res. 2020 Sep;61(9):1287-1299. doi: 10.1194/jlr.RA119000512. Epub 2020 Jun 19. PMID: 32561542; PMCID: PMC7469885.
35) Yamamuro D, Takahashi M, Nagashima S, Wakabayashi T, Yamazaki H, Takei A, Takei S, Sakai K, Ebihara K, Iwasaki Y, Yada T, Ishibashi S. Peripheral circadian rhythms in the liver and white adipose tissue of mice are attenuated by constant light and restored by time-restricted feeding. PLoS One. 2020 Jun 12;15(6):e0234439. doi: 10.1371/journal.pone.0234439. PMID: 32530967; PMCID: PMC7292356.
36) Ohshiro T, Imuta S, Hijikuro I, Yagyu H, Takahashi T, Doi T, Ishibashi S, Tomoda H. The Anti-atherogenic Activity of Beauveriolide Derivative BVD327, a Sterol O-Acyltransferase 2-Selective Inhibitor, in Apolipoprotein E Knockout Mice. Biol Pharm Bull. 2020;43(6):951-958. doi: 10.1248/bpb.b19-00913. PMID: 32475917.
37) Nagashima S, Wakabayashi T, Saito N, Takahashi M, Okada K, Ebihara K, Ishibashi S. Long-term efficacy of the sodium-glucose cotransporter 2 inhibitor, ipragliflozin, in a case of type A insulin resistance syndrome. J Diabetes Investig. 2020 Sep;11(5):1363-1365. doi: 10.1111/jdi.13241. Epub 2020 Mar 20. PMID: 32100949; PMCID: PMC7477530.
38) Yamashita S, Arai H, Yokote K, Araki E, Matsushita M, Nojima T, Suganami H, Ishibashi S. Efficacy and Safety of Pemafibrate, a Novel Selective Peroxisome Proliferator-Activated Receptor α Modulator (SPPARMα): Pooled Analysis of Phase 2 and 3 Studies in Dyslipidemic Patients with or without Statin Combination. Int J Mol Sci.

2019 Nov 6;20(22):5537. doi: 10.3390/ijms20225537. PMID: 31698825; PMCID: PMC6888510.
39) Takei A, Nagashima S, Takei S, Yamamuro D, Murakami A, Wakabayashi T, Isoda M, Yamazaki H, Ebihara C, Takahashi M, Ebihara K, Ishibashi S. Myeloid HMG-CoA Reductase Determines Adipose Tissue Inflammation, Insulin Resistance, and Hepatic Steatosis in Diet-Induced Obese Mice. Diabetes. 2020 Feb;69(2):158-164. doi: 10.2337/db19-0076. Epub 2019 Nov 5. PMID: 31690648.
40) Maekawa T, Okada K, Okada H, Kado S, Kamiya K, Komine M, Murata S, Oka K, Ishibashi S, Ohtsuki M. Case of acute-onset type 1 diabetes induced by long-term immunotherapy with nivolumab in a patient with mucosal melanoma. J Dermatol. 2019 Dec;46(12):e463-e464. doi: 10.1111/1346-8138.15061. Epub 2019 Aug 22. PMID: 31436330.
41) Hatano Y, Araki A, Matsumoto M, Ishibashi S. Low hemoglobin A1c and low body mass index are associated with dementia and activities of daily living disability among Japanese nursing home residents with diabetes. Geriatr Gerontol Int. 2019 Sep;19(9):854-860. doi: 10.1111/ggi.13728. Epub 2019 Jun 30. PMID: 31257696.
42) Araki E, Yamashita S, Arai H, Yokote K, Satoh J, Inoguchi T, Nakamura J, Maegawa H, Yoshioka N, Tanizawa Y, Watada H, Suganami H, Ishibashi S. Efficacy and safety of pemafibrate in people with type 2 diabetes and elevated triglyceride levels: 52-week data from the PROVIDE study. Diabetes Obes Metab. 2019 Jul;21(7):1737-1744. doi: 10.1111/dom.13686. Epub 2019 Apr 1. PMID: 30830727; PMCID: PMC6617746.
43) Yokote K, Yamashita S, Arai H, Araki E, Suganami H, Ishibashi S, Of The K-Study Group OB. Long-Term Efficacy and Safety of Pemafibrate, a Novel Selective Peroxisome Proliferator-Activated Receptor-α Modulator (SPPARMα), in Dyslipidemic Patients with Renal Impairment. Int J Mol Sci. 2019 Feb 6;20(3):706. doi: 10.3390/ijms20030706. PMID: 30736366; PMCID: PMC6386904.
44) Takanashi M, Kimura T, Li C, Tanaka M, Matsuhashi A, Yoshida H, Noda A, Xu P, Takase S, Okazaki S, Iizuka Y, Kumagai H, Ikeda Y, Gotoda T, Takahashi M, Yagyu H, Ishibashi S, Yamauchi T, Kadowaki T, Liang G, Okazaki H. Critical Role of SREBP-1c Large-VLDL Pathway in Environment-Induced Hypertriglyceridemia of Apo AV Deficiency. Arterioscler Thromb Vasc Biol. 2019 Mar;39(3):373-386. doi: 10.1161/ATVBAHA.118.311931. PMID: 30700132; PMCID: PMC6399473.
45) Itoh H, Komuro I, Takeuchi M, Akasaka T, Daida H, Egashira Y, Fujita H, Higaki J, Hirata KI, Ishibashi S, Isshiki T, Ito S, Kashiwagi A, Kato S, Kitagawa K, Kitakaze M, Kitazono T, Kurabayashi M, Miyauchi K, Murakami T, Murohara T, Node K, Ogawa S, Saito Y, Seino Y, Shigeeda T, Shindo S, Sugawara M, Sugiyama S, Terauchi Y, Tsutsui H, Ueshima K, Utsunomiya K, Yamagishi M, Yamazaki T, Yo S, Yokote K, Yoshida K, Yoshimura M, Yoshimura N, Nakao K, Nagai R; EMPATHY Investigators. Achieving LDL cholesterol target levels <1.81 mmol/L may provide extra cardiovascular protection in patients at high risk: Exploratory analysis of the Standard Versus Intensive Statin Therapy for Patients with Hypercholesterolaemia and Diabetic Retinopathy study. Diabetes Obes Metab. 2019 Apr;21(4):791-800. doi: 10.1111/dom.13575. Epub 2018 Dec 6. PMID: 30393955; PMCID: PMC6587486.
46) Sakai K, Nagashima S, Wakabayashi T, Tumenbayar B, Hayakawa H, Hayakawa M, Karasawa T, Ohashi K, Yamazaki H, Takei A, Takei S, Yamamuro D, Takahashi M,Yagyu H, Osuga JI, Takahashi M, Tominaga SI, Ishibashi S. Myeloid HMG-CoA(3-Hydroxy-3-Methylglutaryl-Coenzyme A) Reductase Determines Atherosclerosis byModulating Migration of Macrophages. Arterioscler Thromb Vasc Biol. 2018Nov;38(11):2590-2600. doi: 10.1161/ATVBAHA.118.311664. PMID: 30354246.
47) Wakabayashi T, Takahashi M, Yamamuro D, Karasawa T, Takei A, Takei S, Yamazaki H, Nagashima S, Ebihara K, Takahashi M, Ishibashi S. Inflammasome Activation Aggravates Cutaneous Xanthomatosis and Atherosclerosis in ACAT1 (Acyl-CoA Cholesterol Acyltransferase 1) Deficiency in Bone Marrow. Arterioscler Thromb Vasc Biol. 2018 Nov;38(11):2576-2589. doi: 10.1161/ATVBAHA.118.311648. PMID: 30354239.
48) Yamazaki H, Takahashi M, Wakabayashi T, Sakai K, Yamamuro D, Takei A, TakeiS, Nagashima S, Yagyu H, Sekiya M, Ebihara K, Ishibashi S. Loss of ACAT1 Attenuates Atherosclerosis Aggravated by Loss of NCEH1 in Bone Marrow-Derived Cells. J Atheroscler Thromb. 2019 Mar 1;26(3):246-259. doi: 10.5551/jat.44040. Epub 2018 Oct 4. PMID: 30282838; PMCID: PMC6402884.
49) Yamashita S, Arai H, Yokote K, Araki E, Suganami H, Ishibashi S; K-877 Study Group. Effects of pemafibrate (K-877) on cholesterol efflux capacity and postprandial hyperlipidemia in patients with atherogenic dyslipidemia. J Clin Lipidol. 2018 Sep-Oct;12(5):1267-1279.e4. doi: 10.1016/j.jacl.2018.06.010. Epub 2018 Jun 26. PMID: 30077640.
50) Ando A, Nagasaka S, Ishibashi S. A case with relapsed transient neonatal diabetes mellitus treated with sulfonylurea, ending chronic insulin requirement. Endocrinol Diabetes Metab Case Rep. 2018 Apr

11;2018:18-0005. doi: 10.1530/EDM-18-0005. PMID: 29675256; PMCID: PMC5900458.
51) Arai H, Yamashita S, Yokote K, Araki E, Suganami H, Ishibashi S; K-877 Study Group. Efficacy and Safety of Pemafibrate Versus Fenofibrate in Patients with High Triglyceride and Low HDL Cholesterol Levels: A Multicenter, Placebo- Controlled, Double-Blind, Randomized Trial. J Atheroscler Thromb. 2018 Jun 1;25(6):521-538. doi: 10.5551/jat.44412. Epub 2018 Apr 7. PMID: 29628483; PMCID: PMC6005227.
52) Itoh H, Komuro I, Takeuchi M, Akasaka T, Daida H, Egashira Y, Fujita H, Higaki J, Hirata KI, Ishibashi S, Isshiki T, Ito S, Kashiwagi A, Kato S, Kitagawa K, Kitakaze M, Kitazono T, Kurabayashi M, Miyauchi K, Murakami T, Murohara T, Node K, Ogawa S, Saito Y, Seino Y, Shigeeda T, Shindo S, Sugawara M, Sugiyama S, Terauchi Y, Tsutsui H, Ueshima K, Utsunomiya K, Yamagishi M, Yamazaki T, Yo S, Yokote K, Yoshida K, Yoshimura M, Yoshimura N, Nakao K, Nagai R; EMPATHY Investigators. Intensive Treat-to-Target Statin Therapy in High-Risk Japanese Patients With Hypercholesterolemia and Diabetic Retinopathy: Report of a Randomized Study. Diabetes Care. 2018 Jun;41(6):1275-1284. doi: 10.2337/dc17-2224. Epub 2018 Apr 6. PMID: 29626074.
53) Matsuba I, Matsuba R, Ishibashi S, Yamashita S, Arai H, Yokote K, Suganami H, Araki E. Effects of a novel selective peroxisome proliferator-activated receptor-α modulator, pemafibrate, on hepatic and peripheral glucose uptake in patients with hypertriglyceridemia and insulin resistance. J Diabetes Investig. 2018 Nov;9(6):1323-1332. doi: 10.1111/jdi.12845. Epub 2018 Apr 26. PMID: 29603684; PMCID: PMC6215940.
54) Ando A, Gantulga D, Nakata M, Maekawa F, Dezaki K, Ishibashi S, Yada T. Weaning stage hyperglycemia induces glucose-insensitivity in arcuate POMC neurons and hyperphagia in type 2 diabetic GK rats. Neuropeptides. 2018 Apr;68:49-56. doi: 10.1016/j.npep.2018.02.001. Epub 2018 Feb 6. PMID: 29525472.
55) Araki E, Yamashita S, Arai H, Yokote K, Satoh J, Inoguchi T, Nakamura J, Maegawa H, Yoshioka N, Tanizawa Y, Watada H, Suganami H, Ishibashi S. Effects of Pemafibrate, a Novel Selective PPARα Modulator, on Lipid and Glucose Metabolism in Patients With Type 2 Diabetes and Hypertriglyceridemia: A Randomized, Double- Blind, Placebo-Controlled, Phase 3 Trial. Diabetes Care. 2018 Mar;41(3):538-546. doi: 10.2337/dc17-1589. Epub 2018 Jan 3. PMID: 29298800.
56) Ishibashi S, Arai H, Yokote K, Araki E, Suganami H, Yamashita S; K-877 Study Group. Efficacy and safety of pemafibrate (K-877), a selective peroxisome proliferator-activated receptor α modulator, in patients with dyslipidemia: Results from a 24-week, randomized, double blind, active-controlled, phase 3 trial. J Clin Lipidol. 2018 Jan-Feb;12(1):173-184. doi: 10.1016/j.jacl.2017.10.006. Epub 2017 Oct 28. PMID: 29203092
57) Ueki K, Sasako T, Okazaki Y, Kato M, Okahata S, Katsuyama H, Haraguchi M, Morita A, Ohashi K, Hara K, Morise A, Izumi K, Ishizuka N, Ohashi Y, Noda M, Kadowaki T; J-DOIT3 Study Group. Effect of an intensified multifactorial intervention on cardiovascular outcomes and mortality in type 2 diabetes (J-DOIT3): an open-label, randomised controlled trial. Lancet Diabetes Endocrinol. 2017 Dec;5(12):951-964. doi: 10.1016/S2213-8587(17)30327-3. Epub 2017 Oct 24. PMID: 29079252.
58) Tanaka S, Kawasaki R, Tanaka-Mizuno S, Iimuro S, Matsunaga S, Moriya T, Ishibashi S, Katayama S, Ohashi Y, Akanuma Y, Sone H, Yamashita H; Japan Diabetes Complications Study Group. Severe hypoglycaemia is a major predictor of incident diabetic retinopathy in Japanese patients with type 2 diabetes. Diabetes Metab. 2017 Oct;43(5):424-429. doi: 10.1016/j.diabet.2017.06.002. Epub 2017 Jul 15. PMID: 28720342.
59) Ando A, Miyamoto M, Kotani K, Okada K, Nagasaka S, Ishibashi S. Cardio- Ankle Vascular Index and Indices of Diabetic Polyneuropathy in Patients with Type 2 Diabetes. J Diabetes Res. 2017;2017:2810914. doi: 10.1155/2017/2810914. Epub 2017 May 9. PMID: 28573145; PMCID: PMC5441120.
60) Takanashi M, Taira Y, Okazaki S, Takase S, Kimura T, Li CC, Xu PF, Noda A, Sakata I, Kumagai H, Ikeda Y, Iizuka Y, Yahagi N, Shimano H, Osuga JI, Ishibashi S, Kadowaki T, Okazaki H. Role of Hormone-sensitive Lipase in Leptin-Promoted Fat Loss and Glucose Lowering. J Atheroscler Thromb. 2017 Nov 1;24(11):1105-1116. doi: 10.5551/jat.39552. Epub 2017 Apr 12. PMID: 28413180; PMCID: PMC5684476.
61) Arai H, Yamashita S, Yokote K, Araki E, Suganami H, Ishibashi S; K-877 Study Group. Efficacy and safety of K-877, a novel selective peroxisome proliferator-activated receptor α modulator (SPPARMα), in combination with statin treatment: Two randomised, double-blind, placebo-controlled clinical trials in patients with dyslipidaemia. Atherosclerosis. 2017 Jun;261:144-152. doi: 10.1016/j.atherosclerosis.2017.03.032. Epub 2017 Mar 24. PMID: 28410749.
62) Ohmura H, Fukushima Y, Mizuno A, Niwa K, Kobayashi Y, Ebina T, Kimura K, Ishibashi S, Daida H; Research Committee on Primary Hyperlipidemia of the Ministry of Health and Welfare of Japan. Estimated Prevalence of Heterozygous Familial Hypercholesterolemia in Patients With Acute Coronary Syndrome. Int Heart J. 2017 Feb 7;58(1):88-94. doi: 10.1536/ihj.16-188. Epub 2017 Jan 24. PMID: 28123161.

63) Okada K, Kotani K, Ebihara K, Yamazaki H, Ishibashi S. Predictors of response to ipragliflozin treatment in patients with type 2 diabetes mellitus. Int J Clin Pharmacol Ther. 2016 Dec;54(12):1004-1008. doi: 10.5414/CP202622. PMID: 27615008.
64) Nagashima S, Morishima K, Okamoto H, Ishibashi S. Possible involvement of PCSK9 overproduction in hyperlipoproteinemia associated with hepatocellular carcinoma: A case report. J Clin Lipidol. 2016 Jul-Aug;10(4):1045-1049. doi: 10.1016/j.jacl.2016.05.004. Epub 2016 May 14. PMID: 27578139.
65) Moriya T, Tanaka S, Sone H, Ishibashi S, Matsunaga S, Ohashi Y, Akanuma Y, Haneda M, Katayama S. Patients with type 2 diabetes having higher glomerular filtration rate showed rapid renal function decline followed by impaired glomerular filtration rate: Japan Diabetes Complications Study. J Diabetes Complications. 2017 Feb;31(2):473-478. doi: 10.1016/j.jdiacomp.2016.06.020. Epub 2016 Jun 29. PMID: 27396240.
66) Ishibashi S, Yamashita S, Arai H, Araki E, Yokote K, Suganami H, Fruchart JC, Kodama T; K-877-04 Study Group. Effects of K-877, a novel selective PPARα modulator (SPPARMα), in dyslipidaemic patients: A randomized, double blind, active- and placebo-controlled, phase 2 trial. Atherosclerosis. 2016 Jun;249:36-43. doi: 10.1016/j.atherosclerosis.2016.02.029. Epub 2016 Feb 26. PMID: 27062408.
67) Tanaka S, Tanaka S, Iimuro S, Ishibashi S, Yamashita H, Moriya T, Katayama S, Akanuma Y, Ohashi Y, Yamada N, Araki A, Ito H, Sone H; Japan Diabetes Complications Study Group. Maximum BMI and microvascular complications in a cohort of Japanese patients with type 2 diabetes: the Japan Diabetes Complications Study. J Diabetes Complications. 2016 Jul;30(5):790-7. doi: 10.1016/j.jdiacomp.2016.02.020. Epub 2016 Mar 2. PMID: 26997170.
68) Okada K, Kotani K, Ishibashi S. Ankle-brachial index and eicosapentaenoic acid/arachidonic acid ratio in smokers with type 2 diabetes mellitus. Tob Induc Dis. 2016 Jan 28;14:2. doi: 10.1186/s12971-016-0068-9. PMID: 26834530; PMCID: PMC4731969.
69) Enkhtuvshin B, Tamemoto H, Nagashima S, Tumenbayar B, Sakai K, Osuga J, Takahashi M, Tominaga S, Ishibashi S. Critical role of the length of the first β strand in insulin receptor kinase activity. Jichi Medical University Journal. 2015; 38:1-8.
70) Osaki Y, Nakagawa Y, Miyahara S, Iwasaki H, Ishii A, Matsuzaka T, Kobayashi K, Yatoh S, Takahashi A, Yahagi N, Suzuki H, Sone H, Ohashi K, Ishibashi S, Yamada N, Shimano H. Skeletal muscle-specific HMG-CoA reductase knockout mice exhibit rhabdomyolysis: A model for statin-induced myopathy. Biochem Biophys Res Commun. 2015 Oct 23;466(3):536-40. doi: 10.1016/j.bbrc.2015.09.065. Epub 2015 Sep 14. PMID: 26381177.
71) Kurashina T, Dezaki K, Yoshida M, Sukma Rita R, Ito K, Taguchi M, Miura R, Tominaga M, Ishibashi S, Kakei M, Yada T. The β-cell GHSR and downstream cAMP/TRPM2 signaling account for insulinostatic and glycemic effects of ghrelin. Sci Rep. 2015 Sep 15;5:14041. doi: 10.1038/srep14041. PMID: 26370322; PMCID: PMC4570196.
72) Ohshiro T, Ohtawa M, Nagamitsu T, Matsuda D, Yagyu H, Davis MA, Rudel LL, Ishibashi S, Tomoda H. New pyripyropene A derivatives, highly SOAT2-selective inhibitors, improve hypercholesterolemia and atherosclerosis in atherogenic mouse models. J Pharmacol Exp Ther. 2015 Nov;355(2):299-307. doi: 10.1124/jpet.115.227348. Epub 2015 Sep 3. PMID: 26338984; PMCID: PMC4613958.
73) Nagashima S, Yagyu H, Tozawa R, Tazoe F, Takahashi M, Kitamine T, Yamamuro D, Sakai K, Sekiya M, Okazaki H, Osuga J, Honda A, Ishibashi S. Plasma cholesterol-lowering and transient liver dysfunction in mice lacking squalene synthase in the liver. J Lipid Res. 2015 May;56(5):998-1005. doi: 10.1194/jlr.M057406. Epub 2015 Mar 9. PMID: 25755092; PMCID: PMC4409289.
74) Enkhtuvshin B, Nagashima S, Saito N, Wakabayashi T, Ando A, Takahashi M, Sakai K, Yamamuro D, Nagasaka S, Tamemoto H, Ishibashi S. Successful pregnancy outcomes in a patient with type A insulin resistance syndrome. Diabet Med. 2015 Jun;32(6):e16-9. doi: 10.1111/dme.12659. PMID: 25472847; PMCID: PMC5034500.
75) Okada K, Kotani K, Yagyu H, Ishibashi S. Eicosapentaenoic acid/arachidonic acid ratio and smoking status in elderly patients with type 2 diabetes mellitus. Diabetol Metab Syndr. 2014 Aug 13;6(1):85. doi: 10.1186/1758-5996-6-85. PMID: 25143787; PMCID: PMC4138366.
76) Sekiya M, Yamamuro D, Ohshiro T, Honda A, Takahashi M, Kumagai M, Sakai K, Nagashima S, Tomoda H, Igarashi M, Okazaki H, Yagyu H, Osuga J, Ishibashi S. Absence of Nceh1 augments 25-hydroxycholesterol-induced ER stress and apoptosis in macrophages. J Lipid Res. 2014 Oct;55(10):2082-92. doi: 10.1194/jlr.M050864. Epub 2014 Jun 2. PMID: 24891333; PMCID: PMC4174001.
77) Kuroda M, Holleboom AG, Stroes ES, Asada S, Aoyagi Y, Kamata K, Yamashita S, Ishibashi S, Saito Y, Bujo H. Lipoprotein subfractions highly associated with renal damage in familial lecithin:cholesterol acyltransferase deficiency. Arterioscler Thromb Vasc Biol. 2014 Aug;34(8):1756-62. doi: 10.1161/ATVBAHA.114.303420. Epub

2014 May 29. PMID: 24876348.
78) Sakai K, Igarashi M, Yamamuro D, Ohshiro T, Nagashima S, Takahashi M, Enkhtuvshin B, Sekiya M, Okazaki H, Osuga J, Ishibashi S. Critical role of neutral cholesteryl ester hydrolase 1 in cholesteryl ester hydrolysis in murine macrophages. J Lipid Res. 2014 Oct;55(10):2033-40. doi: 10.1194/jlr.M047787. Epub 2014 May 27. PMID: 24868095; PMCID: PMC4173996.
79) Okada K, Kotani K, Yagyu H, Ando A, Osuga J, Ishibashi S. Effects of treatment with liraglutide on oxidative stress and cardiac natriuretic peptide levels in patients with type 2 diabetes mellitus. Endocrine. 2014 Dec;47(3):962-4. doi: 10.1007/s12020-014-0246-6. Epub 2014 Apr 3. PMID: 24696097; PMCID: PMC4239782.
80) Shirai K, Saiki A, Oikawa S, Teramoto T, Yamada N, Ishibashi S, Tada N, Miyazaki S, Inoue I, Murano S, Sakane N, Satoh-Asahara N, Bujo H, Miyashita Y, Saito Y. The effects of partial use of formula diet on weight reduction and metabolic variables in obese type 2 diabetic patients--multicenter trial. Obes Res Clin Pract. 2013 Jan-Feb;7(1):e43-54. doi: 10.1016/j.orcp.2012.03.002. PMID: 24331681.
81) Miyamoto M, Kotani K, Okada K, Ando A, Hasegawa H, Kanai H, Ishibashi S, Yamada T, Taniguchi N. Arterial wall elasticity measured using the phased tracking method and atherosclerotic risk factors in patients with type 2 diabetes. J Atheroscler Thromb. 2013;20(8):678-87. doi: 10.5551/jat.16220. Epub 2013 May 2. PMID: 23648429.
82) Okada K, Yagyu H, Kotani K, Yamazaki H, Ozaki K, Takahashi M, Nagashima S, Osuga J, Ishibashi S. Effects of miglitol versus sitagliptin on postprandial glucose and lipoprotein metabolism in patients with type 2 diabetes mellitus. Endocr J. 2013;60(7):913-22. doi: 10.1507/endocrj.ej13-0019. Epub 2013 Apr 10. PMID: 23574730.
83) Takase S, Osuga J, Fujita H, Hara K, Sekiya M, Igarashi M, Takanashi M, Takeuchi Y, Izumida Y, Ohta K, Kumagai M, Nishi M, Kubota M, Masuda Y, Taira Y, Okazaki S, Iizuka Y, Yahagi N, Ohashi K, Yoshida H, Yanai H, Tada N, Gotoda T, Ishibashi S, Kadowaki T, Okazaki H. Apolipoprotein C-II deficiency with no rare variant in the APOC2 gene. J Atheroscler Thromb. 2013;20(5):481-93. doi: 10.5551/jat.16592. Epub 2013 Mar 7. PMID: 23470567.
84) Sone H, Tanaka S, Tanaka S, Suzuki S, Seino H, Hanyu O, Sato A, Toyonaga T, Okita K, Ishibashi S, Kodama S, Akanuma Y, Yamada N; Japan Diabetes Complications Study Group. Leisure-time physical activity is a significant predictor of stroke and total mortality in Japanese patients with type 2 diabetes: analysis from the Japan Diabetes Complications Study (JDCS). Diabetologia. 2013 May;56(5):1021-30. doi: 10.1007/s00125-012-2810-z. Epub 2013 Feb 27. PMID: 23443242.
85) Takahashi M, Yagyu H, Tazoe F, Nagashima S, Ohshiro T, Okada K, Osuga J, Goldberg IJ, Ishibashi S. Macrophage lipoprotein lipase modulates the development of atherosclerosis but not adiposity. J Lipid Res. 2013 Apr;54(4):1124-34. doi: 10.1194/jlr.M035568. Epub 2013 Feb 3. PMID: 23378601; PMCID: PMC3605988.
86) Kawasaki R, Tanaka S, Tanaka S, Abe S, Sone H, Yokote K, Ishibashi S, Katayama S, Ohashi Y, Akanuma Y, Yamada N, Yamashita H; Japan Diabetes Complications Study Group. Risk of cardiovascular diseases is increased even with mild diabetic retinopathy: the Japan Diabetes Complications Study. Ophthalmology. 2013 Mar;120(3):574-582. doi: 10.1016/j.ophtha.2012.08.029. Epub 2012 Nov 20. PMID: 23174397.
87) Okada K, Osuga J, Kotani K, Yagyu H, Miyamoto M, Nagasaka S, Ishibashi S. Current smoking status may be associated with overt albuminuria in female patients with type 1 diabetes mellitus: a cross-sectional study. Tob Induc Dis. 2012 Aug 10;10(1):12. doi: 10.1186/1617-9625-10-12. PMID: 22883528; PMCID: PMC3476992.
88) Yagyu H, Nagashima S, Takahashi M, Miyamoto M, Okada K, Osuga J, Ishibashi S. Ezetimibe, an inhibitor of Niemann-Pick C1-like 1 protein, decreases cholesteryl ester transfer protein in type 2 diabetes mellitus. Endocr J. 2012;59(12):1077-84. doi: 10.1507/endocrj.ej12-0132. Epub 2012 Jul 26. PMID: 22850130.
89) Nagasaka S, Kusaka I, Yamashita K, Funase Y, Yamauchi K, Katakura M, Ishibashi S, Aizawa T. Index of glucose effectiveness derived from oral glucose tolerance test. Acta Diabetol. 2012 Dec;49 Suppl 1:S195-204. doi: 10.1007/s00592-012-0417-y. Epub 2012 Jul 27. PMID: 22836490.
90) Nagashima S, Yagyu H, Ohashi K, Tazoe F, Takahashi M, Ohshiro T, Bayasgalan T, Okada K, Sekiya M, Osuga J, Ishibashi S. Liver-specific deletion of 3-hydroxy-3-methylglutaryl coenzyme A reductase causes hepatic steatosis and death. Arterioscler Thromb Vasc Biol. 2012 Aug;32(8):1824-31. doi: 10.1161/ATVBAHA.111.240754. Epub 2012 Jun 14. PMID: 22701022.
91) Kotani K, Yamada T, Miyamoto M, Ishibashi S, Taniguchi N, Gugliucci A. Influence of atorvastatin on serum amyloid A-low density lipoprotein complex in hypercholesterolemic patients. Pharmacol Rep. 2012;64(1):212-6. doi: 10.1016/s1734-1140(12)70748-x. PMID: 22580538.
92) Miyamoto M, Kotani K, Ishibashi S, Taniguchi N. The effect of antihypertensive drugs on endothelial function as assessed by flow-mediated vasodilation in hypertensive patients. Int J Vasc Med. 2012;2012:453264. doi:

10.1155/2012/453264. Epub 2012 Feb 29. PMID: 22489272; PMCID: PMC3303797.
93) Usui F, Kimura H, Ohshiro T, Tatsumi K, Kawashima A, Nishiyama A, Iwakura Y, Ishibashi S, Takahashi M. Interleukin-17 deficiency reduced vascular inflammation and development of atherosclerosis in Western diet-induced apoE- deficient mice. Biochem Biophys Res Commun. 2012 Mar 30;420(1):72-7. doi: 10.1016/j.bbrc.2012.02.117. Epub 2012 Feb 28. PMID: 22402284.
94) Sone H, Tanaka S, Tanaka S, Iimuro S, Ishibashi S, Oikawa S, Shimano H, Katayama S, Ohashi Y, Akanuma Y, Yamada N; Japan Diabetes Complications Study Group. Comparison of various lipid variables as predictors of coronary heart disease in Japanese men and women with type 2 diabetes: subanalysis of the Japan Diabetes Complications Study. Diabetes Care. 2012 May;35(5):1150-7. doi: 10.2337/dc11-1412. Epub 2012 Feb 14. PMID: 22338107; PMCID: PMC3329821.
95) Ogata H, Tokuyama K, Nagasaka S, Tsuchita T, Kusaka I, Ishibashi S, Suzuki H, Yamada N, Hamano K, Kiyono K, Struzik ZR, Yamamoto Y. The lack of long-range negative correlations in glucose dynamics is associated with worse glucose control in patients with diabetes mellitus. Metabolism. 2012 Jul;61(7):1041-50. doi: 10.1016/j.metabol.2011.12.007. Epub 2012 Feb 2. PMID: 22304838.
96) Teramoto T, Kashiwagi A, Ishibashi S, Daida H; Japan Lipid Guideline Achievement Program Investigators. Cross-sectional survey to assess the status of lipid management in high-risk patients with dyslipidemia: clinical impact of combination therapy with ezetimibe. Curr Ther Res Clin Exp. 2012 Feb;73(1-2):1-15. doi: 10.1016/j.curtheres.2012.02.001. PMID: 24653509; PMCID: PMC3954020.
97) Yagyu H, Okada K, Sato S, Yamashita Y, Okada N, Osuga J, Nagasaka S, Sugano K, Ishibashi S. Pegylated interferon-α2b and ribavirin combination therapy induces Hashitoxicosis followed by type 1 diabetes mellitus. Diabetes Res Clin Pract. 2012 Mar;95(3):e52-4. doi: 10.1016/j.diabres.2011.11.016. Epub 2011 Dec 10. PMID: 22154462.
98) Okada K, Miyamoto M, Kotani K, Yagyu H, Osuga J, Nagasaka S, Ishibashi S. Urinary protein as a marker for systolic blood pressure reduction in patients with type 2 diabetes mellitus participating in an in-hospital diabetes education program. Hosp Pract (1995). 2011 Oct;39(4):70-5. doi: 10.3810/hp.2011.10.924. PMID: 22056825.
99) Kotani K, Yamada T, Miyamoto M, Kario K, Ishibashi S, Taniguchi N. The correlation between the cardio-ankle vascular index (CAVI) and serum amyloid A in asymptomatic Japanese subjects. Heart Vessels. 2012 Sep;27(5):499-504. doi: 10.1007/s00380-011-0182-9. Epub 2011 Sep 3. PMID: 21892740.
100) Sone H, Tanaka S, Tanaka S, Iimuro S, Oida K, Yamasaki Y, Oikawa S, Ishibashi S, Katayama S, Ohashi Y, Akanuma Y, Yamada N; Japan Diabetes Complications Study Group. Serum level of triglycerides is a potent risk factor comparable to LDL cholesterol for coronary heart disease in Japanese patients with type 2 diabetes: subanalysis of the Japan Diabetes Complications Study (JDCS). J Clin Endocrinol Metab. 2011 Nov;96(11):3448-56. doi: 10.1210/jc.2011-0622. Epub 2011 Aug 24. PMID: 21865372.
101) Wang XL, Osuga J, Tazoe F, Okada K, Nagashima S, Takahashi M, Ohshiro T, Bayasgalan T, Yagyu H, Okada K, Ishibashi S. Molecular analysis of a novel LCAT mutation (Gly179 → Arg) found in a patient with complete LCAT deficiency. J Atheroscler Thromb. 2011;18(8):713-9. doi: 10.5551/jat.8003. Epub 2011 May 20. PMID: 21597230.
102) Miyamoto M, Kotani K, Okada K, Fujii Y, Konno K, Ishibashi S, Taniguchi N. The correlation of common carotid arterial diameter with atherosclerosis and diabetic retinopathy in patients with type 2 diabetes mellitus. Acta Diabetol. 2012 Feb;49(1):63-8. doi: 10.1007/s00592-011-0287-8. Epub 2011 Apr 29. PMID: 21528431.
103) Ohshiro T, Matsuda D, Sakai K, Degirolamo C, Yagyu H, Rudel LL, Omura S, Ishibashi S, Tomoda H. Pyripyropene A, an acyl-coenzyme A:cholesterol acyltransferase 2-selective inhibitor, attenuates hypercholesterolemia and atherosclerosis in murine models of hyperlipidemia. Arterioscler Thromb Vasc Biol. 2011 May;31(5):1108-15. doi: 10.1161/ATVBAHA.111.223552. Epub 2011 Mar 10. PMID: 21393580.
104) Miyamoto M, Kotani K, Ishibashi S, Taniguchi N. The relationship between urinary 8-hydroxydeoxyguanosine and metabolic risk factors in asymptomatic subjects. Med Princ Pract. 2011;20(2):187-90. doi: 10.1159/000319774. Epub 2011 Jan 20. PMID: 21252578.
105) Ohta K, Sekiya M, Uozaki H, Igarashi M, Takase S, Kumagai M, Takanashi M, Takeuchi Y, Izumida Y, Kubota M, Nishi M, Okazaki H, Iizuka Y, Yahagi N, Yagyu H, Fukayama M, Kadowaki T, Ohashi K, Ishibashi S, Osuga J. Abrogation of neutral cholesterol ester hydrolytic activity causes adrenal enlargement. Biochem Biophys Res Commun. 2011 Jan 7;404(1):254-60. doi: 10.1016/j.bbrc.2010.11.103. Epub 2010 Nov 25. PMID: 21111707.
106) Nagashima S, Yagyu H, Takahashi N, Kurashina T, Takahashi M, Tsuchita T, Tazoe F, Wang XL, Bayasgalan T, Sato N, Okada K, Nagasaka S, Gotoh T, Kojima M, Hyodo M, Horie H, Hosoya Y, Okada M, Yasuda Y, Fujiwara

H, Ohwada M, Iwamoto S, Suzuki M, Nagai H, Ishibashi S. Depot-specific expression of lipolytic genes in human adipose tissues--association among CES1 expression, triglyceride lipase activity and adiposity. J Atheroscler Thromb. 2011;18(3):190-9. doi: 10.5551/jat.6478. Epub 2010 Nov 11. PMID: 21081832.

107) Igarashi M, Osuga J, Uozaki H, Sekiya M, Nagashima S, Takahashi M, Takase S, Takanashi M, Li Y, Ohta K, Kumagai M, Nishi M, Hosokawa M, Fledelius C, Jacobsen P, Yagyu H, Fukayama M, Nagai R, Kadowaki T, Ohashi K, Ishibashi S. The critical role of neutral cholesterol ester hydrolase 1 in cholesterol removal from human macrophages. Circ Res. 2010 Nov 26;107(11):1387-95. doi: 10.1161/CIRCRESAHA.110.226613. Epub 2010 Oct 14. PMID: 20947831.

108) Okada K, Yagyu H, Kotani K, Miyamoto M, Osuga J, Nagasaka S, Ishibashi S. Lipid-lowering effects of ezetimibe for hypercholesterolemic patients with and without type 2 diabetes mellitus. Endocr J. 2010;57(10):903-8. doi: 10.1507/endocrj.k10e-055. Epub 2010 Aug 20. PMID: 20733267.

109) Miyamoto M, Kotani K, Yagyu H, Koibuchi H, Fujii Y, Konno K, Yamada T, Ishibashi S, Taniguchi N. The correlation between CVR-R and carotid atherosclerosis in type 2 diabetes mellitus patients with diabetic neuropathy. J Physiol Anthropol. 2010;29(4):149-52. doi: 10.2114/jpa2.29.149. PMID: 20686328.

110) Eto K, Tumenbayar B, Nagashima S, Tazoe F, Miyamoto M, Takahashi M, Ando A, Okada K, Yagyu H, Ishibashi S. Distinct association of serum FGF21 or adiponectin levels with clinical parameters in patients with type 2 diabetes. Diabetes Res Clin Pract. 2010 Jul;89(1):52-7. doi: 10.1016/j.diabres.2010.03.019. Epub 2010 May 7. PMID: 20452080.

111) Nakayama K, Bayasgalan T, Tazoe F, Yanagisawa Y, Gotoh T, Yamanaka K, Ogawa A, Munkhtulga L, Chimedregze U, Kagawa Y, Ishibashi S, Iwamoto S; Jichi Medical University Promotion Team of a Large-scale Human Genome Bank for All over Japan. A single nucleotide polymorphism in the FADS1/FADS2 gene is associated with plasma lipid profiles in two genetically similar Asian ethnic groups with distinctive differences in lifestyle. Hum Genet. 2010 Jun;127(6):685-90. doi: 10.1007/s00439-010-0815-6. Epub 2010 Apr 3. PMID: 20364269.

112) Takeuchi Y, Yahagi N, Izumida Y, Nishi M, Kubota M, Teraoka Y, Yamamoto T, Matsuzaka T, Nakagawa Y, Sekiya M, Iizuka Y, Ohashi K, Osuga J, Gotoda T, Ishibashi S, Itaka K, Kataoka K, Nagai R, Yamada N, Kadowaki T, Shimano H. Polyunsaturated fatty acids selectively suppress sterol regulatory element- binding protein-1 through proteolytic processing and autoloop regulatory circuit. J Biol Chem. 2010 Apr 9;285(15):11681-91. doi: 10.1074/jbc.M109.096107. Epub 2010 Feb 9. PMID: 20145241; PMCID: PMC2857043.

113) Uurtuya S, Kotani K, Taniguchi N, Yoshioka H, Kario K, Ishibashi S, Yamada T, Kawano M, Khurelbaatar N, Itoh K, Lkhagvasuren T. Comparative study of atherosclerotic parameters in Mongolian and Japanese patients with hypertension and diabetes mellitus. J Atheroscler Thromb. 2010 Feb 26;17(2):181-8. doi: 10.5551/jat.1354. Epub 2010 Feb 3. PMID: 20124737.

114) Sone H, Tanaka S, Iimuro S, Tanaka S, Oida K, Yamasaki Y, Oikawa S, Ishibashi S, Katayama S, Yamashita H, Ito H, Yoshimura Y, Ohashi Y, Akanuma Y, Yamada N; Japan Diabetes Complications Study Group. Long-term lifestyle intervention lowers the incidence of stroke in Japanese patients with type 2 diabetes: a nationwide multicentre randomised controlled trial (the Japan Diabetes Complications Study). Diabetologia. 2010 Mar;53(3):419-28. doi: 10.1007/s00125-009-1622-2. Epub 2010 Jan 7. PMID: 20054522; PMCID: PMC2815795.

115) Munkhtulga L, Nagashima S, Nakayama K, Utsumi N, Yanagisawa Y, Gotoh T, Omi T, Kumada M, Zolzaya K, Lkhagvasuren T, Kagawa Y, Fujiwara H, Hosoya Y, Hyodo M, Horie H, Kojima M, Ishibashi S, Iwamoto S. Regulatory SNP in the RBP4 gene modified the expression in adipocytes and associated with BMI. Obesity (Silver Spring). 2010 May;18(5):1006-14. doi: 10.1038/oby.2009.358. Epub 2009 Oct 22. PMID: 19851303.

116) Uchiyama S, Goto S, Matsumoto M, Nagai R, Origasa H, Yamazaki T, Shigematsu H, Shimada K, Yamada N, Bhatt DL, Steg PG, Ikeda Y; REduction of Atherothrombosis for Continued Health Registry Investigators. Cardiovascular event rates in patients with cerebrovascular disease and atherothrombosis at other vascular locations: results from 1-year outcomes in the Japanese REACH Registry. J Neurol Sci. 2009 Dec 15;287(1-2):45-51. doi: 10.1016/j.jns.2009.09.011. Epub 2009 Oct 7. PMID: 19815240.

117) Sekiya M, Osuga J, Nagashima S, Ohshiro T, Igarashi M, Okazaki H, Takahashi M, Tazoe F, Wada T, Ohta K, Takanashi M, Kumagai M, Nishi M, Takase S, Yahagi N, Yagyu H, Ohashi K, Nagai R, Kadowaki T, Furukawa Y, Ishibashi S. Ablation of neutral cholesterol ester hydrolase 1 accelerates atherosclerosis. Cell Metab. 2009 Sep;10(3):219-28. doi: 10.1016/j.cmet.2009.08.004. PMID: 19723498.

118) Uurtuya S, Kotani K, Taniguchi N, Matsunaga H, Kanai H, Hasegawa H, Kario K, Ishibashi S, Itoh K. Relationship between upper limb peripheral artery stiffness using the radial artery and atherosclerotic parameters. J

Med Ultrason (2001). 2009 Sep;36(3):129-35. doi: 10.1007/s10396-009-0217-3. Epub 2009 Jul 18. PMID: 27277225.

119) Suzuki J, Ueno M, Uno M, Hirose Y, Zenimaru Y, Takahashi S, Osuga J, Ishibashi S, Takahashi M, Hirose M, Yamada M, Kraemer FB, Miyamori I. Effects of hormone-sensitive lipase disruption on cardiac energy metabolism in response to fasting and refeeding. Am J Physiol Endocrinol Metab. 2009 Nov;297(5):E1115-24. doi: 10.1152/ajpendo.91031.2008. Epub 2009 Aug 25. PMID: 19706782.

120) Tokuyama K, Nagasaka S, Mori S, Takahashi N, Kusaka I, Kiyonaga A, Tanaka H, Shindo M, Ishibashi S. Hepatic insulin sensitivity assessed by integrated model of hepatic and peripheral glucose regulation. Diabetes Technol Ther. 2009 Aug;11(8):487-92. doi: 10.1089/dia.2009.0011. PMID: 19698061.

121) Sone H, Tanaka S, Iimuro S, Oida K, Yamasaki Y, Oikawa S, Ishibashi S, Katayama S, Ito H, Ohashi Y, Akanuma Y, Yamada N. Components of metabolic syndrome and their combinations as predictors of cardiovascular disease in Japanese patients with type 2 diabetes. Implications for improved definition. Analysis from Japan Diabetes Complications Study (JDCS). J Atheroscler Thromb. 2009 Aug;16(4):380-7. doi: 10.5551/jat.no117. Epub 2009 Aug 11. PMID: 19672033.

122) Sekiya M, Yahagi N, Tamura Y, Okazaki H, Igarashi M, Ohta K, Takanashi M, Kumagai M, Takase S, Nishi M, Takeuchi Y, Izumida Y, Kubota M, Ohashi K, Iizuka Y, Yagyu H, Gotoda T, Nagai R, Shimano H, Yamada N, Kadowaki T, Ishibashi S, Osuga J. Hormone-sensitive lipase deficiency suppresses insulin secretion from pancreatic islets of Lep ob/ob mice. Biochem Biophys Res Commun. 2009 Sep 25;387(3):511-5. doi: 10.1016/j.bbrc.2009.07.078. Epub 2009 Jul 18. PMID: 19619509.

123) Igarashi M, Osuga J, Isshiki M, Sekiya M, Okazaki H, Takase S, Takanashi M, Ohta K, Kumagai M, Nishi M, Fujita T, Nagai R, Kadowaki T, Ishibashi S. Targeting of neutral cholesterol ester hydrolase to the endoplasmic reticulum via its N-terminal sequence. J Lipid Res. 2010 Feb;51(2):274-85. doi: 10.1194/jlr.M900201-JLR200. Epub 2009 Jul 10. PMID: 19592704; PMCID: PMC2803229.

124) Nakayama K, Bayasgalan T, Yamanaka K, Kumada M, Gotoh T, Utsumi N, Yanagisawa Y, Okayama M, Kajii E, Ishibashi S, Iwamoto S; Jichi Community Genetics Team (JCOG). Large scale replication analysis of loci associated with lipid concentrations in a Japanese population. J Med Genet. 2009 Jun;46(6):370-4. doi: 10.1136/jmg.2008.064063. Epub 2009 Mar 11. Erratum in: J Med Genet. 2009 Dec;46(12):861. PMID: 19487539.

125) Sun L, Ishida T, Yasuda T, Kojima Y, Honjo T, Yamamoto Y, Yamamoto H, Ishibashi S, Hirata K, Hayashi Y. RAGE mediates oxidized LDL-induced pro- inflammatory effects and atherosclerosis in non-diabetic LDL receptor-deficient mice. Cardiovasc Res. 2009 May 1;82(2):371-81. doi: 10.1093/cvr/cvp036. Epub 2009 Jan 28. PMID: 19176597.

126) Sone H, Tanaka S, Iimuro S, Oida K, Yamasaki Y, Ishibashi S, Oikawa S, Katayama S, Ito H, Ohashi Y, Akanuma Y, Yamada N. Waist circumference as a cardiovascular and metabolic risk in Japanese patients with type 2 diabetes. Obesity (Silver Spring). 2009 Mar;17(3):585-92. doi: 10.1038/oby.2008.481. Epub 2008 Nov 20. PMID: 19023281.

127) Kawakami A, Okada N, Rokkaku K, Honda K, Ishibashi S, Onaka T. Leptin inhibits and ghrelin augments hypothalamic noradrenaline release after stress. Stress. 2008 Sep;11(5):363-9. doi: 10.1080/10253890701820257. PMID: 18800308.

128) Okazaki H, Igarashi M, Nishi M, Sekiya M, Tajima M, Takase S, Takanashi M, Ohta K, Tamura Y, Okazaki S, Yahagi N, Ohashi K, Amemiya-Kudo M, Nakagawa Y, Nagai R, Kadowaki T, Osuga J, Ishibashi S. Identification of neutral cholesterol ester hydrolase, a key enzyme removing cholesterol from macrophages. J Biol Chem. 2008 Nov 28;283(48):33357-64.. Epub 2008 Sep 9. PMID: 18782767; PMCID: PMC2662263.

129) Tazoe F, Yagyu H, Okazaki H, Igarashi M, Eto K, Nagashima S, Inaba T, Shimano H, Osuga J, Ishibashi S. Induction of ABCA1 by overexpression of hormone-sensitive lipase in macrophages. Biochem Biophys Res Commun. 2008 Nov 7;376(1):111-5. doi: 10.1016/j.bbrc.2008.08.101. Epub 2008 Aug 30. PMID: 18762171.

130) Inaba T, Yagyu H, Itabashi N, Tazoe F, Fujita N, Nagashima S, Okada K, Okazaki M, Furukawa Y, Ishibashi S. Cholesterol reduction and atherosclerosis inhibition by bezafibrate in low-density lipoprotein receptor knockout mice. Hypertens Res. 2008 May;31(5):999-1005. doi: 10.1291/hypres.31.999. PMID: 18712055.

131) Matsuda D, Namatame I, Ohshiro T, Ishibashi S, Omura S, Tomoda H. Anti- atherosclerotic activity of triacsin C, an acyl-CoA synthetase inhibitor. J Antibiot (Tokyo). 2008 May;61(5):318-21. doi: 10.1038/ja.2008.45. PMID: 18653998.

132) Shimano H, Arai H, Harada-Shiba M, Ueshima H, Ohta T, Yamashita S, Gotoda T, Kiyohara Y, Hayashi T, Kobayashi J, Shimamoto K, Bujo H, Ishibashi S, Shirai K, Oikawa S, Saito Y, Yamada N. Proposed guidelines for

hypertriglyceridemia in Japan with non-HDL cholesterol as the second target. J Atheroscler Thromb. 2008 Jun;15(3):116-21. doi: 10.5551/jat.e560. PMID: 18603817.

133) Sekiya M, Osuga J, Yahagi N, Okazaki H, Tamura Y, Igarashi M, Takase S, Harada K, Okazaki S, Iizuka Y, Ohashi K, Yagyu H, Okazaki M, Gotoda T, Nagai R, Kadowaki T, Shimano H, Yamada N, Ishibashi S. Hormone-sensitive lipase is involved in hepatic cholesteryl ester hydrolysis. J Lipid Res. 2008 Aug;49(8):1829-38. doi: 10.1194/jlr.M800198-JLR200. Epub 2008 May 14. PMID: 18480494.

134) Kusaka I, Nagasaka S, Horie H, Ishibashi S. Metformin, but not pioglitazone, decreases postchallenge plasma ghrelin levels in type 2 diabetic patients: a possible role in weight stability? Diabetes Obes Metab. 2008 Nov;10(11):1039-46. doi: 10.1111/j.1463-1326.2008.00857.x. Epub 2008 Mar 18. PMID: 18355332.

135) Kawano M, Nagasaka S, Yagyu H, Ishibashi S. Pitavastatin decreases plasma prebeta1-HDL concentration and might promote its disappearance rate in hypercholesterolemic patients. J Atheroscler Thromb. 2008 Feb;15(1):41-6. doi: 10.5551/jat.e532. Epub 2008 Feb 9. PMID: 18270457.

136) Iwazu Y, Muto S, Fujisawa G, Nakazawa E, Okada K, Ishibashi S, Kusano E. Spironolactone suppresses peritubular capillary loss and prevents deoxycorticosterone acetate/salt-induced tubulointerstitial fibrosis. Hypertension. 2008 Mar;51(3):749-54. doi: 10.1161/HYPERTENSIONAHA.107.104901. Epub 2008 Feb 4. PMID: 18250361.

137) Muroi R, Kusaka I, Kawakami A, Rokkaku K, Nagasaka S, Ishibashi S. Thyrotropin receptor antibodies measured by second-generation assay are highly specific for Grave's disease and correlate with serum thyrotropin levels in patients with Grave's disease in remission and during maintenance therapy. Jichi Medical University Journal. 2007;30:19-28.

138) Usui R, Shibuya M, Ishibashi S, Maru Y. Ligand-independent activation of vascular endothelial growth factor receptor 1 by low-density lipoprotein. EMBO Rep. 2007 Dec;8(12):1155-61. doi: 10.1038/sj.embor.7401103. Epub 2007 Oct 26. PMID: 17962812; PMCID: PMC2267239.

139) Sone H, Yoshimura Y, Tanaka S, Iimuro S, Ohashi Y, Ito H, Seino H, Ishibashi S, Akanuma Y, Yamada N; Japan Diabetes Complications Study (JDCS) Group. Cross-sectional association between BMI, glycemic control and energy intake in Japanese patients with type 2 diabetes. Analysis from the Japan Diabetes Complications Study. Diabetes Res Clin Pract. 2007 Sep;77 Suppl 1:S23-9. doi: 10.1016/j.diabres.2007.01.029. Epub 2007 May 23. PMID: 17512082.

140) Nagasaka S, Sato N, Takahashi N, Kusaka I, Ishibashi S. New insights on the simultaneous assessment of insulin sensitivity and beta-cell function with the HOMA2 method: response to Caumo et al. Diabetes Care. 2007 May;30(5):e42; author reply e43. doi: 10.2337/dc07-0016. PMID: 17468370.

141) Sekiya M, Yahagi N, Matsuzaka T, Takeuchi Y, Nakagawa Y, Takahashi H, Okazaki H, Iizuka Y, Ohashi K, Gotoda T, Ishibashi S, Nagai R, Yamazaki T, Kadowaki T, Yamada N, Osuga J, Shimano H. SREBP-1-independent regulation of lipogenic gene expression in adipocytes. J Lipid Res. 2007 Jul;48(7):1581-91. doi: 10.1194/jlr.M700033-JLR200. Epub 2007 Apr 24. PMID: 17456898.

142) Ogata H, Tokuyama K, Nagasaka S, Ando A, Kusaka I, Sato N, Goto A, Ishibashi S, Kiyono K, Struzik ZR, Yamamoto Y. Long-range correlated glucose fluctuations in diabetes. Methods Inf Med. 2007;46(2):222-6. PMID: 17347760.

143) Gao J, Katagiri H, Ishigaki Y, Yamada T, Ogihara T, Imai J, Uno K, Hasegawa Y, Kanzaki M, Yamamoto TT, Ishibashi S, Oka Y. Involvement of apolipoprotein E in excess fat accumulation and insulin resistance. Diabetes. 2007 Jan;56(1):24-33. doi: 10.2337/db06-0144. PMID: 17192461.

144) Ideno J, Mizukami H, Kakehashi A, Saito Y, Okada T, Urabe M, Kume A, Kuroki M, Kawakami M, Ishibashi S, Ozawa K. Prevention of diabetic retinopathy by intraocular soluble flt-1 gene transfer in a spontaneously diabetic rat model. Int J Mol Med. 2007 Jan;19(1):75-9. PMID: 17143550.

145) Kraemer FB, Shen WJ, Patel S, Osuga J, Ishibashi S, Azhar S. The LDL receptor is not necessary for acute adrenal steroidogenesis in mouse adrenocortical cells. Am J Physiol Endocrinol Metab. 2007 Feb;292(2):E408-12. doi: 10.1152/ajpendo.00428.2006. Epub 2006 Sep 19. PMID: 16985254.

146) Muroi R, Yagyu H, Kobayashi H, Nagata M, Sato N, Ideno J, Fujita N, Ando A, Okada K, Takiyama Y, Nagasaka S, Miyajima H, Nakano I, Ishibashi S. Early onset insulin-dependent diabetes mellitus as an initial manifestation of aceruloplasminaemia. Diabet Med. 2006 Oct;23(10):1136-9. doi: 10.1111/j.1464-5491.2006.01883.x. PMID: 16978380.

147) Fujisawa G, Muto S, Okada K, Kusano E, Ishibashi S. Mineralocorticoid receptor antagonist spironolactone prevents pig serum-induced hepatic fibrosis in rats. Transl Res. 2006 Sep;148(3):149-56. doi:

10.1016/j.trsl.2006.03.007. PMID: 16938653.

148) Ogata H, Tokuyama K, Nagasaka S, Ando A, Kusaka I, Sato N, Goto A, Ishibashi S, Kiyono K, Struzik ZR, Yamamoto Y. Long-range negative correlation of glucose dynamics in humans and its breakdown in diabetes mellitus. Am J Physiol Regul Integr Comp Physiol. 2006 Dec;291(6):R1638-43. doi: 10.1152/ajpregu.00241.2006. Epub 2006 Jul 27. PMID: 16873556.

149) Hara M, Iso-O N, Satoh H, Noto H, Togo M, Ishibashi S, Kimura S, Kadowaki T, Hashimoto Y, Tsukamoto K. Differential effects of apolipoprotein E isoforms on lipolysis of very low-density lipoprotein triglycerides. Metabolism. 2006 Aug;55(8):1129-34. doi: 10.1016/j.metabol.2006.04.009. PMID: 16839851.

150) Okazaki H, Igarashi M, Nishi M, Tajima M, Sekiya M, Okazaki S, Yahagi N, Ohashi K, Tsukamoto K, Amemiya-Kudo M, Matsuzaka T, Shimano H, Yamada N, Aoki J, Morikawa R, Takanezawa Y, Arai H, Nagai R, Kadowaki T, Osuga J, Ishibashi S. Identification of a novel member of the carboxylesterase family that hydrolyzes triacylglycerol: a potential role in adipocyte lipolysis. Diabetes. 2006 Jul;55(7):2091-7. doi: 10.2337/db05-0585. PMID: 16804080.

151) Shen WJ, Liang Y, Wang J, Harada K, Patel S, Michie SA, Osuga J, IshibashiS, Kraemer FB. Regulation of hormone-sensitive lipase in islets. Diabetes ResClin Pract. 2007 Jan;75(1):14-26. doi: 10.1016/j.diabres.2006.05.001. Epub 2006Jun 9. PMID: 16765472.

152) Okazaki H, Tazoe F, Okazaki S, Isoo N, Tsukamoto K, Sekiya M, Yahagi N,Iizuka Y, Ohashi K, Kitamine T, Tozawa R, Inaba T, Yagyu H, Okazaki M, ShimanoH, Shibata N, Arai H, Nagai RZ, Kadowaki T, Osuga J, Ishibashi S. Increased cholesterol biosynthesis and hypercholesterolemia in mice overexpressingsqualene synthase in the liver. J Lipid Res. 2006 Sep;47(9):1950-8. doi:10.1194/jlr.M600224-JLR200. Epub 2006 Jun 1. PMID: 16741291.

153) Nakata M, Nagasaka S, Kusaka I, Matsuoka H, Ishibashi S, Yada T. Effects ofstatins on the adipocyte maturation and expression of glucose transporter 4(SLC2A4): implications in glycaemic control. Diabetologia. 2006Aug;49(8):1881-92. doi: 10.1007/s00125-006-0269-5. Epub 2006 May 10. PMID:16685502.

154) Sone H, Tanaka S, Ishibashi S, Yamasaki Y, Oikawa S, Ito H, Saito Y, Ohashi Y, Akanuma Y, Yamada N; Japan Diabetes Complications Study (JDCS) Group. The new worldwide definition of metabolic syndrome is not a better diagnostic predictor of cardiovascular disease in Japanese diabetic patients than the existing definitions: additional analysis from the Japan Diabetes Complications Study. Diabetes Care. 2006 Jan;29(1):145-7. doi: 10.2337/diacare.29.1.145. PMID: 16373914.

155) Shinozaki S, Itabashi N, Rokkaku K, Ichiki K, Nagasaka S, Okada K, Fujimoto M, Ohtsuki M, Ishibashi S. Diabetic lipemia with eruptive xanthomatosis in a lean young female with apolipoprotein E4/4. Diabetes Res Clin Pract. 2005 Nov;70(2):183-92. doi: 10.1016/j.diabres.2005.03.023. Epub 2005 Apr 12. PMID: 16188578.

156) Amemiya-Kudo M, Oka J, Ide T, Matsuzaka T, Sone H, Yoshikawa T, Yahagi N, Ishibashi S, Osuga J, Yamada N, Murase T, Shimano H. Sterol regulatory element- binding proteins activate insulin gene promoter directly and indirectly through synergy with BETA2/E47. J Biol Chem. 2005 Oct 14;280(41):34577-89. doi: 10.1074/jbc.M506718200. Epub 2005 Jul 29. PMID: 16055439.

157) Najima Y, Yahagi N, Takeuchi Y, Matsuzaka T, Sekiya M, Nakagawa Y, Amemiya- Kudo M, Okazaki H, Okazaki S, Tamura Y, Iizuka Y, Ohashi K, Harada K, Gotoda T, Nagai R, Kadowaki T, Ishibashi S, Yamada N, Osuga J, Shimano H. High mobility group protein-B1 interacts with sterol regulatory element-binding proteins to enhance their DNA binding. J Biol Chem. 2005 Jul 29;280(30):27523-32. doi: 10.1074/jbc.m414549200. PMID: 16040616.

158) Yang JM, Nagasaka S, Yatagai T, Nakamura T, Kusaka I, Ishikawa SE, Saito T, Ishibashi S. Interleukin-12p40 gene (IL-12B) polymorphism and Type 1 diabetes mellitus in Japanese: possible role in subjects without having high-risk HLA haplotypes. Diabetes Res Clin Pract. 2006 Feb;71(2):164-9. doi: 10.1016/j.diabres.2005.05.005. Epub 2005 Jul 6. PMID: 16005098.

159) Sone H, Mizuno S, Fujii H, Yoshimura Y, Yamasaki Y, Ishibashi S, Katayama S, Saito Y, Ito H, Ohashi Y, Akanuma Y, Yamada N; Japan Diabetes Complications Study. Is the diagnosis of metabolic syndrome useful for predicting cardiovascular disease in asian diabetic patients? Analysis from the Japan Diabetes Complications Study. Diabetes Care. 2005 Jun;28(6):1463-71. doi: 10.2337/diacare.28.6.1463. PMID: 15920069.

160) Yahagi N, Shimano H, Hasegawa K, Ohashi K, Matsuzaka T, Najima Y, Sekiya M, Tomita S, Okazaki H, Tamura Y, Iizuka Y, Ohashi K, Nagai R, Ishibashi S, Kadowaki T, Makuuchi M, Ohnishi S, Osuga J, Yamada N. Co-ordinate activation of lipogenic enzymes in hepatocellular carcinoma. Eur J Cancer. 2005 Jun;41(9):1316-22. doi: 10.1016/j.ejca.2004.12.037. PMID: 15869874.

161) Hayashi Y, Nagasaka S, Takahashi N, Kusaka I, Ishibashi S, Numao S, Lee DJ, Taki Y, Ogata H, Tokuyama K, Tanaka K. A single bout of exercise at higher intensity enhances glucose effectiveness in sedentary men. J Clin Endocrinol Metab. 2005 Jul;90(7):4035-40. doi: 10.1210/jc.2004-2092. Epub 2005 Apr 19. PMID: 15840752.

162) Saher G, Brügger B, Lappe-Siefke C, Möbius W, Tozawa R, Wehr MC, Wieland F, Ishibashi S, Nave KA. High cholesterol level is essential for myelin membrane growth. Nat Neurosci. 2005 Apr;8(4):468-75. doi: 10.1038/nn1426. Epub 2005 Mar 27. PMID: 15793579.

163) Sone H, Yamada N, Mizuno S, Ohashi Y, Ishibashi S, Yamazaki Y. Requirement for hypertension and hyperlipidemia medication in U.S. and Japanese patients with diabetes. Am J Med. 2004 Nov 1;117(9):711-2. doi: 10.1016/j.amjmed.2004.06.030. PMID: 15501216.

164) Bujo H, Takahashi K, Saito Y, Maruyama T, Yamashita S, Matsuzawa Y, Ishibashi S, Shionoiri F, Yamada N, Kita T; Research Committeon Primary Hyperlipidemia of the Ministry of Health, Labour, and Welfare of Japan. Clinical features of familial hypercholesterolemia in Japan in a database from 1996-1998 by the research committee of the ministry of health, labour and welfare of Japan. J Atheroscler Thromb. 2004;11(3):146-51. doi: 10.5551/jat.11.146. PMID: 15256765.

165) Yoshioka T, Okada T, Maeda Y, Ikeda U, Shimpo M, Nomoto T, Takeuchi K, Nonaka-Sarukawa M, Ito T, Takahashi M, Matsushita T, Mizukami H, Hanazono Y, Kume A, Ookawara S, Kawano M, Ishibashi S, Shimada K, Ozawa K. Adeno-associated virus vector-mediated interleukin-10 gene transfer inhibits atherosclerosis in apolipoprotein E-deficient mice. Gene Ther. 2004 Dec;11(24):1772-9. doi: 10.1038/sj.gt.3302348. PMID: 15496963.

166) Fujisawa G, Okada K, Muto S, Fujita N, Itabashi N, Kusano E, Ishibashi S. Spironolactone prevents early renal injury in streptozotocin-induced diabetic rats. Kidney Int. 2004 Oct;66(4):1493-502. doi: 10.1111/j.1523-1755.2004.00913.x. PMID: 15458443.

167) Sata M, Nishimatsu H, Osuga J, Tanaka K, Ishizaka N, Ishibashi S, Hirata Y, Nagai R. Statins augment collateral growth in response to ischemia but they do not promote cancer and atherosclerosis. Hypertension. 2004 Jun;43(6):1214-20. doi: 10.1161/01.HYP.0000126186.29571.41. PMID: 15166180.

168) Tamura Y, Osuga J, Adachi H, Tozawa R, Takanezawa Y, Ohashi K, Yahagi N, Sekiya M, Okazaki H, Tomita S, Iizuka Y, Koizumi H, Inaba T, Yagyu H, Kamada N, Suzuki H, Shimano H, Kadowaki T, Tsujimoto M, Arai H, Yamada N, Ishibashi S. Scavenger receptor expressed by endothelial cells I (SREC-I) mediates the uptake of acetylated low density lipoproteins by macrophages stimulated with lipopolysaccharide. J Biol Chem. 2004 Jul 23;279(30):30938-44. doi: 10.1074/jbc.M313088200. Epub 2004 May 15. PMID: 15145948.

169) Nakamura T, Murakami M, Horiguchi H, Nagasaka S, Ishibashi S, Mori M, Ishikawa SE. A case of thymic enlargement in hyperthyroidism in a young woman. Thyroid. 2004 Apr;14(4):307-10. doi: 10.1089/105072504323030979. PMID: 15142365.

170) Matsuzaka T, Shimano H, Yahagi N, Amemiya-Kudo M, Okazaki H, Tamura Y, Iizuka Y, Ohashi K, Tomita S, Sekiya M, Hasty A, Nakagawa Y, Sone H, Toyoshima H, Ishibashi S, Osuga J, Yamada N. Insulin-independent induction of sterol regulatory element-binding protein-1c expression in the livers of streptozotocin-treated mice. Diabetes. 2004 Mar;53(3):560-9. doi: 10.2337/diabetes.53.3.560. PMID: 14988238.

171) Yahagi N, Shimano H, Matsuzaka T, Sekiya M, Najima Y, Okazaki S, Okazaki H, Tamura Y, Iizuka Y, Inoue N, Nakagawa Y, Takeuchi Y, Ohashi K, Harada K, Gotoda T, Nagai R, Kadowaki T, Ishibashi S, Osuga J, Yamada N. p53 involvement in the pathogenesis of fatty liver disease. J Biol Chem. 2004 May 14;279(20):20571-5. doi: 10.1074/jbc.M400884200. Epub 2004 Feb 25. PMID: 14985341.

172) Nagasaka S, Aiso Y, Yoshizawa K, Ishibashi S. Comparison of pioglitazone and metformin efficacy using homeostasis model assessment. Diabet Med. 2004 Feb;21(2):136-41. doi: 10.1111/j.1464-5491.2004.01083.x. PMID: 14984448.

173) Sekiya M, Osuga J, Okazaki H, Yahagi N, Harada K, Shen WJ, Tamura Y, Tomita S, Iizuka Y, Ohashi K, Okazaki M, Sata M, Nagai R, Fujita T, Shimano H, Kraemer FB, Yamada N, Ishibashi S. Absence of hormone-sensitive lipase inhibits obesity and adipogenesis in Lep ob/ob mice. J Biol Chem. 2004 Apr 9;279(15):15084-90. doi: 10.1074/jbc.M310985200. Epub 2004 Jan 28. PMID: 14752112.

174) Nishida Y, Tokuyama K, Nagasaka S, Higaki Y, Shirai Y, Kiyonaga A, Shindo M, Kusaka I, Nakamura T, Ishibashi S, Tanaka H. Effect of moderate exercise training on peripheral glucose effectiveness, insulin sensitivity, and endogenous glucose production in healthy humans estimated by a two-compartment- labeled minimal model. Diabetes. 2004 Feb;53(2):315-20. doi:10.2337/diabetes.53.2.315. PMID: 14747280.

175) Namatame I, Tomoda H, Ishibashi S, Omura S. Antiatherogenic activity of fungal beauveriolides, inhibitors of

lipid droplet accumulation in macrophages. Proc Natl Acad Sci U S A. 2004 Jan 20;101(3):737-42. doi: 10.1073/pnas.0307757100. Epub 2004 Jan 12. PMID: 14718664; PMCID: PMC321750.

176) Ogura M, Kusaka I, Nagasaka S, Yatagai T, Shinozaki S, Itabashi N, Nakamura T, Yokoyama M, Ishikawa SE, Ishibashi S. Unilateral adrenalectomy improves insulin resistance and diabetes mellitus in a patient with ACTH-independent macronodular adrenal hyperplasia. Endocr J. 2003 Dec;50(6):715-21. doi: 10.1507/endocrj.50.715. PMID: 14709842.

177) Yatagai T, Nakamura T, Nagasaka S, Kusaka I, Ishikawa SE, Yoshitaka A, Ishibashi S. Decrease in serum C-reactive protein levels by troglitazone is associated with pretreatment insulin resistance, but independent of its effect on glycemia, in type 2 diabetic subjects. Diabetes Res Clin Pract. 2004 Jan;63(1):19-26. doi: 10.1016/j.diabres.2003.08.008. PMID: 14693409.

178) Ideno J, Mizukami H, Honda K, Okada T, Hanazono Y, Kume A, Saito T, Ishibashi S, Ozawa K. Persistent phenotypic correction of central diabetes insipidus using adeno-associated virus vector expressing arginine-vasopressin in Brattleboro rats. Mol Ther. 2003 Dec;8(6):895-902. doi: 10.1016/j.ymthe.2003.08.019. PMID: 14664791.

179) Kraemer FB, Shen WJ, Harada K, Patel S, Osuga J, Ishibashi S, Azhar S. Hormone-sensitive lipase is required for high-density lipoprotein cholesteryl ester-supported adrenal steroidogenesis. Mol Endocrinol. 2004 Mar;18(3):549-57. doi: 10.1210/me.2003-0179. Epub 2003 Dec 4. PMID: 14657254.

180) Sekiya M, Yahagi N, Matsuzaka T, Najima Y, Nakakuki M, Nagai R, Ishibashi S, Osuga J, Yamada N, Shimano H. Polyunsaturated fatty acids ameliorate hepatic steatosis in obese mice by SREBP-1 suppression. Hepatology. 2003 Dec;38(6):1529-39. doi: 10.1016/j.hep.2003.09.028. PMID: 14647064.

181) Yatagai T, Nagasaka S, Taniguchi A, Fukushima M, Nakamura T, Kuroe A, Nakai Y, Ishibashi S. Hypoadiponectinemia is associated with visceral fat accumulation and insulin resistance in Japanese men with type 2 diabetes mellitus. Metabolism. 2003 Oct;52(10):1274-8. doi: 10.1016/s0026-0495(03)00195-1. PMID: 14564678.

182) Rokkaku K, Onaka T, Okada N, Ideno J, Kawakami A, Honda K, Yada T, Ishibashi S. Neuromedin U facilitates oxytocin release from the pituitary via beta adrenoceptors. Neuroreport. 2003 Oct 27;14(15):1997-2000. doi: 10.1097/00001756-200310270-00024. PMID: 14561937.

183) Harada K, Shen WJ, Patel S, Natu V, Wang J, Osuga J, Ishibashi S, Kraemer FB. Resistance to high-fat diet-induced obesity and altered expression of adipose-specific genes in HSL-deficient mice. Am J Physiol Endocrinol Metab. 2003 Dec;285(6):E1182-95. doi: 10.1152/ajpendo.00259.2003. Epub 2003 Sep 3. PMID: 12954598.

184) Tajima M, Hirabayashi S, Yao I, Shirasawa M, Osuga J, Ishibashi S, Fujita T, Hata Y. Roles of immunoglobulin-like loops of junctional cell adhesion molecule 4; involvement in the subcellular localization and the cell adhesion. Genes Cells. 2003 Sep;8(9):759-68. doi: 10.1046/j.1365-2443.2003.00673.x. PMID: 12940823.

185) Ohashi K, Osuga J, Tozawa R, Kitamine T, Yagyu H, Sekiya M, Tomita S, Okazaki H, Tamura Y, Yahagi N, Iizuka Y, Harada K, Gotoda T, Shimano H, Yamada N, Ishibashi S. Early embryonic lethality caused by targeted disruption of the 3-hydroxy-3-methylglutaryl-CoA reductase gene. J Biol Chem. 2003 Oct 31;278(44):42936-41. doi: 10.1074/jbc.M307228200. Epub 2003 Aug 14. PMID: 12920113.

186) Nagasaka S, Taniguchi A, Aiso Y, Yatagai T, Nakamura T, Nakai Y, Fukushima M, Kuroe A, Ishibashi S. Effect of glimepiride on serum adiponectin level in subjects with type 2 diabetes. Diabetes Care. 2003 Jul;26(7):2215-6. doi: 10.2337/diacare.26.7.2215. PMID: 12832345.

187) Yatagai T, Nishida Y, Nagasaka S, Nakamura T, Tokuyama K, Shindo M, Tanaka H, Ishibashi S. Relationship between exercise training-induced increase in insulin sensitivity and adiponectinemia in healthy men. Endocr J. 2003 Apr;50(2):233-8. doi: 10.1507/endocrj.50.233. PMID: 12803245.

188) Yahagi N, Shimano H, Matsuzaka T, Najima Y, Sekiya M, Nakagawa Y, Ide T, Tomita S, Okazaki H, Tamura Y, Iizuka Y, Ohashi K, Gotoda T, Nagai R, Kimura S, Ishibashi S, Osuga J, Yamada N. p53 Activation in adipocytes of obese mice. J Biol Chem. 2003 Jul 11;278(28):25395-400. doi: 10.1074/jbc.M302364200. Epub 2003 May 6. PMID: 12734185.

189) Ide T, Shimano H, Yoshikawa T, Yahagi N, Amemiya-Kudo M, Matsuzaka T, Nakakuki M, Yatoh S, Iizuka Y, Tomita S, Ohashi K, Takahashi A, Sone H, Gotoda T, Osuga J, Ishibashi S, Yamada N. Cross-talk between peroxisome proliferator- activated receptor (PPAR) alpha and liver X receptor (LXR) in nutritional regulation of fatty acid metabolism. II. LXRs suppress lipid degradation gene promoters through inhibition of PPAR signaling. Mol Endocrinol. 2003 Jul;17(7):1255-67. doi: 10.1210/me.2002-0191. Epub 2003 May 1. PMID: 12730332.

190) Yoshikawa T, Ide T, Shimano H, Yahagi N, Amemiya-Kudo M, Matsuzaka T, Yatoh S, Kitamine T, Okazaki H, Tamura Y, Sekiya M, Takahashi A, Hasty AH, Sato R, Sone H, Osuga J, Ishibashi S, Yamada N. Cross-talk between peroxisome proliferator-activated receptor (PPAR) alpha and liver X receptor (LXR) in nutritional regulation of fatty acid metabolism. I. PPARs suppress sterol regulatory element binding protein-1c promoter through inhibition of LXR signaling. Mol Endocrinol. 2003 Jul;17(7):1240-54. doi: 10.1210/me.2002-0190. Epub 2003 May 1. PMID: 12730331.

191) Nakamura T, Nagasaka S, Kusaka I, Yatagai T, Yang J, Ishibashi S. HLA-DR-DQ haplotype in rapid-onset type 1 diabetes in Japanese. Diabetes Care. 2003 May;26(5):1640-1. doi: 10.2337/diacare.26.5.1640. PMID: 12716840.

192) Fujisawa G, Okada K, Muto S, Fujita N, Itabashi N, Kusano E, Ishibashi S. Na/H exchange isoform 1 is involved in mineralocorticoid/salt-induced cardiac injury. Hypertension. 2003 Mar;41(3):493-8. doi: 10.1161/01.HYP.0000056769.73726.E5. Epub 2003 Feb 17. PMID: 12623949.

193) Yatagai T, Kusaka I, Nakamura T, Nagasaka S, Honda K, Ishibashi S, Ishikawa SE. Close association of severe hyponatremia with exaggerated release of arginine vasopressin in elderly subjects with secondary adrenal insufficiency. Eur J Endocrinol. 2003 Feb;148(2):221-6. doi: 10.1530/eje.0.1480221. PMID: 12590641.

194) Tamura Y, Adachi H, Osuga J, Ohashi K, Yahagi N, Sekiya M, Okazaki H, Tomita S, Iizuka Y, Shimano H, Nagai R, Kimura S, Tsujimoto M, Ishibashi S. FEEL-1 and FEEL-2 are endocytic receptors for advanced glycation end products. J Biol Chem. 2003 Apr 11;278(15):12613-7. doi: 10.1074/jbc.M210211200. Epub 2002 Dec 6. PMID: 12473645.

195) Okazaki H, Osuga J, Tamura Y, Yahagi N, Tomita S, Shionoiri F, Iizuka Y, Ohashi K, Harada K, Kimura S, Gotoda T, Shimano H, Yamada N, Ishibashi S. Lipolysis in the absence of hormone-sensitive lipase: evidence for a common mechanism regulating distinct lipases. Diabetes. 2002 Dec;51(12):3368-75. doi: 10.2337/diabetes.51.12.3368. PMID: 12453888.

196) Tamura Y, Ishibashi S, Gotoda T, Yasufuku-Takano J, Takano K, Ueki K, Yamashita S, Iizuka Y, Yahagi N, Shionoiri F, Okazaki H, Ohashi K, Osuga J, Harada K, Shimano H, Fujita T, Yamada N, Kimura S. A kindred of familial acromegaly without evidence for linkage to MEN-1 locus. Endocr J. 2002 Aug;49(4):425-31. doi: 10.1507/endocrj.49.425. PMID: 12402974.

197) Sone H, Ito H, Saito Y, Yamashita H, Ishibashi S, Katayama S, Abe R, Ohashi Y, Akanuma Y, Yamada N. The long-term effects of self-management education for patients with type 2 diabetes on glycemic control: response to Norris et al. Diabetes Care. 2002 Nov;25(11):2115-6. doi: 10.2337/diacare.25.11.2115. PMID: 12401777.

198) Sone H, Katagiri A, Ishibashi S, Abe R, Saito Y, Murase T, Yamashita H, Yajima Y, Ito H, Ohashi Y, Akanuma Y, Yamada N; JD Study Group. Effects of lifestyle modifications on patients with type 2 diabetes: the Japan Diabetes Complications Study (JDCS) study design, baseline analysis and three year- interim report. Horm Metab Res. 2002 Sep;34(9):509-15. doi: 10.1055/s-2002-34791. PMID: 12384828

199) Sone H, Takahashi A, Shimano H, Ishibashi S, Yoshino G, Morisaki N, Saito Y, Kawazu S, Teramoto T, Fujita T, Shiba T, Iwamoto Y, Kuzuya N, Akanuma Y, Yamada N. HMG-CoA reductase inhibitor decreases small dense low-density lipoprotein and remnant-like particle cholesterol in patients with type-2 diabetes. Life Sci. 2002 Oct 4;71(20):2403-12. doi: 10.1016/s0024-3205(02)02038-6. PMID: 12231401.

200) Nakamura T, Saito T, Kusaka I, Higashiyama M, Nagasaka S, Ishibashi S, Ishikawa SE. Decrease in urinary excretion of aquaporin-2 associated with impaired urinary concentrating ability in diabetic nephropathy. Nephron. 2002 Oct;92(2):445-8. doi: 10.1159/000063285. PMID: 12218327.

201) Ichiki K, Nakamura T, Fujita N, Honda K, Hiraga T, Ishibashi S, Ishikawa S. An endocrinopathy characterized by dysfunction of the pituitary-adrenal axis and alopecia universalis: supporting the entity of a triple H syndrome. Eur J Endocrinol. 2002 Sep;147(3):357-61. doi: 10.1530/eje.0.1470357. PMID: 12213673.

202) Amemiya-Kudo M, Shimano H, Hasty AH, Yahagi N, Yoshikawa T, Matsuzaka T, Okazaki H, Tamura Y, Iizuka Y, Ohashi K, Osuga J, Harada K, Gotoda T, Sato R, Kimura S, Ishibashi S, Yamada N. Transcriptional activities of nuclear SREBP-1a, -1c, and -2 to different target promoters of lipogenic and cholesterogenic genes. J Lipid Res. 2002 Aug;43(8):1220-35. PMID: 12177166.

203) Imai Y, Shindo T, Maemura K, Sata M, Saito Y, Kurihara Y, Akishita M, Osuga J, Ishibashi S, Tobe K, Morita H, Oh-hashi Y, Suzuki T, Maekawa H, Kangawa K, Minamino N, Yazaki Y, Nagai R, Kurihara H. Resistance to neointimal hyperplasia and fatty streak formation in mice with adrenomedullin overexpression. Arterioscler Thromb Vasc Biol. 2002 Aug 1;22(8):1310-5. doi: 10.1161/01.atv.0000024685.92243.e7. PMID:

12171793.
204) Ando A, Yatagai T, Rokkaku K, Nagasaka S, Ishikawa SE, Ishibashi S. Obesity is a critical risk factor for worsening of glucose tolerance in a family with the mutant insulin receptor. Diabetes Care. 2002 Aug;25(8):1484-5. doi: 10.2337/diacare.25.8.1484. PMID: 12145261.
205) Fujita N, Furukawa Y, Du J, Itabashi N, Fujisawa G, Okada K, Saito T, Ishibashi S. Hyperglycemia enhances VSMC proliferation with NF-kappaB activation by angiotensin II and E2F-1 augmentation by growth factors. Mol Cell Endocrinol. 2002 Jun 28;192(1-2):75-84. doi: 10.1016/s0303-7207(02)00108-9. PMID: 12088869.
206) Okazaki H, Osuga J, Tsukamoto K, Isoo N, Kitamine T, Tamura Y, Tomita S, Sekiya M, Yahagi N, Iizuka Y, Ohashi K, Harada K, Gotoda T, Shimano H, Kimura S, Nagai R, Yamada N, Ishibashi S. Elimination of cholesterol ester from macrophage foam cells by adenovirus-mediated gene transfer of hormone-sensitive lipase. J Biol Chem. 2002 Aug 30;277(35):31893-9. doi: 10.1074/jbc.M204016200. Epub 2002 May 29. PMID: 12036961.
207) Matsuzaka T, Shimano H, Yahagi N, Yoshikawa T, Amemiya-Kudo M, Hasty AH, Okazaki H, Tamura Y, Iizuka Y, Ohashi K, Osuga J, Takahashi A, Yato S, Sone H, Ishibashi S, Yamada N. Cloning and characterization of a mammalian fatty acyl-CoA elongase as a lipogenic enzyme regulated by SREBPs. J Lipid Res. 2002 Jun;43(6):911-20. PMID: 12032166.
208) Kusaka I, Saito T, Nakamura T, Nagasaka S, Ishibashi S, Ishikawa SE. Urinary excretion of aquaporin-2 water channel in diabetic ketoacidosis. Nephron. 2002 May;91(1):167-9. doi: 10.1159/000057622. PMID: 12021537.
209) Nagasaka S, Abe T, Kawakami A, Kusaka I, Nakamura T, Ishikawa S, Saito T, Ishibashi S. Pioglitazone-induced hepatic injury in a patient previously receiving troglitazone with success. Diabet Med. 2002 Apr;19(4):347-8. doi: 10.1046/j.1464-5491.2002.00712_4.x. PMID: 11943013.
210) Yahagi N, Shimano H, Hasty AH, Matsuzaka T, Ide T, Yoshikawa T, Amemiya- Kudo M, Tomita S, Okazaki H, Tamura Y, Iizuka Y, Ohashi K, Osuga J, Harada K, Gotoda T, Nagai R, Ishibashi S, Yamada N. Absence of sterol regulatory element- binding protein-1 (SREBP-1) ameliorates fatty livers but not obesity or insulin resistance in Lep(ob)/Lep(ob) mice. J Biol Chem. 2002 May 31;277(22):19353-7. doi: 10.1074/jbc.M201584200. Epub 2002 Mar 28. PMID: 11923308.
211) Kraemer FB, Shen WJ, Natu V, Patel S, Osuga J, Ishibashi S, Azhar S. Adrenal neutral cholesteryl ester hydrolase: identification, subcellular distribution, and sex differences. Endocrinology. 2002 Mar;143(3):801-6. doi: 10.1210/endo.143.3.8693. PMID: 11861500.
212) Matsuzaka T, Shimano H, Yahagi N, Amemiya-Kudo M, Yoshikawa T, Hasty AH, Tamura Y, Osuga J, Okazaki H, Iizuka Y, Takahashi A, Sone H, Gotoda T, Ishibashi S, Yamada N. Dual regulation of mouse Delta(5)- and Delta(6)-desaturase gene expression by SREBP-1 and PPARalpha. J Lipid Res. 2002 Jan;43(1):107-14. PMID: 11792729.
213) Yoshikawa T, Shimano H, Yahagi N, Ide T, Amemiya-Kudo M, Matsuzaka T, Nakakuki M, Tomita S, Okazaki H, Tamura Y, Iizuka Y, Ohashi K, Takahashi A, Sone H, Osuga Ji J, Gotoda T, Ishibashi S, Yamada N. Polyunsaturated fatty acids suppress sterol regulatory element-binding protein 1c promoter activity by inhibition of liver X receptor (LXR) binding to LXR response elements. J Biol Chem. 2002 Jan 18;277(3):1705-11. doi: 10.1074/jbc.M105711200. Epub 2001 Nov 2. PMID: 11694526.
214) Yoshikawa T, Shimano H, Chen Z, Ishibashi S, Yamada N. Effects of probucol on atherosclerosis of apoE-deficient or LDL receptor-deficient mice. Horm Metab Res. 2001 Aug;33(8):472-9. doi: 10.1055/s-2001-16940. PMID: 11544561.
215) Chiwata T, Aragane K, Fujinami K, Kojima K, Ishibashi S, Yamada N, Kusunoki J. Direct effect of an acyl-CoA:cholesterol acyltransferase inhibitor, F-1394, on atherosclerosis in apolipoprotein E and low density lipoprotein receptor double knockout mice. Br J Pharmacol. 2001 Aug;133(7):1005-12. doi: 10.1038/sj.bjp.0704160. PMID: 11487509; PMCID: PMC1572866.
216) Iizuka Y, Gotoda T, Ishibashi S, Yamada N. CD36 deficiency and insulin resistance. Lancet. 2001 Jul 21;358(9277):243; author reply 244. doi: 10.1016/S0140-6736(01)05429-0. Erratum in: Lancet 2002 Jan 5;359(9300):84. PMID: 11480437.
217) Hasty AH, Shimano H, Osuga J, Namatame I, Takahashi A, Yahagi N, Perrey S, Iizuka Y, Tamura Y, Amemiya-Kudo M, Yoshikawa T, Okazaki H, Ohashi K, Harada K, Matsuzaka T, Sone H, Gotoda T, Nagai R, Ishibashi S, Yamada N. Severe hypercholesterolemia, hypertriglyceridemia, and atherosclerosis in mice lacking both leptin and the low density lipoprotein receptor. J Biol Chem. 2001 Oct 5;276(40):37402-8. doi: 10.1074/jbc.M010176200. Epub 2001 Jul 9. PMID: 11445560.
218) Yoshikawa T, Shimano H, Amemiya-Kudo M, Yahagi N, Hasty AH, Matsuzaka T, Okazaki H, Tamura Y,

Iizuka Y, Ohashi K, Osuga J, Harada K, Gotoda T, Kimura S, Ishibashi S, Yamada N. Identification of liver X receptor-retinoid X receptor as an activator of the sterol regulatory element-binding protein 1c gene promoter. Mol Cell Biol. 2001 May;21(9):2991-3000. doi: 10.1128/MCB.21.9.2991-3000.2001. PMID: 11287605; PMCID: PMC86928.

219) Tozawa R, Ishibashi S, Osuga J, Yamamoto K, Yagyu H, Ohashi K, Tamura Y, Yahagi N, Iizuka Y, Okazaki H, Harada K, Gotoda T, Shimano H, Kimura S, Nagai R, Yamada N. Asialoglycoprotein receptor deficiency in mice lacking the major receptor subunit. Its obligate requirement for the stable expression of oligomeric receptor. J Biol Chem. 2001 Apr 20;276(16):12624-8. doi: 10.1074/jbc.M011063200. Epub 2001 Jan 16. PMID: 11278827.

220) Chen Z, Ishibashi S, Perrey S, Osuga Ji, Gotoda T, Kitamine T, Tamura Y, Okazaki H, Yahagi N, Iizuka Y, Shionoiri F, Ohashi K, Harada K, Shimano H, Nagai R, Yamada N. Troglitazone inhibits atherosclerosis in apolipoprotein E-knockout mice: pleiotropic effects on CD36 expression and HDL. Arterioscler Thromb Vasc Biol. 2001 Mar;21(3):372-7. doi: 10.1161/01.atv.21.3.372. PMID: 11231916.

221) Perrey S, Ishibashi S, Yahagi N, Osuga J, Tozawa R, Yagyu H, Ohashi K, Gotoda T, Harada K, Chen Z, Iizuka Y, Shionoiri F, Yamada N. Thiazolidinedione- and tumor necrosis factor alpha-induced downregulation of peroxisome proliferator-activated receptor gamma mRNA in differentiated 3T3-L1 adipocytes. Metabolism. 2001 Jan;50(1):36-40. doi: 10.1053/meta.2001.19505. PMID: 11172472.

222) Perrey S, Ishibashi S, Kitamine T, Osuga J, Yagyu H, Chen Z, Shionoiri F, Iizuka Y, Yahagi N, Tamura Y, Ohashi K, Harada K, Gotoda T, Yamada N. The LDL receptor is the major pathway for beta-VLDL uptake by mouse peritoneal macrophages. Atherosclerosis. 2001 Jan;154(1):51-60. doi: 10.1016/s0021-9150(00)00457-3. PMID: 11137082.

223) Ohashi Y, Ishibashi S, Suzuki T, Shineha R, Moriya T, Satomi S, Sasano H. Significance of tumor associated tissue eosinophilia and other inflammatory cell infiltrate in early esophageal squamous cell carcinoma. Anticancer Res. 2000 Sep-Oct;20(5A):3025-30. PMID: 11062718.

224) Ohashi K, Ishibashi S, Osuga J, Tozawa R, Harada K, Yahagi N, Shionoiri F, Iizuka Y, Tamura Y, Nagai R, Illingworth DR, Gotoda T, Yamada N. Novel mutations in the microsomal triglyceride transfer protein gene causing abetalipoproteinemia. J Lipid Res. 2000 Aug;41(8):1199-204. PMID: 10946006.

225) Amemiya-Kudo M, Shimano H, Yoshikawa T, Yahagi N, Hasty AH, Okazaki H, Tamura Y, Shionoiri F, Iizuka Y, Ohashi K, Osuga J, Harada K, Gotoda T, Sato R, Kimura S, Ishibashi S, Yamada N. Promoter analysis of the mouse sterol regulatory element-binding protein-1c gene. J Biol Chem. 2000 Oct 6;275(40):31078-85. doi: 10.1074/jbc.M005353200. PMID: 10918064.

226) Hasty AH, Shimano H, Yahagi N, Amemiya-Kudo M, Perrey S, Yoshikawa T, Osuga J, Okazaki H, Tamura Y, Iizuka Y, Shionoiri F, Ohashi K, Harada K, Gotoda T, Nagai R, Ishibashi S, Yamada N. Sterol regulatory element-binding protein-1 is regulated by glucose at the transcriptional level. J Biol Chem. 2000 Oct 6;275(40):31069-77. doi: 10.1074/jbc.M003335200. PMID: 10913129.

227) Abe H, Yamada N, Ishibashi S, Makuuchi M. Chronic inhibitory effect of insulin on plasma lipid concentrations in rats with transplanted pancreas. Transplantation. 2000 May 27;69(10):2038-42. doi: 10.1097/00007890-200005270-00011. PMID: 10852593.

228) Noto H, Mitsuhashi T, Ishibashi S, Kimura S. Hyperthyroidism presenting as dysphagia. Intern Med. 2000 Jun;39(6):472-3. doi: 10.2169/internalmedicine.39.472. PMID: 10852166.

229) Yagyu H, Kitamine T, Osuga J, Tozawa R, Chen Z, Kaji Y, Oka T, Perrey S, Tamura Y, Ohashi K, Okazaki H, Yahagi N, Shionoiri F, Iizuka Y, Harada K, Shimano H, Yamashita H, Gotoda T, Yamada N, Ishibashi S. Absence of ACAT-1 attenuates atherosclerosis but causes dry eye and cutaneous xanthomatosis in mice with congenital hyperlipidemia. J Biol Chem. 2000 Jul 14;275(28):21324-30. doi: 10.1074/jbc.M002541200. PMID: 10777503.

230) Osuga J, Ishibashi S, Oka T, Yagyu H, Tozawa R, Fujimoto A, Shionoiri F, Yahagi N, Kraemer FB, Tsutsumi O, Yamada N. Targeted disruption of hormone- sensitive lipase results in male sterility and adipocyte hypertrophy, but not in obesity. Proc Natl Acad Sci U S A. 2000 Jan 18;97(2):787-92. doi: 10.1073/pnas.97.2.787. PMID: 10639158; PMCID: PMC15409.

231) Yahagi N, Shimano H, Hasty AH, Amemiya-Kudo M, Okazaki H, Tamura Y, Iizuka Y, Shionoiri F, Ohashi K, Osuga J, Harada K, Gotoda T, Nagai R, Ishibashi S, Yamada N. A crucial role of sterol regulatory element-binding protein-1 in the regulation of lipogenic gene expression by polyunsaturated fatty acids. J Biol Chem. 1999 Dec 10;274(50):35840-4. doi: 10.1074/jbc.274.50.35840. PMID: 10585468.

232) Shimano H, Yahagi N, Amemiya-Kudo M, Hasty AH, Osuga J, Tamura Y, Shionoiri F, Iizuka Y, Ohashi K, Harada K, Gotoda T, Ishibashi S, Yamada N. Sterol regulatory element-binding protein-1 as a key transcription

factor for nutritional induction of lipogenic enzyme genes. J Biol Chem. 1999 Dec 10;274(50):35832-9. doi: 10.1074/jbc.274.50.35832. PMID: 10585467.

233) Tozawa R, Ishibashi S, Osuga J, Yagyu H, Oka T, Chen Z, Ohashi K, Perrey S, Shionoiri F, Yahagi N, Harada K, Gotoda T, Yazaki Y, Yamada N. Embryonic lethality and defective neural tube closure in mice lacking squalene synthase. J Biol Chem. 1999 Oct 22;274(43):30843-8. doi: 10.1074/jbc.274.43.30843. PMID: 10521476.

234) Yagyu H, Ishibashi S, Chen Z, Osuga J, Okazaki M, Perrey S, Kitamine T, Shimada M, Ohashi K, Harada K, Shionoiri F, Yahagi N, Gotoda T, Yazaki Y, Yamada N. Overexpressed lipoprotein lipase protects against atherosclerosis in apolipoprotein E knockout mice. J Lipid Res. 1999 Sep;40(9):1677-85. PMID: 10484615.

235) Gotoda T, Iizuka Y, Kato N, Osuga J, Bihoreau MT, Murakami T, Yamori Y, Shimano H, Ishibashi S, Yamada N. Absence of Cd36 mutation in the original spontaneously hypertensive rats with insulin resistance. Nat Genet. 1999 Jul;22(3):226-8. doi: 10.1038/10285. PMID: 10391208.

236) Murakami K, Ishibashi S, Yoshida Y, Yamada N, Akanuma Y. Lipoprotein(a) as a coronary risk factor in Japanese patients with Type II (non-insulin-dependent) diabetes mellitus. Relation with apolipoprotein(a) phenotypes. Diabetologia. 1998 Nov;41(11):1397-8. doi: 10.1007/s001250051083. PMID: 9833951.

237) Ohashi K, Ishibashi S, Yamamoto M, Osuga J, Yazaki Y, Yukawa S, Yamada N. A truncated species of apolipoprotein B (B-38.7) in a patient with homozygous hypobetalipoproteinemia associated with diabetes mellitus. Arterioscler Thromb Vasc Biol. 1998 Aug;18(8):1330-4. doi: 10.1161/01.atv.18.8.1330. PMID: 9714141.

238) Osuga J, Yonemoto M, Yamada N, Shimano H, Yagyu H, Ohashi K, Harada K, Kamei T, Yazaki Y, Ishibashi S. Cholesterol lowering in low density lipoprotein receptor knockout mice overexpressing apolipoprotein E. J Clin Invest. 1998 Jul 15;102(2):386-94. doi: 10.1172/JCI1124. PMID: 9664080; PMCID: PMC508897.

239) Sakaguchi H, Takeya M, Suzuki H, Hakamata H, Kodama T, Horiuchi S, Gordon S, van der Laan LJ, Kraal G, Ishibashi S, Kitamura N, Takahashi K. Role of macrophage scavenger receptors in diet-induced atherosclerosis in mice. Lab Invest. 1998 Apr;78(4):423-34.PMID: 9564887

240) Sun L, Ishibashi S, Osuga J, Harada K, Ohashi K, Gotoda T, Fukuo Y, Yazaki Y, Yamada N. Clinical features associated with the homozygous Trp64Arg mutation of the beta3-adrenergic receptor: no evidence for its association with obesity in Japanese. Arterioscler Thromb Vasc Biol. 1998 Jun;18(6):941-6. doi: 10.1161/01.atv.18.6.941. PMID: 9633935.

241) Abe H, Yamada N, Kamata K, Kuwaki T, Shimada M, Osuga J, Shionoiri F, Yahagi N, Kadowaki T, Tamemoto H, Ishibashi S, Yazaki Y, Makuuchi M. Hypertension, hypertriglyceridemia, and impaired endothelium-dependent vascular relaxation in mice lacking insulin receptor substrate-1. J Clin Invest. 1998 Apr 15;101(8):1784-8. doi: 10.1172/JCI1594. PMID: 9541510; PMCID: PMC508761.

242) Ohashi K, Ishibashi S, Yazaki Y, Yamada N. Improved glycemic control in a diabetic patient after discontinuation of allopurinol administration. Diabetes Care. 1998 Jan;21(1):192-3. doi: 10.2337/diacare.21.1.192. PMID: 9538994.

243) Suzuki H, Kurihara Y, Takeya M, Kamada N, Kataoka M, Jishage K, Ueda O, Sakaguchi H, Higashi T, Suzuki T, Takashima Y, Kawabe Y, Cynshi O, Wada Y, Honda M, Kurihara H, Aburatani H, Doi T, Matsumoto A, Azuma S, Noda T, Toyoda Y, Itakura H, Yazaki Y, Horiuchi S, Takahashi K, Kruijt JK, van Berkel TJC, Steinbrecher UP, Ishibashi S, Maeda N, Gordon S, Kodama T. A role for macrophage scavenger receptors in atherosclerosis and susceptibility to infection. Nature. 1997 Mar 20;386(6622):292-6. doi: 10.1038/386292a0.PMID: 9069289

244) Harada K, Chen Z, Ishibashi S, Osuga J, Yagyu H, Ohashi K, Yahagi N, Shionoiri F, Sun L, Yazaki Y, Yamada N. Apoptotic cell death in atherosclerotic plaques of hyperlipidemic knockout mice. Atherosclerosis. 1997 Dec;135(2):235-9. doi: 10.1016/s0021-9150(97)00167-6. PMID: 9430373.

245) Osuga J, Yagyu H, Ohashi K, Harada K, Yazaki Y, Yamada N, Ishibashi S. Effects of apo E deficiency on plasma lipid levels in mice lacking APOBEC-1. Biochem Biophys Res Commun. 1997 Jul 18;236(2):375-8. doi: 10.1006/bbrc.1997.6951. PMID: 9240444.

246) Harada K, Ishibashi S, Miyashita T, Osuga J, Yagyu H, Ohashi K, Yazaki Y, Yamada N. Bcl-2 protein inhibits oxysterol-induced apoptosis through suppressing CPP32-mediated pathway. FEBS Lett. 1997 Jul 7;411(1):63-6. doi: 10.1016/s0014-5793(97)00662-5. PMID: 9247143.

247) Gotoda T, Kinoshita M, Ishibashi S, Inaba T, Harada K, Shimada M, Osuga J, Teramoto T, Yazaki Y, Yamada N. Skipping of exon 14 and possible instability of both the mRNA and the resultant truncated protein underlie a common cholesteryl ester transfer protein deficiency in Japan. Arterioscler Thromb Vasc Biol. 1997 Jul;17(7):1376-81. doi: 10.1161/01.atv.17.7.1376. PMID: 9261270.

248) Osuga J, Ishibashi S, Shimano H, Inaba T, Kawamura M, Yazaki Y, Yamada N. Suppression of neutral cholesterol ester hydrolase activity by antisense DNA of hormone-sensitive lipase. Biochem Biophys Res Commun. 1997 Apr 28;233(3):655-7. doi: 10.1006/bbrc.1997.6518. PMID: 9168908.

249) Inaba T, Ishibashi S, Harada K, Osuga J, Yagyu H, Ohashi K, Yazaki Y, Yamada N. Synergistic effects of transforming growth factor-beta on the expression of c-fms, macrophage colony-stimulating factor receptor gene, in vascular smooth muscle cells. FEBS Lett. 1996 Dec 16;399(3):207-10. doi: 10.1016/s0014-5793(96)01322-1. PMID: 8985146.

250) Inaba T, Ishibashi S, Harada K, Ohsuga J, Ohashi K, Yagyu H, Yazaki Y, Higashiyama S, Kawata S, Matsuzawa Y, Yamada N. Induction of macrophage colony- stimulating factor receptor (c-fms) expression in vascular medial smooth muscle cells treated with heparin binding epidermal growth factor-like growth factor. J Biol Chem. 1996 Oct 4;271(40):24413-7. doi: 10.1074/jbc.271.40.24413. PMID: 8798698.

251) Ishibashi S, Perrey S, Chen Z, Osuga Ji, Shimada M, Ohashi K, Harada K,Yazaki Y, Yamada N. Role of the low density lipoprotein (LDL) receptor pathway in the metabolism of chylomicron remnants. A quantitative study in knockout mice lacking the LDL receptor, apolipoprotein E, or both. J Biol Chem. 1996 Sep 13;271(37):22422-7. doi: 10.1074/jbc.271.37.22422. PMID: 8798405.

252) Braun JR, Willnow TE, Ishibashi S, Ashwell G, Herz J. The major subunit ofthe asialoglycoprotein receptor is expressed on the hepatocellular surface in mice lacking the minor receptor subunit. J Biol Chem. 1996 Aug30;271(35):21160-6. doi: 10.1074/jbc.271.35.21160. PMID: 8702886.

253) Ishibashi S, Schwarz M, Frykman PK, Herz J, Russell DW. Disruption of cholesterol 7alpha-hydroxylase gene in mice. I. Postnatal lethality reversed by bile acid and vitamin supplementation. J Biol Chem. 1996 Jul 26;271(30):18017-23. doi: 10.1074/jbc.271.30.18017. PMID: 8663429.

254) Shimada M, Ishibashi S, Inaba T, Yagyu H, Harada K, Osuga JI, Ohashi K, Yazaki Y, Yamada N. Suppression of diet-induced atherosclerosis in low density lipoprotein receptor knockout mice overexpressing lipoprotein lipase. Proc Natl Acad Sci U S A. 1996 Jul 9;93(14):7242-6. doi: 10.1073/pnas.93.14.7242. PMID: 8692976; PMCID: PMC38967.

255) Suzuki T, Ishibashi S, Qin X, Oka T, Hirai H, Ishikawa T, Nagai R, Yazaki Y. Sick sinus syndrome in association with malignant lymphoma. Eur Heart J. 1996 Jun;17(6):968. doi: 10.1093/oxfordjournals.eurheartj.a014987. PMID: 8781845.

256) Inaba T, Gotoda T, Ishibashi S, Harada K, Ohsuga JI, Ohashi K, Yazaki Y, Yamada N. Transcription factor PU.1 mediates induction of c-fms in vascular smooth muscle cells: a mechanism for phenotypic change to phagocytic cells. Mol Cell Biol. 1996 May;16(5):2264-73. doi: 10.1128/MCB.16.5.2264. PMID: 8628293; PMCID: PMC231214

257) Inaba T, Ishibashi S, Gotoda T, Kawamura M, Morino N, Nojima Y, Kawakami M, Yazaki Y, Yamada N. Enhanced expression of platelet-derived growth factor-beta receptor by high glucose. Involvement of platelet-derived growth factor in diabetic angiopathy. Diabetes. 1996 Apr;45(4):507-12. doi: 10.2337/diab.45.4.507. PMID: 8603774.

258) Gaw A, Mancini FP, Ishibashi S. Rapid genotyping of low density lipoprotein receptor knockout mice using a polymerase chain reaction technique. Lab Anim. 1995 Oct;29(4):447-9. doi: 10.1258/002367795780739944. PMID: 8558830.

259) Shimada M, Ishibashi S, Gotoda T, Kawamura M, Yamamoto K, Inaba T, Harada K, Ohsuga J, Perrey S, Yazaki Y, et al. Overexpression of human lipoprotein lipase protects diabetic transgenic mice from diabetic hypertriglyceridemia and hypercholesterolemia. Arterioscler Thromb Vasc Biol. 1995 Oct;15(10):1688-94. doi: 10.1161/01.atv.15.10.1688. PMID: 7583545.

260) Osuga J, Inaba T, Harada K, Yagyu H, Shimada M, Yazaki Y, Yamada N, Ishibashi S. Cloning and structural analysis of the mouse apolipoprotein B mRNA editing protein gene. Biochem Biophys Res Commun. 1995 Sep 14;214(2):653-62. doi: 10.1006/bbrc.1995.2336. PMID: 7677778.

261) Shimada M, Ishibashi S, Yamamoto K, Kawamura M, Watanabe Y, Gotoda T, Harada K, Inaba T, Ohsuga J, Yazaki Y, et al. Overexpression of human lipoprotein lipase increases hormone-sensitive lipase activity in adipose tissue of mice. Biochem Biophys Res Commun. 1995 Jun 26;211(3):761-6. doi: 10.1006/bbrc.1995.1878. PMID: 7598704.

262) Inaba T, Gotoda T, Harada K, Shimada M, Ohsuga J, Ishibashi S, Yazaki Y, Yamada N. Induction of sustained expression of proto-oncogene c-fms by platelet-derived growth factor, epidermal growth factor, and basic fibroblast growth factor, and its suppression by interferon-gamma and macrophage colony-stimulating factor in

human aortic medial smooth muscle cells. J Clin Invest. 1995 Mar;95(3):1133-9. doi: 10.1172/JCI117761. PMID: 7883962; PMCID: PMC441450.

263) Ishibashi S, Hammer RE, Herz J. Asialoglycoprotein receptor deficiency in mice lacking the minor receptor subunit. J Biol Chem. 1994 Nov 11;269(45):27803-6. PMID: 7961705.

264) Willnow TE, Sheng Z, Ishibashi S, Herz J. Inhibition of hepatic chylomicron remnant uptake by gene transfer of a receptor antagonist. Science. 1994 Jun 3;264(5164):1471-4. doi: 10.1126/science.7515194. PMID: 7515194.

265) Ishibashi S, Herz J, Maeda N, Goldstein JL, Brown MS. The two-receptor model of lipoprotein clearance: tests of the hypothesis in "knockout" mice lacking the low density lipoprotein receptor, apolipoprotein E, or both proteins. Proc Natl Acad Sci U S A. 1994 May 10;91(10):4431-5. doi: 10.1073/pnas.91.10.4431. PMID: 8183926; PMCID: PMC43799.

266) Ishibashi S, Goldstein JL, Brown MS, Herz J, Burns DK. Massive xanthomatosis and atherosclerosis in cholesterol-fed low density lipoprotein receptor-negative mice. J Clin Invest. 1994 May;93(5):1885-93. doi: 10.1172/JCI117179. PMID: 8182121; PMCID: PMC294295.

267) Ishibashi S, Brown MS, Goldstein JL, Gerard RD, Hammer RE, Herz J. Hypercholesterolemia in low density lipoprotein receptor knockout mice and its reversal by adenovirus-mediated gene delivery. J Clin Invest. 1993 Aug;92(2):883-93. doi: 10.1172/JCI116663. PMID: 8349823; PMCID: PMC294927.

268) Murakami K, Shimizu M, Yamada N, Ishibashi S, Shimano H, Yazaki Y, Akanuma Y. Apolipoprotein E polymorphism is associated with plasma cholesterol response in a 7-day hospitalization study for metabolic and dietary control in NIDDM. Diabetes Care. 1993 Apr;16(4):564-9. doi: 10.2337/diacare.16.4.564. PMID: 8462379.

269) Ishibashi S, Mori N, Shimada M, Oka T, Shimano H, Gotoda T, Komeda K, Kawazu S, Murase T, Yazaki Y, et al. Apolipoprotein E metabolism in sciatic nerves of diabetic rats. Implication for diabetic neuropathy. Horm Metab Res. 1993 Feb;25(2):82-7. doi: 10.1055/s-2007-1002048. PMID: 8458613.

270) Yamada N, Ishibashi S, Shimano H, Inaba T, Gotoda T, Harada K, Shimada M, Shiomi M, Watanabe Y, Kawakami M, et al. Role of monocyte colony-stimulating factor in foam cell generation. Proc Soc Exp Biol Med. 1992 Jun;200(2):240-4. doi: 10.3181/00379727-200-43427. PMID: 1579589

271) Gotoda T, Yamada N, Murase T, Inaba T, Ishibashi S, Shimano H, Koga S, Yazaki Y, Furuichi Y, Takaku F. Occurrence of multiple aberrantly spliced mRNAs upon a donor splice site mutation that causes familial lipoprotein lipase deficiency. J Biol Chem. 1991 Dec 25;266(36):24757-62. PMID: 1761570.

272) Gotoda T, Yamada N, Kawamura M, Kozaki K, Mori N, Ishibashi S, Shimano H, Takaku F, Yazaki Y, Furuichi Y, Murase T. Heterogeneous mutations in the human lipoprotein lipase gene in patients with familial lipoprotein lipase deficiency. J Clin Invest. 1991 Dec;88(6):1856-64. doi: 10.1172/JCI115507. PMID: 1752947; PMCID: PMC295753.

273) Mori N, Gotoda T, Ishibashi S, Shimano H, Harada K, Inaba T, Takaku F, Yazaki Y, Yamada N. Effects of human recombinant macrophage colony-stimulating factor on the secretion of lipoprotein lipase from macrophages. Arterioscler Thromb. 1991 Sep-Oct;11(5):1315-21. doi: 10.1161/01.atv.11.5.1315. PMID: 1911718.

274) Inoue I, Ishibashi S, Harada K, Shimano H, Gotoda T, Shimada M, Takahashi K, Ishii J, Yazaki Y, Yamada N. Overexpression of low density lipoprotein receptor on Chinese hamster ovary cells generates foam cells. Arterioscler Thromb. 1991 Sep-Oct;11(5):1310-4. doi: 10.1161/01.atv.11.5.1310. PMID: 1911717.

275) Shimano H, Yamada N, Ishibashi S, Mokuno H, Mori N, Gotoda T, Harada K, Akanuma Y, Murase T, Yazaki Y, et al. Oxidation-labile subfraction of human plasma low density lipoprotein isolated by ion-exchange chromatography. J Lipid Res. 1991 May;32(5):763-73. PMID: 2072039.

276) Mokuno H, Yamada N, Shimano H, Ishibashi S, Mori N, Takahashi K, Oka T, Yoon TH, Takaku F. The enhanced cellular uptake of very-low-density lipoprotein enriched in apolipoprotein E. Biochim Biophys Acta. 1991 Feb 26;1082(1):63-70. doi: 10.1016/0005-2760(91)90300-7. PMID: 1849015.

277) Yoon TH, Mori N, Kitamura K, Ishibashi S, Shimano H, Mokuno H, Gotoda T, Takaku F, Yamada N. Characterization of monoclonal anti-rabbit apolipoprotein E antibodies and chemical composition of lipoproteins separated by anti-apolipoprotein E immuno-affinity chromatography. J Biochem. 1991 Feb;109(2):204-10. PMID: 1864834

278) Yokode M, Hammer RE, Ishibashi S, Brown MS, Goldstein JL. Diet-induced hypercholesterolemia in mice: prevention by overexpression of LDL receptors. Science. 1990 Nov 30;250(4985):1273-5. doi: 10.1126/science.2244210. PMID: 2244210.

279) Harada K, Shimano H, Kawakami M, Ishibashi S, Gotoda T, Mori N, Takaku F, Yamada N. Effect of tumor necrosis factor/cachectin on the activity of the low density lipoprotein receptor on human skin fibroblasts. Biochem

Biophys Res Commun. 1990 Nov 15;172(3):1022-7. doi: 10.1016/0006-291x(90)91548-7. PMID: 2244888.
280) Ishibashi S, Inaba T, Shimano H, Harada K, Inoue I, Mokuno H, Mori N, Gotoda T, Takaku F, Yamada N. Monocyte colony-stimulating factor enhances uptake and degradation of acetylated low density lipoproteins and cholesterol esterification in human monocyte-derived macrophages. J Biol Chem. 1990 Aug 25;265(24):14109-17. PMID: 2201680.
281) Shimano H, Yamada N, Ishibashi S, Harada K, Matsumoto A, Mori N, Inaba T, Motoyoshi K, Itakura H, Takaku F. Human monocyte colony-stimulating factor enhances the clearance of lipoproteins containing apolipoprotein B-100 via both low density lipoprotein receptor-dependent and -independent pathways in rabbits. J Biol Chem. 1990 Aug 5;265(22):12869-75. PMID: 2198280.
282) Yoon TH, Yamada N, Ishibashi S, Shimano H, Gotoda T, Harada K, Akanuma Y, Murase T, Takaku F. The release of hepatic triglyceride lipase from rat monolayered hepatocytes in primary culture. Endocrinol Jpn. 1990 Jun;37(3):437-42. doi: 10.1507/endocrj1954.37.437. PMID: 2253594.
283) Mokuno H, Yamada N, Sugimoto T, Kobayashi T, Ishibashi S, Shimano H, Takizawa M, Kawakami M, Takaku F, Murase T. Cholesterol-free diet with a high ratio of polyunsaturated to saturated fatty acids in heterozygous familial hypercholesterolemia: significant lowering effect on plasma cholesterol. Horm Metab Res. 1990 Apr;22(4):246-51. doi: 10.1055/s-2007-1004894. PMID: 2351374.
284) Ishibashi S, Yamada N, Shimano H, Mori N, Mokuno H, Gotohda T, Kawakami M, Murase T, Takaku F. Apolipoprotein E and lipoprotein lipase secreted from human monocyte-derived macrophages modulate very low density lipoprotein uptake. J Biol Chem. 1990 Feb 25;265(6):3040-7. PMID: 2303437.
285) Mokuno H, Ishibashi S, Shimano H, Gothoda T, Takaku F, Yamada N. Effect of exogenous apo E on the cellular binding of lipoproteins. Gerontology. 1990;36 Suppl 1:42-8. doi: 10.1159/000213232. PMID: 2384229.
286) Shimano H, Yamada N, Motoyoshi K, Matsumoto A, Ishibashi S, Mori N, Takaku F. Plasma cholesterol-lowering activity of monocyte colony-stimulating factor (M-CSF). Ann N Y Acad Sci. 1990;587:362-70. doi: 10.1111/j.1749-6632.1990.tb00177.x. PMID: 2193582.
287) Shimano H, Ishibashi S, Murase T, Gotohda T, Yamada N, Takaku F, Ohtomo E. Plasma apolipoproteins in patients with multi-infarct dementia. Atherosclerosis. 1989 Oct;79(2-3):257-60. doi: 10.1016/0021-9150(89)90132-9. PMID: 2597234.
288) Ishibashi S, Mori N, Murase T, Shimano H, Gotohda T, Kawakami M, Akanuma Y, Takaku F, Yamada N. Enhanced lipoprotein lipase secretion from human monocyte-derived macrophages caused by hypertriglyceridemic very low density lipoproteins. Arteriosclerosis. 1989 Sep-Oct;9(5):650-5. doi: 10.1161/01.atv.9.5.650. PMID: 2783078.
289) Ishibashi S, Yamada N, Shimano H, Takaku F, Akanuma Y, Murase T. Composition of very-low-density lipoproteins in non-insulin-dependent diabetes mellitus. Clin Chem. 1989 May;35(5):808-12. PMID: 2720974.
290) Ohno M, Ishibashi S, Nakao K, Nozue T, Nonomura K, Yamada N, Aburatani H, Shimano H, Murase T. A neonatal case of apolipoprotein C-II deficiency. Eur J Pediatr. 1989 Apr;148(6):550-2. doi: 10.1007/BF00441556. PMID: 2501098.
291) Yamada N, Shimano H, Mokuno H, Ishibashi S, Gotohda T, Kawakami M, Watanabe Y, Akanuma Y, Murase T, Takaku F. Increased clearance of plasma cholesterol after injection of apolipoprotein E into Watanabe heritable hyperlipidemic rabbits. Proc Natl Acad Sci U S A. 1989 Jan;86(2):665-9. doi: 10.1073/pnas.86.2.665. PMID: 2911597; PMCID: PMC286534.
292) Ishibashi S, Yamada N, Oka Y, Shimano H, Mori N, Yoon TH, Shimada M, Kanazawa Y, Akanuma Y, Murase T, et al. Enhanced synthesis and secretion of apolipoprotein E from sciatic nerves of streptozotocin-induced diabetic rats after injury. Biochem Biophys Res Commun. 1988 Aug 30;155(1):283-8. doi: 10.1016/s0006-291x(88)81081-7. PMID: 3415684.
293) Mori N, Yamada N, Ishibashi S, Kawakami M, Takahashi K, Shimano H, Fujisawa M, Takaku F, Murase T. High-cholesterol diet-induced lipoproteins stimulate lipoprotein lipase secretion in cultured rat alveolar macrophages. Biochim Biophys Acta. 1987 Nov 21;922(2):103-10. doi: 10.1016/0005-2760(87)90143-3. PMID: 3676335.
294) Kawakami M, Murase T, Ogawa H, Ishibashi S, Mori N, Takaku F, Shibata S. Human recombinant TNF suppresses lipoprotein lipase activity and stimulates lipolysis in 3T3-L1 cells. J Biochem. 1987 Feb;101(2):331-8. doi: 10.1093/oxfordjournals.jbchem.a121917. PMID: 3495531.
295) Kawakami M, Ishibashi S, Ogawa H, Murase T, Takaku F, Shibata S. Cachectin/TNF as well as interleukin-1 induces prostacyclin synthesis in cultured vascular endothelial cells. Biochem Biophys Res Commun. 1986 Dec

15;141(2):482-7. doi: 10.1016/s0006-291x(86)80198-x. PMID: 3541932.

296) Kawakami M, Murase T, Ishibashi S, Mori N, Takaku F. Lipoprotein lipase in mouse peritoneal macrophages: the effects of insulin and dexamethasone. J Biochem. 1986 Nov;100(5):1373-8. doi: 10.1093/oxfordjournals.jbchem.a121843. PMID: 3546281.

297) Ishibashi S, Murase T, Takahashi K, Mori N, Kawakami M, Takaku F. Plasma apolipoprotein CII levels in hypertriglyceridemia. Metabolism. 1986 Aug;35(8):781-5. doi: 10.1016/0026-0495(86)90246-5. PMID: 3736415.

298) Murase T, Oka T, Yamada N, Mori N, Ishibashi S, Takaku F, Mori W. Immunohistochemical localization of apolipoprotein E in atherosclerotic lesions of the aorta and coronary arteries. Atherosclerosis. 1986 Apr;60(1):1-6. doi:10.1016/0021-9150(86)90080-8. PMID: 3518733.

299) Ishibashi S, Murase T, Yamada N, Tanaka K, Takaku F, Sato K. Hyperlipidaemia in patients with hypopituitarism. Acta Endocrinol (Copenh). 1985 Dec;110(4):456-60. doi: 10.1530/acta.0.1100456. PMID: 4090908.

300) Miyazono K, Okabe T, Ishibashi S, Urabe A, Takaku F. A platelet factor stimulating the proliferation of vascular endothelial cells. Partialpurification and characterization. Exp Cell Res. 1985 Aug;159(2):487-94. doi:10.1016/s0014-4827(85)80022-7. PMID: 4029276.

Reviews/editorials/letters in English

1) Okamura T, Tsukamoto K, Arai H, Fujioka Y, Ishigaki Y, Koba S, Ohmura H, Shoji T, Yokote K, Yoshida H, Yoshida M, Deguchi J, Dobashi K, Fujiyoshi A, Hamaguchi H, Hara M, Harada-Shiba M, Hirata T, Iida M, Ikeda Y, Ishibashi S, Kanda H, Kihara S, Kitagawa K, Kodama S, Koseki M, Maezawa Y, Masuda D, Miida T, Miyamoto Y, Nishimura R, Node K, Noguchi M, Ohishi M, Saito I, Sawada S, Sone H, Takemoto M, Wakatsuki A, Yanai H.: Japan Atherosclerosis Society (JAS) Guidelines for Prevention of Atherosclerotic Cardiovascular Diseases 2022. J Atheroscler Thromb. 2023 Dec 19. doi: 10.5551/jat.GL2022. Online ahead of print.PMID: 38123343
2) Bredefeld C, Hussain MM, Averna M, Black DD, Brin MF, Burnett JR, Charrière S, Cuerq C, Davidson NO, Deckelbaum RJ, Goldberg IJ, Granot E, Hegele RA, Ishibashi S, Karmally W, Levy E, Moulin P, Okazaki H, Poinsot P, Rader DJ, Takahashi M, Tarugi P, Traber MG, Di Filippo M, Peretti N. Guidance for the diagnosis and treatment of hypolipidemia disorders. J Clin Lipidol. 2022 Nov- Dec;16(6):797-812. doi: 10.1016/j.jacl.2022.08.009. Epub 2022 Sep 29. PMID: 36243606.
3) Tada H, Kurashina T, Ogura M, Takegami M, Miyamoto Y, Arai H, Harada-Shiba M, Ishibashi S. Prospective Registry Study of Primary Dyslipidemia (PROLIPID): Rationale and Study Design. J Atheroscler Thromb. 2022 Jun 1;29(6):953-969. doi: 10.5551/jat.63222. Epub 2021 Oct 22. PMID: 34690220; PMCID: PMC9174082.
4) Takahashi M, Okazaki H, Ohashi K, Ogura M, Ishibashi S, Okazaki S, Hirayama S, Hori M, Matsuki K, Yokoyama S, Harada-Shiba M. Current Diagnosis and Management of Abetalipoproteinemia. J Atheroscler Thromb. 2021 Oct 1;28(10):1009-1019. doi: 10.5551/jat.RV17056. Epub 2021 May 16. PMID: 33994405; PMCID: PMC8560840.
5) Okazaki H, Gotoda T, Ogura M, Ishibashi S, Inagaki K, Daida H, Hayashi T, Hori M, Masuda D, Matsuki K, Yokoyama S, Harada-Shiba M. Current Diagnosis and Management of Primary Chylomicronemia. J Atheroscler Thromb. 2021 Sep 1;28(9):883-904. doi: 10.5551/jat.RV17054. Epub 2021 May 13. PMID: 33980761; PMCID: PMC8532063.
6) Yamashita S, Masuda D, Akishita M, Arai H, Asada Y, Dobashi K, Egashira K, Harada-Shiba M, Hirata K, Ishibashi S, Kajinami K, Kinoshita M, Kozaki K, Kuzuya M, Ogura M, Okamura T, Sato K, Shimano H, Tsukamoto K, Yokode M, Yokote K, Yoshida M. Guidelines on the Clinical Evaluation of Medicinal Products for Treatment of Dyslipidemia. J Atheroscler Thromb. 2020 Nov 1;27(11):1246-1254. doi: 10.5551/jat.CR004. Epub 2020 Aug 28. PMID: 32863291; PMCID: PMC7803830.
7) Fruchart JC, Santos RD, Aguilar-Salinas C, Aikawa M, Al Rasadi K, Amarenco P, Barter PJ, Ceska R, Corsini A, Després JP, Duriez P, Eckel RH, Ezhov MV, Farnier M, Ginsberg HN, Hermans MP, Ishibashi S, Karpe F, Kodama T, Koenig W, Krempf M, Lim S, Lorenzatti AJ, McPherson R, Nuñez-Cortes JM, Nordestgaard BG, Ogawa H, Packard CJ, Plutzky J, Ponte-Negretti CI, Pradhan A, Ray KK, Reiner Ž, Ridker PM, Ruscica M, Sadikot S, Shimano H, Sritara P, Stock JK, Su TC, Susekov AV, Tartar A, Taskinen MR, Tenenbaum A, Tokgözoğlu LS, Tomlinson B, Tybjærg- Hansen A, Valensi P, Vrablík M, Wahli W, Watts GF, Yamashita S, Yokote K, Zambon A, Libby P. The selective peroxisome proliferator-activated receptor alpha modulator (SPPARMα) paradigm: conceptual framework and therapeutic potential : A consensus statement from the

International Atherosclerosis Society (IAS) and the Residual Risk Reduction Initiative (R3i) Foundation. Cardiovasc Diabetol. 2019 Jun 4;18(1):71. doi: 10.1186/s12933-019-0864-7. PMID: 31164165; PMCID: PMC6549355.

8) Pradhan AD, Paynter NP, Everett BM, Glynn RJ, Amarenco P, Elam M, Ginsberg H, Hiatt WR, Ishibashi S, Koenig W, Nordestgaard BG, Fruchart JC, Libby P, Ridker PM. Rationale and design of the Pemafibrate to Reduce Cardiovascular Outcomes by Reducing Triglycerides in Patients with Diabetes (PROMINENT) study. Am Heart J. 2018 Dec;206:80-93. doi: 10.1016/j.ahj.2018.09.011. Epub 2018 Sep 29. PMID: 30342298.
9) Kinoshita M, Yokote K, Arai H, Iida M, Ishigaki Y, Ishibashi S, Umemoto S, Egusa G, Ohmura H, Okamura T, Kihara S, Koba S, Saito I, Shoji T, Daida H, Tsukamoto K, Deguchi J, Dohi S, Dobashi K, Hamaguchi H, Hara M, Hiro T, Biro S, Fujioka Y, Maruyama C, Miyamoto Y, Murakami Y, Yokode M, Yoshida H, Rakugi H, Wakatsuki A, Yamashita S; Committee for Epidemiology and Clinical Management of Atherosclerosis. Japan Atherosclerosis Society (JAS) Guidelines for Prevention of Atherosclerotic Cardiovascular Diseases 2017. J Atheroscler Thromb. 2018 Sep 1;25(9):846-984. doi: 10.5551/jat.GL2017. Epub 2018 Aug 22. PMID: 30135334; PMCID: PMC6143773.
10) Harada-Shiba M, Arai H, Ishigaki Y, Ishibashi S, Okamura T, Ogura M, Dobashi K, Nohara A, Bujo H, Miyauchi K, Yamashita S, Yokote K; Working Group by Japan Atherosclerosis Society for Making Guidance of Familial Hypercholesterolemia. Guidelines for Diagnosis and Treatment of Familial Hypercholesterolemia 2017. J Atheroscler Thromb. 2018 Aug 1;25(8):751-770. doi: 10.5551/jat.CR003. Epub 2018 Jun 7. PMID: 29877295; PMCID: PMC6099072.
11) Sattar NA, Ginsberg H, Ray K, Chapman MJ, Arca M, Averna M, Betteridge DJ, Bhatnagar D, Bilianou E, Carmena R, Ceška R, Corsini A, Erbel R, Flynn PD, Garcia-Moll X, Gumprecht J, Ishibashi S, Jambart S, Kastelein JJ, Maher V, da Silva PM, Masana L, Odawara M, Pedersen TR, Rotella CM, Salti I, Teramoto T, Tokgozoglu L, Toth PP, Valensi P, Vergès B. The use of statins in people at risk of developing diabetes mellitus: evidence and guidance for clinical practice. Atheroscler Suppl. 2014 Jun;15(1):1-15. doi: 10.1016/j.atherosclerosissup.2014.04.001. PMID: 24840509.
12) Teramoto T, Sasaki J, Ishibashi S, Birou S, Daida H, Dohi S, Egusa G, Hiro T, Hirobe K, Iida M, Kihara S, Kinoshita M, Maruyama C, Ohta T, Okamura T, Yamashita S, Yokode M, Yokote K; Japan Atherosclerosis Society Committee for Epidemiology and Clinical Management of Atherosclerosis. Statements. J Atheroscler Thromb. 2014;21(4):299-303. doi: 10.5551/jat.ed002. Epub 2014 Apr 12. PMID: 24727684.
13) Teramoto T, Sasaki J, Ishibashi S, Birou S, Daida H, Dohi S, Egusa G, Hiro T, Hirobe K, Iida M, Kihara S, Kinoshita M, Maruyama C, Ohta T, Okamura T, Yamashita S, Yokode M, Yokote K, Harada-Shiba M, Arai H, Bujo H, Nohara A, Ohta T, Oikawa S, Okada T, Wakatsuki A. Familial hypercholesterolemia. J Atheroscler Thromb. 2014;21(1):6-10. doi: 10.5551/jat.20040. Epub 2013 Dec 10. PMID: 24335046.
14) Teramoto T, Sasaki J, Ishibashi S, Birou S, Daida H, Dohi S, Egusa G, Hiro T, Hirobe K, Iida M, Kihara S, Kinoshita M, Maruyama C, Ohta T, Okamura T, Yamashita S, Yokode M, Yokote K; Japan Atherosclerosis Society Committee for Epidemiology and Clinical Management of Atherosclerosis. Diagnosis of atherosclerosis. Executive Summary of the Japan Atherosclerosis Society (JAS) Guidelines for the Diagnosis and Prevention of Atherosclerotic Cardiovascular Diseases in Japan―2012 Version. J Atheroscler Thromb. 2014;21(4):296-8. doi: 10.5551/jat.19737. Epub 2013 Dec 10. PMID: 24335045.
15) Teramoto T, Sasaki J, Ishibashi S, Birou S, Daida H, Dohi S, Egusa G, Hiro T, Hirobe K, Iida M, Kihara S, Kinoshita M, Maruyama C, Ohta T, Okamura T, Yamashita S, Yokode M, Yokote K; Japan Atherosclerosis Society Committee for Epidemiology and Clinical Management of Atherosclerosis. Women. Executive Summary of the Japan Atherosclerosis Society (JAS) Guidelines for the Diagnosis and Prevention of Atherosclerotic Cardiovascular Diseases in Japan―2012 Version. J Atheroscler Thromb. 2014;21(4):291-5. doi: 10.5551/jat.19711. Epub 2013 Dec 10. PMID: 24335044.
16) Teramoto T, Sasaki J, Ishibashi S, Birou S, Daida H, Dohi S, Egusa G, Hiro T, Hirobe K, Iida M, Kihara S, Kinoshita M, Maruyama C, Ohta T, Okamura T, Yamashita S, Yokode M, Yokote K. The elderly. J Atheroscler Thromb. 2014;21(3):180-5. doi: 10.5551/jat.19679. Epub 2013 Dec 10. PMID: 24335043.
17) Teramoto T, Sasaki J, Ishibashi S, Birou S, Daida H, Dohi S, Egusa G, Hiro T, Hirobe K, Iida M, Kihara S, Kinoshita M, Maruyama C, Ohta T, Okamura T, Yamashita S, Yokode M, Yokote K. Cerebrovascular diseases. J Atheroscler Thromb. 2014;21(3):175-9. doi: 10.5551/jat.19661. Epub 2013 Dec 10. PMID: 24335042.
18) Teramoto T, Sasaki J, Ishibashi S, Birou S, Daida H, Dohi S, Egusa G, Hiro T, Hirobe K, Iida M, Kihara S, Kinoshita M, Maruyama C, Ohta T, Okamura T, Yamashita S, Yokode M, Yokote K. Chronic kidney disease. J

Atheroscler Thromb. 2014;21(3):173-4. doi: 10.5551/jat.19588. Epub 2013 Dec 10. PMID: 24335041.
19) Teramoto T, Sasaki J, Ishibashi S, Birou S, Daida H, Dohi S, Egusa G, Hiro T, Hirobe K, Iida M, Kihara S, Kinoshita M, Maruyama C, Ohta T, Okamura T, Yamashita S, Yokode M, Yokote K. Diabetes mellitus. Executive summary of the Japan Atherosclerosis Society (JAS) guidelines for the diagnosis and prevention of atherosclerotic cardiovascular diseases in Japan--2012 version. J Atheroscler Thromb. 2014;21(2):93-8. doi: 10.5551/jat.19349. Epub 2013 Dec 10. PMID: 24335040.
20) Teramoto T, Sasaki J, Ishibashi S, Birou S, Daida H, Dohi S, Egusa G, Hiro T, Hirobe K, Iida M, Kihara S, Kinoshita M, Maruyama C, Ohta T, Okamura T, Yamashita S, Yokode M, Yokote K. Treatment B) drug therapy: executive summary of the Japan Atherosclerosis Society(JAS) guidelines for the diagnosis and prevention of atherosclerotic cardiovascular diseases in Japan--2012 version. J Atheroscler Thromb. 2013;20(12):850-60. doi: 10.5551/jat.19166. Epub 2013 Dec 10. PMID: 24335039.
21) Teramoto T, Sasaki J, Ishibashi S, Birou S, Daida H, Dohi S, Egusa G, Hiro T, Hirobe K, Iida M, Kihara S, Kinoshita M, Maruyama C, Ohta T, Okamura T, Yamashita S, Yokode M, Yokote K. Coronary artery disease. Executive summary of the Japan Atherosclerosis Society (JAS) guidelines for the diagnosis and prevention of atherosclerotic cardiovascular diseases in Japan--2012 version. J Atheroscler Thromb. 2014;21(2):86-92. doi: 10.5551/jat.19158. Epub 2013 Dec 10.PMID: 24335038.
22) Teramoto T, Sasaki J, Ishibashi S, Birou S, Daida H, Dohi S, Egusa G, Hiro T, Hirobe K, Iida M, Kihara S, Kinoshita M, Maruyama C, Ohta T, Okamura T, Yamashita S, Yokode M, Yokote K. Other types of primary hyperlipoproteinemia(hyperlipidemia). Executive summary of the Japan Atherosclerosis Society (JAS) guidelines for the diagnosis and prevention of atherosclerotic cardiovascular diseases in Japan--2012 version. J Atheroscler Thromb. 2014;21(2):82-5. doi: 10.5551/jat.19141. Epub 2013 Dec 10. PMID: 24335037.
23) Teramoto T, Sasaki J, Ishibashi S, Birou S, Daida H, Dohi S, Egusa G, Hiro T, Hirobe K, Iida M, Kihara S, Kinoshita M, Maruyama C, Ohta T, Okamura T, Yamashita S, Yokode M, Yokote K. Metabolic syndrome. J Atheroscler Thromb. 2014;21(1):1-5. doi: 10.5551/jat.18473. Epub 2013 Dec 10. PMID: 24335036.
24) Teramoto T, Sasaki J, Ishibashi S, Birou S, Daida H, Dohi S, Egusa G, Hiro T, Hirobe K, Iida M, Kihara S, Kinoshita M, Maruyama C, Ohta T, Okamura T, Yamashita S, Yokode M, Yokote K. Treatment A) lifestyle modification: executive summary of the Japan Atherosclerosis Society(JAS) guidelines for the diagnosis and prevention of atherosclerotic cardiovascular diseases in Japan—2012 version. J Atheroscler Thromb. 2013;20(12):835-49. doi: 10.5551/jat.18820. Epub 2013 Oct 29. PMID: 24172256.
25) Teramoto T, Sasaki J, Ishibashi S, Birou S, Daida H, Dohi S, Egusa G, Hiro T, Hirobe K, Iida M, Kihara S, Kinoshita M, Maruyama C, Ohta T, Okamura T, Yamashita S, Yokode M, Yokote K. Other high-risk conditions. J Atheroscler Thromb. 2013;20(11):785-9. doi: 10.5551/jat.17525. Epub 2013 Aug 1. PMID: 23903295.
26) Teramoto T, Sasaki J, Ishibashi S, Birou S, Daida H, Dohi S, Egusa G, Hiro T, Hirobe K, Iida M, Kihara S, Kinoshita M, Maruyama C, Ohta T, Okamura T, Yamashita S, Yokode M, Yokote K. Absolute risk of cardiovascular disease and lipid management targets. J Atheroscler Thromb. 2013;20(9):689-97. doi: 10.5551/jat.17392. Epub 2013 Jul 26. PMID: 23892530.
27) Teramoto T, Sasaki J, Ishibashi S, Birou S, Daida H, Dohi S, Egusa G, Hiro T, Hirobe K, Iida M, Kihara S, Kinoshita M, Maruyama C, Ohta T, Okamura T, Yamashita S, Yokode M, Yokote K. Cardiovascular disease risk factors other than dyslipidemia. Executive summary of the Japan Atherosclerosis Society (JAS) guidelines for the diagnosis and prevention of atherosclerotic cardiovascular diseases in Japan - 2012 version. J Atheroscler Thromb. 2013;20(10):733-42. doi: 10.5551/jat.17368. Epub 2013 Jul 26. PMID: 23892529.
28) Teramoto T, Sasaki J, Ishibashi S, Birou S, Daida H, Dohi S, Egusa G, Hiro T, Hirobe K, Iida M, Kihara S, Kinoshita M, Maruyama C, Ohta T, Okamura T, Yamashita S, Yokode M, Yokote K. Diagnostic criteria for dyslipidemia. J Atheroscler Thromb. 2013;20(8):655-60. doi: 10.5551/jat.17152. Epub 2013 Jul 26. PMID: 23892528.
29) Teramoto T, Sasaki J, Ishibashi S, Birou S, Daida H, Dohi S, Egusa G, Hiro T, Hirobe K, Iida M, Kihara S, Kinoshita M, Maruyama C, Ohta T, Okamura T, Yamashita S, Yokode M, Yokote K; Japan Atherosclerosis Society (JAS). Comprehensive risk management for the prevention of cardiovascular disease: executive summary of the Japan Atherosclerosis Society (JAS) guidelines for the diagnosis and prevention of atherosclerotic cardiovascular diseases in Japan -- 2012. J Atheroscler Thromb. 2013;20(7):603-15. doi: 10.5551/jat.15867. Epub 2013 Jul 25. PMID: 23883545.
30) Teramoto T, Sasaki J, Ishibashi S, Birou S, Daida H, Dohi S, Egusa G, Hiro T, Hirobe K, Iida M, Kihara S, Kinoshita M, Maruyama C, Ohta T, Okamura T, Yamashita S, Yokode M, Yokote K; Japan Atherosclerosis

Society. Executive summary of the Japan Atherosclerosis Society (JAS) guidelines for the diagnosis and prevention of atherosclerotic cardiovascular diseases in Japan -2012 version. J Atheroscler Thromb. 2013;20(6):517-23. doi: 10.5551/jat.15792. Epub 2013 May 11. Erratum in: J Atheroscler Thromb. 2014 Mar 27;21(3):289. PMID: 23665881.

31) Arai H, Ishibashi S, Bujo H, Hayashi T, Yokoyama S, Oikawa S, Kobayashi J, Shirai K, Ota T, Yamashita S, Gotoda T, Harada-Shiba M, Sone H, Eto M, Suzuki H, Yamada N; Research Committee for Primary Hyperlipidemia, Research on Measures against Intractable Diseases by the Ministry of Health, Labour and Welfare in Japan. Management of type IIb dyslipidemia. J Atheroscler Thromb. 2012;19(2):105-14. doi: 10.5551/jat.10447. Epub 2011 Dec 3. PMID: 22139432.
32) Gotoda T, Shirai K, Ohta T, Kobayashi J, Yokoyama S, Oikawa S, Bujo H, Ishibashi S, Arai H, Yamashita S, Harada-Shiba M, Eto M, Hayashi T, Sone H, Suzuki H, Yamada N; Research Committee for Primary Hyperlipidemia, Research on Measures against Intractable Diseases by the Ministry of Health, Labour and Welfare in Japan. Diagnosis and management of type I and type V hyperlipoproteinemia. J Atheroscler Thromb. 2012;19(1):1-12. doi: 10.5551/jat.10702. Epub 2011 Dec 1. PMID: 22129523.
33) Harada-Shiba M, Arai H, Oikawa S, Ohta T, Okada T, Okamura T, Nohara A, Bujo H, Yokote K, Wakatsuki A, Ishibashi S, Yamashita S. Guidelines for the management of familial hypercholesterolemia. J Atheroscler Thromb. 2012;19(12):1043-60. doi: 10.5551/jat.14621. Epub 2012 Oct 25. PMID: 23095242.
34) Yokoyama S, Yamashita S, Ishibashi S, Sone H, Oikawa S, Shirai K, Ohta T, Bujo H, Kobayashi J, Arai H, Harada-Shiba M, Eto M, Hayashi T, Gotoda T, Suzuki H, Yamada N. Background to discuss guidelines for control of plasma HDL- cholesterol in Japan. J Atheroscler Thromb. 2012;19(3):207-12. doi: 10.5551/jat.11452. Epub 2012 Jan 12. PMID: 22240911.
35) Ishibashi S, Igarashi M, Sekiya M, Okazaki H, OsugaJ. Response to the letter by Ghosh. Circ Res 2011;108(5)、https://www.ahajournals.org/doi/10.1161/CIRCRESAHA.110.239434
36) Sekiya M, Osuga J, Igarashi M, Okazaki H, Ishibashi S. The role of neutral cholesterol ester hydrolysis in macrophage foam cells. J Atheroscler Thromb. 2011;18(5):359-64. doi: 10.5551/jat.7013. Epub 2011 Apr 6. PMID: 21467808.
37) Holmes RS, Wright MW, Laulederkind SJ, Cox LA, Hosokawa M, Imai T, Ishibashi S, Lehner R, Miyazaki M, Perkins EJ, Potter PM, Redinbo MR, Robert J, Satoh T, Yamashita T, Yan B, Yokoi T, Zechner R, Maltais LJ. Recommended nomenclature for five mammalian carboxylesterase gene families: human, mouse, and rat genes and proteins. Mamm Genome. 2010 Oct;21(9-10):427-41. doi: 10.1007/s00335-010-9284-4. Epub 2010 Oct 8. PMID: 20931200; PMCID: PMC3127206.
38) Ishibashi S. The vascular renin-angiotensin system as a possible source of vascular inflammation in fructose-fed rats. Hypertens Res. 2007 May;30(5):375-6. doi: 10.1291/hypres.30.375. PMID: 17587748.
39) Harada-Shiba M, Takagi A, Marutsuka K, Moriguchi S, Yagyu H, Ishibashi S, Asada Y, Yokoyama S. Disruption of autosomal recessive hypercholesterolemia gene shows different phenotype in vitro and in vivo. Circ Res. 2004 Oct 29;95(9):945-52. doi: 10.1161/01.RES.0000146946.78540.46. Epub 2004 Oct 7. PMID: 15472122.
40) Maruyama T, Yamashita S, Matsuzawa Y, Bujo H, Takahashi K, Saito Y, Ishibashi S, Ohashi K, Shionoiri F, Gotoda T, Yamada N, Kita T; Research Committee on Primary Hyperlipidemia of the Ministry of Health and Welfare of Japan. Mutations in Japanese subjects with primary hyperlipidemia--results from the Research Committee of the Ministry of Health and Welfare of Japan since 1996--. J Atheroscler Thromb. 2004;11(3):131-45. doi: 10.5551/jat.11.131. PMID: 15256764.
41) Ishibashi S. Lipoprotein(a) and atherosclerosis. Arterioscler Thromb Vasc Biol. 2001 Jan;21(1):1-2. doi: 10.1161/01.atv.21.1.1. PMID: 11145926.
42) Harada K, Shimano H, Ishibashi S, Yamada N. Transgenic mouse and gene therapy. Diabetes. 1996 Jul;45 Suppl 3:S129-32. doi: 10.2337/diab.45.3.s129. PMID: 8674880.

原著論文(和文)

1) 佐藤 和徳, 三浦 光一, 野本 弘章, 渡邊 俊司, 前田 浩史, 五家 里栄, 津久井 舞未子, 齋藤 奈緒子, 櫻井 百恵, 武井 暁一, 石橋 俊, 矢作 直也, 森本 直樹, 山本 博徳アテゾリズマブ・ベバシズマブ併用療法後

に続発性副腎皮質機能低下症を呈した肝細胞癌の 1 例 肝臓(0451-4203)65 巻 5 号 Page231-239(2024.05) DOI:10.2957/kanzo.65.23
2) 渡邉 秀平, 倉科 智行, 五十嵐 真由子, 谷口 亜衣, 澁谷 浩史, 山岡 桂子, 齋藤 新介, 岡 聖典, 櫻井 百恵, 甲賀 裕希子, 高橋 学, 永島 秀一, 岡田 健太, 海老原 健, 石橋 俊 経時的に消失した下垂体病変を認めた Klinefelter 症候群の一例 自治医科大学紀要(1881-252X)45 巻 Page85-90(2023.03)
3) 甲賀 裕希子, 高橋 学, 岡 聖典, 櫻井 百恵, 澤山 渚, 山下 裕美子, 武井 暁一, 若林 徹治, 佐藤 信, 倉科 智行, 永島 秀一, 岡田 健太, 河田 浩敏, 山口 崇, 海老原 健, 福嶋 敬宜, 川合 謙介, 石橋 俊 先端巨大症に中毒性多結節性甲状腺腫(TMNG)を合併した 1 例 自治医科大学紀要(1881-252X)45 巻 Page77-84(2023.03)
4) 石橋 俊, 吉田 知也, 中西 路子, 新垣 航, 郡司 良治, 牧之瀬 勇一, 菅野 崇, 栗原 雄司 ペマフィブラートの長期使用に関する特定使用成績調査 中間報告(3 ヵ月) 薬理と治療(0386-3603)51 巻 4 号 Page453-467(2023.04)
5) 佐藤 由華, 成田 伸, 茂木 さつき, 石橋 俊 尿ケトン体陽性を示した妊娠糖尿病妊婦への支援方法の検討事例を通して考える 栃木県母性衛生学会雑誌: とちぼ 49 号 Page24-30(2023.03)
6) 塚原 亜理沙, 永山 志穂, 甲賀 裕希子, 内田 慎一郎, 薄井 里英, 大口 昭英, 高橋 宏典, 石橋 俊, 藤原 寛行 コントロール不良の重症早発型妊娠高血圧腎症を示したクッシング症候群 栃木県産婦人科医報 49 巻 Page25-29(2023.03)
7) 櫻井 百恵, 倉科 智行, 岡田 健太, 海老原 健, 石橋 俊 甲状腺中毒症状を契機に診断された GH・TSH 同時産生下垂体腺腫の 1 例 内科(0022-1961)130 巻 2 号 Page316-319(2022.08) DOI:10.15106/j_naika130_316
8) 川畑 奈緒, 石田 洋一, 岡田 健太, 長嶺 智重子, 四反田 由紀, 佐久間 志津, 千葉 円香, 小暮 亜弥子, 芳賀 敦子, 荒川 由起子, 茂木 さつき, 鈴木 達也, 藤原 寛行, 石橋 俊肥満不妊女性に対する減量プログラムの臨床的、身体的および栄養学的効果 日本病態栄養学会誌(1345-8167)25 巻 1 号 Page109-118(2022.04)
9) 小池 瑛, 齋藤 心, 春田 英律, 岡田 健太, 石橋 俊, 倉科 憲太郎, 橋本 愛, 山野井 徳子, 芝 順太郎, 鈴木 昭広, 竹内 護, 千葉 蒔七, 千葉 小夜, 金子 勇貴, 高橋 和也, 北山 丈二, Lefor Alan K., 細谷 好則, 佐田 尚宏 高度肥満症に対する減量・代謝改善手術の治療成績 自治医科大学における 103 例の集計 自治医科大学紀要(1881-252X)44 巻 Page15-20(2022.03)
10) 五十嵐 真由子, 倉科 智行, 濱野 有美子, 山下 裕美子, 斎藤 新介, 川田 和己, 柴野 智毅, 蘆澤 健太郎, 高橋 学, 岡田 修和, 岡田 健太, 海老原 健, 西野 宏, 遠藤 俊輔, 石橋 俊 比較的早い経過で多発肺転移を示し経過中に TIA 様症状を来した副甲状腺癌の一例 自治医科大学紀要(1881-252X)41 巻 Page53-60(2019.03)
11) 山下 裕美子, 倉科 智行, 五十嵐 真由子, 礒田 雅代, 村上 明子, 斎藤 新介, 岡田 修和, 高橋 学, 安藤 明彦, 永島 秀一, 岡田 健太, 海老原 健, 秋山 達, 野首 光弘, 石橋 俊 局在診断目的の全身静脈サンプリングの結果の解釈に難渋した腫瘍性骨軟化症の 1 例 自治医科大学紀要(1881-252X)40 巻 Page23-28(2018.03)
12) 山崎 久隆, 長坂 昌一郎, 藤井 奈々, 永島 秀一, 大須賀 淳一, 石橋 俊超高齢発症で IA-2 抗体陽性から緩徐進行 1 型糖尿病と考えられた 1 例 糖尿病(0021-437X)59 巻 9 号 Page661-666(2016.09) DOI:10.11213/tonyobyo.57.453
13) 礒田 雅代, 長坂 昌一郎, 永島 秀一, 安藤 明彦, 岡田 健太, 海老原 健, 石橋 俊 HbA1c 偽高値から異常ヘモグロビン症と診断された 2 型糖尿病の 1 例 自治医科大学紀要(1881-252X)38 巻 Page47-51(2016.03)
14) 柳田 浩己, 安藤 明彦, 岡田 健太, 長坂 昌一郎, 石橋 俊, 小谷 和彦, 長谷川 修, 谷口 信行 健常者の末梢神経伝導検査に与える年齢・身長・性別の影響 自治医科大学附属病院における基準範囲の設定も含めて 自治医科大学紀要(1881-252X)38 巻 Page27-39(2016.03)
15) 長坂 昌一郎, 葛谷 健, 石橋 俊 我が国での CSII 黎明期に導入された 17 例の長期的経過 日本先進糖尿病治療研究会雑誌(2436-0058)11 巻 Page5-10(2015.11) DOI:10.34612/asindtj.11.0_5
16) 岡野 義英, 長坂 昌一郎, 関澤 大輔, 岡田 修和, 大須賀 淳一, 石橋 俊 抗 GAD 抗体高値を認めた劇症 1 型糖尿病の 1 例 Diabetes Journal: 糖尿病と代謝(0303-6057)43 巻 3 号 Page112-116(2015.09)
17) 高橋 学, 長坂 昌一郎, 小太刀 豪, 若林 徹治, 齋藤 奈緒子, 野口 仁麗, 岡田 健太, 今田 浩生, 福嶋 敬宜, 佐久間 康成, 佐田 尚宏, 石橋 俊 アドステロールシンチグラフィ陰性の副腎 black adenoma による Cushing 症候群の 1 例 自治医科大学紀要(1881-252X)37 巻 Page19-23(2015.03)
18) 川畑 奈緒, 佐藤 敏子, 斎藤 修, 石川 鎮清, 長田 太助, 草野 英二, 石橋 俊 2 型糖尿病腎症の発症と進展に寄与する臨床的および栄養学的指標の検討 栄養指導による介入がこれらの諸指標に及ぼす効果に関する研究 腎臓(0911-9752)37 巻 Page37-42(2015.03)
19) 高橋 深雪, 遠藤 俊輔, 野口 仁麗, 長坂 昌一郎, 石橋 俊, 山口 岳彦 高分子 insulin-like growth factor-II 産生が確認された臓側胸膜由来の孤立性線維性腫瘍の 1 切除例 日本呼吸器学会誌(2186-5876)3 巻 5 号

Page680-684(2014.09)
20) 齋藤 新介, 長坂 昌一郎, 齋藤 奈緒子, 松田 蓉子, 高橋 学, 岡田 修和, 岡田 健太, 野牛 宏晃, 大須賀 淳一, 石橋 俊 ジアゾキシドにて加療し、持続血糖モニタリングにて血糖推移を観察しえたインスリノーマの一例 自治医科大学紀要(1881-252X)36 巻 Page107-112(2014.03)
21) 関澤 大輔, 長坂 昌一郎, 高橋 仁麗, 大須賀 淳一, 石橋 俊 放射性ヨード内用療法後に発熱・炎症所見を伴う甲状腺中毒症の増悪を来した Basedow 病の 1 例 自治医科大学紀要(1881-252X)36 巻 Page101-105(2014.03)
22) 倉科 智行, 糟谷 優, 岡田 修和, 長坂 昌一郎, 大須賀 淳一, 石橋 俊 直腸がん術後の化学療法中に発症した橋本病急性増悪の 1 例 内科(0022-1961)113 巻 3 号 Page582-586(2014.03) DOI:10.15106/J00974.2014159112
23) 細谷 好則, 春田 英律, 石橋 俊, 倉科 憲太郎, 瑞木 亨, Lefor Alan, 佐田 尚宏, 永島 秀一, 大須賀 淳一, 安藤 康宏, 江口 和男, 岡島 美朗, 布宮 伸, 竹内 護, 佐藤 敏子, 矢田 俊彦, 多賀谷 信美, 川村 功, 安田 是和病的肥満症に対する腹腔鏡下スリーブ状胃切除術の導入と効果 自治医科大学紀要(1881-252X)35 巻 Page117-122(2013.03)
24) 岡田 健太, 石橋 俊 早期の 2 型糖尿病治療ステージにおけるリラグルチドの糖脂質代謝、血圧・心機能関連パラメーターに及ぼす効果 新薬と臨牀(0559-8672)60 巻 11 号 Page2261-2269(2011.11)
25) 宮本 倫聡, 小谷 和彦, 紺野 啓, 山田 俊幸, 石橋 俊, 谷口 信行 総頸動脈の血管径と冠動脈疾患の関連 臨床病理(0047-1860)59 巻 7 号 Page643-648(2011.07)
26) 岡田 健太, 仁科 浩和, 岡田 修和, 槌田 武史, 野牛 宏晃, 大須賀 淳一, 長坂 昌一郎, 石橋 俊 インスリン値が高値を示さず、プロインスリン高値を示したインスリノーマの 1 例 日本内科学会雑誌(0021-5384)99 巻 10 号 Page2545-2547(2010.10) DOI:10.2169/naika.99.2545
27) 森 浩輝, 岡田 修和, 野牛 宏晃, 齋藤 奈緒子, 槌田 武史, 関澤 大輔, 江藤 一弘, 長坂 昌一郎, 岡田 耕治, 石橋 俊 広がる疼痛を訴える 59 歳男性 日本未病システム学会雑誌(1347-5541)16 巻 1 号 Page149-152(2010.07)
28) 永島 秀一, 野牛 宏晃, 高橋 仁麗, 倉科 智行, 高橋 学, 田中 泰道, 槌田 武史, 田副 文子, 稲葉 利敬, 岡田 健太, 江藤 一弘, 長坂 昌一郎, 岡田 耕治, 石橋 俊 メタボリックシンドロームにおけるトリグリセライド水解酵素群の脂肪部位別発現の意義 Therapeutic Research(0289-8020)30 巻 6 号 Page899-904(2009.06)
29) 出口 亜希子(自治医科大学 内分泌代謝科), 長坂 昌一郎, 藤沢 元郎, 谷田貝 利光, 板橋 直樹, 岡田 耕治, 石橋 俊 胃バイパス術を施行した Prader-Willi 症候群の 1 例 糖尿病(0021-437X)51 巻 10 号 Page919-924(2008.10) DOI:10.11213/tonyobyo.51.919
30) 安藤 明彦, 長坂 昌一郎, 蒔田 芳男, 石橋 俊 新生児一過性糖尿病の再発と考えられた 1 例 Diabetes Journal: 糖尿病と代謝(0303-6057)35 巻 3 号 Page118-121(2007.09)
31) 楡木 恵実子, 長坂 昌一郎, 富澤 裕子, 稲葉 利敬, 六角 久美子, 藤田 延也, 岡田 耕治, 石橋 俊 抗 GAD 抗体強陽性が短期間で陰性化し、インスリン非依存状態にとどまっている糖尿病の 1 例 糖尿病(0021-437X)49 巻 9 号 Page717-721(2006.09) DOI:10.11213/tonyobyo.49.717
32) 高橋 学, 宮田 五月, 高野 類, 安藤 明彦, 藤沢 元郎, 野牛 宏晃, 長坂 昌一郎, 岡田 耕治, 石橋 俊, 小林 伸行, 渡辺 英寿, 市村 恵一, 田中 亨, 仁木 利郎, 佐野 壽昭 多発性圧迫骨折、動眼神経麻痺を契機に発見された macroadenoma による Cushing 病の 1 例 日本内分泌学会雑誌(0029-0661)82 巻 Suppl. Page33-35(2006.10)
33) 佐藤 奈緒子, 板橋 直樹, 倉科 智行, 野牛 宏晃, 長坂 昌一郎, 石橋 俊 口渇中枢障害を合併した Cushing 病術後患者に生じた重症高血糖高浸透圧昏睡の 1 例 内科(0022-1961)98 巻 4 号 Page745-748(2006.10) DOI:10.15106/J00974.2007018860
34) 室井 理佳, 長坂 昌一郎, 谷田貝 利光, 草鹿 育代, 石橋 俊 ヒトインスリン混合製剤(40R/50R)から二相性インスリンアナログ製剤への切り換えに関する検討 糖尿病診療マスター(1347-8176)4 巻 5 号 Page631-635(2006.07) DOI:10.11477/mf.1415100268
35) 河野 幹彦, 石橋 俊 ピタバスタチンの血清脂質および HDL 亜分画に及ぼす影響 Progress in Medicine(0287-3648)26 巻 4 号 Page875-880(2006.04)
36) 山家 邦章, 加藤 敏, 長坂 昌一郎, 石橋 俊 糖尿病患者の精神障害合併について 栃木県医学会々誌(0285-6387)35 巻 Page46-48(2005.10)
37) 多田 紀夫, 吉田 博, 寺本 民生, 及川 眞一, 齋藤 康, 山田 信博, 白井 厚治, 石橋 俊, 石川 俊次, 芳野原, 平野 勉 わが国における高 LDL コレステロール血症ならびに低 HDL コレステロール血症患者が有する危険因子と高脂血症治療の実態調査 Lipid Management Program(LiMAP)in Japan 成人病と生活習慣病(1347-0418)35 巻 10 号 Page1187-1197(2005.10)
38) 高橋 仁麗, 六角 久美子, 市来 健二, 中村 友厚, 長坂 昌一郎, 岡田 耕治, 塚原 宗俊, 栗原 克己, 佐田

尚宏，永井 秀雄，石橋 俊 糖尿病に VIPoma を合併した 1 例 糖尿病(0021-437X)47 巻 11 号 Page855-860(2004.11) DOI:10.11213/tonyobyo1958.47.855
39) 稲葉 利敬，野牛 宏晃，板橋 直樹，藤田 延也，田副 文子，岡崎 三代，岡田 耕治，石橋 俊 家族性高コレステロール血症(FH)のモデル動物である LDL 受容体欠損(LDLRKO)マウスにおけるベザフィブラートの動脈硬化抑制作用の検討 Therapeutic Research(0289-8020)25 巻 11 号 Page2175-2178(2004.11)
40) 田中 明，加藤 徹，石橋 俊，及川 眞一，大荷 満生，小沼 富男，白井 厚治，多田 紀夫，寺本 民生，平野 勉，木庭 新治，武城 英明，山田 信博，芳野 原 食後高脂血症に及ぼす抗高脂血症薬の影響 脂肪負荷試験を用いた多施設による臨床検討 Progress in Medicine(0287-3648)24 巻 5 号 Page1293-1302(2004.05)
41) 相磯 嘉孝，長坂 昌一郎，谷田貝 利光，中村 友厚，石橋 俊 ピオグリタゾンとメトホルミンの治療前後における血清アディポネクチン値の比較検討 プラクティス(0289-4947)21 巻 1 号 Page97-101(2004.01)
42) 本多 一文，田口 朋広，圓谷 由紀子，岡田 修和，川上 昭雄，六角 久美子，井手野 順一，中野 今治，石橋 俊【内分泌 興味ある症例】間脳・下垂体 脳炎後に視床下部-下垂体機能障害をきたした 1 例 ホルモンと臨床(0045-7167)51 巻秋季増刊 Page56-59(2003.11)
43) 稲葉 利敬，六角 久美子，板橋 直樹，井手野 順一，長坂 昌一郎，本多 一文，岡田 耕治，横山 水映，石川 三衛，齊藤 寿一，内潟 安子，岩本 安彦，石橋 俊 Methimazole 開始 4 年後に診断されたインスリン自己免疫症候群の 1 例 糖尿病(0021-437X)46 巻 10 号 Page787-790(2003.10) DOI:10.11213/tonyobyo1958.46.787
44) 藤田 延也，稲葉 利敬，市来 健二，板橋 直樹，野牛 宏晃，藤沢 元郎，岡田 耕治，石橋 俊 血管内皮細胞での高血糖による NF-κB 転写亢進に対する Pitavastatin の抑制作用 Therapeutic Research(0289-8020)24 巻 7 号 Page1349-1353(2003.07)
45) 市来 健二，中村 友厚，藤田 延也，本多 一文，石橋 俊，石川 三衛 下垂体性小人症に引き続き全身性脱毛及び ACTH 分泌不全をきたした 1 例 疾患単位としての Triple H 症候群について ホルモンと臨床(0045-7167)51 巻夏季増刊 Page27-29(2003.07)
46) 田村 嘉章，塚本 和久，山本 夏代，石橋 俊，門脇 孝，木村 哲 塩酸ブホルミン投与中,下痢,嘔吐に続いて急性腎不全,乳酸アシドーシスを発症した基礎疾患のない 2 型糖尿病の 1 例 糖尿病(0021-437X)46 巻 4 号 Page325-327(2003.04) DOI:10.11213/tonyobyo1958.46.325
47) 塚本 和久，森澤 雄司，深山 正久，戸辺 一之，岡田 光正，河野 匡，浅野 知一郎，石橋 俊，柴崎 芳一，門脇 孝，木村 哲 IL-6 産生腎細胞癌に伴い高血糖を呈した症例 糖尿病(0021-437X)46 巻 1 号 Page15-22(2003.01) DOI:10.11213/tonyobyo1958.46.15
48) 増田 貴博，長坂 昌一郎，都留 利恵，市来 健二，谷田貝 利光，岡田 修和，川上 昭雄，中村 友厚，藤田 延也，本多 一文，岡田 耕治，石橋 俊 トリロスタン治療後下垂体腫瘍を摘出した小児 Cushing 病の 1 例 日本内分泌学会雑誌(0029-0661)78 巻 Suppl. Page48-50(2002.10)
49) 谷田貝 利光，六角 久美子，草鹿 育代，中村 友厚，長坂 昌一郎，石川 三衛，齊藤 寿一，石橋 俊 分娩後にケトアシドーシスで発症した 1 型糖尿病の 1 例 糖尿病(0021-437X)45 巻 5 号 Page325-328(2002.05) DOI:10.11213/tonyobyo1958.45.325
50) 山田 信博，河津 捷二，宇都木 敏浩，森崎 信尋，寺本 民生，石橋 俊，藤田 敏郎，柴 輝男，岩本 安彦，葛谷 信明，芳野 原，赤沼 安夫，齋藤 康【ピタバスタチン(NK-104)の臨床的研究】新規 HMG-CoA 還元酵素阻害薬 Pitavastatin の高脂血症を伴うインスリン非依存型糖尿病患者における脂質代謝及び糖代謝に対する影響の検討 臨床医薬(0910-8211)17 巻 6 号 Page945-956(2001.06)
51) 能登 洋、三橋 知明、石橋 俊 木村 哲 嚥下障害で発症した甲状腺機能亢進. 日本内科学会雑誌. 2000 Jul 10;89(7):1358-65. PMID: 10934763.
52) 島本 和明，土橋 和文，東浦 勝浩，田中 繁道，廣上 貢，松田 勝浩，若林 央，続 雅博，工藤 千佳，足永 武，松木 高雪，山内 一暁，金澤 武道，奥村 謙，長内 智宏，須田 俊宏，玉澤 直樹，及川 眞一，豊田 隆謙，阿部 隆三，清野 弘明，菊池 宏明，山崎 俊朗，松島 照彦，齊藤 壽一，岡田 耕治，福田 修一，坪井 靖，長坂 昌一郎，東山 みのり，若松 秀，大野 富雄，谷口 興一，大島 茂，森 昌朋，山田 正信，佐藤 哲郎，門伝 剛，中村 治雄，石川 俊次，東 賢治，繁 英樹，鈴川 満雄，伊藤 利光，中島 啓，綾織 誠人，西尾 栄助，米村 篤，加藤 泰一，齋藤 康，森崎 信尋，村野 俊一，武城 英明，小林 淳二，清宮 晃一，水野 杏一，松本 真，田中 啓治，今泉 孝敬，上松瀬 勝男，藤岡 考之，寺本 民生，木下 誠，望月 正武，多田 紀夫，池脇 克則，廣瀬 信義，柴 輝男，橋本 佳明，塚本 和久，石橋 俊，後藤田 貴也，山田 信博，大内 尉義，吉栖 正雄，大橋 靖雄，沼野 藤夫，田中 明，田村 倫朗，村勢 敏郎，大久保 実，竹内 一郎，安井 俊行，中谷 矩章，北島 和一，小泉 和正，赤塚 宣治，出雲 和秀，五島 雄一郎，板倉 弘重，鈴木 晟時，佐藤 勉，井上 穣，五味 由加利，津曲 兼実，真家 伸一，並木 雅彦，竹越 襄，金光 政右，馬渕 宏，他 新規 HMG-CoA 還元酵素阻害薬 CI-981(アトルバスタチン)の長期投与による臨床効果 有効性ならびに安全性の検討 Progress in Medicine(0287-3648)19 巻 9 号 Page2123-2160(1999.09)

53) 川上 義和(北海道大学病院 第 1 内科), 田上 清一, 坂上 慎二, 長谷川 敦, 奥村 謙, 金澤 武道, 須田 俊宏, 玉澤 直樹, 豊田 隆謙, 及川 眞一, 有我 由紀夫, 谷 牧夫, 渡辺 毅, 加藤 健, 山田 大志郎, 栗城 実, 緑川 早苗, 佐藤 和加乃, 上野 修一, 伊藤 信雄, 松井 遵一郎, 山口 学, 石井 一, 橋本 重厚, 重富 秀一, 林 晃, 菅野 理平, 亘理 裕昭, 矢田部 洋一郎, 宮崎 三弘, 山下 亀次郎, 川上 康, 鈴木 誠司, 松島 照彦, 永井 良三, 宇都木 敏浩, 大山 良雄, 伴野 祥一, 中村 治雄, 石川 俊次, 繁 英樹, 東 賢治, 伊藤 利光, 鈴川 満雄, 西尾 栄助, 米村 篤, 中島 啓, 片山 茂裕, 高橋 慶一, 井上 郁夫, 川上 正舒, 河野 幹彦, 黒木 昌寿, 櫻林 郁之介, 齋藤 康, 森崎 信尋, 武城 英明, 山崎 健也, 望月 正武, 多田 紀夫, 池脇 克則, 平野 勉, 板倉 弘重, 五島 雄一郎, 上松瀬 勝男, 大塚 雄司, 佐藤 裕一, 宮崎 滋, 川村 光信, 荒牧 琢己, 太田 眞夫, 矢崎 義雄, 山田 信博, 石橋 俊, 大橋 靖雄, 沼野 藤夫, 田中 明, 村勢 敏郎, 大久保 実, 中谷 矩章, 北島 和一, 小泉 和正, 宮元 進, 馬渕 宏, 小泉 順二, 梶波 康二, 大家 他喜雄, 金谷 法忍, 宇野 欣秀, 上田 幸生, 東方 利徳, 竹越 忠美, 原城 達夫, 宮森 勇, 玉井 利孝, 笈田 耕治, 安田 圭吾, 森田 浩之, 井口 昭久, 内藤 通孝, 他 HMG-CoA 還元酵素阻害薬 CI-981(アトルバスタチン)の臨床効果 プラバスタチンを対照薬とした第 III 相二重盲検群間比較試験 Progress in Medicine(0287-3648)18 巻 9 号 Page2251-2300(1998.09)
54) 阿部 秀樹, 山田 信博, 石橋 俊, 他 膵臓移植による高インスリン血症ラット及び IRS-1 ノックアウトマウスにおける脂質代謝・動脈壁への影響 動脈硬化(0386-2682)24 巻 10 号 Page505-508(1997.02) DOI:10.5551/jat1973.24.10_505
55) 原田 賢治, 石橋 俊, 門脇 孝, 他 プロタミン含有インスリンの使用中に,冠動脈造影後のプロタミン静注でアナフィラキシーショックを起こした 1 症例 Diabetes Journal: 糖尿病と代謝(0303-6057)23 巻 2 号 Page65-68(1995.06)
56) 宮園 浩平, 岡部 哲郎, 石橋 俊, 他 血小板に由来する血管内皮細胞増殖因子(VEPF)の生化学的検討 血液と脈管(0386-9717)16 巻 5 号 Page528-530(1985.10) DOI:10.2491/jjsth1970.16.528
57) 宮園 浩平, 岡部 哲郎, 石橋 俊, 他 血管内皮細胞増殖に対するヘパリンの影響 血液と脈管(0386-9717)16 巻 5 号 Page508-513(1985.10) DOI:10.2491/jjsth1970.16.508
58) 石橋 俊, 湯尾 明, 永井 良三, 他 悪性リンパ腫の心房浸潤により Sick Sinus Syndrome を呈した 1 剖検例 日本内科学会雑誌(0021-5384)76 巻 1 号 Page100-105(1987.01) DOI:10.2169/naika.76.100
59) 宮崎 純, 中釜 斉, 石橋 俊, 他 高齢者の白血病の 1 例 日立医学会誌(0286-0171)45 号 Page38-40(1984.09)
60) 宮崎 純, 中釜 斉, 石橋 俊, 他 二つの異なる組織型の原発性腫瘍が併存した肺癌の 1 例 日立医学会誌(0286-0171)45 号 Page31-32(1984.09)
61) 宮崎 純, 中釜 斎, 石橋 俊, 他 最後まで診断を確定しえなかった肺癌の 1 例 日立医学会誌(0286-0171)45 号 Page33-35(1984.09)
62) 石橋 俊, 倉林 正彦, 児玉 竜彦, 他 リポ蛋白リパーゼ活性低下により高トリグリセライド(TG)血症をきたした多発性筋炎の 1 例 日本内科学会雑誌(0021-5384)73 巻 3 号 Page368-373(1984.03) DOI:10.2169/naika.73.368

解説・座談会・その他(和文)

1) 石橋 俊, 吉田 知也, 中西 路子, 新垣 航, 郡司 良治, 牧之瀬 勇一, 菅野 崇, 栗原 雄司 ペマフィブラートの長期使用に関する特定使用成績調査 中間報告(3 ヵ月) 薬理と治療(0386-3603)51 巻 4 号 Page453-467(2023.04)
2) 若林 徹治, 石橋 俊【動脈硬化性疾患・脂質異常症 Update】動脈硬化性疾患・脂質異常症に対する予防・診療の実際 薬物療法 診断と治療(0370-999X)111 巻 9 号 Page1235-1241(2023.09) DOI:10.34433/dt.0000000404
3) 岡田 健太, 石橋 俊【それぞれの地域の糖尿病事情】北関東地域の糖尿病事情 糖尿病・内分泌代謝科(2435-1946)56 巻 1 号 Page15-21(2023.01)
4) 若林 徹治, 石橋 俊 プラークの形成と退縮の分子機序に関する話題 循環器内科(1884-2909)92 巻 1 号 Page103-108(2022.07)
5) 櫻井 百恵, 石橋 俊【脂質異常症診療の最新知識】脂質異常症の非薬物療法 食事療法・運動療法 臨牀と研究(0021-4965)99 巻 1 号 Page35-39(2022.01)
6) 若林 徹治, 石橋 俊【生活習慣病】生活習慣病の予防と治療 脂質異常症 臨牀と研究(0021-4965)98 巻 10 号 Page1177-1182(2021.10)
7) 石橋 俊【内分泌疾患・糖尿病・代謝疾患-診療のエッセンス】(III 章)代謝疾患 脂質代謝異常 脂質異常症の治療と管理目標 日本医師会雑誌(0021-4493)150 巻特別 2 Page S290-S292(2021.10)
8) 山下 裕美子, 高橋 学, 石橋 俊 臨床各科 難渋症例から学ぶ診療のエッセンス(File 119) 自律性機能性甲状腺結節と診断された甲状腺中毒症 日本医事新報(0385-9215)5088 号 Page10-11(2021.10)
9) 齋藤 新介, 高橋 学, 石橋 俊 臨床各科 難渋症例から学ぶ診療のエッセンス(File 115) 治療選択に持続グル

コースモニターが有用であった反応性低血糖 日本医事新報(0385-9215)5082 号 Page10-11(2021.09)
10) 五十嵐 真由子, 高橋 学, 石橋 俊 臨床各科 難渋症例から学ぶ診療のエッセンス(File 108) チアマゾール再投与により無顆粒球症をきたし、アイソトープ治療を行ったバセドウ病 日本医事新報(0385-9215)5071 号 Page12-13(2021.07)
11) 石橋 俊【動脈硬化進行予防のための肥満・脂質異常診療戦略】動脈硬化の病態・早期診断法・リスク 動脈硬化のリスクとしての脂質異常症 診断と治療(0370-999X)108 巻 10 号 Page1299-1304(2020.10) DOI:10.34433/J00697.2021018143
12) 高橋 学, 石橋 俊【評価・処方の"いま"を押さえる 見直し!脂質異常症】(3 章)患者さんを知ろう! 病歴聴取と診察のコツ LDL-C 値が低い患者に遭遇したら? :jmed mook70 号 Page83-87(2020.10)
13) 石橋 俊【脂質異常症と動脈硬化 update】選択的 PPARα モジュレーター(SPPARMα) 糖尿病・内分泌代謝科(2435-1946)51 巻 2 号 Page136-140(2020.08)
14) 永島 秀一, 石橋 俊【検査値を読む 2020】(8 章)脂質代謝検査 リポ蛋白(a) 内科(0022-1961)125 巻 4 号 Page644(2020.04) DOI:10.15106/j_naika125_644
15) 武井 暁一, 石橋 俊【検査値を読む 2020】(8 章)脂質代謝検査 アポリポ蛋白(A-I,A-II,B,C-II,C-III,E) 内科(0022-1961)125 巻 4 号 Page643(2020.04) DOI:10.15106/j_naika125_643
16) 若林 徹治, 石橋 俊【検査値を読む 2020】(8 章)脂質代謝検査 リポ蛋白分画(ポリアクリルアミドゲル電気泳動) 内科(0022-1961)125 巻 4 号 Page642(2020.04) DOI:10.15106/j_naika125_642
17) 若林 徹治、石橋 俊【検査値を読む 2020】(8 章)脂質代謝検査 リポ蛋白分画(アガロースゲル電気泳動) 内科(0022-1961)125 巻 4 号 Page641(2020.04) DOI:10.15106/j_naika125_641
18) 石橋 俊【動脈硬化診療のすべて】(IV 章)動脈硬化と心血管疾患の予防 薬物療法 選択的 PPARα モジュレーター 日本医師会雑誌(0021-4493)148 巻特別 2 Page S246-S247(2019.10)
19) 竹田 幸代, 岡田 健太, 石橋 俊【脂質異常症治療の最新動向-スタチンを軸とした展開】エゼチミブの薬理・薬効 カレントテラピー(0287-8445)37 巻 10 号 Page955-958(2019.10)
20) 若林 徹治, 石橋 俊【「生活習慣病」診療の新潮流:この 10 年で何が変わったか】心血管イベント一次予防のための早期治療の進歩 脂質異常症 :診断と治療(0370-999X)107 巻 9 号 Page1037-1044(2019.09)
21) 石橋 俊【指定難病ペディア 2019】個別の指定難病 代謝・内分泌系 原発性高カイロミクロン血症[指定難病 262] 日本医師会雑誌(0021-4493)148 巻特別 1 Page S278(2019.06)
22) 高橋 学, 石橋 俊【原発性高脂血症研究の過去・現在・未来】無βリポ蛋白血症の過去・現在・未来 The Lipid(0915-6607)30 巻 1 号 Page87-93(2019.01)
23) 岡田 健太, 春田 英律, 今井 靖, 淺川 智香子, 石橋 和世, 千葉 円香, 佐藤 敏子, 石橋 俊, 細谷 好則, 佐田 尚宏 クリニカルカンファレンスから(第 11 回) 自治医科大学附属病院の症例 心臓疾患など重複疾患に対し連携治療を行った結果、無事手術に至った症例 肥満症治療学展望 11 号 Page6-8(2017.06)
24) 石橋 俊 残余リスクに対する治療戦略について Selective PPARα modulator(SPPARMα)への期待 高崎医学(0916-121X)68 巻 Page43-46(2018.07)
25) 石橋 俊【脂質異常症 新たな時代に入った脂質異常症治療をふまえて】治療 脂質異常症治療の実践のために 選択的 PPARα モジュレーター(SPPARMα) ペマフィブラートの使いかた Medical Practice(0910-1551)36 巻 1 号 Page137-139(2019.01)
26) 石橋 俊【ビヨンドコレステロール時代の動脈硬化リスク管理】Atherogenic hypertriglyceridemia の新しい治療薬、選択的 PPARα モジュレーターの意義 Pharma Medica(0289-5803)36 巻 10 号 Page23-27(2018.10) DOI:10.34449/J0001.36.10_0023-0027
27) 石橋 俊【診断と治療の ABC[138]高 TG 血症】(第 3 章)診断 原発性高 TG 血症の鑑別診断の進め方 最新医学(0370-8241)別冊高 TG 血症 Page101-106(2018.09)
28) 山下 静也、斯波 真理子, 太田 孝男, 石橋 俊, 丸山 千寿子, 池脇 克則, 吉田 雅幸, 野原 淳, 寺本 民生 家族性高コレステロール血症ホモ接合体に対する診断と新規治療薬ロミタピドによる治療 診療と新薬(0037-380X)55 巻 1 号 Page51-58(2018.01)
29) 石橋 俊 新薬紹介(No.92) 脂質異常症(高脂血症)治療薬 ペマフィブラート 日本医師会雑誌(0021-4493)147 巻 5 号 Page1022-1023(2018.08)
30) 石橋 俊【動脈硬化予防のための脂質異常症治療最前線】その他の原発性脂質異常症 日本医師会雑誌(0021-4493)147 巻 5 号 Page991-993(2018.08)
31) 石橋 俊【脂質代謝異常と循環器疾患】識る 家族性高コレステロール血症などの原発性高脂質血症と動脈硬化 Heart View(1342-6591)22 巻 7 号 Page639-643(2018.07) DOI:10.18885/J03097.2018310382
32) 石橋 俊 中性脂肪と動脈硬化 東京都医師会雑誌(0040-8956)71 巻 4 号 Page299-303(2018.05)
33) 石橋 俊 脂質異常症診療 Update 日本内科学会雑誌(0021-5384)107 巻 3 号 Page453-457(2018.03) DOI:

10.2169/naika.107.453
34) 石橋 俊 【栄養指導・管理のためのスキルアップシリーズ vol.5 脂質異常症の最新食事療法のなぜに答える 基礎編】家族性高コレステロール血症以外の原発性高脂血症について教えてください 臨床栄養(0485-1412)別冊 栄養指導・管理のためのスキルアップシリーズ 5 Page28-32(2017.12)
35) 石橋 俊 【動脈硬化性疾患予防ガイドライン 2017】原発性高脂血症(家族性高コレステロール血症、そのほかの原発性高脂血症) The Lipid(0915-6607)29 巻 1 号 Page82-87(2018.01)
36) 石橋 俊 【家族性高コレステロール血症(FH)up to date】FH 治療の実際 女性 FH 治療の注意点 Modern Physician(0913-7963)37 巻 11 号 Page1195-1197(2017.11)
37) 石橋 俊【脂質異常症診療が変わる 新 GL の特徴から新薬の使い方まで】知っておきたい脂質異常症のさまざまな病態 薬事(0016-5980)59 巻 16 号 Page3259-3265(2017.12)
38) 石橋 俊 【脂質管理を一歩深める】新しい治療薬 新しい高トリグリセライド血症治療薬(SPPARMα など) 診断と治療(0370-999X)105 巻 9 号 Page1197-1203(2017.09)
39) 石橋 俊 【動脈・静脈の疾患(上)-最新の診断・治療動向-】動脈・静脈疾患の疫学 血管疾患の発症要因 動脈硬化の危険因子 脂質異常症 日本臨床(0047-1852)75 巻増刊 4 動脈・静脈の疾患(上) Page63-68(2017.05)
40) 倉科 智行, 石橋 俊 【肝疾患と脂質代謝】脂質異常症治療薬の肝脂質代謝への影響 The Lipid(0915-6607)28 巻 2 号 Page188-194(2017.04)
41) 石橋 俊 【高コレステロール血症治療の現状と展望】家族性高コレステロール血症の診断と治療 医薬ジャーナル(0287-4741)53 巻 3 号 Page875-879(2017.03) DOI:10.20837/1201703113
42) 石橋 俊 【循環器薬物療法 UPDATE】期待される新薬 選択的 PPARα モジュレーター(SPPARMα)、K-877:医学のあゆみ(0039-2359)259 巻 14 号 Page1515-1520(2016.12)
43) 石橋 俊 【生活習慣病の予防と治療】脂質異常症の管理目標値と薬物療法 日本医師会雑誌(0021-4493)145 巻 7 号 Page1400-1404(2016.10)
44) 石橋 俊 【家族性高コレステロール血症(FH)診療のパラダイムシフト-PCSK9 のインパクト】FH の病態と疫学 呼吸と循環(0452-3458)64 巻 11 号 Page1067-1071(2016.11) DOI:10.11477/mf.1404206061
45) 安藤 明彦, 石橋 俊【脂質異常症の臨床 見落としていませんか】この症例から何を学ぶか LDL アフェレシスを必要としたヘテロ型家族性高コレステロール血症の一例 Medical Practice(0910-1551)33 巻 4 号 Page650-655(2016.04)
46) 矢崎 義雄, 石橋 俊, 横山 信治, 水野 健彦【脂質異常症の臨床 見落としていませんか】脂質異常症診療のあるべき姿 Medical Practice(0910-1551)33 巻 4 号 Page525-544(2016.04)
47) 武井 暁一, 石橋 俊 注目される用語の解説 ホルモン感受性リパーゼ:動脈硬化予防(1347-7056)14 巻 3 号 Page91-92(2015.10)
48) 石橋 俊 【家族性高コレステロール血症(FH)の新しい治療】FH の病態 The Lipid(0915-6607)26 巻 4 号 Page317-323(2015.10)
49) 石橋 俊 【原発性脂質異常症:疾患概念の整理と最近の進歩】原発性低脂血症 家族性低 β リポ蛋白血症(アポ B 異常症) Pharma Medica(0289-5803)33 巻 8 号 Page53-55(2015.08)
50) 永島 秀一, 石橋 俊 代謝 基礎分野での進歩 肝臓コレステロール合成と糖代謝 Annual Review 糖尿病・代謝・内分泌 2015 巻 Page105-110(2015.01)
51) 加来 浩平, 石橋 俊, 谷澤 幸生, 前川 聡 2 型糖尿病治療に対する SGLT2 阻害薬への期待 大血管障害の抑制を目指して Diabetes Frontier(0915-6593)26 巻 2 号 Page253-258(2015.04)
52) 山室 大介, 石橋 俊 【サーカディアンリズムと循環器疾患】サーカディアンリズムと脂質代謝 医学のあゆみ(0039-2359)253 巻 3 号 Page229-232(2015.04)
53) 石橋 俊, 大橋 健 見る脂質のページ 脂質代謝異常 無βリポ蛋白血症の脂質、血液、消化器、神経所見 The Lipid(0915-6607)25 巻 3 号 Page200-203(2014.07)
54) 石橋 俊 【身体科の臨床現場におけるうつ病等精神疾患の現状と今後】糖尿病とうつ病等精神疾患 Psychiatrist18 巻 Page71-75(2013.06)
55) 石橋 俊 糖尿病における脂質異常症の治療 PTM: 最新の疾患別治療マニュアル(1343-3598)2013 年 12 月 Page np7-np8(2013.12)
56) 福島 理文, 大村 寛敏, 代田 浩之, 三井田 孝, 小林 欣夫, 首藤 裕, 小倉 正恒, 松島 照彦, 田代 淳, 斯波 真理子, 横手 幸太郎, 石橋 俊, 池脇 克則, 白井 厚治 1 型糖尿病を合併する原発性胆汁性肝硬変に発症した虚血性心疾患の 1 例 Progress in Medicine(0287-3648)34 巻 1 号 Page174-181(2014.01)
57) 石橋 亮一, 竹本 稔, 若林 華恵, 小川 真, 服部 暁子, 茂手木 宏美, 渡邉 亜紀, 鶴谷 悠也, 河村 治清, 小林 一貴, 黒田 正幸, 横手 幸太郎, 龍野 一郎, 松本 太郎, 小倉 正恒, 首藤 裕, 山下 静也, 石橋 俊, 三井田 孝 著しい低コレステロール血症とネフローゼ症候群を呈し、後天的 LCAT 欠損症が疑われた 1 例

Progress in Medicine(0287-3648)34 巻 1 号 Page166-173(2014.01)

58) 長谷川 夕希子, 槇野 久士, 玉那覇 民子, 肥塚 諒, 菱田 藍, 道倉 雅仁, 岸本 一郎, 斯波 真理子, 横手 幸太郎, 岡崎 啓明, 都島 基夫, 小松 知広, 田代 淳, 小倉 正恒, 池脇 克則, 山下 静也, 石橋 俊, 松本 太郎 妊娠・出産を契機に頸動脈内膜中膜複合体肥厚の著明な増悪を来したFHホモ接合体の1例 Progress in Medicine(0287-3648)34 巻 1 号 Page158-165(2014.01)

59) 山崎 久隆, 大須賀 淳一, 石橋 俊 【内分泌・代謝領域の「難病」とその克服に向けた取り組みの現状と展望】原発性高脂血症 内分泌・糖尿病・代謝内科(1884-2917)37 巻 5 号 Page487-494(2013.11)

60) 宮本 倫聡, 小谷 和彦, 石橋 俊 【頸動脈プラークのリスクと対応-プラークの質的診断と適切な治療戦略】治療薬解説 エイコサペンタエン酸(EPA)/ドコサヘキサエン酸(DHA) カレントテラピー(0287-8445)31 巻 11 号 Page1165-1169(2013.11)

61) 高橋 学, 石橋 俊 【女性と脂質代謝】血中脂質とリポ蛋白受容体 HORMONE FRONTIER IN GYNECOLOGY(1340-220X)20 巻 4 号 Page281-285(2013.12)

62) 石橋 俊, 坂井 謙斗, 岡崎 啓明【リパーゼの臨床的意義】リパーゼファミリーの分類および構造と機能 The Lipid(0915-6607)24 巻 4 号 Page326-333(2013.10)

63) 関澤 大輔, 大須賀 淳一, 石橋 俊 【脂質代謝とその異常】高血糖による脂質代謝異常 内分泌・糖尿病・代謝内科(1884-2917)37 巻 3 号 Page291-296(2013.09)

64) 高橋 学, 石橋 俊 【高トリグリセライド血症-高トリグリセライド血症の最新知見-】高トリグリセライド血症 病因・病態および管理法 続発性高トリグリセライド血症 日本臨床(0047-1852)71 巻 9 号 Page1597-1601(2013.09)

65) 永島 秀一, 野牛 宏晃, 大橋 健, 田副 文子, 高橋 学, 坂井 謙斗, 山室 大介, エンフトウシュン・ボロルマー , 大須賀 淳一, 石橋 俊 非アルコール性脂肪肝形成におけるコレステロール合成経路の意義 Therapeutic Research(0289-8020)34 巻 7 号 Page941-945(2013.07)

66) 永島 秀一, 大須賀 淳一, 石橋 俊【脂質異常症 UPDATE 2013】(Part 3)脂質異常症の病因 メカニズムの立場から 脂質輸送の視点から 臨床栄養(0485-1412)122 巻 6 号 Page711-718(2013.05)

67) 安藤 明彦, 大須賀 淳一, 石橋 俊 【糖尿病と消化器疾患】糖尿病性消化管運動機能障害 Diabetic gastroparesis、constipation G.I.Research(0918-9408)21 巻 3 号 Page222-232(2013.06)

68) 岡田 健太, 石橋 俊 【動脈硬化のすべて】動脈硬化関連ガイドライン 糖尿病診療ガイド 医学のあゆみ(0039-2359)245 巻 13 号 Page1303-1307(2013.06)

69) 石橋 俊 話題のキーワード解説 動脈硬化の residual risk factor International Review of Thrombosis(1880-8549)8 巻 2 号 Page164-167(2013.06)

70) 宮本 倫聡, 小谷 和彦, 石橋 俊【検査値を読む 2013】脂質代謝検査 リポ蛋白(a)内科(0022-1961)111 巻 6 号 Page1188(2013.06) DOI:10.15106/J00974.2013213971

71) 宮本 倫聡, 小谷 和彦, 石橋 俊【検査値を読む 2013】脂質代謝検査 アポリポ蛋白(A-I,A-II,B,C-II,C-III,E)内科(0022-1961)111 巻 6 号 Page1186-1187(2013.06) DOI:10.15106/J00974.2013213970

72) 宮本 倫聡, 小谷 和彦, 石橋 俊【検査値を読む 2013】脂質代謝検査 リポ蛋白分画(ポリアクリルアミドゲル電気泳動) 内科(0022-1961)111 巻 6 号 Page1185(2013.06) DOI:10.15106/J00974.2013213969

73) 宮本 倫聡), 小谷 和彦, 石橋 俊【検査値を読む 2013】脂質代謝検査 リポ蛋白分画(アガロースゲル電気泳動) 内科(0022-1961)111 巻 6 号 Page1184(2013.06) DOI:10.15106/J00974.2013213968

74) 田副 文子, 石橋 俊【先天代謝異常症候群(第 2 版)(下)-病因・病態研究、診断・治療の進歩-】脂質代謝異常 高カイロミクロン血症 アポリポタンパク A-V 欠損症 日本臨床(0047-1852)別冊先天代謝異常症候群(下) Page27-32(2012.12)

75) 石橋 俊 【先天代謝異常症候群(第 2 版)(下)-病因・病態研究、診断・治療の進歩-】脂質代謝異常 概論 日本臨床(0047-1852)別冊先天代謝異常症候群(下) Page7-14(2012.12)

76) 大須賀 淳一, 石橋 俊【脂質異常症-動脈硬化性疾患予防のために】脂質異常症の治療 スタチンの使い方 診断と治療(0370-999X)100 巻 12 号 Page2033-2037(2012.12)

77) 高橋 仁麗, 大須賀 淳一, 石橋 俊 【Beyond LDL-LDL 以外のリポ蛋白代謝と心臓病 up to date-】治す 各種脂質異常症治療薬の使い分けと副作用 Heart View(1342-6591)16 巻 11 号 Page1161-1165(2012.11)

78) 高橋 学, 石橋 俊【リポ蛋白受容体-正常細胞と病的細胞における役割-】細胞機能から新たな病態解明へ リポ蛋白代謝とLDL 受容体 The Lipid(0915-6607)23 巻 4 号 Page403-409(2012.10)

79) 和田 攻, 八谷 寛, 島野 仁, 石橋 俊【実地臨床栄養 日常診療に不可欠な情報とその活用】実地医家は、肥満・生活習慣病改善に臨床栄養の最大限活用を Medical Practice(0910-1551)29 巻 9 号 Page1451-1468(2012.09)

80) 安藤 明彦, 大須賀 淳一, 石橋 俊 【糖尿病の薬物療法-最新の治療と将来展望】糖尿病における脂質異常症の薬物療法 カレントテラピー(0287-8445)30 巻 7 号 Page608-615(2012.07)

81) 黄川 恵慈, 石原 宏尚, 橋本 麿和, 小林 淳二, 平野 勉, 谷山 松雄, 武城 英明, 野牛 宏晃, 石橋 俊, 及川 眞一, 川上 正舒, 田代 淳 Apo リポ蛋白 B 遺伝子にホモ接合型の変異を認めた家族性低 β リポ蛋白血症の 1 例 Progress in Medicine(0287-3648)32 巻 8 号 Page1749-1756(2012.08)
82) 関澤 大輔, 石橋 俊 病気について知りたい! 臨床講座 脂質異常症 PharmaTribune(1883-4043)4 巻 7 号 Page77-87(2012.07)
83) 高橋 仁麗, 石橋 俊 【実地医家のための臨床検査のすすめかた・評価のしかた 疑いから確定診断までの検査項目の選択と総合評価】ビタミン・その他の栄養素欠乏症 症候から診断へ Medical Practice(0910-1551)29 巻臨増 Page273-277(2012.05)
84) 石橋 俊, 寺本 民生, 山田 信博 【脂質異常症-日常診療に必要な知識をまとめよう】脂質異常症診療のピットフォール 次世代治療を見据えて カレントテラピー(0287-8445)30 巻 3 号 Page266-278(2012.03)
85) 石橋 俊 【臨床医学の展望 2012】糖尿病学 日本医事新報(0385-9215)4583 号 Page72-78(2012.02)
86) 石橋 俊 【心血管疾患のリスクと対策】糖尿病患者における脂質管理、最新知見から見えてきた可能性 循環 plus(1345-9155)12 巻 2 号 Page2-6(2011.11)
87) 岡田 健太, 石橋 俊 【高齢者の脂質異常とコレステロール吸収阻害薬】Seminar 糖尿病・メタボリックシンドロームにおける吸収阻害薬の意義(高齢者に対する使用法も含めて) Geriatric Medicine(0387-1088)49 巻 10 号 Page1125-1130(2011.10)
88) 永島 秀一, 長坂 昌一郎, 石橋 俊 【CGM のすべて-持続血糖モニターの基本と応用-】CGM のパターンから学ぶ適切な薬物療法 ダンピング症候群の血糖パターンを教えてください 糖尿病レクチャー(2185-1611)2 巻 3 号 Page604-610(2011.10)
89) 槌田 武史, 長坂 昌一郎, 石橋 俊 【CGM のすべて-持続血糖モニターの基本と応用-】CGM のパターンから学ぶ適切な薬物療法 B-B 療法や CSII で完璧な血糖コントロールが得られますか(2 型糖尿病) 糖尿病レクチャー(2185-1611)2 巻 3 号 Page551-555(2011.10)
90) 石橋 俊 【脂質異常症の病態・初期診断と治療指針 日常診療における早期発見のポイント】(各論 6-3)各種脂質異常症治療薬の使い方 どのような症例にどのように処方するか フィブラート系薬剤、ニコチン酸誘導体、EPA 月刊レジデント 4 巻 8 号 Page81-88(2011.08)
91) 石橋 俊 【脂質異常症診療のエビデンスと将来展望】続発性高脂血症の分類と発症メカニズム 綜合臨床(0371-1900)60 巻 7 号 Page1478-1483(2011.07)
92) 石橋 俊 外来診療のワンポイントアドバイス 脂質異常症に対する食事療法のポイント 診断と治療(0370-999X)99 巻 6 号 Page1072-1075(2011.06)
93) 石橋 俊, 門脇 孝, 野田 光彦 【糖尿病ガイドライン Update】 動脈硬化予防(1347-7056)10 巻 1 号 Page90-103(2011.04)
94) 石橋 俊 【加齢に伴う内分泌代謝疾患】加齢とインスリン抵抗性 最新医学(0370-8241)66 巻 4 号 Page818-822(2011.04)
95) 石橋 俊 代謝 基礎分野での進歩 細胞内中性脂質水解酵素群の新しい機能 Annual Review 糖尿病・代謝・内分泌 2011 巻 Page106-112(2011.01)
96) 石橋 俊 【糖尿病 新しい診断と治療】実地医家の糖尿病治療のポイント 糖尿病患者における脂質管理の目標と治療法 Medical Practice(0910-1551)28 巻 1 号 Page154-157(2011.01)
97) 岡田 健太, 王 暁黎, 大須賀 淳一, Bayasgalan Tumenbayar, 高橋 学, 永島 秀一, 大城 太一, 野牛 宏晃, 岡田 耕治, 石橋 俊 新規遺伝子変異が同定された LCAT 欠損症の 1 例 Progress in Medicine(0287-3648)30 巻 10 号 Page2692-2698(2010.10)
98) 石橋 俊 【糖尿病診療 2010】糖尿病の早期治療 糖尿病に合併した脂質代謝異常の治療 日本医師会雑誌(0021-4493)139 巻特別 2 Page S238-S241(2010.10)
99) 石橋 俊 【糖尿病治療の最前線】糖尿病に合併する疾患の治療 脂質代謝異常 カレントテラピー(0287-8445)28 巻 11 号 Page1050-1054(2010.11)
100) 石橋 俊 【糖尿病診療 Update いま何が変わりつつあるのか】慢性合併症の診かた 冠動脈疾患 Medicina(0025-7699)47 巻 12 号 Page1940-1943(2010.11) DOI:10.11477/mf.1402104891
101) 石橋 俊 【広範囲 血液・尿化学検査免疫学的検査[第 7 版] その数値をどう読むか】生化学的検査 脂質関係 LDL 受容体活性 日本臨床(0047-1852)68 巻増刊 1 広範囲血液・尿化学検査 免疫学的検査(2) Page125-128(2010.01)
102) 石橋 俊 専門医に聞く 脂質異常症 HIV 感染症と AIDS の治療(2185-1689)1 巻 1 号 Page82-85(2010.05)
103) 宮本 倫聡, 小谷 和彦, 石橋 俊 【動脈硬化症 診断と治療の最前線】動脈硬化症を治療する 脂質低下療法 カレントテラピー(0287-8445)28 巻 5 号 Page474-478(2010.05)
104) 石橋 俊 内科懇話会 糖尿病診療の ABC 日本医事新報(0385-9215)4489 号 Page44-55(2010.05)

105)　横出 正之，山下 静也，石橋 俊，木下 誠 心血管病治療の 10 年間の軌跡と展望 脂質異常症・動脈硬化 分子心血管病(1345-2355)11 巻 1 号 Page47-54(2010.02)
106)　宮本 倫聡，小谷 和彦，石橋 俊 【初診外来における初期診療】脂質異常(LDL、HDL、TG) 診断と治療(0370-999X)98 巻 Suppl. Page473-478(2010.03)
107)　安藤 明彦，石橋 俊 【実地医家に必要な臨床検査値の正しい読み方】生活習慣関連疾患 糖代謝検査 :臨牀と研究(0021-4965)87 巻 2 号 Page163-170(2010.02)
108)　石橋 俊 【動脈硬化治療】動脈硬化危険因子の治療とその EBM 脂質異常症 最新医学(0370-8241)65 巻 2 号 Page242-247(2010.02)
109)　岡田 健太，石橋 俊 【大規模臨床研究から糖尿病治療のあり方を考える】糖尿病患者における脂質管理のエビデンス ホルモンと臨床(0045-7167)57 巻 6 号 Page561-570(2009.06)
110)　岡田 健太，石橋 俊 エゼチミブによる脂質代謝異常の治療 内分泌・糖尿病科(1341-3724)29 巻 4 号 Page342-350(2009.10)
111)　宮本 倫聡，小谷 和彦，石橋 俊 【糖尿病の血糖管理と血管合併症】糖尿病の血管合併症 UKPDS からの知見 Angiology Frontier(1347-6874)8 巻 4 号 Page360-367(2009.12)
112)　石橋 俊 【遺伝子変異によるLDL代謝異常 変異遺伝子の発見と創薬への応用】アポ蛋白機能異常症 家族性低 β リポ蛋白血症(アポリポ蛋白 B 遺伝子変異) The Lipid(0915-6607)20 巻 4 号 Page388-393(2009.10)
113)　石橋 俊 【炎症と動脈硬化】単球マクロファージと動脈硬化 動脈硬化予防(1347-7056)8 巻 3 号 Page9-15(2009.10)
114)　石橋 俊 【高血圧(第 4 版) 日本における最新の研究動向】基礎編 遺伝子研究 原因候補遺伝子 LDL 受容体遺伝子 日本臨床(0047-1852)67 巻増刊 6 高血圧(上) Page375-379(2009.10)
115)　岡田 健太，石橋 俊 【アディポネクチン】糖尿病・メタボリックシンドロームとアディポネクチン ホルモンと臨床(0045-7167)57 巻 2 号 Page183-188(2009.02)
116)　長坂 昌一郎，徳山 薫平，石橋 俊 【インスリン作用の原点】ヒトにおけるインスリン作用 糖尿病(0021-437X)52 巻 5 号 Page317-319(2009.05) DOI:10.11213/tonyobyo.52.317
117)　倉科 智行，石橋 俊【糖尿病 最新の糖尿病予防・治療を実地診療に】糖尿病・治療 実地医家による合併症の診療と管理 糖尿病に合併する脂質代謝異常の診療 新しいガイドライン Medical Practice(0910-1551)26 巻 4 号 Page649-653(2009.04)
118)　小田原 雅人，石橋 俊，浦 信行，山内 俊一 肥満症に伴う心血管危険因子をどのように管理すべきか カレントテラピー(0287-8445)27 巻 4 号 Page368-378(2009.04)
119)　石橋 俊，横手 幸太郎，三井田 孝，吉田 雅幸 【脂質異常症 基本を踏まえた実践】脂質異常症の診断の基本と治療の実践 内科(0022-1961)103 巻 1 号 Page147-158(2009.01) DOI:10.15106/J00974.2009072557
120)　石橋 俊 【脂質異常症 基本を踏まえた実践】動脈硬化制圧への挑戦 内科(0022-1961)103 巻 1 号 Page2-4(2009.01) DOI:10.15106/J00974.2009072530
121)　石橋 俊 合併症に配慮した糖尿病診療 歯周病からメタボリックシンドロームまで 栃木県歯科医学会誌 60 巻 Page151-153(2008.08)
122)　石橋 俊 大血管合併症の克服をめざして 成因としての脂質異常症 糖尿病学の進歩 42 号 Page142-146(2008.09)
123)　石橋 俊 【他科医に聞きたいちょっとしたこと】糖尿病とうつ病 クリニシアン(0387-1541)55 巻 8 号 Page802-804(2008.08)
124)　安藤 明彦，石橋 俊【新時代の糖尿病学 病因・診断・治療研究の進歩】糖尿病の疫学・病態・診断学の進歩 糖尿病にみられる各種病態 タンパク質およびアミノ酸代謝異常 タンパク質合成・分解に対するインスリンの作用 日本臨床(0047-1852)66 巻増刊 4 新時代の糖尿病学(2) Page49-55(2008.06)
125)　高橋 学，石橋 俊【動脈硬化性疾患予防のための脂質管理】脂質異常症のやさしい理解 LDL と動脈硬化 診断と治療(0370-999X)96 巻 7 号 Page1218-1224(2008.07)
126)　石橋 俊 メタボリックシンドロームに対する降圧療法 Therapeutic Research(0289-8020)29 巻 6 号 Page895-900(2008.06)
127)　岡田 健太，石橋 俊 単一遺伝子病とゲノム 動脈硬化・血管炎 家族性複合型高脂血症 ゲノム医学(1346-4671)8 巻 2 号 Page147-151(2008.06)
128)　石橋 俊 【エビデンスに基づく循環器薬の使いかた 実地医家に役立つ診療の手引き】エビデンスに基づく循環器薬の使いかた・トピックス 最近の脂質介入試験の明暗 Medical Practice(0910-1551)25 巻 3 号 Page435-436(2008.03)
129)　石橋 俊 【新時代の糖尿病学 病因・診断・治療研究の進歩】糖尿病治療学の進歩 糖尿病治療の良否判定の指標とその目標 脂質代謝に関する指標 日本臨床(0047-1852)60 巻増刊 9 新時代の糖尿病学(3)

Page675-678(2002.09)
130)　出口 亜希子, 石橋 俊 【どれを選ぶ?類似薬の使い分け】経口糖尿病薬の使い分け レジデントノート(1344-6746)9 巻 6 号 Page817-824(2007.09)
131)　前村 浩二, 石橋 俊, 池田 宇一 高脂血症・動脈硬化の外来診療 全身疾患としての捉え方と新しい検査・治療 Medicina(0025-7699)44 巻 8 号 Page1574-1583(2007.08) DOI:10.11477/mf.1402102899
132)　永島 秀一, 野牛 宏晃, 石橋 俊 【脂質代謝異常 高脂血症・低脂血症】病因論 脂質代謝関連酵素機能異常 日本臨床(0047-1852)65 巻増刊 7 脂質代謝異常 Page93-99(2007.07)
133)　田副 文子, 野牛 宏晃, 石橋 俊 【脂質代謝異常 高脂血症・低脂血症】脂質・リポ蛋白代謝の分子機構 脂質代謝にかかわる酵素の種類とその機能 日本臨床(0047-1852)65 巻増刊 7 脂質代謝異常 Page26-30(2007.07)
134)　宮本 倫聡, 岡田 健太, 石橋 俊 この症例から何を学ぶか 軽度耐糖能障害を認める患者が清涼飲料水ケトーシスを発症した 1 例 Medical Practice(0910-1551)24 巻 9 号 Page1650-1654(2007.09)
135)　石橋 俊 【メタボリックシンドロームの実地診療 実地医家に不可欠の日常診療のすべて】メタボリックシンドロームの実地診療へのアプローチ 実地医家のメタボリックシンドロームの診療の実際 診断から治療・管理まで Medical Practice(0910-1551)24 巻 9 号 Page1500-1506(2007.09)
136)　石橋 俊, 谷田貝 利光, 長坂 昌一郎 大血管障害の臨床評価 新しい大血管症マーカーの特性 糖尿病合併症 18 巻 1 号 Page36-37(2004.07)
137)　石橋 俊 【再びコレステロールを考える】細胞内コレステロール・脂質代謝制御とその異常 The Lipid(0915-6607)18 巻 3 号 Page240-247(2007.06)
138)　稲葉 利敬, 石橋 俊【適切な高脂血症診療の実践のために】高脂血症治療薬の種類と薬理作用 フィブラート系薬綜合臨床(0371-1900)56 巻 7 号 Page2281-2285(2007.07)
139)　石橋 俊 【メタボリックシンドローム up to date】LDL-コレステロールはどうして診断基準に入らないのですか? 日本医師会雑誌(0021-4493)136 巻特別 1 Page S189(2007.06)
140)　永島 秀一, 石橋 俊 糖尿病の治療に関する最近の知見 糖尿病における高脂血症管理 CARDS と MEGA study 分子糖尿病学の進歩: 基礎から臨床まで(1344-0861)2007 巻 Page114-121(2007.04)
141)　倉科 智行, 長坂 昌一郎, 石橋 俊【ベッドサイド必携二次性高血圧】識る プレクリニカルクッシング症候群 Heart View(1342-6591)11 巻 4 号 Page408-412(2007.04)
142)　小田原 雅人, 宮崎 滋, 石橋 俊, 齊藤 郁夫 【メタボリックシンドローム どう診断し、どう対処するか】診療室におけるメタボリックシンドロームへの対処 内科(0022-1961)99 巻 1 号 Page97-109(2007.01) DOI:10.15106/J00974.2007160126
143)　安藤 明彦, 石橋 俊【糖尿病治療の新しい展開】抗肥満・食欲調節物質 リパーゼ阻害薬 ホルモンと臨床(0045-7167)54 巻 12 号 Page1179-1187(2006.12)
144)　石橋 俊 【メタボリックシンドローム 病因解明と予防・治療の最新戦略】病態 メタボリックシンドロームの終末病態としての動脈硬化 メタボリックシンドロームにおける粥状動脈硬化症の成因 日本臨床(0047-1852)64 巻増刊 9 メタボリックシンドローム Page356-363(2006.12)
145)　石田 均, 山崎 力, 卜部 貴夫, 内田 俊也, 石橋 俊 糖尿病に合併した高血圧治療 脳・心・腎からみた治療戦略 Pharma Medica(0289-5803)24 巻 11 号 Page64-69(2006.11)
146)　石橋 俊 【最新臨床検査の ABC】検査項目各論 生化学検査 脂質・胆汁色素関係 遊離脂肪酸(FFA) 日本医師会雑誌(0021-4493)135 巻特別 2 Page S191(2006.10)
147)　石橋 俊【最新臨床検査の ABC】検査項目各論 生化学検査 脂質・胆汁色素関係 トリグリセリド(TG) 日本医師会雑誌(0021-4493)135 巻特別 2 Page S189-S190(2006.10)
148)　石橋 俊【最新臨床検査の ABC】検査項目各論 生化学検査 脂質・胆汁色素関係 アポ蛋白とその分画 日本医師会雑誌(0021-4493)135 巻特別 2 Page S188(2006.10)
149)　石橋 俊 【最新臨床検査の ABC】検査項目各論 生化学検査 脂質・胆汁色素関係 リポ蛋白リパーゼ(LPL) 日本医師会雑誌(0021-4493)135 巻特別 2 Page S187(2006.10)
150)　石橋 俊 【最新臨床検査の ABC】検査項目各論 生化学検査 脂質・胆汁色素関係 リポ蛋白とその分画 日本医師会雑誌(0021-4493)135 巻特別 2 Page S184-S186(2006.10)
151)　石橋 俊 【高脂血症治療の update】高脂血症治療のガイドラインと展望 Mebio(0910-0474)23 巻 11 号 Page28-32(2006.11)
152)　石橋 俊 【糖尿病マクロアンギオパシー 診断・予防・治療の最新動向】糖尿病マクロアンギオパシー発症・進展の予防と治療 血糖管理 管理目標と実践法 日本臨床(0047-1852)64 巻 11 号 Page2089-2094(2006.11)
153)　曽根 博仁, 石橋 俊, 横手 幸太郎, 笈田 耕治, 及川 眞一, 井藤 英喜, 山崎 義光, 赤沼 安夫, 山田 信博 糖尿病治療におけるエビデンス 心血管疾患のエビデンス JDCSからみた日本人のデータ 糖尿病学の進

歩 40 号 Page102-108(2006.09)
154) 高橋 学, 石橋 俊 【見直される生活習慣病】糖尿病と耐糖能異常 糖尿病と耐糖能異常の診断 臨牀と研究(0021-4965)83 巻 7 号 Page990-994(2006.07)
155) 石橋 俊 【高血圧 最新の研究動向】基礎編 遺伝子研究 原因候補遺伝子 LDL 受容体遺伝子 日本臨床(0047-1852)64 巻増刊 5 高血圧(上) Page373-378(2006.07)
156) 石橋 俊 【糖尿病の病態と薬物療法】糖尿病患者における高脂血症の薬物療法 医薬ジャーナル(0287-4741)42 巻 7 号 Page1901-1906(2006.07)
157) 曽根 博仁, 田中 佐智子, 清野 弘明, 山崎 義光, 石橋 俊, 山下 英俊, 井藤 英喜, 齋藤 康, 片山 茂裕, 大橋 靖雄, 赤沼 安夫, 山田 信博, JDCS グループ 日本から発信する血管病の EBM JDCS(Japan Diabetes Complications Study) Vascular Medicine(1880-2478)1 巻 1 号 Page86-94(2005.07)
158) 永島 秀一, 石橋 俊 代謝 基礎分野での進歩 腹腔内脂肪と皮下脂肪の代謝調節の役割 Annual Review 糖尿病・代謝・内分泌 2006 巻 Page103-110(2006.01)
159) 石橋 俊 【動脈硬化のすべて】動脈硬化危険因子の治療の実際とEBM 高 LDL コレステロール血症 循環器科(0388-1911)59 巻特別増刊 Page527-536(2006.05)
160) 曽根 博仁, 石橋 俊, 及川 眞一, 山崎 義光, 山田 信博 JDCS における脂質代謝異常と動脈硬化疾患との関連 内分泌・糖尿病科(1341-3724)22 巻 3 号 Page326-331(2006.03)
161) 石橋 俊 【広範囲血液・尿化学検査 免疫学的検査 その数値をどう読むか】生化学的検査 脂質関係 LDL 受容体活性 日本臨床(0047-1852)62 巻増刊 12 広範囲血液・尿化学検査 免疫学的検査(2) Page130-133(2004.12)
162) 石橋 俊 薬剤師のための臨床講座 高脂血症 Up-To-Date Pharmavision10 巻 2 号 Page42-49(2006.02)
163) 石橋 俊 プラークの形成と退縮の分子機序 心臓(0586-4488)38 巻 2 号 Page174-177(2006.02) DOI: 10.11281/shinzo1969.38.2_174
164) 石橋 俊 【高血圧 その発症・進展と代謝異常】新しい概念 インスリン抵抗性の発症機構 カレントテラピー(0287-8445)23 巻 12 号 Page13-17(2005.11)
165) 石橋 俊 【経口糖尿病治療薬 UP-TO-DATE】高脂血症治療薬の糖尿病予防・治療効果 Diabetes Frontier(0915-6593)16 巻 6 号 Page729-732(2005.12)
166) 石橋 俊 【生活習慣病と血管リモデリング 最新の病態と治療戦略】高脂血症による血管リモデリングの機序 循環器科(0388-1911)58 巻 4 号 Page354-359(2005.10)
167) 曽根 博仁, 水野 佐智子, 大橋 靖雄, 高橋 和男, 齋藤 康, 井藤 英喜, 山崎 義光, 石橋 俊, 赤沼 安夫, 山田 信博 EBM から見た糖尿病における心血管疾患予防の重要性 Japan Diabetes Complications Study 糖尿病学の進歩 39 号 Page19-23(2005.09)
168) 石橋 俊 【内分泌関連疾患にかかわる遺伝子多型研究の現状】生活習慣病と遺伝子多型 遺伝子異常による高脂血症 ホルモンと臨床(0045-7167)53 巻 9 号 Page929-937(2005.09)
169) 藤田 延也, 石橋 俊 【健診データの読み方といかし方】脂質検査 総コレステロール,HDL コレステロール, 中性脂肪 診断と治療(0370-999X)93 巻 9 号 Page1486-1493(2005.09)
170) 曽根 博仁, 清野 弘明, 山崎 義光, 石橋 俊, 山下 英俊, 井藤 英喜, 齋藤 康, 片山 茂裕, 松岡 健平, 大橋 靖雄, 赤沼 安夫, 山田 信博 糖尿病合併症の疫学研究の現状と課題 Japan Diabetes Complications Study(JDCS)中間報告にみる現代日本の糖尿病合併症 糖尿病合併症 19 巻 1 号 Page28-32(2005.07)
171) 石橋 俊 【家族性高コレステロール血症】治療の実際 Mebio(0910-0474)22 巻 9 号 Page88-95(2005.09)
172) 安藤 明彦, 石橋 俊 スタチン療法と C 反応性蛋白 内科(0022-1961)96 巻 1 号 Page163-165(2005.07) DOI:10.15106/J00974.2005251879
173) 石橋 俊 【高脂血症 動脈硬化症を予防する実地診療の進めかた】高脂血症患者の診断手順 必要な診察・検査,およびそれらをどう評価するか Medical Practice(0910-1551)22 巻 7 号 Page1151-1155(2005.07)
174) 稲葉 利敬, 野牛 宏晃, 石橋 俊 【症例と Q&A で学ぶ高脂血症 今すぐ役立つ診療ガイド】診療の実際と最新のトピックス 胆汁酸の代謝とその制御 今月の治療(0918-614X)13 巻 6～7 号 Page725-730(2005.06)
175) 石橋 俊 【糖尿病と動脈硬化】脂質代謝とアディポサイトカイン プラークの形成と退縮の分子機序 日本医学会シンポジウム記録集(1347-006X) Page53-58(2005.03)
176) 永島 秀一, 石橋 俊 CARDS 糖尿病患者でコレステロールはどこまで下げるべきか Diabetes Journal: 糖尿病と代謝(0303-6057)33 巻 1 号 Page29-32(2005.03)
177) 石橋 俊 糖尿病合併症管理の進歩 大血管障害 軽症糖尿病管理 糖尿病学の進歩 38 号 Page58-61(2004.09)
178) 田副 文子, 石橋 俊 【インスリンによる臓器作用の調節】マクロファージ・リンパ球におけるインスリン作用

内分泌・糖尿病科(1341-3724)20 巻 2 号 Page161-166(2005.02)
179) 石橋 俊 【知っておくべき高血圧の知識(2004-2005)】Q&A 医師からの質問に答えるために 高脂血症高血圧の指導は要点は? 腎と透析(0385-2156)57 巻増刊 Page430-431(2004.12)
180) 石橋 俊 【血管のリピドロジー】ACAT・コレステロールエステラーゼと血管 血管医学(1345-9031)5 巻 5 号 Page483-489(2004.10)
181) 石橋 俊 【肥満症 診断・治療の新展開】肥満症 減量により改善する病態 メタボリックシンドロームとは Medicina(0025-7699)42 巻 2 号 Page213-215(2005.02) DOI:10.11477/mf.1402100011
182) 石橋 俊 【生活習慣病】高脂血症 食事療法と薬物療法 Dokkyo Journal of Medical Sciences(0385-5023)30 巻 3 号 Page269-274(2003.10)
183) 稲葉 利敬, 野牛 宏晃, 石橋 俊 【Metabolic Modulators インスリン作用改善薬】フィブラート系薬剤 内分泌・糖尿病科(1341-3724)20 巻 1 号 Page1-5(2005.01)
184) 石橋 俊 【メタボリックシンドローム】動脈硬化進展におけるマルチプルリスクファクターの意義 最新医学(0370-8241)60 巻 1 号 Page30-35(2005.01)
185) 石橋 俊 【糖尿病における脂質管理】糖尿病における脂質代謝異常 脂質代謝とインスリン作用 The Lipid(0915-6607)15 巻 4 号 Page316-321(2004.07)
186) 石橋 俊 【メタボリック症候群】メタボリックシンドロームの治療戦略 内分泌・糖尿病科(1341-3724)19 巻 5 号 Page553-556(2004.11)
187) 曽根 博仁, 齋藤 康, 吉村 幸雄, 石橋 俊, 井藤 英喜, 山下 英俊, 山崎 義光, 片山 茂裕, 大橋 靖雄, 赤沼 安夫, 山田 信博, JDCS グループ 医学と医療の最前線 糖尿病と合併症 日本人における最近の動向 日本内科学会雑誌(0021-5384)93 巻 11 号 Page2427-2434(2004.11) DOI:10.2169/naika.93.2427
188) 石橋 俊 【アディポネクチン,日本発,未来へ】アディポネクチンの医療応用 BIO Clinica(0919-8237)19 巻 13 号 Page1077-1079(2004.12)
189) 石橋 俊 【血管年齢と臓器障害】血管の老化の予防と治療 血管年齢を若く保つための生活習慣改善 Modern Physician(0913-7963)24 巻 11 号 Page1767-1772(2004.11)
190) 石橋 俊 【動脈硬化性疾患研究の最前線】プラーク破綻の分子基盤 Atherothrombosis(1343-4470)7 巻 2 号 Page12-17(2004.07)
191) 石橋 俊 【メタボリックシンドローム 新たな動脈硬化病態】メタボリックシンドローム診療の実際 肥満とその管理 臨床医(0388-2969)30 巻 9 号 Page1755-1758(2004.09)
192) 石橋 俊【生活習慣病と骨代謝】スタチンと骨代謝 内分泌・糖尿病科(1341-3724)19 巻 2 号 Page151-157(2004.08)
193) 石橋 俊 糖尿病の諸相 糖尿病に合併した高脂血症 からだの科学 増刊(0303-0334)増刊糖尿病 2005 Page216-219(2004.07)
194) 稲葉 利敬, 石橋 俊 【検査値を読む】血液生化学 リン脂質 内科(0022-1961)93 巻 6 号 Page1112(2004.06) DOI:10.15106/J00974.2004283086
195) 石橋 俊 【検査値を読む】血液生化学 リポタンパク・Lp(a) 内科(0022-1961)93 巻 6 号 Page1101(2004.06) DOI:10.15106/J00974.2004283076
196) 石橋 俊 【近年明らかにされたスタチン製剤の多角的作用】スタチン製剤の抗炎症 内分泌・糖尿病科(1341-3724)18 巻 6 号 Page540-544(2004.06)
197) 石橋 俊 糖尿病・代謝症候群の合併症 家族性高コレステロール血症と動脈硬化 医学のあゆみ(0039-2359)別冊糖尿病・代謝症候群ーstate of arts2004-2006 Page526-528(2004.06)
198) 大橋 健, 兎澤 隆一, 石橋 俊 見る脂質のページ 脂質代謝異常モデル動物 スクアレン合成酵素ノックアウトマウス/HMG-CoA 還元酵素ノックアウトマウス The Lipid(0915-6607)15 巻 1 号 Page4-9(2004.01)
199) 関谷 元博, 石橋 俊 糖尿病 合併症 動脈硬化症 Annual Review 内分泌,代謝 2004 巻 Page189-
200) 田村 嘉章, 石橋 俊 【動脈硬化と脂質代謝異常】高脂血症の鑑別診断とその要点 動脈硬化予防(1347-7056)2 巻 4 号 Page11-16(2003.12)
201) 石橋 俊 【日本人の肥満症】肥満症の病態 インスリン抵抗性と糖尿病 綜合臨床(0371-1900)53 巻 2 号 Page275-281(2004.02)
202) 石橋 俊 【糖尿病と動脈硬化 update】成因 糖尿病における動脈硬化の発症機序 現代医療(0533-7259)35 巻増刊 IV Page2647-2653(2003.11)
203) 石橋 俊 【危険因子重複症候群としてのメタボリックシンドロームの病態】メタボリックシンドロームの概念と臨床的意義 Mebio(0910-0474)21 巻 3 号 Page14-22(2004.03)
204) 石橋 俊 【高トリグリセリド血症と心血管病】遺伝子改変マウスモデルを用いた高 TG-rich リポ蛋白血症の病態解明 循環器科(0388-1911)55 巻 1 号 Page30-35(2004.01)

205)　川上 昭雄, 岡田 修和, 石橋 俊 【肥満と摂食制御と疾患】摂食障害の臨床の場から BIO Clinica(0919-8237)19 巻 1 号 Page47-53(2004.01)
206)　石橋 俊 【糖尿病診療マニュアル】治療と病態コントロール 血清脂質コントロール 高脂血症合併糖尿病患者への指導 日本医師会雑誌(0021-4493)130 巻 8 号 Page S196-S197(2003.10)
207)　石橋 俊 心血管病のモデル動物 LDL レセプターノックアウトマウス 分子心血管病(1345-2355)4 巻 4 号 Page416-420(2003.08)
208)　石橋 俊 【糖尿病トータルケアの実際】小児・高齢者・併発症の治療 糖尿病を合併した高脂血症の治療のポイント 診断と治療(0370-999X)91 巻 9 号 Page1666-1670(2003.09)
209)　石橋 俊 【インスリン抵抗性の基礎と臨床】インスリン抵抗性に伴う病態 高脂血症 Diabetes Frontier(0915-6593)14 巻 3 号 Page321-325(2003.06)
210)　石橋 俊 【血管の老化を診る】治す 生活習慣改善は血管老化を予防するか Heart View(1342-6591)7 巻 6 号 Page736-741(2003.06)
211)　石橋 俊 【インスリン抵抗性治療薬の選択と適正使用】病態をふまえたインスリン抵抗性に対する治療薬の選択 シンドローム X 治療薬 3.2 巻 Page98-101(1998.04)
212)　稲葉 利敬, 野牛 宏晃, 藤田 延也, 石橋 俊 脂質代謝異常の解析 動物種による塩基配列の相異 LCAT The Lipid(0915-6607)14 巻 2 号 Page185-190(2003.04)
213)　石橋 俊 【内分泌代謝】エビデンスに基づいた糖尿病性合併症のマネージメント 大血管障害のマネージメント Mebio(0910-0474)20 巻 5 号 Page54-59(2003.05)
214)　石橋 俊 【動脈硬化と腎病変】動脈硬化進行機序とその防止 高脂血症による動脈硬化 腎と透析(0385-2156)54 巻 3 号 Page318-321(2003.03)
215)　石橋 俊 糖尿病 合併症 動脈硬化症 内分泌,代謝 2003 巻 Page169-173(2003.01)
216)　石橋 俊 【糖尿病の臓器障害と血圧管理】高脂血症・動脈硬化と糖尿病臓器障害 ホルモンと臨床(0045-7167)51 巻 1 号 Page41-47(2003.01)
217)　石橋 俊 【高脂血症診療 update】予防試験の実地での応用・EBM 糖尿病を対象とした予防試験 臨床医(0388-2969)28 巻 12 号 Page2398-2400(2002.12)
218)　石橋 俊 【高脂血症 最新の実践的個別診療】セミナー 症例からみた高脂血症の診療の実際 低βリポ蛋白血症 アポ B 異常症 Medical Practice(0910-1551)20 巻 1 号 Page75-78(2003.01)
219)　石橋 俊 【内科医が使う薬の副作用・相互作用】代謝・栄養障害薬 プロブコール(シンレスタール,ロレルコ) Medicina(0025-7699)39 巻 11 号 Page198-199(2002.10) DOI:10.11477/mf.1402909006
220)　石橋 俊 スタチン系高脂血症薬による横紋筋融解症 Medical Practice(0910-1551)19 巻 11 号 Page1920-1922(2002.11)
221)　石橋 俊 見る脂質のページ 脂質代謝異常モデル動物 LDL レセプターノックアウトマウス The Lipid(0915-6607)13 巻 5 号 Page442-448(2002.10)
222)　石橋 俊 【臨床遺伝子学】代謝疾患の遺伝子学 コレステロール代謝異常のかたち最新医学(0370-8241)57 巻 9 月増刊 Page2086-2099(2002.09)
223)　石橋 俊 【糖尿病のトータルケア】合併症の治療 高脂血症の治療 臨床医(0388-2969)28 巻 9 号 Page2005-2007(2002.09)
224)　石橋 俊 SNPs と循環器疾患 SNPs と高脂血症 分子心血管病(1345-2355)3 巻 4 号 Page491-494(2002.08)
225)　石橋 俊 【糖尿病の合併症 病態と治療戦略】大血管症の発症機構と遺伝素因 最新医学(0370-8241)57 巻 6 号 Page1160-1166(2002.06)
226)　石橋 俊 【高脂血症と栄養】食後高脂血症 栄養-評価と治療(0915-759X)19 巻 2 号 Page153-157(2002.05)
227)　関谷 元博, 石橋 俊 【スタチン 注目される多面的作用と新規薬剤】スタチンの多面的効果 治療学(0386-8109)36 巻 5 号 Page496-501(2002.05)
228)　石橋 俊 【内分泌代謝】生活習慣病の治療 複雑な代謝病態でのマネージメント 肥満症の診断と病態 Mebio(0910-0474)19 巻 6 号 Page58-62(2002.06)
229)　石橋 俊 【高脂血症診療の最前線 医療現場への提言】高脂血症診療のための最新知識 リポタンパクリパーゼと治療 内科(0022-1961)89 巻 5 号 Page906-909(2002.05) DOI:10.15106/J00974.2002205875
230)　石橋 俊 【ホルモンと炎症 最近の知見】炎症と動脈硬化 ホルモンと臨床(0045-7167)50 巻 3 号 Page301-307(2002.03)
231)　石橋 俊 【生活習慣病 遺伝子から病態まで】遺伝子 高脂血症 高脂血症の原因遺伝子 最新医学(0370-8241)57 巻 3 月増刊 Page600-610(2002.03)

232)　石橋 俊【循環器薬の使いかた いま必要な最新知見とその活用の実際】治療/最新の知見と EBM に基づいた薬の使いかたの実際 高脂血症治療薬 Medical Practice(0910-1551)19 巻 5 号 Page825-830(2002.05)
233)　石橋 俊【動脈硬化と高脂血症】高脂血症と細胞機能 マクロファージの泡沫化 Medicina(0025-7699)39 巻 4 号 Page579-582(2002.04) DOI:10.11477/mf.1402908645
234)　石橋 俊【脂質代謝異常 診断と治療の進歩】脂質代謝異常の遺伝子解析と臨床 日本内科学会雑誌(0021-5384)90 巻 10 号 Page2010-2016(2001.10) DOI:10.2169/naika.90.2010
235)　大橋 健, 石橋 俊 脂質代謝異常の解析 脂質代謝に関わる塩基配列からみた相同性と調節機能 アポ B The Lipid(0915-6607)12 巻 5 号 Page505-515(2001.10)
236)　石橋 俊【21 世紀の新しい治療医学】内分泌・代謝領域 新しいメカニズムによる高脂血症治療薬の開発と臨床応用の展望 現代医療(0533-7259)34 巻 1 号 Page173-177(2002.01)
237)　冨田 佐智子, 石橋 俊【糖尿病性腎症の全て】基礎 糖尿病性腎症の発症機序 糖尿病性腎症における脂質代謝の役割 腎と透析(0385-2156)51 巻増刊 Page197-201(2001.12)
238)　石橋 俊【内科 この 1 年の進歩】脂質代謝 内科(0022-1961)88 巻 6 号 Page1089-1097(2001.12) DOI:10.15106/J00974.2002080689
239)　石橋 俊【生活習慣病 分子メカニズムと治療】動脈硬化 泡沫細胞・炎症細胞としてのマクロファージの機能 Molecular Medicine(0918-6557)38 巻臨増 生活習慣病分子メカニズムと治療 Page64-69(2001.08)
240)　石橋 俊【核内受容体ファミリーによる代謝調節】LXR,FXR のコレステロール代謝調節メカニズム 内分泌・糖尿病科(1341-3724)13 巻 2 号 Page144-148(2001.08)
241)　石橋 俊【高脂血症の病態と最新の治療法】新しいatherogenicリポタンパクの特徴と意義 レムナント 最新医学(0370-8241)56 巻 6 号 Page1151-1157(2001.06)
242)　石橋 俊【アテローマの形成とその破綻】プラークの破綻:高脂血症の役割 BIO Clinica(0919-8237)16 巻 7 号 Page611-615(2001.06)
243)　石橋 俊 発生工学的手法からみる循環器疾患 脂質代謝の分子機序 血管医学(1345-9031)1 巻 1 号 Page93-97(2000.10)
244)　後藤田 貴也, 大須賀 淳一, 石橋 俊【脂質代謝異常概論】ノックアウトマウス 日本臨床(0047-1852)59 巻増刊 2 高脂血症(上) Page626-629(2001.02)
245)　石橋 俊 胆汁酸レセプター,FXR 内分泌・糖尿病科(1341-3724)12 巻 5 号 Page507-512(2001.05)
246)　大須賀 淳一, 石橋 俊【脂肪細胞機能の多彩性】脂肪細胞とホルモン分泌 内分泌・糖尿病科(1341-3724)12 巻 4 号 Page342-350(2001.04)
247)　石橋 俊【高脂血症の治療/動脈硬化を予防する治療目標値とは】高コレステロール血症と高中性脂肪血症を合併したときの治療 Mebio(0910-0474)18 巻 6 号 Page81-85(2001.06)
248)　石橋 俊【高脂血症 治療の理論的根拠と日常診療への活用】低脂血症(低コレステロール,低トリグリセリド,低 HDL)の臨床的意義 治療は必要か?必要であるとするとどのように対処するのか? Medical Practice(0910-1551)18 巻 3 号 Page399-404(2001.03)
249)　矢作 直也, 島野 仁, 石橋 俊【高脂血症治療の進歩】遺伝子治療の現状と将来への展望 日本臨床(0047-1852)59 巻増刊 3 高脂血症(下) Page715-721(2001.03)
250)　関谷 元博, 石橋 俊【高脂血症治療の進歩】Helsinki Heart Study 日本臨床(0047-1852)59 巻増刊 3 高脂血症(下) Page404-409(2001.03)
251)　冨田 佐智子, 石橋 俊【脂質・リポ蛋白代謝の分子機構】Lipoprotein(a)[Lp(a)]日本臨床(0047-1852)59 巻増刊 2 高脂血症(上) Page86-90(2001.02)
252)　石橋 俊【循環器疾患 state of arts】病態生理に関する基礎的・臨床的研究 高脂血症と遺伝子異常 医学のあゆみ(0039-2359)別冊循環器疾患-state of arts(Ver.2) Page154-156(2001.03)
253)　大須賀 淳一, 石橋 俊【高脂血症 病態解明・治療の進歩】発生工学による脂質代謝異常モデル 内分泌・糖尿病科(1341-3724)12 巻 2 号 Page129-136(2001.02)
254)　石橋 俊, Evidence Based Medicine 糖尿病を合併した場合の治療に関する EBM 分子心血管病(1345-2355)1 巻 6 号 Page699-703(2000.12)
255)　石橋 俊【糖尿病と合併症へのアプローチ】糖尿病合併症の発症・進展を予防するための治療の進め方 合併症の発症・進展予防に向けたインスリンの使い方 糖尿病患者の脂質代謝異常の治療の進め方 Medicina(0025-7699)37 巻 13 号 Page1951-1955(2000.12) DOI:10.11477/mf.1402907858
256)　田村 嘉章, 石橋 俊【糖尿病臨床の最前線 エビデンスと新基準に基づいた糖尿病の治療】糖尿病患者の大血管症 効果的な予防戦略 臨床医(0388-2969)26 巻 10 号 Page2186-2191(2000.10)
257)　石橋 俊 高脂血症の新たな局面 高脂血症と HSL Modern Physician(0913-7963)20 巻 10 号 Page1291-1294(2000.10)

258) 大須賀 淳一, 石橋 俊, 島野 仁, 嶋田 昌子, 野牛 宏晃, 陳 忠, 矢作 直也, 塩之入 太, 大橋 健, 原田 賢治, 後藤田 貴也, 山田 信博 中性脂肪代謝への発生工学の応用 Therapeutic Research(0289-8020)21 巻 10 号 Page2306-2312(2000.10)
259) 石橋 俊 【発生工学による疾患マウスモデル】高脂血症マウスモデル 細胞(1346-7557)32 巻 11 号 Page412-415(2000.09)
260) 石橋 俊 【循環器疾患のコホート研究】遺伝疫学 高脂血症 循環器科(0388-1911)48 巻 2 号 Page163-171(2000.08)
261) 岡崎 啓明, 石橋 俊 【高脂血症の全て 2000】高脂血症の成因 高 LDL-C 血症 臨床栄養(0485-1412)96 巻 6 号 Page643-647(2000.05)
262) 岡崎 啓明, 石橋 俊 高脂血症の原因遺伝子はどこまでわかったか 臨床医(0388-2969)26 巻 6 号 Page1575-1579(2000.06)
263) 石橋 俊 【成人病の遺伝的背景と生活習慣】高脂血症・肥満の原因としての脂肪分解異常仮説の検証 臨床成人病(0387-1231)30 巻 5 号 Page637-642(2000.05)
264) 石橋 俊 【高血圧(上)】本態性高血圧症 成因論と病態生理 原因候補遺伝子 LDL 受容体遺伝子 日本臨床(0047-1852)58 巻増刊 高血圧(上) Page535-539(2000.01)
265) 石橋 俊 発生工学を用いた動脈硬化の研究 Current Topics in Cardiology(0918-2985)22 号 Page24-34(1999.11)
266) 石橋 俊 【脂肪肝をめぐる最近の話題】代謝疾患と脂肪肝 臨床消化器内科(0911-601X)15 巻 2 号 Page169-176(2000.01)
267) 石橋 俊 【高脂血症治療薬】高脂血症の遺伝子治療の展望 治療学(0386-8109)33 巻 10 号 Page1106-1111(1999.10)
268) 石橋 俊 【高脂血症 分子生物学的アプローチによる基礎・臨床研究の最新動向】特殊療法 遺伝子治療の現状と将来への展望 日本臨床(0047-1852)57 巻 12 号 Page2862-2868(1999.12)
269) 大須賀 淳一, 石橋 俊【Vascular biology 分子生物学と病態・治療】血管病動物モデル 脂質代謝遺伝子と動脈硬化 医学のあゆみ(0039-2359)191 巻 5 号 Page581-585(1999.10)
270) 大須賀 淳一, 石橋 俊, 島野 仁, 嶋田 昌子, 野牛 宏晃, 陳 忠, 矢作 直也, 塩之入 太, 大橋 健, 原田 賢治, 後藤田 貴也, 山田 信博 レムナントリポ蛋白の代謝と動脈硬化形成 Therapeutic Research(0289-8020)20 巻 9 号 Page2517-2521(1999.09)
271) 石橋 俊 動脈硬化に関わる遺伝子 コレステロール代謝と発生工学 Therapeutic Research(0289-8020)20 巻 9 号 Page2470-2477(1999.09)
272) 田村 嘉章, 石橋 俊【脂質代謝障害へのアプローチ】その他 二次性高脂血症のマネージメント 診断と治療(0370-999X)87 巻 11 号 Page2041-2045(1999.11)
273) 石橋 俊 【高脂血症治療の最前線】高脂血症の病態解析 発生工学的手法を用いた高脂血症の病態解析 Tokyo Tanabe Quarterly(0285-368X)44 号 Page136-140(1999.11)
274) 石橋 俊 【高脂血症の診療 strategy】なぜ,高脂血症を治療するのか 臨床成人病(0387-1231)29 巻 9 号 Page1139-1143(1999.09)
275) 石橋 俊 【高脂血症の分子医学】レムナント代謝の分子生物学 現代医療(0533-7259)31 巻 11 号 Page2641-2645(1999.11)
276) 石橋 俊 LXR によるコレステロールの代謝調節 内分泌・糖尿病科(1341-3724)9 巻 3 号 Page267-274(1999.09)
277) 石橋 俊 【リポ蛋白の量と質の制御】LDL 亜分画の代謝とその病態 The Lipid(0915-6607)10 巻 3 号 Page211-215(1999.04)
278) 石橋 俊 【高脂血症と動脈硬化】心血管イベントの抑制のために コレステロールをどうするか: Medicina(0025-7699)36 巻 3 号 Page459-463(1999.03) DOI:10.11477/mf.1402905950
279) 山田 信博, 石橋 俊, 後藤田 貴也, 嶋田 昌子 リポ蛋白代謝酵素と動脈硬化 リポタンパクリパーゼの役割 動脈硬化(0386-2682)26 巻 3 号 Page119-121(1998.11) DOI:10.5551/jat1973.26.3_119
280) 石橋 俊 レムナントとプラーク Therapeutic Research(0289-8020)19 巻 11 号 Page3479-3482(1998.11)
281) 石橋 俊 脂質代謝異常の解析 発生工学的手法 ノックアウトマウスの作り方 卵操作編 The Lipid(0915-6607)9 巻 5 号 Page495-500(1998.10)
282) 石橋 俊 【動脈硬化をめぐる最近の話題 動脈硬化の診断と治療】動脈硬化治療のライフスタイル 興和医報(0285-4570)41 巻 4 号 Page37-41(1998.10)
283) 大須賀 淳一, 嶋田 昌子, 石橋 俊, 野牛 宏晃, 原田 賢治, 大橋 健, 山田 信博, 矢崎 義雄 リポ蛋白代謝と動脈硬化性疾患-最近の知見 レムナントリポ蛋白と動脈硬化性疾患 発生工学的手法による解析 動

脈硬化(0386-2682)25 巻 11～12 号 Page427-429(1998.08)
284) 石橋 俊 【高コレステロール血症治療の最前線】LDL 受容体ノックアウトマウスとアポ E ノックアウトマウス 臨床科学(0385-0323)34 巻 4 号 Page500-505(1998.04)
285) 石橋 俊 脂質代謝異常の解析 発生工学的手法 ノックアウトマウスの作り方 ES 細胞培養編 The Lipid(0915-6607)9 巻 4 号 Page377-381(1998.07)
286) 石橋 俊 【検査値活用マニュアル】検査値の読み方 アポタンパク(アポ)E 内科(0022-1961)81 巻 6 号 Page1268-1269(1998.06)
287) 石橋 俊 【検査値活用マニュアル】検査値の読み方 アポタンパク(アポ)C 内科(0022-1961)81 巻 6 号 Page1267(1998.06)
288) 石橋 俊 【検査値活用マニュアル】検査値の読み方 アポタンパク(アポ)B 内科(0022-1961)81 巻 6 号 Page1265-1266(1998.06)
289) 石橋 俊 【検査値活用マニュアル】検査値の読み方 アポタンパク(アポ)A 内科(0022-1961)81 巻 6 号 Page1263-1264(1998.06)
290) 石橋 俊, 山田 信博 【合併症の遺伝学的背景】合併症関連遺伝子を探索するための方法論 Transgenic animals,Gene-knockout mice Complication: 糖尿病と血管(1342-4904)3 巻 1 号 Page29-35(1998.05)
291) 石橋 俊 【Common Disease 原因遺伝子解明に向けて 現状と展望】動物モデルを用いた高脂血症遺伝子研究 医学のあゆみ(0039-2359)185 巻 9 号 Page577-579(1998.05)
292) 石橋 俊 Atherogenesis update 発生工学と動脈硬化 Therapeutic Research(0289-8020)19 巻 2 号 Page235-241(1998.02)
293) 石橋 俊 【糖尿病】糖尿病にみられる遺伝子異常,DNA 多型 NIDDM アポ蛋白遺伝子 日本臨床(0047-1852)55 巻増刊 糖尿病(1) Page490-497(1997.10)
294) 石橋 俊 脂質代謝異常の解析 発生工学的手法(2) ノックアウトマウスの作り方 ターゲティングベクター作製編 The Lipid(0915-6607)9 巻 3 号 Page275-279(1998.04)
295) 矢作 直也, 石橋 俊 【脂肪細胞の機能調節と病態】脂肪分解の調節と肥満・インスリン抵抗性 内分泌・糖尿病科(1341-3724)6 巻 3 号 Page215-225(1998.03)
296) 石橋 俊 【新しい脂質検査法】日常検査法としての脂質関連遺伝子異常の解析 The Lipid(0915-6607)9 巻 2 号 Page178-182(1998.02)
297) 石橋 俊 【循環器病学における分子生物学的研究の進歩】脂質 高脂血症の原因遺伝子 医学のあゆみ(0039-2359)185 巻 1 号 Page75-78(1998.04)
298) 石橋 俊 【血管の分子医学-その最前線】動脈硬化と脂質代謝 動脈硬化研究手段としての脂質代謝遺伝子改変マウス 実験医学(0288-5514)16 巻 5 号 Page683-687(1998.03)
299) 石橋 俊 脂質代謝異常の解析 発生工学的手法 発生工学的手法の応用 発生工学によって何が可能か :The Lipid(0915-6607)9 巻 1 号 Page93-97(1998.01)
300) 石橋 俊 【発生工学による疾病の成因と病態の解析】発生工学と臨床 現代医療(0533-7259)29 巻 12 号 Page3140-3147(1997.12)
301) 石橋 俊 【代謝】高脂血症の遺伝子治療 Annual Review 内分泌,代謝 1997 巻 Page1-7(1997.01)
302) 大須賀 淳一, 石橋 俊 【高脂血症 病態解明の進歩と診療の実際】トピックス 発生工学を用いた脂質代謝異常モデルの作製 内科(0022-1961)81 巻 2 号 Page323-326(1998.02)
303) 石橋 俊 【高脂血症 病態解明の進歩と診療の実際】高脂血症の診断の進め方 高脂血症の診断と病型分類 内科(0022-1961)81 巻 2 号 Page220-225(1998.02)
304) 大須賀 淳一, 石橋 俊 【受容体と疾患】臨床 脂質代謝異常・動脈硬化症 LDL 受容体 現代医療(0533-7259)30 巻 1 号 Page234-237(1998.01)
305)
306) 石橋 俊 【糖尿病】糖尿病慢性合併症の早期診断と病期に応じた治療法 動脈硬化症 マルチプルリスクファクターのコントロール Medical Practice(0910-1551)15 巻 1 号 Page93-99(1998.01)
307) 石橋 俊 【高脂血症の治療】トピックス 発生工学的研究による進歩 カレントテラピー(0287-8445)16 巻 1 号 Page132-136(1997.12)
308) 石橋 俊 【内分泌・代謝疾患 state of arts】内分泌・代謝疾患理解のための病態生理 高脂血症の実験動物モデル 医学のあゆみ(0039-2359)別冊内分泌・代謝疾患 Page141-142(1997.10)
309) 石橋 俊 【高脂血症のマネージメント】治療しなければならない新しい atherogenic リポ蛋白;レムナント Heart View(1342-6591)1 巻 10 号 Page1209-1212(1997.10)
310) 石橋 俊 動脈硬化とトリグリセリド リポタンパクリパーゼの意義 内科(0022-1961)80 巻 3 号 Page555-556(1997.09)

311) 石橋 俊 高脂血症と循環器疾患 動脈硬化惹起性リポ蛋白と HDL 循環器 Today(1342-7032)1 巻 2 号 Page205-209(1997.01)
312) 石橋 俊 糖尿病と冠動脈硬化症のプログレッション 糖尿病と冠血管内皮・平滑筋細胞 循環器 Today(1342-7032)1 巻 5 号 Page568-573(1997.04)
313) 石橋 俊 家族性高コレステロール血症(FH)の遺伝子治療 現代医療(0533-7259)29 巻 8 号 Page1955-1961(1997.08)
314) 石橋 俊 血管における生命現象の分子生物学 第 1 部 血管の機能解明のための新しい分子生物学的手法 トランスジェニックマウスとノックアウトマウス 血管と内皮(0917-5318)7 巻 3 号 Page303-308(1997.06)
315) 石橋 俊 動脈硬化 血管壁脂質蓄積と Atherogenic lipoprotein LDL Mebio(0910-0474)14 巻 1 号 Page35-40(1997.01)
316) 石橋 俊 受容体機能とその評価法 LDL 受容体 日本臨床(0047-1852)55 巻増刊 現代臨床機能検査(下) Page577-580(1997.04)
317) 大須賀 淳一, 石橋 俊 高脂血症から動脈硬化へ アポ BmRNA editing の意義 Medical Practice(0910-1551)14 巻 4 号 Page623-625(1997.04)
318) 石橋 俊 レムナント受容体(LRP) Therapeutic Research(0289-8020)17 巻 12 号 Page4755-4761(1996.12)
319) 石橋 俊 LDL 受容体ファミリー LDL 受容体遺伝子の操作 The Lipid(0915-6607)8 巻 2 号 Page151-157(1997.02)
320) 石橋 俊, 嶋田 昌子, 陳 忠, 他 リポ蛋白代謝変異マウスモデルにおける動脈硬化の比較 動脈硬化(0386-2682)24 巻 9 号 Page477-480(1997.01) DOI:10.5551/jat1973.24.9_477
321) 石橋 俊 家族性高コレステロール血症の遺伝子治療 BIO Clinica(0919-8237)11 巻 11 号 Page848-851(1996.10)
322) 石橋 俊 高脂血症の遺伝子診断 LPL, HTGL 異常の遺伝子診断 The Lipid(0915-6607)8 巻 1 号 Page63-68(1997.01)
323) 石橋 俊 動脈硬化の分子生物学的解明 動脈硬化の疾患動物モデル Molecular Medicine(0918-6557)33 巻 12 号 Page1380-1386(1996.11)
324) 塩之入 太, 石橋 俊 動脈硬化とカルシウム 細胞内コレステロール代謝とカルシウム拮抗薬 Clinical Calcium(0917-5857)6 巻 11 号 Page1418-1422(1996.10)
325) 石橋 俊 グラビア LDL レセプターノックアウトマウスの動脈硬化 現代医療(0533-7259)28 巻 10 号 Page2551-2553(1996.10)
326) 石橋 俊 動脈硬化研究 脂質代謝研究法 実験医学(0288-5514)14 巻 12 号 Page1681-1685(1996.08)
327) 石橋 俊 Gene targetingと高脂血症モデル動物 最新医学(0370-8241)51 巻 6 号 Page1148-1152(1996.06)
328) 石橋 俊 トリグリセライドのすべて 最近のトピックス LPL の血漿コレステロール低下作用 現代医療(0533-7259)28 巻 7 号 Page1963-1965(1996.07)
329) 石橋 俊 発生工学を用いた高脂血症研究 LDL レセプターノックアウトマウスを中心に 医学のあゆみ(0039-2359)別冊高脂血症の分子生物学 Page101-105(1996.03)
330) 大須賀 淳一, 石橋 俊 肥満遺伝子 内分泌・糖尿病科(1341-3724)1 巻 4 号 Page377-382(1995.10)
331) 石橋 俊 ノックアウトマウス(LDL レセプター/アポ E) 細胞工学(0287-3796)別冊動脈硬化+高脂血症研究ストラテジー Page433-435(1996.04)
332) 原田 賢治, 石橋 俊 Up Date 循環器疾患と遺伝子異常 ジーンテラピィの現状と将来への展望 現代医療(0533-7259)27 巻 5 号 Page1337-1340(1995.05)
333) 石橋 俊 知っておきたい最新のキーワード 循環器編 家族性複合型高脂血症 Medical Digest(0543-2618)45 巻 1 号 Page14-15(1996.01)
334) 大橋 健, 石橋 俊 冠動脈疾患における高脂血症治療と冠動脈機能の改善とその意義 Medical Practice(0910-1551)13 巻 1 号 Page117-121(1996.01)
335) 石橋 俊 知っておきたい最新のキーワード 循環器編 Lp(a) Medical Digest(0543-2618)45 巻 1 号 Page10-12(1996.01)
336) 石橋 俊 知っておきたい最新のキーワード 循環器編 レムナント Medical Digest(0543-2618)45 巻 1 号 Page12-14(1996.01)
337) 石橋 俊 高脂血症と遺伝子異常 医学のあゆみ(0039-2359)別冊循環器疾患 -state of arts Page130-133(1996.01)
338) 原田 賢治, 石橋 俊 動脈硬化とアポトーシス 臨床医(0388-2969)21 巻 9 号 Page2158-2161(1995.09)
339) 石橋 俊 家族性高コレステロール血症の遺伝子治療 医学のあゆみ(0039-2359)175 巻 9 号 Page668-671(1995.12)

340)　石橋 俊 家族性高コレステロール血症に対する遺伝子治療 最新医学(0370-8241)50 巻増刊 Page1803-1815(1995.09)
341)　石橋 俊 脂質代謝異常症の動物モデル LDL レセプターとアポ E のノックアウトマウス The Lipid(0915-6607)6 巻 4 号 Page362-368(1995.07)
342)　石橋 俊 高脂血症治療の諸問題と新しい展開 動脈硬化症の遺伝子治療 Medicina(0025-7699)32 巻 4 号 Page756-758(1995.04) DOI:10.11477/mf.1402903610
343)　石橋 俊 動脈硬化の遺伝子治療 LDL レセプターノックアウトマウスのアデノウイルスによる遺伝子治療 実験医学(0288-5514)13 巻 2 号 Page286-291(1995.01)
344)　石橋 俊 発生工学を用いた高脂血症研究 発生工学を用いた高脂血症研究 LDL レセプターノックアウトマウスを中心に 医学のあゆみ(0039-2359)172 巻 5 号 Page351-355(1995.02)
345)　石橋 俊 高脂血症 分子生物学研究がもたらしたもの LDL 受容体のノックアウトマウス 治療学(0386-8109)29 巻 3 号 Page252-256(1995.03)
346)　石橋 俊, 山田 信博 糸球体障害の症候論 糖尿病性腎症 血管 腎と透析(0385-2156)37 巻増刊 Page453-456(1994.11)
347)　石橋 俊 糖尿病における動脈硬化症 成因に基づいた最新の治療の進めかた Medical Practice(0910-1551)11 巻 12 号 Page2041-2048(1994.12)
348)　石橋 俊 発生工学による循環器疾患モデル動物 LDL 受容体欠損マウス 循環器科(0388-1911)36 巻 3 号 Page192-198(1994.09)
349)　石橋 俊 高リポ蛋白血症の治療 遺伝子治療の現況と将来 日本臨床(0047-1852)52 巻 12 号 Page3303-3308(1994.12)
350)　石橋 俊 リポ蛋白受容体の分子生物学 LDL 受容体関連蛋白(LRP) 日本臨床(0047-1852)52 巻 12 号 Page3177-3183(1994.09)
351)　石橋 俊 トランスジェニックを用いた高脂血症の研究 臨床科学(0385-0323)30 巻 12 号 Page1575-1582(1994.12)
352)　石橋 俊 家族性高コレステロール血症の遺伝子治療 実験医学(0288-5514)12 巻 15 号 Page1878-1883(1994.10)
353)　石橋 俊 病態解明の Recent Progress 動脈硬化モデルマウスとその遺伝子治療 最新医学(0370-8241)49 巻増刊 Page1834-1840(1994.09)
354)　石橋 俊 動脈硬化の基礎と臨床 1994Transgenic mouse と gene knockout カレントテラピー(0287-8445)12 巻 8 号 Page1579-1583(1994.07)
355)　石橋 俊 広範囲血液・尿化学検査,免疫学的検査 リポ蛋白リパーゼ(LPL) 日本臨床(0047-1852)47 巻増刊 Page550-552(1989.12)
356)　石橋 俊 リポ蛋白の atherogeneity 今日の焦点 VLDL と細胞の interaction 診断と治療(0370-999X)78 巻 1 号 Page143-148(1990.01)
357)　山田 信博, 石橋 俊 本邦における高脂血症の諸問題 リポ蛋白代謝におけるアポ E の意義 日本内科学会雑誌(0021-5384)78 巻 10 号 Page1414-1415(1989.10) DOI:10.2169/naika.78.1414
358)　石橋 俊 〔高脂血症と動脈硬化〕高脂血症薬の実際的な使い方 Medicina(0025-7699)26 巻 3 号 Page444-446(1989.03) DOI:10.11477/mf.1402222363
359)　山田 信博, 石橋 俊 〔糖尿病のマネージメント〕糖尿病患者の高脂血症とその対策 Medical Practice(0910-1551)6 巻 5 号 Page655-658(1989.05)
360)　石橋 俊 神経損傷とアポ蛋白 BIO medica3 巻 3 号 Page281-285(1988.03)
361)　石橋 俊 〔糖尿病とその合併症の管理 成因と対策の実際〕糖尿病を伴った高脂血症の治療 Medical Practice(0910-1551)5 巻 1 号 Page113-117(1988.01)
362)　村勢 敏郎, 高橋 慶一, 石橋 俊, 他 脂肪細胞の代謝 リポ蛋白リパーゼ(LPL)の合成について 日本肥満学会記録 6 回 Page272-274(1986.10)
363)　石橋 俊, 村勢 敏郎, 赤沼 安夫 〔ホルモンと脂質代謝〕インスリン・グルカゴンと脂質代謝 ホルモンと臨床(0045-7167)34 巻 8 号 Page675-680(1986.08)
364)　村勢 敏郎, 石橋 俊, 高橋 慶一, 他 〔高脂血症の薬物療法〕合併症のある高脂血症の薬物療法 糖尿病 医学と薬学(0389-3898)14 巻 5 号 Page1281-1286(1985.11)
365)　村勢 敏郎, 高橋 慶一, 石橋 俊 〔糖尿病のコントロール 合併症の防止をめざして〕糖尿病のコントロールと脂質代謝 Medical Practice(0910-1551)3 巻 7 号 Page1228-1231(1986.07)
366)　石橋 俊, 村勢 敏郎 家族性リポ蛋白リパーゼ欠損症 臨床医(0388-2969)11 巻増刊 Page1461-1462(1985.08)

367)　石橋 俊, 村勢 敏郎, 高久 史麿 [リポ蛋白・脂質代謝と臨床検査] 後天性脂質代謝異常 内分泌疾患臨床検査(0485-1420)29 巻 11 号 Page1576-1580(1985.11) DOI:10.11477/mf.1542917584
368)　石橋 俊, 村勢 敏郎, 高久 史麿 血液・尿化学検査 リポ蛋白リパーゼ(LPL) 日本臨床(0047-1852)43 巻 秋季増刊上 Page377-379(1985.09)
369)　石橋 俊, 村勢 敏郎 一次性高脂血症の病態とその診断 家族性 1 型および 5 型高脂血症 Medical Practice(0910-1551)2 巻 5 号 Page656-658(1985.05)

著書(和文、一部)

1) 石橋俊:インスリン作用と脂質代謝/血清脂質・リポタンパク/脂質異常症、糖尿病専門医研修ガイドブック 改訂 9 版 診断と治療社、2024
2) 石橋俊:脂質異常症治療薬、治療薬ハンドブック 2024、じほう、2024
3) 石橋俊:その他の原発性脂質異常症、動脈硬化診療ガイド 2023 年版、日本動脈硬化学会、2023
4) 石橋俊:その他の原発性脂質異常症、動脈硬化性疾患予防ガイドライン 2022 年版、日本動脈硬化学会、2022
5) 石橋俊:脂質異常症、内科学 第 12 版 矢崎・小室編、IV-433-IV-442、朝倉書店 2022
6) 石橋俊:脂質異常症、循環器/腎・泌尿器/代謝/内分泌、臨床薬学テキストシリーズ 乾賢一監修、中山書店、2020
7) 石橋俊:中性脂肪を下げる、そうだったんだ!脂質異常症、第2版、伊藤浩編、文光堂、2020
8) 石橋俊:原発性高カイロミクロン血症・家族性高コレステロール血症・家族性複合型高脂血症、原発性脂質代謝異常、脂質代謝異常、新臨床内科学 第 10 版、 矢崎編、768-774、2020
9) 石橋俊:脂質異常症―高コレステロール血症、今日の診断指針 2020、福井・高木・小室編、762-765、医学書院、2020
10) 石橋俊:脂質異常症、治療―治療法の考え方とエビデンス、糖尿病学、門脇・荒木・稲垣・植木・羽田・綿田編、西村書店 2015
11) 石橋俊・岩崎啓子:おいしく食べてコレステロールを下げる食事 ハンドブック、永岡書店 2014
12) 石橋俊・検見崎聡美:おいしく食べて血糖値を下げる食事 ハンドブック、永岡書店 2014
13) 石橋俊・検見崎聡美:おいしく食べて中性脂肪を減らす食事 ハンドブック、永岡書店 2014
14) 石橋俊:糖尿病における動脈硬化症の発症・進展機序 糖尿病学イラストレイテッド 春日雅人編、羊土社 2012
15) 石橋俊:血糖値が高いと言われたら読む本、早わかり健康ガイド、小学館、2007
16) 石橋俊:メタボリックシンドローム・脂質異常症、カラー版 糖尿病学―基礎と臨床、門脇・石橋・佐倉・戸辺・野田編、西村書店 2007
17) 岡崎啓明、石橋俊: HARP DATA update 山口、日和田、斎藤編集 276-279 先端医学社、2000
18) 石橋俊:高脂血症 医療薬学 長尾拓・岩坪威編 73-79 共立出版 2000
19) 野牛、山田、石橋、後藤田:高脂血症 新内科治療ガイド 矢崎、和田、大久保、 永田編 1543-1551 文光同 1999
20) 石橋俊:LDL 受容体、アポ E ノックアウトマウスと動脈硬化分子、リピドロジー 森崎編 24-28、メディカルセンス 1997
21) 石橋俊・山田信博:高インスリン血症と NIDDM における冠動脈危険因子の異同 96 糖尿病学 99-123 診断と治療社 1996
22) 石橋俊: LCAT 欠損症、高脂血症、低脂血症 新内科学体系 9 井村、緒方、高久、垂井編 205-215 中山書店 1995
23) 石橋俊:アポリポタンパク質の分析と精製 新生化学実験講座 234-240、1993
24) 石橋俊:動脈硬化とマクロファージ 動脈硬化症 Update 34-41、 1992

監訳

1) 石橋俊 ・島野仁 内分泌代謝疾患、福井・黒川監訳 ハリソン内科学 第5版、メディカルサイエンスインターナショナル 2017

最　終　講　義



北岳（南アルプス）3192m　3 回登頂

2023年３月１日
自治医大

旅の半空

Our masterpieces@jichi

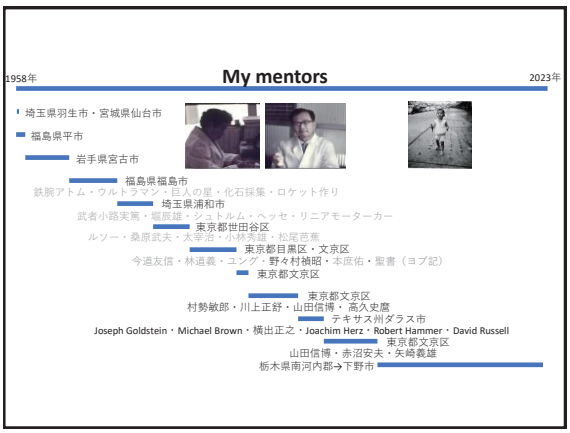
石橋俊

1

京までは
まだ半空や
雪の雲

笈の小文　芭蕉

2

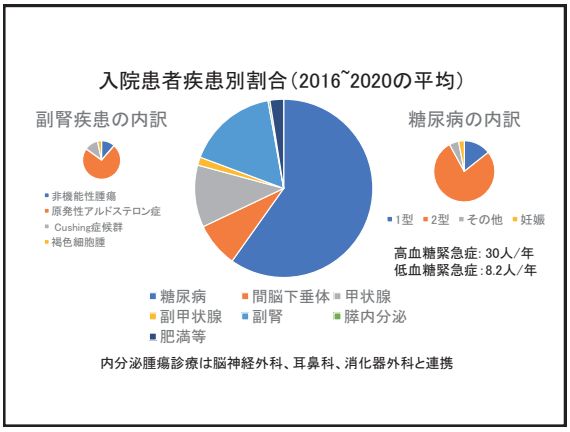


3

What is my masterpiece?

Paper?
Patent?
Patient?
People?

4



5

自治医大で出会った希少疾患

無セルロプラスミン血症	CP	Muroi R et al. Diabet Med 2006
LCAT欠損症	LCAT	Wang XL et al. J Atheroscler Thromb 2011
インスリン受容体異常症	IR	Enkhtuvshin B et al. Diabet Med 2015, 自治医大紀要2016
重症高脂血症合併肝細胞癌	PCSK9?	Nagashima S et al. J Atheroscler Thromb 2016
無βリポタンパク血症	MTTP	Takahashi M et al. J Clin Lipidol 2021
Kallmann syndrome 合併 Waardenburg syndrome	SOX10	Wakabayashi T et al. Endocrinol Diabetes Metab Case Rep. 2021
ViPoma	MEN1	Sakurai M et al. Endocr J in press
高カイロミクロン血症	LPL	未発表
高カイロミクロン血症	GPIHBP1	未発表
Tangier病	ABCA1	未発表

6

A case of vasoactive intestinal peptide-secreting tumor (VIPoma) arising from *MEN1* inactivation which recurred 15 years after the initial resection

Case Presentation

51歳女性

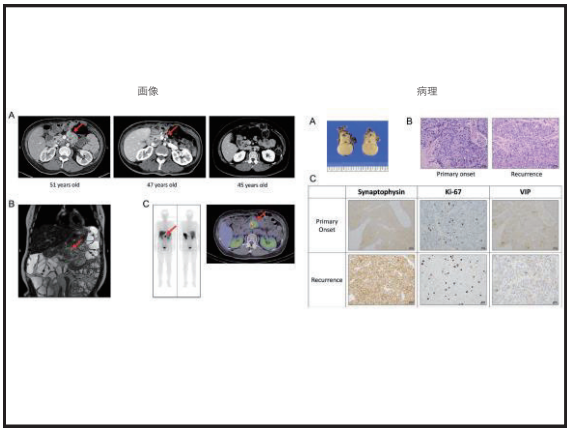
32歳　数年に及ぶ水様下痢・低カリウム血症・高血糖(WDHA症候群）→VIPoma→切除術
45歳　血糖コントロール悪化
46歳　水様下痢
50歳　低カリウム血症・血糖コントロール悪化
→VIPoma再燃

A contrast-enhanced CT and magnetic resonance imaging (MRI) scan showed a well-defined enhancing multinodular lesion, approximately 5 cm in size, with some cystic and calcified components localizing near the dorsal of the pancreatic body (Fig. 1A and 1B). No distant metastases were observed, including those in the

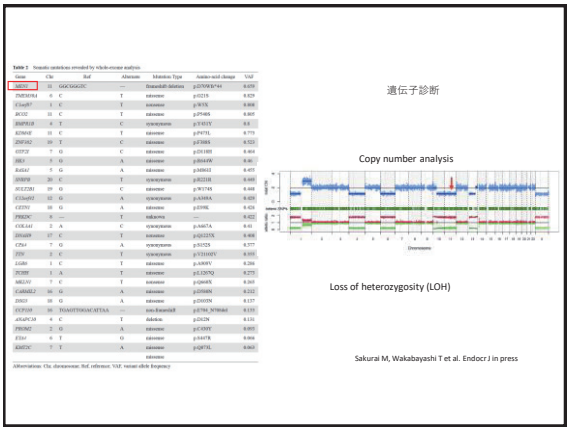
age of 50, she developed symptoms of hypokalemia, which necessitated potassium replacement therapy. In addition, glycemic control deteriorated. She was suspected of having VIPoma recurrence and was referred to our hospital for further examination.

VIP concentration (257 pg/mL) was detected to be above the normal range in several measurements. This value was similar to that at the initial presentation (318 pg/mL). Based on these results, the patient was diagnosed with VIPoma relapse.

7



8

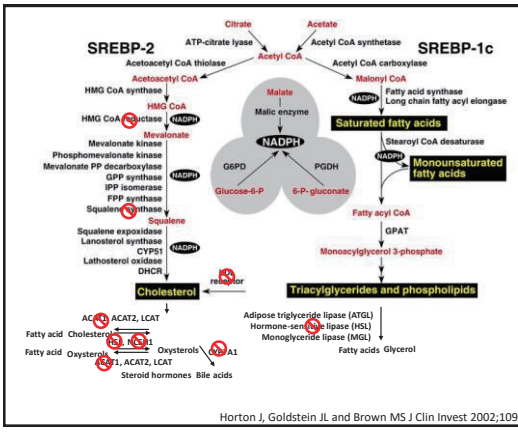


9

Global knockout mice (1990~)

Gene	Abbreviation	
LDL receptor	Ldlr	Ishibashi S et al. J Clin Invest. 1993
Asialoglycoprotein receptor type 2	Asgr2, Hl2	Ishibashi S et al. J Biol Chem. 1994
Cholesterol 7α-hydroxylase	Cyp7A	Ishibashi S et al. J Biol Chem. 1996
Apolipoprotein B editing protein 1	Apobec1	Osuga J et al. BBRC. 1997
Squalene synthase	Sqs, Fdft1	Tozawa R et al. J Biol Chem. 1999
Hormone-sensitive lipase	Hsl, Lipe	Osuga J et al. PNAS. 2000
Acyl-CoA cholesterol acyltransferase 1	Acat1, Soat1	Yagyu et al. J Biol Chem. 2000
Asialoglycoprotein receptor type 1	Asgr1, Hl1	Tozawa R et al. J Biol Chem. 2001
HMG-CoA reductase	Hmgcr	Ohashi K et al. J Biol Chem. 2003
Scavenger receptor expressed by endothelial cells 1	Srec1	Tamura Y et al. J Biol Chem. 2004
Neutral cholesterol ester hydrolase 1	Nceh1	Sekiya M et al. Cell Metab. 2009
Triglyceride hydrolase 2	Tgh2, Ces1f	Unpublished

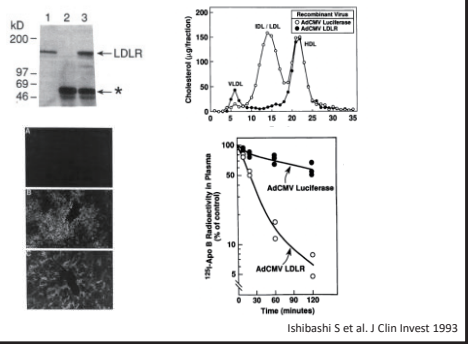
10



Horton J, Goldstein JL and Brown MS J Clin Invest 2002;109:1125-31

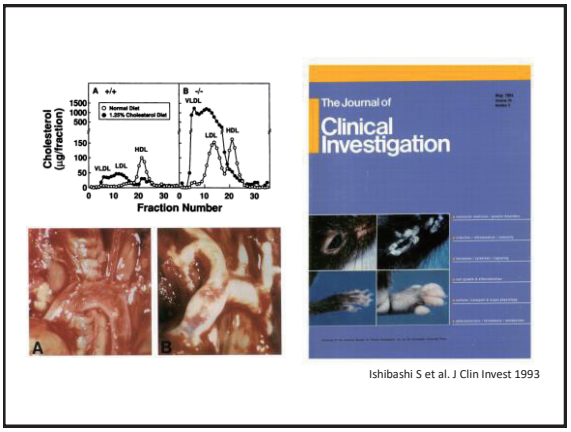
11

Hypercholesterolemia in Low Density Lipoprotein Receptor Knockout Mice and its Reversal by Adenovirus-mediated Gene Delivery



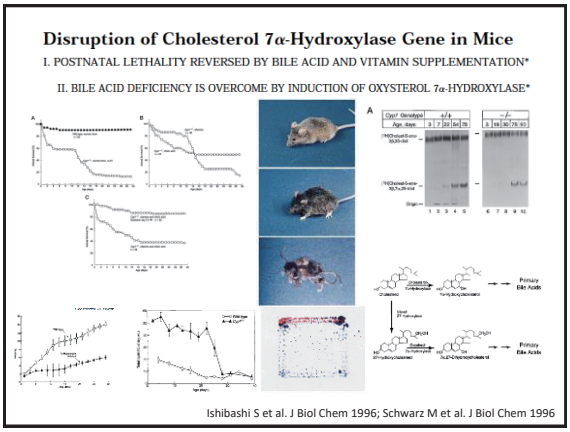
Ishibashi S et al. J Clin Invest 1993

12



Ishibashi S et al. J Clin Invest 1993

13

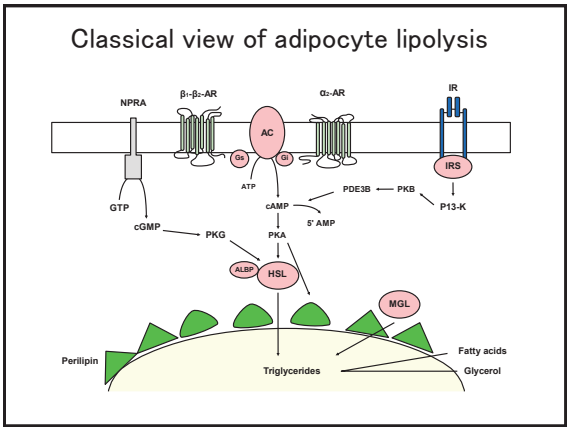


Ishibashi S et al. J Biol Chem 1996; Schwarz M et al. J Biol Chem 1996

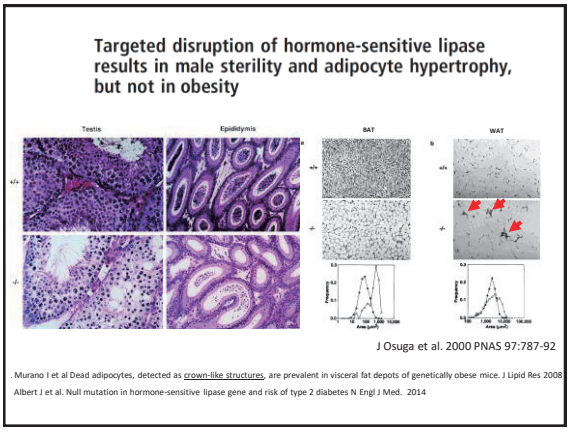
14



15



16

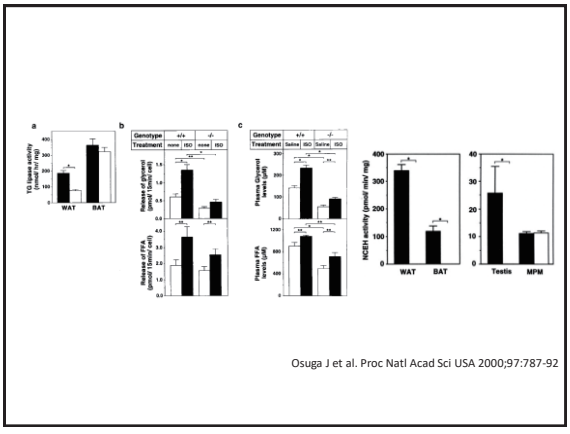


J Osuga et al. 2000 PNAS 97:787-92

. Murano I et al Dead adipocytes, detected as crown-like structures, are prevalent in visceral fat depots of genetically obese mice. J Lipid Res 2008

Albert J et al. Null mutation in hormone-sensitive lipase gene and risk of type 2 diabetes N Engl J Med. 2014

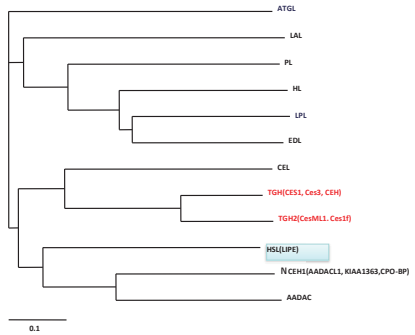
17



Osuga J et al. Proc Natl Acad Sci USA 2000;97:787-92

18

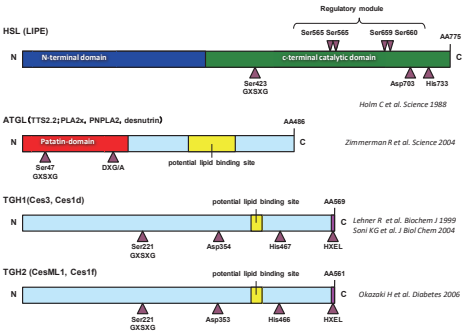
Family of neutral lipid hydrolases



Okazaki H et al. Diabetes 2006;55:2091-7

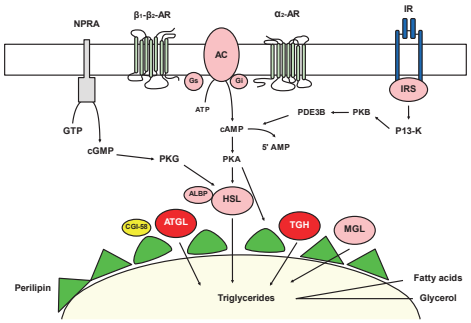
19

Lipases responsible for adipocyte lipolysis



20

Current view of adipocyte lipolysis



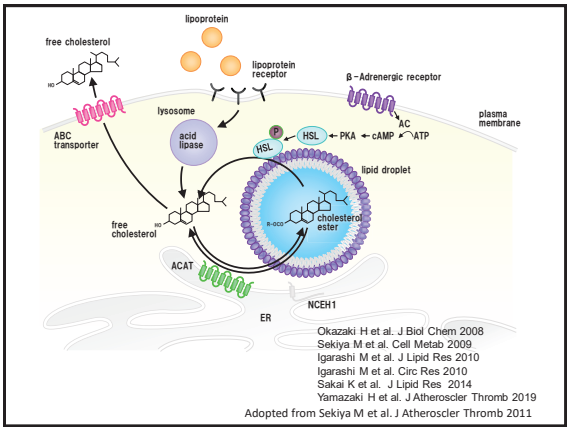
21



22



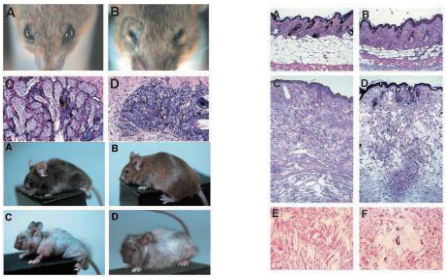
23



Okazaki H et al. J Biol Chem 2008
Sekiya M et al. Cell Metab 2009
Igarashi M et al. J Lipid Res 2010
Igarashi M et al. Circ Res 2010
Sakai K et al. J Lipid Res 2014
Yamazaki H et al. J Atheroscler Thromb 2019
Adopted from Sekiya M et al. J Atheroscler Thromb 2011

24

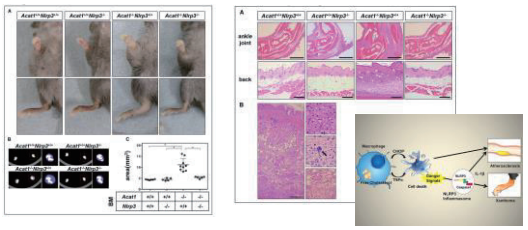
Absence of ACAT-1 Attenuates Atherosclerosis but Causes Dry Eye and Cutaneous Xanthomatosis in Mice with Congenital Hyperlipidemia*



Yagyu H et al. J Biol Chem 2000

25

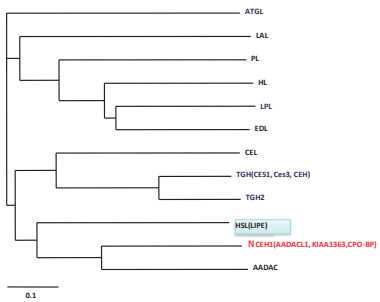
Inflammasome Activation Aggravates Cutaneous Xanthomatosis and Atherosclerosis in ACAT1 (Acyl-CoA Cholesterol Acyltransferase 1) Deficiency in Bone Marrow



Wakabayashi T et al. Arterioscler Thromb Vasc Biol 2018

26

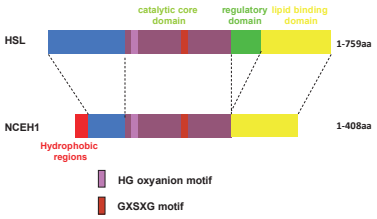
Family of neutral lipid hydrolases



Okazaki H et al. J Biol Chem 2008;283:33357-64

27

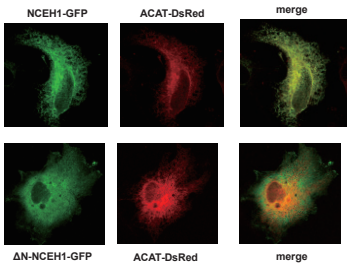
Structure of NCEH1



Okazaki H et al. J Biol Chem 2008;283:33357-64
Igarashi M et al. J Lipid Res 2010; 51:274-285

28

Targeting of NCEH1 to ER requires the N-terminal sequence

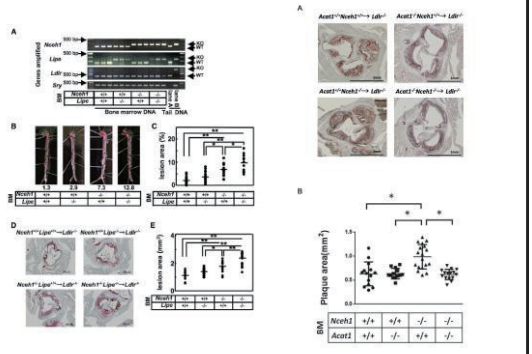


Igarashi M et al. J Lipid Res 2010; 51:274-285

29

Ablation of Neutral Cholesterol Ester Hydrolase 1 Accelerates Atherosclerosis

Loss of ACAT1 Attenuates Atherosclerosis Aggravated by Loss of NCEH1 in Bone Marrow-Derived Cells



Sekiya M et al. Cell Metab 2009

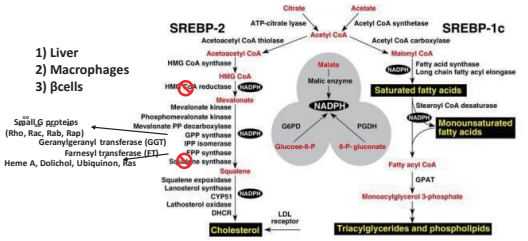
Yamazaki H et al. J Atheroscler Thromb 2019

30

Conditional knockout mice (2000~)

Gene	Promotor/procedure	
HMG-CoA reductase	Albumin	Nagashima S et al. Arterioscler Thromb Vasc Biol. 2012
	Alfa skeletal actin	Osaki Y et al. BBRC 2015
	Lysozyme	Sakai K et al. Arterioscler Thromb Vasc Biol. 2018
	Lysozyme	Takei A et al. Diabetes. 2020
	Insulin	Takei S et al. Diabetes. 2020
Squalene synthase	2',3'-cyclic nucleotide phosphodiesterase (CNP)	Saher G et al. Nat Neurosci. 2005
	Albumin	Nagashima S et al. J Lipid Res. 2015
Lipoprotein lipase	Lysozyme	Takahashi M et al. J Lipid Res. 2013
	Lysozyme	Takahashi M et al. J Biol Chem. 2022

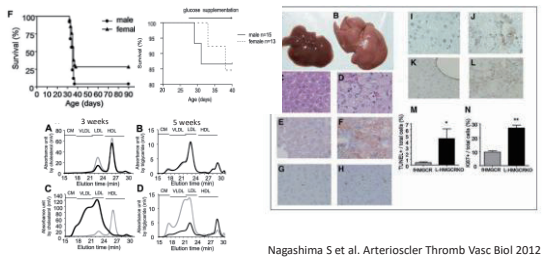
31



J Horton, JL Goldstein and MS Brown J Clin Invest 2002;109:1125-31

32

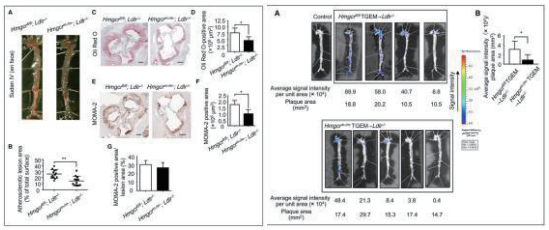
Liver-Specific Deletion of 3-Hydroxy-3-Methylglutaryl Coenzyme A Reductase Causes Hepatic Steatosis and Death



Nagashima S et al. Arterioscler Thromb Vasc Biol 2012

33

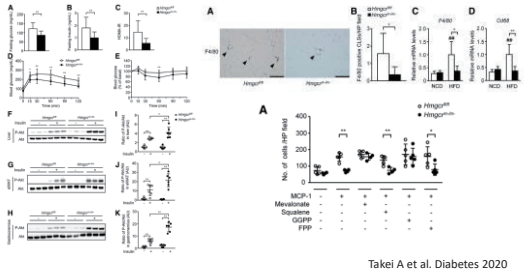
Myeloid HMG-CoA (3-Hydroxy-3-Methylglutaryl-Coenzyme A) Reductase Determines Atherosclerosis by Modulating Migration of Macrophages



Sakai K et al. Arterioscler Thromb Vasc Biol 2018

34

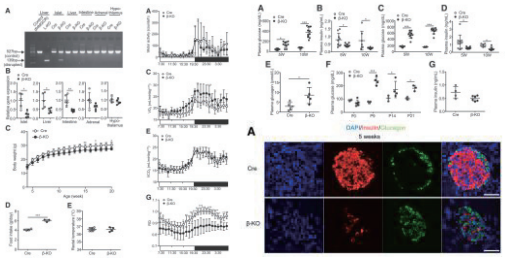
Myeloid HMG-CoA Reductase Determines Adipose Tissue Inflammation, Insulin Resistance, and Hepatic Steatosis in Diet-Induced Obese Mice



Takei A et al. Diabetes 2020

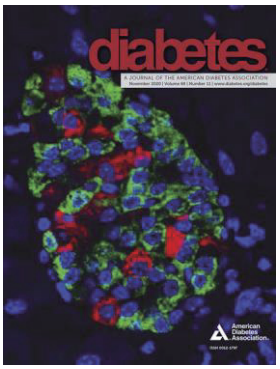
35

β-Cell–Specific Deletion of HMG-CoA (3-hydroxy-3-methylglutaryl-coenzyme A) Reductase Causes Overt Diabetes due to Reduction of β-Cell Mass and Impaired Insulin Secretion

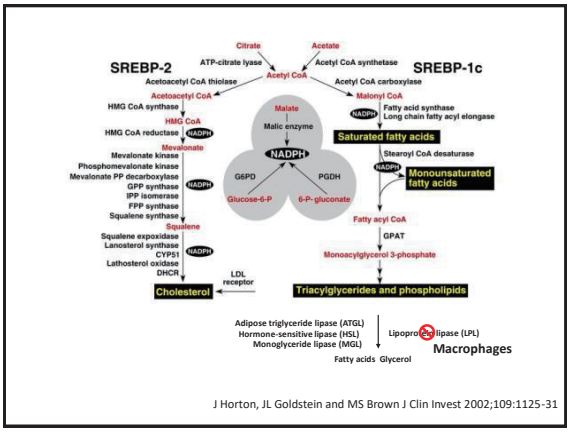


Takei S et al. Diabetes 2020

36

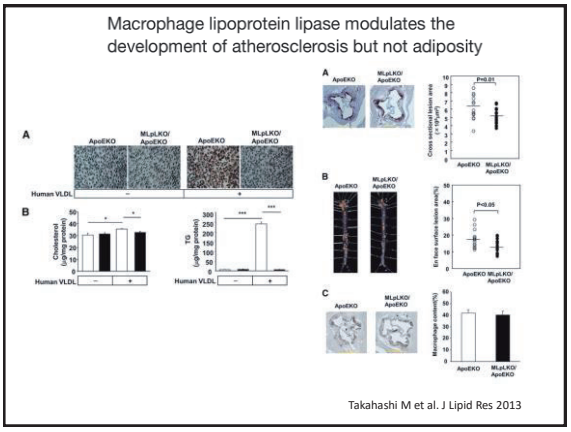


37



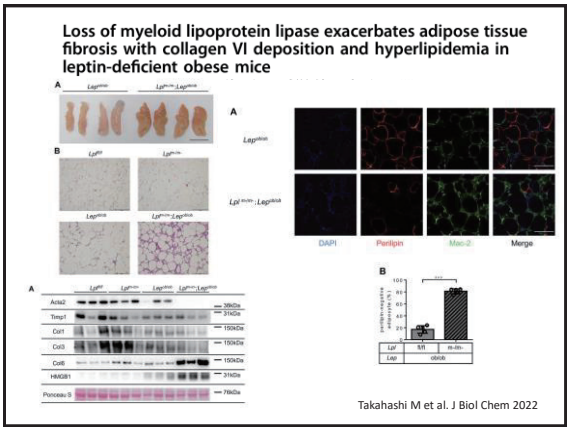
J Horton, JL Goldstein and MS Brown J Clin Invest 2002;109:1125-31

38



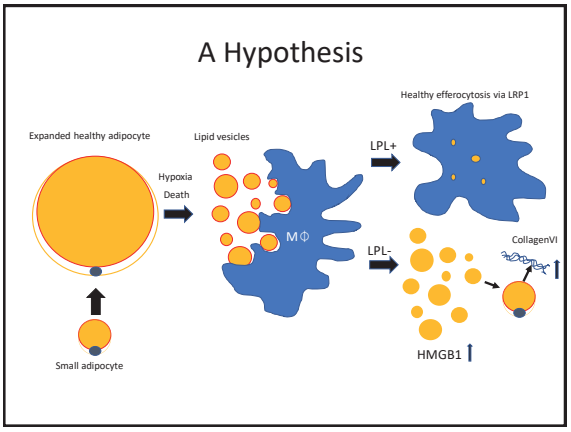
Takahashi M et al. J Lipid Res 2013

39

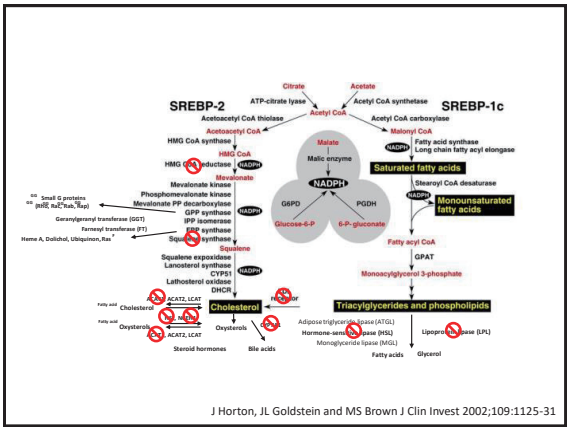


Takahashi M et al. J Biol Chem 2022

40



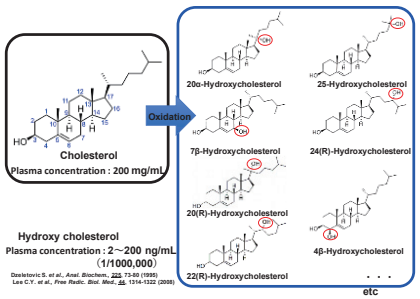
41



J Horton, JL Goldstein and MS Brown J Clin Invest 2002;109:1125-31

42

Oxidative metabolites of cholesterol

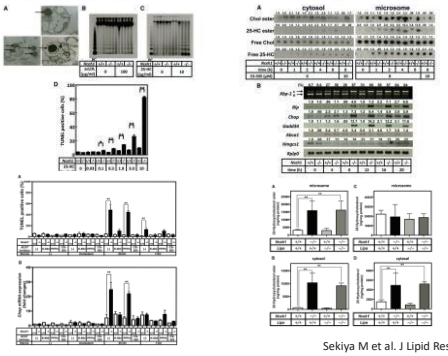


Hydroxy cholesterol
Plasma concentration : 2～200 ng/mL
(1/1000,000)

Dzeletovic S. *et al., Anal. Biochem.*, 225, 73-80 (1995)
Lea C.Y. *et al., Free Radic. Biol. Med.*, 44, 1314-1322 (2008)

43

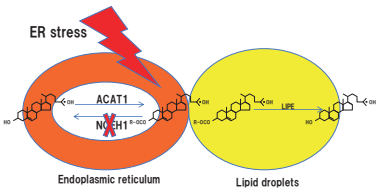
Absence of Nceh1 augments 25-hydroxycholesterol-induced ER stress and apoptosis in macrophages



Sekiya M et al. J Lipid Res 2014

44

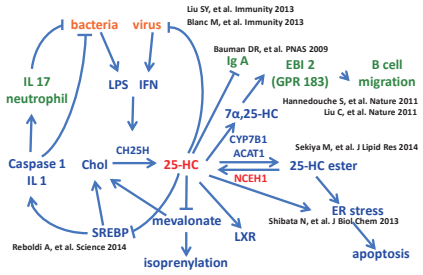
Excessive 25-HC ester may trigger ER stress



Sekiya M et al. J Lipid Res 2014

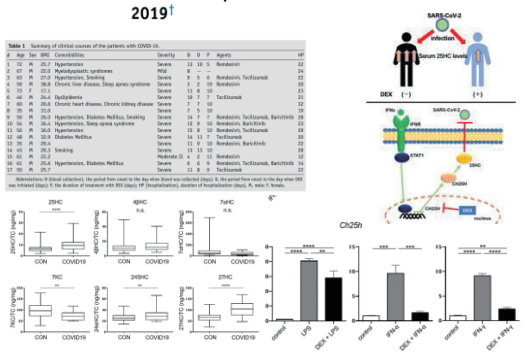
45

Multifaceted roles of 25HC in immunity and inflammation



46

Serum 25-hydroxycholesterol levels are increased in patients with coronavirus disease 2019†

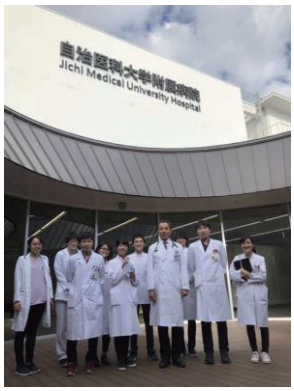


Asano T et al. J Clin Lipidol 2023

47



48



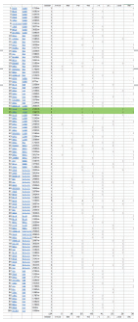
49

深田久弥　日本百名山

登頂回数	大学以前	教養	学部	卒後	ソロ	友人	山岳部	家族
124	5	18	35	66	41	25	26	30

2017年10月の瑞垣山が100山目





50

2018年10月根名草山　2019年7月富士山　2022年８月北岳







51

好きな言葉

- Honesty is the best policy.
- Stay hungry, stay foolish.
- Party is over, go back to the bench.
- 草莽の志士　（医師）

52

4P's of POR (Patient-oriented research)

Passion
Patients
Patience
Poverty

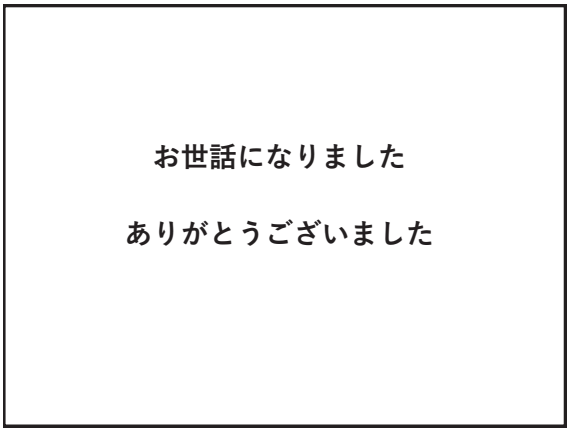
Collaboration

Goldstein J and Brown M. The Clinical Investigator: Bewitched, Bothered, Bewildered-But Still beloved. J Clin Invest 1997;99:2803-2812

53

帰りなんいざ、
田園將に蕪れなんとす
帰去来
菊を採る東籬のもと、
悠然として南山を見る
飲酒二十首
陶淵明

54



55

表紙写真説明

1） Ishibashi S et al. J Clin Invest. 1994 May;93(5):1885-9 掲載号表紙

留学 2 年目に LDL 受容体欠損マウスの作成を命じられた。長いゲノム DNA をクローニングすべくマウスゲノムのコスミドライブラリー作成から始まった。何回ライブラリーを作り直しても陽性クローンが取れずに、半年以上経過した頃、ラムダファージのライブラリーに変更することになった。初回で陽性クローンが取れた。相同的組換え変異体は比較的早く取得できた。次にキメラマウスを作成するのだが、キメラ率 10%程度のマウスしか生まれてこない。この時も半年近く空回りした。ES 細胞のロットを変更したら難なく 100%近いキメラマウスが得られた。ホモ化した LDL 受容体欠損マウスに動脈硬化病変がなかなかできない。そこで、高脂肪食飼育したところ、顕著な高脂血症を発症し、数ヶ月後に顔貌や皮膚が普通ではなくなった。皮膚黄色腫と矛盾しない組織像だった。毎晩のように過ごした Bug room（大腸菌培養室）や実体顕微鏡のある Bob Hammer の部屋の風景が鮮やかに蘇る。失敗に次ぐ失敗で相当焦ったが、ボスたちは選手交代とは決して言わなかった。廊下ですれ違うたびに Joe からは”Work hard!”と叱咤激励された。

2）Takei S et al. Diabetes. 2020;69(11):2352-2363 掲載号表紙

コレステロール合成の律速酵素である HMG-CoA 還元酵素欠損マウスは胎生致死だった。そこで Cre-lox システムによる組織特異的遺伝子欠損手法を開発した Brian Sauer 博士を日本にお招きし技術指導いただいた。何人かの手を経てようやく floxed マウスが完成した。膵臓 β 細胞特異的 HMG-CoA 還元酵素欠損マウスは糖尿病を発症した。当初血糖値のデータが安定せず floxed マウスの inbred 化が必要と判断された。これにまた数年を要した。共焦点顕微鏡を用いたラ氏島の組織学的解析は解剖学教室の指導を仰いだ。正常では豊富な β 細胞集塊の周辺に α 細胞が縁取る構造を示すが、このマウスはラ氏島の数が減少しているだけでなく、ラ氏島一個あたりの β 細胞数も減少し、α 細胞の周辺局在構造も失われていた。インスリンとグルカゴン共陽性の細胞も散見された。手がけてから 20 年以上を要する長いバトンリレーだった。

転載許諾済み：表紙写真、学内広報、鉄門だより、羽生市医師会会報

石橋　俊教授退任記念誌　自治医科大学内分泌代謝学部門業績集

発　行　日　令和 6 年 12 月 10 日
発　行　者　石橋　俊教授退任記念事業実行委員会
〒329-0498　栃木県下野市薬師寺 3311-1
自治医科大学医学部内科学講座内分泌代謝学部門


自治医科大学
Jichi Medical University